

---

# **転生は良い結果をもたらすのか？**

反逆のピカチュウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生は良い結果をもたらすのか？

### 【NZコード】

N5221M

### 【作者名】

反逆のピカチュウ

### 【あらすじ】

フリーーターだった私が、交通事故で死んだ事により新たな人生を迎えた。

第二の人生を、わずかながらに生きてきたそれまでの知識と経験を使い生きて行く。外伝として、転生したが知識、経験が無い人物を焦点に物語を開拓。転生を優位に使える人物、使えない人物のそれぞれの視点で日常を進めて行く。

## プロローグ フリーター（前書き）

初めまして

この度初めて ssというものを書かせて頂きます。

読みにくい文章、技術が低いと思われるかもしませんが私も勉強して良い物に仕上げて行きたいと思っています。

ではよろしくお願いします。

## プロローグ フリーター

死んだはずの自分が何故また人生を満喫しているのだろうか。疑問を浮かべたらキリが無い、自我が芽生えた時から疑問だらけだったのだから。

疑問の一つは私が知っていたはずの私では無かつた事だ。

私が今の体になる以前はフリーターとして過ごしていた。就職活動に失敗した私はアルバイトで日々の収入を稼ぎ暮らしていた。東京等の都会ならばそれでも十分に暮らしていけるだろう。しかし、私が暮らしていた地域は東京と比べて自給が低く、フリーターにとっては厳しい場所だった。実家暮らしだったのならば話しさ変わるのだが、私は実家には戻らなかつた。両親が必死に稼いでくれたお金を使い大学まで進学したのに、職に就くことが出来なかつたのだ。どの顔をして家に置いてくれと言えるのか。

私が大学を卒業した時、職が決まるまで決して実家に顔を出さないと決めた。昼間は求人表等を使い就職活動。夕方から夜まで居酒屋でアルバイトという生活を繰り返していた。昨今の世界的な不況から職が見つかる事は無かつた。だが、諦めなければ必ず私にもチャンスが巡ってくると思い活動を続けていた。そうでなければ心が折れてしまいそうだつたから。

その日、私はバイト先からアパートへ向かっていた。この地域は交通事故での死者の数は全国でもトップクラスに入るほど車のマナーが悪い。いつものように私のすぐそばを車が走り去つて行つた。

その度に私は一人で愚痴をこぼすのだが、その日はそのような気分では無かつた。それからの事はあまり詳しく覚えていない。気が付いたら、私の目の前に道路があつた。そこで私の意識は一時途切れた。

それから意識を回復した時、私は目を開ける事が出来なかつた。ましてや言葉も発せない。何が起きているのか解らなかつた。そして極度の睡魔が襲いまた意識を手放す。

その繰り返しを行つていくうちに、空腹感を感じるようになつた。だが言葉を發せれない。私が出来た事は言葉では無い音を發する事だけだつた。それを行つていくうちになぜだか涙が出てきた。涙腺が緩くなつたのだろうか？まるで赤子のようだ。そのうち、口元に何かを入れられ、そこから液体を補充させられた。しだいに空腹感が無くなつていつた。腹が満たされると睡魔が訪れた。強い睡魔に私はまた意識を手放した。次に私が気が付いた時は排泄物を催した時である。我ながらこの年でおもしろとは情けなかつた。だが、目は開ける事が出来ないし、何故だか自由に体が動かない。また私は声を上げ泣いた。その時私は思った。赤子そのものではないか、と。それから目を開ける事が出来、目の前の光景を見た時に私は確信した。

私が赤子になつてゐる事を

三年の月日が流れた。私は歩くことも出来るようになつたし、言葉を発せる事も出来るようになった。

何故三年と解つてゐるのかと言つと、つここの間私の三歳の誕生日会が開かれたからだ。新しい両親は私が生まれた時から愛情を注いでくれてゐる。この歳でそのような考えをする子供はいないだろうが、私は別だ。なにせこの体になる前は成人だつたのだから。そして、私がこの体になる前の年号から四年経つてゐる事を知つた。つまり、空白の一年間があるのだ。私はその時、私の魂が輪廻転生したのだと確信した。それと同時に、以前の私が死んだという事も理解した。調べる方法はあるにせよ今は出来ない。当たり前の話である、三歳児が自分で調べようとして出来る事では無いし、他人に頼る事も出来ない。運良く死んでいなかつたとしても、私は両親に会わせる顔が無い・・・・私だと言つ証拠も無いのだから。

「『』飯食べるよ~、手洗つて来なさい。」

「はい。今洗つてくるよ。」

母に促され、私は洗面所へ向かつた。今の私の身長では洗面台に届かないでの、踏み台を使い手を洗う。

新しい両親は至つて普通の人だ。父はサラリーマン、母は専業主婦をしている。いや、私が見たらサラリーマンは勝ち組なのだろ

う。一人で家族を養つてているのだ、会社も、給料も決して平均の位置では無いのだろう。それとも都会では当たり前なのだろうか？田舎で生まれて育つた私だからなのだろうか？

「良は何かやりたい事つてあるか？」

テーブルで夕食を食べている時、ふと父親が私に話してきた。

「あなた、良に何か習い事でもさせるつもり？」

「うん。今の時期から習い事とかさせた方が良いって聞くだろ？俺もそうした方がいいのかな～って思つてさ。それなら、良がやりたいことさせようつて思つてね。」

なるほど。確かにそれは一理ある。小さい頃からの習い事の影響でその習つていたものを嫌いになるという話はよく聞く。

「確かにそうね～。もうそろそろ塾も行かせなきゃいけない時期よね。何か勉強以外もやらせてあげたいよね。」

この年齢で塾に行くのか？あれはテレビの話やおぼしきやんだけじゃ無かつたのか？それとも家はそれほどまでに裕福なのだろうか？

「お前、良をもう塾に行かせるのか？さすがに速すぎんだろう？」

「何言つてるの！」

二人は私の塾の事で少し言い争いになつてしまつた。私の予想ではこのままでは母は教育ママさんになつてしまつ。それは回避して欲しい。頑張れ！親父！

「とにかくだ、良。何かやりたい事あるか？」

父がいつたん母を制し私に聞いてくる。その目は真剣だ、何かやりたい事・・・・私が今最もやりたい事は・・・・ふと田線をずらした先にそれはあつた。



「僕、ギターをやりたい。」

## プロローグ フリーーター（後書き）

読んで頂きありがとうございました。  
所々変えたりしました。宜しければ次回以降も読んで頂ければ幸い  
です。

## 小学校低学年（前書き）

幼稚ながらも一話田を投稿します。読んでいただけたなら幸いで  
す。

頑張つてよい文章にしていきたいと思いますのでよろしくお願ひしま  
す。

最後の所を少し変えました。

「はいはい、今日はこれまでだよ。もう終わり。」

先生が私の目の前で両腕を大きく振りながら声を掛けた。時計を見ると既に終了時間となっていた。

「すみません。集中してて時計を見るの忘れてました。」

「いいよいよ。それだけ熱中してたんだしょ？君の熱意は見てて心地いいからね。」

私は立ちあがり先生に礼をした。その後、先生から次回の課題曲と日課を忘れないように言われた。金物類のネジを緩め、ハイハットをクローズさせペダルとスネアをバックに詰めて帰る準備を行つた。

スタジオから出ると、次のレッスン時間の生徒が待つていた。時間まだ三十分前なのに既に来ている所から自主練習を行いに早く来たのだろう。

「お疲れ。良君のドラム、ますます上手くなつてるね。」

「ありがとうございます。でも、豪さん程では無いですよ。」

まあなと言い、彼はスタジオの中に入つて行つた。私が豪さんと言つた彼は私より五歳年上の中学生だ。私がこのドラム教室に通う以前から通つていて、私の先輩に当たる。長年ドラムを習つているだけで無く、持つて生まれた非凡さ、そしてそれに甘える事無く自分に厳しい人だからその技術は目を見張る物がある。同年代はもちらんの事、大人でも彼程上手に叩ける人はアマチュアではそういうないだろう。

階段に向かつて歩いていると別のスタジオから女の子が出てきた。

「お疲れ！今終わり？一緒に途中まで帰らうよー！」

「うん、いいよ。」

彼女は真美と言い、ベースを習つている。歳が同じという事と、レッスン時間が同じ時間帯な所から話すようになり親しくなつた。

「今度またスタジオ入ってセッションしようよ！私上手くなつたんだからね！」

「いいね。僕も前に合わせた時より上手になつたと思うよ。」

真美もそうだが、このレッスンに参加している人は皆総じて上手い。小さい頃から教わっている事もあるのだろうが、講師の質もいいのだ。それなりの年代から参加している人も、事前に自主的に始めている人ばかりだ。そして向上心が高い人ばかりなのだから自ずと上手になる。

「そういうえばそろそろ夏休みだよね～、良は夏休みする事あるの？」

「特に無いかな。あらかじめ宿題終わらせて遊んで暮らすよ。」

「え～、宿題先に終わらせるの？絶対最後の日まで何もしないのが良いよ！」

真美は大げさに驚いているようだが、私は何事も先に済ませてしまふ方が性に合っているのだ。心配事は先に失くしておいた方が良い。「じゃあ夏休み暇なんだね？それじゃあ私が呼んだ時は必ず来る事！」

「つて言つても僕、真美の連絡先なんて知らないよ。」

私がそのように言うと真美は私に携帯を出すように言った。私が携帯を出すと真美も携帯を出し、私に無理やりアドレス交換をさせた。前世では私が携帯を持ったのは高校生の時からなのだが、昨今は小学生のほとんどが携帯を持っている。そんな世の中なのかなと思ふが田舎ではそんな事は無いと思いたい。

「はい、これで大丈夫でしょ。じゃあ駅まで元気よく歩こう！」

真美は張り切つて階段を降りて行く。そんなに急ぐと危ないぞ。

それから駅に着き、電車に乗り私と真美は家に向かつた。家の近くの駅に着き電車を降り真美と別れ、改札に向かつた。夕方六時と言ふ事もあり駅は帰路に着く人達で溢れていた。私も都会で就職し

ていたのならば同じようにスーツを着て帰路に着いていたのだろうか。

改札を抜けてすぐに母が私の元に迎えに来た。週に二回、レッスンがある日はこのように駅まで迎えに来てくれる。

「お帰り、良。」

「ただいま、母さん。」

私と母は一緒に家へと向かつた。

言つのが遅れたが私は小学一年生となつた。幼稚園、小学校と私立に通わせてもらい、またドラム教室まで通わさせてくれている。父が昇給し、給料の羽振りが良くなつたとは言え、あまり楽ではないのではと思う。塾に通わないでここまで来れたのはひとえに、前世の事があるからだろう。いくら急げていたとしても国立大学を卒業したのだ。中学受験までは少しの勉強で大丈夫だろうと思っていたのだが、テレビ番組で有名私立中学校の試験を見て愕然とした。もし、中学校も私立に通うのならばそれなりに勉強をしなければならない。幸いにも頭が柔らかい今の時期から大学入試レベルまでの勉強をしたら、私は間違ひなく秀才として名をはせる事が出来るのだが。

そして、何故あの時ギターを習いたいと父に言い、今ドラムを習つてているのか。それは父がギターを弾ける事がきっかけだった。私の家には父が使用しているギターがあつた。エレキギター一本とアコースティックギター一本、それそれなりの値段な品物だ。父は大学生の頃にバンドをやつていたらしく、仕事から帰つてくると毎日ギターを弾いていた。そして、私も前世で中学生の頃からギターを始め、高校生になつてからずっとバンドを行つていた。何か習い事をするならギターでもやろうかな位と私は考えていたのだが父の、

「ギターなら俺が教えるから大丈夫だ！良、お前はドラムを習え！そして家族でバンドをしよう！」

と言い始めたのがきっかけだった。いやいや、私と父は良くても母は何も出来ないのではないか！だが、その心配も

「いいわね、私も久しぶりにベースを練習しようかしら。」

と、言う一言で全て無くなつた。父と母は大学の軽音楽サークルで知り合つたらしい。かくして私はドラム教室に通う事になった。父は最初、私のしたい事をと言つたいたのだが、おそらくギターを、楽器をやりたいと言う私の言葉に感化され家族でバンドをしたくなつたのだろう。私がギターでも良かつたのだろうが、今からドラムを練習するわけにはいかない。それならば、私がドラムを叩けたら全て丸く收まるのではと考えたに違いない。そしてドラムならば何年間は機材が無くとも教室で貸してくれるからお金もあまり掛からないだろう、と間違いなく考えた。ギターは自分のを使わせれば良いのだから。当たり前だが大人用のギターは子供の手には大きすぎる。この事を知ると父は私にギターは大きくなつてからと言つたのだが、

「僕もギターを弾きたい！」

と言う、息子の言葉を聞き、母が父の機材を売り、私に子供用のギターを買い与えてくれた。その事を父は知らなかつたみたいで、最初は知り合いから譲り受けたのだろうと考えていたのだが、私の持つていてるギターが新品なのを見て、母に問い合わせた所、事の詳細を知つた。そして、それと同時に父の持つていた主要なエフェクターを売られたと知り、一人寂しく泣いていた。

かくして、私はドラム教室に通うと同時にギターを手に入れた。初めは父の言うとおり弾き、初心者の振りをしていた。父や母がいない時に前世でやつっていた曲をひたすら練習する、という事を繰り返していた。だが、半年も経つとこまかしきれなくなり、父に怪しまれ私が練習している所を見られてしまった。父は大変驚くと同時に、俺の息子は天才だ！と嬉しそうにしていた。メガデスのSYM

PHONY OF DISTRACTIONと書いた曲を幼稚園児が弾いていたら誰でもそう思うだろう。

それはそうと私は五年前に兄となつた。妹が生まれたのだ。私が生まれてからも父と母は事あるごとに励み、新しい命を授かつた。生まれたのが妹と解ると父はすぐに加奈と名付けた。私は加奈を見た時、物凄く心を打たれた。それと同時に前世の時も同じように祝福されたのだろうかと思つたら少し悲しくなつた。

加奈はそれから健やかに育ち、もう四歳となつてゐる。身内の私から見ても加奈は愛くるしい少女であり、このまま育つていけばさぞ美人になるのではないか。さらに加奈は物凄く？チート？と言う言葉が似合う。私がギターを弾いていると加奈は「私もやる！」と言つて聞かなかつた。遊ばせるだけだと思いギターを渡したら、先ほどまで私が弾いていた曲を弾きこなして見せた。一度もギターを触つた事の無い少女が初見でいきなり弾いて見せたのだ。私は開いた口が塞がらなかつた。また、母が言つには加奈は幼稚園で歳が上の子たちとかけっこをしても負けないらしい。学力面でも非凡さを見せている。私は天才と呼ばれる類の人間を身内を通して初めて体験した。

「おかえりなさい。」

私と母が家に帰つてくると加奈が玄関に走つてきた。駅まで数分と言つ事と、加奈が聞きわけの良い子と言つ事もあり母はお留守番をさせている。その間加奈はギターを弾いているのだからそこまで心配していらないのだろう。

「お父さん来たらご飯食べるからもう少し待つてね。」

母がそう言つと私と加奈は元気よく返事をした。父が帰つてくるのはだいたい夜七時くらいである。それまでに私は日課のメトロノームを使いリズムを鍛える事を行つた。メトロノームの音を頼りに手足を使いリズムを鍛える。ドラムもさる事ながら、全ての楽器にお

いてリズムは重要である。それを鍛える事は楽器奏者としては当たり前の事だ。加奈も私と一緒になつて行うために決して辛く無い。加奈が楽しそうにしている姿を見ると自然と私は自然と笑顔がこぼれる。だから決して辛く無い。

「ただいま。」

どうやら父が帰ってきたようだ。夕飯を食べてからギターを弾き宿題をする事にしよう。

学校も夏休みに入り、私は家にいる事が多くなつた。たまに学校の友人と遊んだりするのだが毎日では無い。朝、起床し朝食を済ませ、午前中はギターを加奈と一緒に弾き、リズム練習をする。昼食を取り、午後は加奈と遊ぶか学校の友人と遊び、夕方になつたら帰宅し、夕飯を取り、それから本を読んだり、ギターを弾くか、ドラムの練習をする。ドラムの練習と言つても自宅がマンションだから生ドラムを置くわけにはいかない。練習パットを使い練習している。最近、父は仕事が忙しいらしく休日も出勤している。母は家にいる事が多い。たまに昔の友人と会いに外に出かけるか買い物をする位だ。いわゆる専業主婦なのだが、実の所、月に稼ぐ額は母の方が多い。父の収入の足しになればいいと思いFXを始めたのだが母の手際と感が冴えたり、実際に多額の資金を手に入れる事に成功した。おかげ様で私と加奈は実に恵まれた環境化で過ごす事が出来ている。

夏休みのある日、私は真美に呼ばれてスタジオに向かつていた。

私と真美が通つて いる教室の親会社のスタジオと言う事もあり、普通に入るより安い値段で入る事が出来る。私のお金で入つて いる訳ではないのだから少しでも安く済ませたい、と言う事で毎回このス

タジオで私と真美はセッションを行う。たまに家族で入る事もある。セッションと言つてもそんな難しい事はしない。私が適当に叩くリズムに合わせて真美が弾く、と言う具合だ。そして毎回何らかの曲のコピーをして遊ぶ。それはレッスンでやつた曲だつたり、自分たちでやりたい曲だつたりする。その都度、真美はベースとヴォーカルを担当し、たまに私がコーラスを行う。最初の頃はラモーンズ等を行つていたのだが、最近は真美がレッチリにはまつているらしくレッチリの曲を行つている。決して小学生が弾ける曲では無いのだが、だましだまし何とかやつてている。要是樂しければいいのだ。

「あ～！来週までに絶対完璧にしてやる！来週も入るよ！」

「無理だつて、僕たちじゃ。ただでさえ難しいんだよ？僕も真美も全然だよ。」

昔はレッチリのドラマなら経験者ならば誰でも出来るんじやないかと思つていてがそんな事は断じてない。チャドのように迫力があり、要所要所でここしかないと思わせる叩き方をするのは決して楽ではない。しっかりしたリズムを保てないと曲として成り立たないのではないだろうか。

「絶対絶対ぜ～～つた、来週までに出来るようにしてやる！目指せフリー！」

ベーシストは必ずフリーに影響されるのだろうか。昔もフリーを愛してやまない人達が多かつたような気がする。私としては真美がフリーの真似して全裸で弾くと言う事が無いように注意しないといけない。友人が露出狂になるのだけは勘弁願いたい。

## 小学校低学年（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

## 小学校高学年（前書き）

二話目となりました。

読んでいるうちに転生とか関係なくね？と感じるかもしれませんのが、私が思う転生の最大のメリットは経験した事を覚えている事だと思います。その経験を元にさらに成長出来る事が転生のメリットだと思います。

それでは楽しく読んで頂けたならば光栄です。

後少しで二度目の小学校生活も終わる。エスカレーター式に系列の中学校に通う事になった私は勉強に身を入れる事無く過ごしていった。学力を落とさないようにそれなりに勉強していただけなのだが、前世の記憶を持っていた私は学内ではそこそこの成績を収める事に成功した。

加奈も同じ学校に通い、学年でトップクラスの成績、運動面でもトップなのを見るとここまで天才是そんなにいない事が解った。つまり加奈は特別な人なのだ。そしてそのルックスの良さから加奈は学年でもマドンナ的存在となっていた。その話をクラスの友人から聞いた時に、前世の高校での四天王を思い出した。学内で特に可愛い子四人を四天王と呼んでいた事を思い出した。それはそうと加奈はピアノを習い出した。最初は私と同じドラムを習いたいと言っていたのだがそこはまた父の田論みによりピアノを習わされた。持つて生まれた才能と数年ギターをやつていた事もあり、耳、指の回転は速くもう既に将来を希望されているらしい。加奈が今後何を選ぶかは解らないがほぼ全てにおいて人並み以上になるのは間違いないだろう。音楽と言う事に関して言えばプレイヤーならば間違いないだろう。ただ、生みだす者としてならば解らない、技術が上の者が認められる訳ではないのだから。

私は後数週間後に行う、小学校卒業パーティーの出し物の練習をしていた。一次会はある会館を貸し切り、それぞれのグループが出しど物を行う事になっている。私は真美とクラスの友人達とバンドを行う事にした。他のグループはダンスだったり、バックに音楽を鳴らして歌を歌つたり、コントを行うみたいだ。欲を言えば私の組んでいるバンドのベースを真美が担当していたならばそれなりの演奏が出来たのだが真美は他校の生徒である。そんな事出来る訳もない。

真美は真美で中学受験で忙しいらしく、レッスンに来ていらない時が多くなつた。

「じゃあ、もう一回頭からね。」

ハイハットを叩きカウントを行つ。一拍のカウント後、楽器隊の演奏が始まつた。メンバーは私を入れて五人、ギター、ベース、キーボード、ドラム、ヴォーカルとオーソドックスな布陣だ。曲自体も初心者が行うような比較的簡単な曲を選んだ。バンドはリズム帯がしつかりしていれば他が初心者でもどうにか聞けるようになる。ドラムとベースが上手ければ何とかなる、と言うのが私の自論だ。ヴォーカルはクラスで歌が上手くて人気者の子、身内で発表するならこれは仕方が無いだろう。歌が凄く上手でも小学生にとつてヴォーカルは人気者の子がやらなければ盛り上がらない。うちのクラスの人気者は歌が上手くて良かつた。物凄い音痴だつたならば苦笑いしかできない。ギターとベースの子は初心者だつた。数か月前から始めたらしく、バンドを組むのも、バンドで演奏するのも初めてと話していた。最初の頃はそれぞれが合わせる事を知らないから自分のリズムで弾いていた。これだと曲が「こちや」「こちや」になつてしまつ。私はギターとベースの子にドラムの音を聞いて演奏する事を教えた。何回か練習していくうちに合わさるようになつた。また、彼らは演奏する能力も高くなつていつた。ギターの子なんか私がギターで見本を見せた時から対抗意識を燃やし、家で相当練習していただみた。元々ギタリストの私からしたら音だけで解る。キーボードの子は小さい頃からピアノを習つているらしく技術はしつかりしている。

スタジオに最初に入つた時と比べると別のバンドかのように私達のバンドはレベルが上がつていた。

「人前で演奏するには全然大丈夫なレベルになつたね。」

「当たり前だろ？俺は天才だからな！」

ギターの子が笑いながら私の問い合わせに答える。

「でも天才と言うのは良なんじやない？ドラムめちゃくちゃ上手い

のにギターも上手んだもん。」

キー・ボードの子が天才と言う言葉に反応して喋つた。私はドラム歴八年になるし、ギターは前世と合わせると二十年近くなるから当たり前だ。本当の天才と言つるのは加奈みみたいな人なのだよ。ギター等の楽器はどれくらい練習したかが重要だ。しかし、世の中には持つて生まれた才能だけでそれをいとも簡単に覆る事もある。それが加奈だつた。今はまだ私の方がいささか上だがそのうち追い抜かれるだろう。

「じゃあ、ちょっと休憩しようか。十分くらいしたらまた合わせよう。」

私はそう言つとスタジオの外に出た。毎度の事ながら長時間ドラムを叩いたり、バンドで合わせると耳が遠くなつた感じがする。少し外に出て耳を休めないと。他の子達は休憩時間にも関わらず練習を行うから余計うるさい。

外に出て体を伸ばしていると携帯が鳴つた。真美からの着信のようだ。

「もしもし？」

「もしもし、良？今スタジオにいるでしょ。何してるの？」

何故真美は私がスタジオにいるのか解つたのだろうか。

「学校の出し物に出るバンドの練習だよ。真美こそ何で僕がスタジオにいるつて解つたの？もしかしているの？」

と、聞いたら電話が切れた。何だろうと思い携帯をポケットに入れたら後ろから大きな声がした。

「わっ！！！！！」

突然後ろから大きな声がしてびっくりして振り返るとそこには真美がいた。

「驚かさないでよ。心臓に悪いよ。」

「ごめんごめん！久しぶりにスタジオに来たら良がいたから。」

笑いながら真美はそう答える。真美は入試で忙しかったのだがもしかして終わったのだろうか。

「受験、終わったの？」

「うん！終わったよ」後は合格発表だけかな。

「どこ受けたの？」

「受かつてから教えるよ。それより久しぶりに良とセッションした

いな～。今大丈夫？」

「だから、今はクラスの友達とのバンド練習が「いいからーじゃあやるよ！」

真美は私の言葉を遮りそう言うと、私の手をひっぱり中に入った。何番のスタジオかと聞かれ、無視していたら怒られたので素直に喋りつた。私は小学生の女の子にすら逆らえないのだった。

「お邪魔します！」

真美が勢いよくスタジオに入るとメンバー皆、誰？と言つ顔をした。当たり前だ、いきなり知らない人が入ってくると言う事はまず無い。真美の後に私がいるのが見えたのか、ギターを弾いていた子が私に話しかけた。

「誰だよそいつ？」

「いや、その・・・・僕の友達なんだけど勝手に・・・・」

「いいからーほら良、早く座つて！あ、君、ベース借りるね。」

有無を言わさず真美はベースを奪い取り音を出した。少しチューニングがズれていたのかチューニングを直し、準備万端と言う顔で私を見た。こうなつたらしうがない、私には真美とセッションすると言う選択肢しか無かつた。ペダルをツインにして、本気モードのセッティングにする。そうしなければ真美に怒られるからだ。

「何するの？」

「RUSHのYYZ、忘れないよね？」

いきなりあの難しい曲かよ、と言う俺の視線を笑顔で真美は返してきた。私のドラムから始まり、曲が開始される。一年前から真美はプログレやジャズ等難しい曲を弾きたがる傾向にあった。それに付き合わされる形で私もいろいろやらされた。おかげ様で技術は上がったのだが。

私のドラムに合わせて真美が音を弾いていく、やっぱり真美と合わせるのは凄く楽しい。それが難しい曲でも簡単な曲でも。偶に私と真美は顔を合わせる。長年お互いに組んでいた事もあり互いのリズム、グループは確認しなくとも解るのだが見てしまう。ドラムとベースの関係はピッチャードとキャッシュの関係に似ている気がする。私にとつて真美は最高の相棒だ。

曲が終わっても私と真美は合わせ続けていた。私の要求するリズムを把握し完璧に合わせる、合わせるだけでなく自分のグループを出していく真美の技術はもはや小学生レベルでは無い。こんな小学生が「ゴロ」、「ロ」としていたら嫌だろつた。

私は叩いていたうちに重要な事に気付いた、私はバンド練習をしごとにこにこにいるのだ。慌てて時計を見ると既に休憩時間は終わっていた。終わっているだけでなく、五分も延長していた。私は真美に目で終わらせると言図を行い、軽いロールの後終わらせた。

「「めん! ちょっと遊びすぎた!」

私がそう言い謝ると皆、ハツとした顔をし拍手を行つた。何故拍手をされたのか解らないでいるとキーボードの子が

「良君つてこんなに上手かつたんだね! プロの演奏を聴いてるみたいだったよ!」

「良、お前俺たちの前じゃ実力隠してたんだな! くつそー今にみてるよ、絶対に追い抜いてやる!」

「良、そのベースの子上手すぎだろ・・・・・後でいろいろ聞かせろよ。」

と、色々言つてたみたいだが、要是は皆俺らの演奏に聞き入つていたらしい。それにしてもプロレベルと言つのはさすがに無理がある。まだまだひよつ子だ。

「「めんね、良。ちょっと白熱しちゃったね。」

そうだね、と言いそれから私達はバンドの練習を再開した。一曲終

わる」といってベースの子は真美にどこが悪かったか、良かったかを聞き、他の子は私に聞いてきた。今までと違い、各自自主的に聞いてくる当たり、私と真美の演奏で彼らは自分達のバンドが未熟だと感じたらしい。そして、より良くしたいと思つたのだろう。これはバンドの演奏力向上させるきっかけとして良かったのかも知れない。

その後、練習が終わり私達はスタジオを後にした。私と真美以外は迎えが来ており、それぞれ別々に帰宅した。私と真美はいつも通り駅に行き、それから電車の乗った。

「それにしてもキーボードの子可愛かったね～良つてあいつのがタイプなの？」

「可愛いとは思うけど別に僕のタイプって訳じゃ」

真美が私を茶化してきた。女の子はこの年頃になると異性との関係について聞きてくる。思春期を迎えるのが男より早いのだろう。私が前世で小学校の時はこの時期に女性と付き合う等と言う事は考えもしなかった。人によるのだろうが、ほとんどの人がそうだと思う。中学校に上がった時から異性を気にし出すのだが、考えてみたら春には中学生になるのだからそのうち皆そつなるのだろう。

「あっちのほうはなんか良に氣がある感じだったけど…どうなの？ もしかして両思い～？」

「だから、そんなんじゃ無いってば！ 真美こそ好きな奴いるのかよ？」

「私が好きな人はね～、さう誰でしょ？」

私は真美とは違う学校だしレッスン以外では真美との交友関係を知らないから解るはずが無い。

「解る訳無いじゃん。誰だよ？ 教えてよ。」

真美の好きな人が誰か別に知らうとは思わないが一応せがんでみた。真美はえ～と言い笑うだけな所を見ると教える気は無いらしい。

「じゃあ、良の好きな人教えてくれたらいいよ。」

「残念、駅に着いたようだ。じゃあ真美またね～」

ちょっと、と言う真美の声を無視して僕は電車から降りた。そして

軽く手を振つて電車から離れた。

私が小学校高学年になると母は迎えに来なくなつた。私を信頼して同時に加奈のピアノ教室の送り迎えがあるからだ。加奈のピアノ教室は駅から電車を使って向かうほど遠い場所では無い。なので加奈は母と歩きながら通つてゐる。

家に着くころにはもう七時になつてゐた。家に入ると母が夕食の準備をしていた。

「おかえりなさい。」

「ただいま。加奈と父さんは？」

「加奈は部屋でギター弾いてるわ、お父さん今日も遅くなるんだつて。すぐ夕食にするから手洗つて来なさい。あと加奈も呼んで来て。」

「そう言つと母は食器を並べ出した。私は洗面所に向かい手を洗つと、私と加奈の部屋に入った。

「加奈、ご飯食べるよ。」

加奈に話しかけると、加奈はギターを弾くのを一旦辞め私の方を向いた。

「お兄ちゃんお帰り！ちょっと待つて！」

ギターをスタンドに掛け、加奈は私の前まで来た。私と加奈は一緒に部屋を出てダイニングに向かつた。

「最近の父は以前にも増して仕事が忙しくなつた。昇任すると以前にも増して責任や重要な仕事が増える。それに伴い給料も上がるのだが割に合わないと愚痴をこぼしている。休日も少なくなり、家族でどこかに出かける事も少なくなった。父にとつては家族でどこかに出かけるよりも家族でバンドをする事が好きらしく、母

や加奈に文句を言われていた。選曲も父の好きなバンドばかりなので、本当に父のためのバンドになつていて。

「ただいま。」

「あら、おかえりなさい。今日は遅くなるんじゃなかつたの？」  
父が予定よりも早く帰ってきたので母は急いで父の分の食事を取りに行つた。

「いや～切り上げてきたよ。全く・・・・」

父は仕事の愚痴を言い始めた。母は適当に畠わせながらテーブルに父の分の食事を出した。私と加奈はそれを見ながら食べていた。

父はテーブルに着くと食事をとりながら私達に話しかけた。

「な～、今度スタジオ入る時までにスレイヤーの曲練習してくんない？久しぶりにスレイヤーやりたいのよ。」

「私違うのやりた～い！B-Nやりうよ～、ウルトラソウルやりた～！」

加奈が父の意見に反対した。私だつてスレイヤーは嫌だ。おそらく、父がやりたがつてゐる曲は angel of deathかれい ごく い ぶ と お どだ。あんな速いテンポで16分のバスを踏むのは体力的に無理だ。

「そうね～たまにはお父さんのやりたい曲じやなくて加奈のやりたい曲をやりましょうよ～お母さんもB-Nやりたいわ～。」

女一人の意見に父は勝てる訳もなく、次にやる曲はB-Nで決まった。

私としてもスレイヤーじゃなくて良かつた。父は私がツインを踏めるようになった時からメタルばかりやらせるものだから正直きつかった。

時間が過ぎるのは早い物でもつすぐ私達のバンドの順番になる。  
皆、家族や級友、学年の前で演奏する事に緊張している。私みたい

に過去に何度もライブに出ている訳では無く初ライブなのだから緊張するのは当たり前だ。しかもライブハウスのような小さい場所では無くホール規模、さらに入数も多い。私もこれくらいの人前でやるのは過去に数える位しかなかったので少し緊張していた。

私達の前のグループが終わり、いよいよ私達の出番になつた。幕が降りると、それぞれが楽器の準備をした。私はドラムをそれぞれの位置にセッティングして軽く叩いて終えた。他の皆は何をしていいのか解らずに楽器を準備したらその場に立つていた。キーボードだけ少し音を確認して終えていた。

「ギターとベースも少し音出した方がいいよ。始まつてから音出ないとかなつたら困るでしょ？」

「そ、そうだね・・・・・」

私のアドバイスに焦つてそれぞれ急いで音出しをした。まずい、このままでは緊張しすぎてバンドが成り立たない。

それぞれ軽く音出しを終えたと同時に私は皆に向かつて喋つた。「皆凄く緊張してるとと思うけど大丈夫だよ。いつもの練習通りにやろづ。練習通りにやつたら絶対上手いくんだから。自信を持つていじりや！」

「そうだねー良君の言う通りだよー皆頑張つたんだもん。絶対にうまくいくよ。」

私が言った後に、キーボードの子が自信よく喋つた。

「そうだな、良がそう言つたら間違いないよな。」

「思いつきり暴れようぜ。」

「皆をびっくりさせよーぜー。」

少しずつだが皆の顔色が良くなってきた。私はドラムスローンから立ちあがリステージの真ん中に来ると皆を呼んだ。

「じゃあ皆で円陣をしようよ。僕達の初ライブ前に皆で意氣込もうよ。」

私が呼ぶと皆私の元に駆け寄り丸くなつて円陣を組んだ。

「ありきたりだけど精一杯楽しもう! ミスしたとかそんなの関係無しに。誰だって間違えるんだ、人間だもん。」

「お前、みつおかよ。」

皆があははと笑い表情が柔らかくなつた。  
「じゃう、頃張りまへや。

「じゃあ、元張り、お二、ハ、」

私達のバンド演奏は大いに盛り上がった。それぞれが持てる力を出し切り、精一杯に演奏、歌い、楽しく終わつた。嬉しい事にアンコールまでしてもらつたのだが、持ち時間一杯やつたためにアンコールは出来なかつた。

終わった後、皆泣いていた。ライブをする事の楽しさを知つたと同時に、もうこのメンバーで演奏する事が出来ないかもしないから。私とキー・ボードの子とギターの子はそのまま中学に上がるのだが、他の子は違う中学に進学する事になつた。それも親の都合により違う県に行くことになつた。恐らくこのメンバーでずっとやつて行きたいと思つたのだから涙が出たのだろう。違う中学にいくから、遠くに行くからもう会えない、もうこのメンバーで出来ないんだと。

「そんなに悲しそうに泣くなよ。」

「だって悲しくないの？もうこのメンバーで出来ないんだよ？」  
キーボードの子が泣きながら僕に訴えかけた。

「大丈夫だよ。」

「何が大丈夫なの！？」

私はギリホークの子を含め誰を見て

「また僕達はこのメンバーで演奏する事ができるよ。僕たちはまだまだ時間があるんだ。この先も続いて行くんだ。僕達皆が忘れないでいたならきっといつかこのメンバーで会う事ができる。絶対にね。

喋りながら私も涙が流れていった。私もこの苦楽を共にしたメンバーでバンドをしたかったのだろう。その後、皆泣きながらも楽器を片づけた。片づけが終わるころにはキーボードの子以外は泣き止んでいた。ステージ裏から客席に戻る時にクラスの皆から拍手と歓声を貰つた。母と加奈からもかつこ良かつたと言われた。ちょっとだけ照れたのは皆にはばれてないだろうか？

それからあつという間に卒業式を迎えた私は小学校を卒業した。卒業式が終わった後の教室で、私達は語り合い、写真を撮り、寄せ書きを書いたり、最後の小学校生活を満喫した。小学校、中学校、高校との時期に過ごした事は一度と体験出来ないし戻る事も無い。それでも私達の心の中にいつまでも残り続ける。思い出は時が経つにつれて色あせていく。その事を皆が知るのはいつなのだろう、と私は思いながら教室を出て行つた。

「じゃあな、また会える時までにあの女の子へりへり上手くなつてるよ。」

「頑張つてね。また会える時を楽しみにしてるよ。」

私とベースの子は軽く握手をして別れた。

「お前とバンド組めて楽しかつたよ。今度会うときは俺が歌手としてデビューしてるかもな。」

「そうなつたら僕が君の後ろでドラムを叩くよ。」

ヴォーカルの子とは笑いあいながら別れた。

彼らの今後の人生で何があるか解らないけど、一緒に楽しく過ごして事を忘れないでいてくれたら私は嬉しい。

あつという間に小学校生活が過ぎ中学校生活が始まるつとしている。玄関に張り出されたクラス表で自分のクラスを確認し、教室へ向かう。そこにいるのは大半が同じ小学校の生徒だが何人か違う小学校からの生徒がいる。小学校の時に同じクラスだった友達も何人かいるようで、最初から見知った顔がないという状況は無くなつた。

「お、良！また一緒のクラスだな。」

「そうだね。よろしく。」

見知った顔と挨拶しているうちに後ろから女性に呼ばれた。

「良～！」

聞いたことのある声だと思い振り返るとそこにはいる人物を見て私は固まつた。

「ちょっと良！これから宜しくね～！」

「あ、ああ。よろしく・・・・・・」

ニヤニヤ笑いながら私に挨拶をしてくる女性。まさか同じ学校かつ、同じクラスになるとは思いもしなかつた。

私と真美は中学校生活を共に過ごす事になつた。

## 小学校高学年（後書き）

今回も読んで頂もありがとうございました。

## 中学生一年生？（前書き）

テストやら、バルドスカイやらのために四語田は少し書くのに時間が掛かりました。

幸いにも少しずつですが読んでくださっている方がいらっしゃるようで嬉しい思います。それでは宜しくお願いします。

## 中学生一年生？

中学生の時期が心身ともに変わる。本格的に成長期を迎える、少年だった見た目から青年へと変化する。また、性というものに興味を抱き、今まで以上に異性の事を気に掛けるようになる。学校においても小学校の時のように全て先生が片付けてくれるような環境から少しだが自主性を求められるようになる。前世で私はこれらの変化に大いに戸惑つた。女性とは話せなくなり、それまで無かつた、先輩との上下関係に苦しんだ。

入学して数ヶ月も過ぎると、皆、やっと中学校生活に慣れてくれた。目まぐるしい変化に最初こそは驚くが、人は慣れる生き物であり、この時期になると皆適応していく。

放課後になると、クラスの友人達はそれぞれの部活動へと向かう。うちの学校は部活動に強制参加では無いので私は部活動に入らなかつた。音楽の方に力を入れる事を、優先したからだ。中学校に入学してすぐ、私はドラム教室とは別に週に一回、プロのドラマーから個人的にご教授して頂いている。どのようにしてその経緯に至ったかというと、私は、ドラム教室の先生の知人にプロのドラマーゲイる事を知つた。その時に、先生にその知人の人が私の演奏を見て頂く事は出来ないか聞いた。先生はすぐさま知人に連絡をし、次のレッスンの時に私の演奏を見ててくれるよう取り付けた。次のレッスンの時、私の演奏を見て頂いた後に、個人的にご教授して下さる話になつた。元々、こちらの方からお願ひしようとしていただけに、その話は願つても無い事だった。

昼休みの時、私の携帯に一通のメールが届いた。それは薫さんからであり、薫さんの都合により、個人レッスンが出来ないという内

容だった。薰さんは私に「教授して下さっているプロのドラマーの人だ。

「あ〜、今日は大人しく家に帰るかな。」

「今日つて薰さんとのレッスンの日なんじゃないの？」  
私が独り言ちていたら、隣にいた真美が話しかけてきた。

「今薰さんから中止つてメールが来た。」

「じゃあさ、放課後に楽器屋に行かない？弦買いに行きたいんだよね。」

「いいよ、暇だし。」

久しぶりに楽器屋に行くのも悪くない。何か新しいものが入荷しているかもしれない。

「あの、真美さん、良くん、私も一緒に付いて行つてもいいかな？」  
「いいよ。ね、真美？」

私が真美の方を向くと、真美は少しだけ嫌そうだった。一見何も変わっていないように見えるのだが、付き合いが長い事もあり、ほんの少しだけだが嫌そうにしているのが解った。

「うん、増田さんも一緒に行こう！」

表面上は笑っているのだが、どこか増田さんと距離を置いているようを感じる。何かあったのだろうか。

増田さんは小学校の頃に行つたバンドのキーボードの子であり、あのライブ後、私と増田さんはよく喋るようになった。中学校でも同じクラスになり、増田さんは私の数少ない女子での親しい友人だ。もつとも、女子で親しいのは真美と増田さんしかいないのだが。

放課後、私達はいつも行つている楽器屋へ向かつた。そこへは学校の近くの駅から一駅程であり、通つているドラム教室から近いこともあり、私と真美は常連客となつていて。

「お、良くんと真美ちゃんじゃないか。もう一人の子は初めて見る顔だね〜。」

「お久しぶりです、松本さん。」うちの子は同じ学校の友達ですよ。

「

「増田と言います。宜しくお願ひします。」

松本さんはこの店の店長だ。増田さんと松本さんが話しているうちに、真美はベース弦を探しに行つていた。

「増田さん、僕ちょっといろいろ見てくるね。」

「あ、私も一緒に行く。」

私が最初に向かつたのはギター関連の場所だった。身長の伸びにより、手が大きくなつたため、今まで使つていたギターではサイズが合わなくなつてきたのだ。幸いにも、今まで貯つてきた小遣いやお年玉をこまめに貯金していたため、それなりに纏まつたお金はある。PRSや、ギブソンのヒスコレ等は高くて手が出せないが、フエンダー USA のストラトや、ギブソンのレスポール等を、買うお金はある。

ギタリストはギターを眺めているとどれも欲しくなつてくる。お金に余裕が無い時は強がつて、今まで良いと口ずさむのだが、本音は欲しくて仕方がない。自分の持つているギターとは別の種類、用途が展示されているなら尚更だ。前世で私はギブソンの SG とフエンダーのストラトキヤスターを使つていた。うまい具合に、ピックアップがシングルとハムバッカーの両方を持つていただけにその時々で求められる音毎に分けて使つていた。今現在使つている子供用ギターは正直な話、音に関してはアンプ任せである。バンドでギターを弾いていないので今はいいが、私としてはバンドでギターを弾きたい気持ちはある。

「また SG にしようかな・・・・・・」

私が SG の前で喰いていると、増田さんが不思議そうな顔をして私に訪ねてきた。

「良くんつてこのギター持つてたの?」

「い、いや、父さんが昔持つてたんだよ! それで僕も弾いてたからそれで・・・・・・」

「なんだ?」

危ない所だった。上手く誤魔化せたが、次からはこのような事が無

いようにしよう。何か疑われたら誤魔化しようが無い。

「お、良くん、弾いてみるかい？」

「お願いします。」

松本さんは、壁に掛けてあるSGを取り近くのアンプに繋げた。軽く音を出してからチューニングを合わせ、私に手渡した。

Aのコードを鳴らし、クリーンの音を確かめるとSG独特的の音が流れた。SGの特徴は何と言つてもその中域の音にある。よくゴバゴバと言い表されている。ギターの音が中域が強いためにこもりがちな音ではあるが、決してバンド内で埋もれる事は無く、単音においては逆に前に出てくる。一音一音の音が太く、まさに目立つ音だ。ただ、相変わらずフロントピックアップの音が気に食わない。無駄に高域が出るために、前世でも直ぐに違うピックアップに取り替えた。次に、歪みの音を確認していったのだが、特に前世の頃のSGとの違いは無かつた。オリジナルで付いているコンデンサーを変えて、フロントピックアップを変えたら正に、私が使っていたSGの音になるだろう。

「そう言えば良はギターが弾けるんだったね。」

いつの間にか真美が私の後ろにいて話しかけてきた。手に店のビニール袋を持っている所を見ると、既にベース弦の会計を済ませたのだろう。

「真美の前じゃ弾く機会無いからね。ドラマよりギタリストだと僕は思ってるよ。」

「ベースは弾けないんだ、と言つてもルート弾きは出来るか。リズムはしつかりしてるし。」

「でもギタリストの癖が出るかもね。」

「そういうものなのかな~。」

一度だけベースを弾いた事があったのだが、私には難しいものだった。弦は太いし、重いし、何より指弾きが出来なかつた。ビリー・シーンが好きな私としてはどうしても指で弾きたかったのだが、バンドに迷惑がかかるのでピック弾きに甘んじた。

「それにしてもSGね。私はアイバニーズの方が良いと思いつくな。

確かにアイバニーズは良い。安価な値段でそこそこの物を買えるし、Jカスタムは見た目も音も素晴らしい。

「私はこのギター、良君に凄く似合つてると思つたな。」

増田さんに似合つてると言われ、前世でSGと言えば私と言われたのを思い出した。やはり、SGと私は切つても切れない縁なのだろうか。

「良君、SG買つちやう? 買つてくれるなら安くしどくよ。今のがうちにギブソン買つておかないと次から大変になるよ。代理店変わつちやうしね。」

「SGでよかつたの? SG持つてると長門だとか言われるよ。」

「バカ野郎。SGつて言えばトニー・アイオミだろ。」

結局、私はSGを買つた。私にとつてSG使いはトニー・アイオミである。日本人なら人間椅子の和嶋さんが直ぐに思いつく。和嶋さんは物凄くアイオミの影響を受けているのが解る。あの音とプレイは聴いてて心地が良い。去年の冬頃に放映されたアニメにSGを使った場面があつたらしく、ネタでSGを使つてている人をそのキャラの名前で呼ぶ、その影響で使つてているのかと問う風潮が出来てしまつた。オタクがアニメの影響でギターを始めた!と嘆く人もいるだろ?が、楽器演奏者は総じて?音楽オタク?の部類に入ると私は思う。だから全く気にしない。と言うより、私の周りのバンド仲間はアニメオタク、ゲームオタクが多くつた気がする。楽器屋も新規の顧客を獲得出来る機会を得たのだから悲観する事も無いだろう。

「白のSGだつたら完璧だつたのにね。」

「くどい。」

ふと窓を見上げると少しづつだが口が傾いている。

「ごめんね増田さん。予想以上に長く居すぎたみたい。」

「全然大丈夫だよ。今日は特に何も無いし。」

増田さんは放課後にピアノ教室に行く事が多い。レッスンが無い日でも自主的に通い、日々鍛錬に励んでいる。そんな増田さんが私達のために時間を割いて一緒に来てくれたと思つと申し訳なく思う。「でも、そろそろ発表会じゃないの？」

何気なく私は増田さんに発表会について聞いてみた。

「うん、来週にね。課題曲は終わってるし、そんなに焦らなくても大丈夫かな～って。焦つて練習して手を痛めたらどうしようも無いから。」

「そりなんだ。それじゃあ応援しに行こう。」

「ほんと!？」

増田さんが嬉しそうにこちらを向いた。

「うん、多分何も無いしね。真美も無いよね?他にいろんな人連れて応援しに行こうよ。」

私が真美に話を振ると、

「え、ま、ま、私は別に何も無いけど……行つていいの?」

増田さん?」

「え、う、うん。来てくれるなら嬉しいよ……」

真美と増田さんの間に何とも言えない空気が流れた。そんなに一人は仲が悪いのだろうか?

家に着いた時には外が暗くなっていた。楽器屋を出て駅に向かい、外で話をしていたら予想以上に話が弾み、気が付いたら一時間近く時間が経っていた。本来ならば、早い時間に帰れたはずだったのだが、結局いつも通りの時間に帰つてきてしまった。

中学生になつたからと言つて一人部屋になつたという事は無い。

一度、父からそれぞれの個人部屋にしようかと問われた時に加奈が猛反対したからだ。加奈は私に物凄く懷いてるので、恐らく第三者視点から見たならばブラコンに見えるのだろう。何にせよ、可愛い妹が懷いてくれる事は全然嫌では無い。思春期を迎える頃にどうなるか解らないが、もし拒絶されたのならば私は今まで無く落ち込むだろう。

「お兄ちゃん、ご飯だよ。」

「直ぐ行く。」

私はいつものように夕食を取りにキッチンへ向かった。

夕食後、私は部屋に戻り買つたばかりのギターをハードケースから取りだした。ハードケースから取り出す感覺は最初の頃は心地よいのだが、運搬方法が徒歩の場合、持ち運ぶ際に非常に重量感があるために結局ソフトケースに入れる事になる。

「お兄ちゃん新しいギター買つたの？」

私がギターを取りだしたのを見て、加奈が私に問いかけた。

「うん。いつも使つてたギターが小さく感じるようになつたからね。貯金使って買つてきたんだよ。」

へ~と加奈が呟いてるのを横目に、私はギターを弾き始めた。ギターを弾いているうちに、ふと一つの感情が生まれた。

やはり、ギタリストとしてライブに出たい。

ドラマとしてはもちろん楽しいのだが、今ならば前以上に楽しめるかもしけないとthoughtたからだ。リズム感も確立してきたし、テクニック面も言う事無い。ならば、以前よりも高いクオリティでバンドを組み、ライブを行えるかもしれない。もちろんドラマーとしてもバンドを組んでいきたい。これは欲張りなのだろうか。

「ねえ加奈、加奈はギターとピアノどっちが好き？」

私と突然の問い合わせに加奈は驚き、そしてしばらく考えた後にこう答えた。

「どちらかと言つたらギターだよ。ずっとお兄ちゃんとやつてきたからね！」

「そつか。それじゃあ一緒にギター弾こつか。」

「うん！」

私は加奈と一緒に流行りの曲を弾きながら歌つた。

翌日、私は教室に向かう途中に、壁に貼つてあった一枚のポスターが目に入った。

? 頭見せライブ　月　日土曜日　at　音楽室　OPEN  
12：30　START　13：00　入場料無料”

「軽音なんてあつたんだ。」

私が独りごちていると後ろから声をかけられた。

「君、軽音に興味あるの？興味あるんだつたら入らない？」

後ろに、私より頭一つ背の高い男性がいた。察するに軽音学部の人で、私より上の学年なんだろう。

「いや、僕は部活に入ろうと思ってないので……」

「取り敢えず！取り敢えず顔見せライブに来てみなよーまずはそこ

からね、合わないって思つたら入らなくても大丈夫だから。取り敢えず、来てね！あ、それじゃあこの紙にクラスと名前書いてね。え？そんな時間無い？大丈夫大丈夫！喋つてくれるだけでいいから！ほらほら。「

半ば強引な手口で私は軽音楽部の人々にクラスと名前を教える事となつた。だが、この手の勧誘にはうんざりするほど慣れていたので適当な名前と違うクラスを教えておいた。人が多い学校なだけにもう一度と会う事もないだろうと思つたからだ。

土曜日、家でギターを弾いていると、携帯に電話が掛かってきた。

「もしもし？」

「もしもし？良か？お前今日暇だよな？」

電話の相手は小倉だつた。彼は小学校の時にバンドを組んだギタリストだ。

「暇と言つたら暇だけど何？」

「それじゃあ、今から学校の音楽室に来てくれ！出来たら真美さんと増田も誘つて！」

「良いけど、増田さんは来週ピアノの発表会あるから無理かもよ？」

「じゃあ真美さんだけでいい！取り敢えず来い。解つたな？」

それだけ言つと、向こうから電話が切れた。何事が解らなかつたが取り敢えず真美に連絡をして、私は学校へ向かつた。

「ねえ、学校の中、凄く煩いんだけど。学校内でライブしてるの？」  
私と真美が学校に着いて音楽室のある方へ向かつて廊下を歩いていると真美が話しかけてきた。それもそうだ。物凄く煩い。それも聞きなれている音でだ。その時、私は思い出した。今日は土曜日、軽音楽部のライブの日と言つ事を。

「まづい。今日は軽音のライブの日だつた。」

「え、何それ？」

真美も私と同様に軽音楽部なるものが存在する事を知らなかつたみたいで、初耳だという顔をしていた。ともかく、これは非常にまずい展開だ。小倉が軽音楽部に入部していたなんて知らなかつた。違うクラスなのであまり会う機会が無かつたから情報が全然入つてこなかつた。

「取り敢えず、帰るか。」

「ちょっと、何それ？ 学校に来たばかりだよ？」

「そりなんだけど、取り敢えず帰ろう。何ならミスド齧る「おーーい！ 良！ やつと来たなーーー！」」

真美に帰ろうと喋つていると遠くから大きい声で私の声が遮断された。真美と私が声のする方を向いたら、遠くから小倉が走つてくるのが見えた。

「小倉君じゃない？」

「うん・・・・・・」

小倉が私達の前まで来ると、型で息を整え、私達の方を見て  
「それじゃあ、音楽室へ行こう。今から俺出るから。」

と言い、真美を連れて行つた。私が啞然としていると小倉から早く来い！と言われたので、私は覚悟を決めて音楽室の方へ向かつた。

音楽室に入ると、調度次のバンド演奏のための転換中だつた。そのせいか、中には人が少なかつた。音楽室の外は軽音楽部の部員とその友人、観に来た人達で溢れていた。

「結構本格的なんじやない？」

真美が音楽室の中を見回してそう喋つた。

確かに、本格的だつた。中はカーテンで暗くして、照明機器でステージを照らしている。アンプやドラムにもきちんとマイкиングがささつており、パワー・アンプを通して後ろの卓で音量バランスを取つていて。返しもきちんと置かれていて、小さいライブハウスと同じくらいの設備が整つていた。業者に頼んでもらつたのだろうか。

「確かにこれは凄いね。人も多いし、ライブって感じがするね。ス

テージの後ろに黒板があるけど。」

これはこれでライブ感が養えるのかもしない。学校側からお金が出ていいなら、タダでライブが出来る事になる。アマチュアバンドの出演料、ノルマが無い分、ここで腕と場慣れをするのは良いかもしない。

「そういえば小倉君、次のバンドで出るって言つてたね。私、練習の時しか小倉君の音聴いてないから楽しみだな。」

「僕もライブの時以降聴いてない。どうなつてるのかな。」

真美と話していると、次のバンドの準備が出来た。会場の音楽が違うのに変わり、バンドのメンバーが入ってくる。それに伴い、音楽室の中にも外にいた人達が入ってきた。

メンバーの一人がP A側に手を挙げ、曲を止めるとき小倉のギターから始まり、演奏が始まった。演奏している曲を私は知っていた。ニルバーナの *Smells Like Teen Spirit*だ。中学生には調度良い難易度だからこれを選んだのだろう。もしくは、バンドメンバーがニルバーナが好きなのか。中学生の演奏にしてはそれなりの演奏でかつ、曲がニルバーナと言つ事もあり、周りは盛り上がっていた。私が中学生だった頃はメタル全盛期でラウドネス等をコピーしたものだ。今はグリーンデイやニルバーナなのだろうか。

一曲目が終わり、二曲、三曲と演奏していくうちに小倉は緊張感が解けたのか楽しく弾いているようだつた。大きく動き周る等のパフォーマンスを行い、場を盛り上げていた。そして、最後の曲が終わり、バンドは履けて次のバンドのための転換が行われた。

「小倉君、前より上手くなつてるんじゃない？」

「そうだね。良い刺激を貰つたよ。」

「でも全然良のレベルじゃないよ？」

私が刺激を受けたと言う事に驚いたのだろう、真美が少し驚いた顔をしていた。

「テクニックとかじやないんだよ。 しいて言うならバンドで楽しそをしていた。

私が刺激を受けたと言う事に驚いたのだろう、真美が少し驚いた顔をしていた。

うにしているのが凄く刺激を受けたのかもね。」

どれだけ他者よりも上手くても、楽しくなかつたら意味が無い。初めてバンドを組んだ時に技術は全然無くて演奏は酷かったけど、それでもやつて楽しかった。一つが出来る度に喜びを感じそれを糧に頑張ろうと思いつつも皆で笑いながら切磋琢磨していった。それらがこのバンドには見えたのだ。恐らく今日出る他のバンドもそうなのだろう。

「バンド組みたくなってきたな。」

バンドを組むと色々な事がある。それを私は経験してきた。いくら仲の良い友人同士で組んでも些細な事で離れたりもするし、逆に色々な事を学んで仲が深まる事もある。だが、大概が前者が多い。

「それじゃあ、私ベースやるよ。」

「やつてくれるの?」

「良の相棒が務まるのは私しかいないでしょ?」

笑いながら真美が私の方を向いた。その笑顔に私は少しだけドキッとした。真美の笑顔は見慣れているはずなのに。気持ち的に歳下としか思つていなかつたのだが。

「お、お前の前の!俺に嘘教えやがつたな!」

ハツとして振り返るとこの前ポスターを見ていた時に話しかけられた人がいた。

「え、え~っと」

「お前の事を探していたんだ。さあどうしてくれようかな。」

顔を見るに怒つていてる事が解る。隣で真美は何が何だか解らない顔をしているし、この場をどうやって切り抜けようか考えていた所、

「先輩どうしたんですか?良と知り合いでしたつけ?」

小倉が何とも言えないタイミングで現れた。今現れたら私の名前が知られてしまう。

「小倉か、こいつ知つてるのか?」

「はい、小学校の頃からの友達ですよ。」

小倉の言葉を聞き、にやりと笑みを浮かべて

「 そうか、名前何て言つんだ？」  
と小倉に聞いた。

「 良つて言ひますよ。」

「 そうか、良君つて言つんだ。なあ良君、これで俺から逃れられなくなつたな。お前の選択肢は二つだ。俺に焼きを入れられるか、軽音楽部に入つて俺のパシリとなるか。どっちがいい？」

笑いながら、私の方を向いた。小倉は何かしたのかと言いたげな顔をして私を見て、同じように真美も私を見た。

かくして、私は軽音楽部に入部する事となつた。ついでに真美も入部した。

## 中学生一年生？（後書き）

読んで頂きありがとうございました。今回は専門用語やら、楽器のメーカー等、いろいろ知ってる人にはなじみの深い、知らない人にな全く解らない単語を使ってしました。要望がありましたら軽くですが説明をしたいと思います。

それでは今回も読んで頂きありがとうございました。もつと語彙力、文章力が付くように頑張って行きたいと思います。

## 外伝 別の転生者の場合？（前書き）

本編の良とは違う場合の転生者を書いてみました。物語の場所は本編と同じ舞台なのですが、今後、両者が関わるとかそういうのは全然考えていません。私の気まぐれで関わりが出来るかもしませんが。

それではこちらの方も読んで頂ければ嬉しいです。

## 外伝 別の転生者の場合？

時々不思議な夢を見る。自分の知らない所で、自分の知らない人達がいる夢だ。そこで俺はその人達と親しそうに話している。

知らないはずなのに昔から知っているように話をしていて、俺の知らない話題で盛り上がり、俺自身もその話題について面白おかしく話している。

これは夢なのか？それとも誰かの記憶なのか？

「じゃあ行つてくる。」

俺は家を出て駅に向かう。朝だと囁ひのに日差しは強く、外は暑かつた。まだ朝だからそれほど湿度も気温も高くないが、昼近くになるとつれて両方とも上がってるのでそう楽観視は出来ない。衣替えの準備期間だと言うのに、この暑さは異常だ。年々、上がつてくる気温に初夏と言つ言葉と季節が無くなつたのではないかと思う。

「それじゃあここ的问题を、えへつと誰にしようかな。」

授業を受けている間、俺は夢の事を考えていた。小さい頃からよく見る夢、それは普通の夢の内容とは違い、まるで俺自身が経験してきたかのような夢だった。正夢とは違う。現実においてその場面に出くわした事は一回もない。そして、夢から目が覚めると決まって目から涙が流れていた。小さい頃は気にしていなかつたし、あくびでもたのだろうと思つていたけど最近は違う。何故だか悲しい

のだ。あのような何でも無い、『く当たり前にある事の夢なのに、それを見ると悲しみが私の心に残る。

「おい、聞いてるのか佐藤！」

「は、はい！」

先生に怒鳴られて慌てて俺は返事をした。考えすぎていたために気が付かなかつた。

「タク、お前最近ぼ～っとしてるけどどうしたの？」

授業が終わり、教室を出ようとしたら正也が話しかけてきた。

「いや、特に何も無いんだけどな。ちょっとと考え事をしてた。」

「なんだ、好きな奴でも出来たのか？このクラスは可愛い子多いし

な。増田さんとか真美ちゃんとかさ。」

正也の話を聞いて名前の挙がつた二人を見てみる。増田さんは少しおとなし目の美少女だ。品の良さが伝わってくる。家ではお父様、お母様とでも読んでいるのだろう。もう一人の真美さんは活発的で元気がある子だ。二人とも正反対のタイプの美少女と言えるだろう。「でもさ、あの二入つて絶対あいつの事好きだろ？」

「あ～良ね。あれは勝てないわ。」

正也もお手上げだと言わんばかりに両手を挙げた。勉強は出来て、運動もそこそこ、ルックスも良いと来たら周りの女は黙つて無いだろう。話では小学校の最後の時にバンド演奏をしたとか。物凄く上手なドラムを披露したのだから小学校から同じ奴はあいつに惚れてもおかしく無い。かたや、俺なんて平凡だ。無理して中学受験をしてここに入った時は自分が天才かもと思ったが、そんな事は決して無かつた。井の中の蛙は狭い日本の中でさえ大海を知つたのだ。

「でも可愛いよな～ちくしょう！俺もなんか楽器やろうかな。」「はいはい、頑張れよ。」

放課後、する事も無いが、家に帰っても誰もいない。そして最悪な事に家の鍵を忘れてしまったためにどこかで時間を潰すしか無い。そんな時は決まって屋上に俺は行く。

この学校は屋上が開放されているために多くの生徒が利用している。放課後は部活があるために、昼休み程人がいないので快適だ。

「今日は誰もいない、ね？」

屋上に着いてみると珍しく人がいなかつた。近くのベンチに腰を掛けグラウンドを見る。色々な運動部が汗を流して部活に励んでいる。そんな人達を見て何が面白いのかと思ってしまう。彼らは青春してました、という事だけを楽しみにしているのだろうか。俺には全く解らない気持ちだった。むしろそういう人達は見ていて不愉快になる。

「人生って何だろうな？」

「それで、今日はどこ行くの？」

「決まってるだろ、こんな晴れた日は海に行くしかないだろ?」

男がそう言うと、車にサーフボードを乗せた。女はまたかと言ひ顔をして車に乗り込み、男が乗るのを待っていた。

「ね~、速くしてよ?」

「ちょっと待つてろつて、今すぐ乗るから。」

荷物を全て詰み込んだ後、男は車に乗り込みエンジンを掛けて車を動かした。

「毎日海に行つて飽きないの?」

女は少しうんざりしながら男に話しかける。

「バカ、毎日海に行つてサーフが出来るなんて最高だろ? 大学生つて素晴らしいな! 来年からはこんな事出来ないよ。」

「私達も社会人になるからね~。早い物だよね、もう最後の学生生活だよ?」

「だから思い出をいっぱい残そうぜ!」

車を運転しながら男は女に喋る。先ほどのうんざりした顔から笑顔で頷き、男を見ている。男の方も女と一緒にいるのが嬉しいのか笑顔になっている。車を運転して一人は海を目指した。

「ねえ、君! そろそろ屋上閉まっちゃうよ?」

聞きなれない女性の声で俺は目を覚ました。目の前に見た事の無い女性がいる。制服を着ている所から教師じゃない、スカーフの色から一学年上の先輩だと解った。どうやら俺は寝てしまっていたようだ。少しだが、また夢を見た。今回は女と一緒に海に行く話、彼

女なのだろう。

「あ、起きたね。もうそろそろ屋上閉まっちゃうよ。寝てたから悪いと思つたけど・・・・・・って君、何か怖い夢でも見たの？」

「え？」

田を擦ると涙が出ていた。あの夢だから涙が出たのだろうか。そう思つていると、目の前の女性が俺を抱きしめ、頭を撫で始めた。「え、ちょ・・・・ちょっと・・・・」

「大丈夫、大丈夫だから。落ち着いてね。」

この状況でどうせやつて落ち着けと言つのだろうか?寝起きに知らない女性に抱きつかれて頭を撫でられるという事に。顔に胸が当たつていい。生まれて初めて女性から抱きしめられ、胸が顔に当たつていると言つ状況に俺はパニックに陥った。

「アハハ、じゃあ怖い夢を見て泣いてたんじゃなかつたんだね。少し照れつつ、笑いながら女性が喋る。

「ごめんな、うちの弟さ、こうしたら落ち着くから。」

「俺はあなたの弟じゃない。」

「そうだね」と言い、女性は振り返つた。あれから、俺はこの女性に離してもらい、訳を話して屋上を後にした。

「私亞里抄、桐島亞里抄つて言うの。見ての通り一年生。君は名前なんて言つの?」

「佐藤匠。」

「匠君ね。私、放課後は毎日屋上にいるから良かつたら話そつ?」  
亞里抄が俺の方を見てそつ話す。要するに話し相手になつてほしいのだろう。

「そこまで暇じゃない。」

「じゃあ暇な時!暇な時でいいからね?」

「わ、わかった。暇な時だけなら。」

物凄い勢いで喋りかけてきたために俺は嫌だと言えなかつた。

「それじゃ、毎日待ってるからね？じゃあね～！」

亜里抄は俺とは別の方向に走つて行った。変な夢を見た後に、変な先輩に付きまとわれてと今日は散々な一日だった。これからもこのような日々が続くのだろうか？亜里抄の方は解らないが夢の方は続くのだろう。そう思つたら、自然と溜め息が出た。

## 外伝 別の転生者の場合？（後書き）

読んで頂きありがとうございました。転生物で私が書きたかった事の一つです。記憶を完全に引き継ぐのではなく、全く引き継がず、かと言って記憶を完全に消去した訳ではなく、何かしらによつて思い出していく、見る事が出来る話。そんな話を書いてみたいと思ってました。転生をしたら記憶、経験が引き継がれて全てが上手く行く。そんな転生においての成功者じゃなく、転生をしたが全くと言つて良いほど転生の恩赦を受けない人の物語を書いてみました。題名が題名なので良い結果をもたらす例を良として、匠は良い結果も悪い結果も得なかつた例、もう一つ悪い結果を得る例を考えています。それではまた次回も頑張つて書きたいと思います。

## 中学生一年生？（前書き）

本編第五話です。早い物でもう五話目です。徐々にアクセス数、PVが増えて行くのを見る度に読んで頂いてる皆さまに感謝、感謝です。それでは今回も読んで頂けたならば幸いです。宜しくお願いします。

## 中学一年生？

「暑い・・・・・・」

「言つてな、もつと暑くなる・・・・・・」

扇風機の前で真美が力無く喋る。今、私と真美は学校の音楽室、の隣の隣の準備室にいる。通常、音楽室は吹奏楽部が使用する。それなので、軽音楽部はその隣のさらに隣の第一音楽室準備室で活動を行つ。準備室と言つ名田だが、言つほど狭く無い。それなりの防音をしているはずらしいが、音はダダ漏れなために、よく吹奏楽部の人達といざいざがある。そして、今年の夏は例年に比べて暑い。裸足でアスファルトを歩いたら低温火傷するのでは無いだろ？

「音出す時に締めきらなくちゃいけないならクーラー付けてよ。扇風機だけで何とかなる訳無いじゃん！」

「じゃあスタジオで練習する？」

「今月お金無いから無理！」

と言ひ訳で、私と真美はここで練習している。当たり前だが、音を出す時は窓、ドアを締めきらなければならぬ。そうすると熱がこもる、演奏していくと自然と体が熱くなる、また熱がこもる。この悪循環の繰り返しだ。

「服脱ぎたい気分・・・・・・」

「頼むから僕の前で裸に成らないでね。」

「お、良は私の裸見たくないの？」

真美はシャツの首元をブラが見えるか見えないかの瀬戸際まで伸ばし悪戯っぽく笑つた。

「そんな事しなくても汗で透けて見えるよ。」

「嘘！？」

「嘘です。」

そう言つと、真美は私の方に向けて近くにあつたペットボトルを投げつけた。少しテリカシーが無かつたのだろうか？

この準備室を実質スタジオ化している軽音楽部は、時間を決めて各バンド事に利用している。学内のライブが近い時は時間がびつしり埋まるらしいが、それが無い時はガラガラに空いている。そんな時や、どのバンドも入っていない時は自由に使っていいというのが暗黙のルールだ。夏休みの午前中という時間帯にバンドが練習を入れてる訳も無く、私と真美は一人でここにいる。時間表を見ると、二週間後までバンド練習が一切入っていない事が解る。ここにあるアンプは私立の学校なだけあつていいアンプを置いている。中学校の軽音楽部にアンペグやマーシャルのスタック、ジャズコーラスが置いてあるものなのか？

「真美、ちょっとギター弾きたいから窓閉めるよ。」「わかった。」

ギターのボリュームを上げてギターをかき鳴らす。最近、キングクリムゾンにはまり始めたのでその曲をよく練習している。21st Century Schizoid Man including Mirrorsの最初のリフを弾き始めるとそれに合わせて真美も弾き始めた。ドラムが無いのが寂しいが、それでも曲として何とかなってる想いしたい。この曲の難しい所は最初のゆつたりしたテンポからの転調、そしてまた戻る時にもたつてしまふ可能性が出てくる所が一番厳しい。他にも、全てのパートがきつちりと合わせなければならぬ場面が多数あるので、バンドで合わせるとなると一人一人がしつかりとリズムを把握して無ければ全くと言つていほど形にならないだろう。

私と真美が弾き終えると同時に準備室のドアが開き、小倉が中に入ってきた。

「やっぱ良と真美さんか。」

開口一番に私と真美を特定する言葉が出てくるのはどうだらうか？

「何でつて顔してるけど、あんな難しい曲弾けるの前位しかいなによ。同じ学校にお前らレベルがいつぱいいたらこいつが困る。世の中には同じ年で同じ位、それ以上は山ほどいるだらうけど、小倉の言う通り、同じ学校に沢山いたら嫌になる気持ちは解ら無いでもない。

「それはそうと奥、ドラム叩いてくれないか？今度のライブでこれやるんだけど。」

と、言い私にスコアを渡してきた。曲はグリーンデイの America can Idiotだった。これならば真美と私で一度だけ合わせた事があつたから直ぐに出来る。

「いいよ。真美も弾けるはずだから監督でやるつよ。America n' Idiot覚えてるでしょ？」

「覚えてるよ～歌も歌おつか？」

「頼みます。俺コーラスだからさ。」

ギターをアンプに接続しながら小倉は答えた。それと同時に私はドラムスローンに座り、真美はマイクスタンドを調整し始めた。それぞれの準備が整った所を見て、

「じゃあ、やろつか。」

小倉のギターから始まり、私達は曲を演奏した。

「まつたく、リズム帯がしつかりし過ぎて口に合わせる気分だつたよ。」

小倉がギターをスタンドに掛けながら私の方を見て喋った。

「そりやどうも。」

「ま～あれくらいならね～」

演奏が終わると直ぐに窓を開け、扇風機の前で陣取っている真美もそう答えた。小倉が水を飲みつつ、

「そう言えば良は日っぽいドラマー見つけたのか？ギターでバンドやりたいんでしょ？」

と聞いてきたので、私は

「いや～手数が多い人はいるんだけどリズムがね～。真美がリズムしっかりしている人じゃなきゃやりたくないって言つから結局僕がドラムやる事になるかも。」

「ぶっちゃけ良より上手い人いないよ～ライブで見て解ったもん。自惚れる訳では無いが、真美の言葉は本当だった。私が入るきっかけになつた先輩もドラムだつたが、ぶっちゃけそこまで上手く無い。ドラムを初めて一年と言つ事だつたが、私が一年経つた頃よりも全然下手だつた。先輩には練習出来ない理由があつたのだが。

「ま～良より上手い人つてあまり見かけないしな～。」

「いっぱいいるよ。師匠とか雲の上の存在だよ。」

「良の師匠プロだしね～。プロの中でもトップレベルだし当たり前じゃない？」

そんな話をしていると、またドアが開き人が入つてきた。

「お疲れ様です！」

小倉が持つていた水の入つたペットボトルを置いて挨拶をした。先輩が入つてきたのだろうと思い、後ろを振り向いたらあの先輩がいた。

「おいおい、良君は挨拶しないのかい？」

「・・・お疲れ様です。」

少し睨みつけて挨拶をしたら先輩は笑いながら、

「冗談だよ。そんなに睨まないでくれよ。こっちがビビるつてば」と言つた。

「前田先輩は見た目が怖いんで冗談に聞こえないんですよ。」

「確かに。」

小倉と真美がそれぞれそう言つが、前田さんは笑つたままだつた。

あの時の印象は最悪だったが、本当は優しい人なのだ。三年生の人からそうしろと言われたので仕方なく、行ってただけらしい。

「前田さんはサッカー部に行かなくていいんですか？」

「もう終わったよ。今日は午前だけなんだ。」

前田さんは軽音楽部とは別にサッカー部に入っている。本業はサッ

カー部の方なのであまり練習は出来ないらしい。

「それについてもさつきの演奏は君達かい？プロがいるのかと思ったよ。」

「そんな、プロだなんて褒めすぎですよ。」

調子よく小倉が笑いながら答えるが、断じて小倉のプレイがプロレベルな訳が無い。

「小倉君は今年入った部員の中で一番ギター上手いけど、君達は僕達とレベルが違うね。小学生の草サッカーに高校生の全国レベルが入ってきたみたいだ。」

サッカーに例えて前田さんが説明する。その例えは予想以上に的を得ていた。

翌日、私は真美と前田さんと加奈と小倉で近くのプールに來ていた。夏休み中、連日の猛暑により、プールは超満員状態だった。

「人多すぎだろ・・・・・・」

「皆考える事は一緒なんだよ。」

小倉と共に、私は人の多さに少しばかり不満を抱いた。ビキニ姿の女性を見る度に、小倉は喜びを隠せないでいたが、その気持ちは私

も解るので黙つている事にした。

「おい良、ここにいる人達のレベルは高いけど増田と真美さんも期待できるんじやない？他の奴らからしたら羨ましい事なんだろうな。」

「…………確かにあの二人は可愛いけど。」

真美も増田さんも人気が高い事は私も知っている。そして、二人と親しくしている私に非難が来ている事も承知している。だが、今の段階で私は特定の誰かと付き合おうという考えは無い。同じ年なのに恋をしてしまえば口リコンと言うレッテルを貼られそうな気がしてならないのだ。誰も私の本当の事を知るはずもないのに。それにあればビルックスがいいのだ。私よりも似合う人がいるだろう。

「加奈ちゃんも後少しだらとびつきりの美人になるだろうな。今でも十分可愛いけど…………お義兄さんと呼んでもいい？」

「殺すぞ？」

「じょ、冗談だよ冗談！マジになるなよ、目がめっちゃ怖いんだけど…………」

冗談でもそんな事は言つものでは無い。加奈と付き合つ人は俺がしつかりと見定めなければならない。ビニーゾの馬の骨に加奈の操を預けてなるものか。

「お、待つた？？」

「遅いよ、やつとき…………」

ようやく三人が来たと思い、一人で振り返ると私達は言葉を失った。学校のプールの授業とは違い、それぞれがビキニの水着を着ていた。増田さんは見る者全てが奪われるほど、中学一年生とは思えないほど胸がスクール水着以上に強調さつて目に毒だ。真美は胸は普通だが、モデル並みのスタイルの良さが露骨に表れ、足フェチにはたまらない魅力を醸し出していた。加奈は、私は肉親だから小学生の割に発育が良いとしか思わないが、そのルックスは口リコンじやなくても手をだしそになるのではないだろうか。

「どうしたの？固まつて。」

真美の問いにハツと我に返つて、

「いや、何でも無いよ。ね、小倉。」

「そ、そうだね良。」

私達は互いに肩を抱き笑つて誤魔化したが、加奈が不機嫌そうに、「お兄ちゃん、絶対増田さんの胸見て固まつたでしょ？」

と言い、増田さんの後ろから両手で胸を揉んだ。

「きやー!? ちょっと加奈ちゃん!」

「どうしたらこんなに大きくなるのよ!」

「確かにね~私も小さくは無いのに・・・・・・」

加奈が増田さんの胸を揉み、真美は一人で胸を見て落ち込むという謎の状況。加奈の手により豊満な増田さんの胸が色々と形を変えていく。非常にけしからん光景である。けしからん! もっとやれ! . . . . . と言いたい所だが、小倉が鼻を押さえそうになつたので、

「か、加奈。もう辞めるんだ。増田さんも嫌がつてゐるじゃないか。それにそろそろやばそうな人がいる。」

加奈に辞めるように言った。手を掴めば速いのだが、そんな事をしたら増田さんの胸に触れてしまつ。

「え~でもお兄ちゃん、もっと見たいって顔してるよ? ほらほら。

加奈の揉む手が本格的にやばくなつてきた。これはいけない!

「ちょっと加奈! 辞めろつて!」

「きやあ!!!」

考えるよりも先に体を動かしたために、加奈の手を離すため掴んだ私の手が増田さんの胸を少しだけだが揉んでしまつた。

「うーごめん増田さん!」

「お兄ちゃんへんたい。」

「見損なつたよ、良!」

真美と加奈が私を軽蔑の目で見てくる。だが、加奈の目は笑つていた。間違ひなく確信犯だった。

「い、いや全然気にしてないよーそれに・・・・・・」

増田さんは苦笑いをしながら答えた。最後の方は小さくてよく聞こ

えなかつたが大丈夫だろう！ふと小倉の事を思い出して小倉を見たら、小さく蹲つて鼻を押さえていた。

「おい、大丈夫か！？」

「良か？大丈夫とは言えないが、今日この場にいる事を俺は誇りに思つ。」

恐らく、鼻血を流しながら生理現象が起きたのだろう。私は小倉をそつとしておく事に決めた。

それから私達は気の赴くまでプールで楽しんだ。途中、加奈が危ない人達に声を掛けられると言つハプニングが起きたが、監視員の人に急いで連絡をする等をして何とかその場を乗り越えた。

「楽しかつたね、お兄ちゃん！」

「楽しかつたけど、悪ふざけしすぎだろ？」

えへへとほほ笑みながら加奈は私を見た。いつもなら愛くるしい笑顔なのだが、今日に限つて小悪魔のように感じた。加奈の将来が少し心配になつてきた。

「小倉君大丈夫かな？最初からずつと蹲つてたけど・・・・」

「大丈夫大丈夫、あいつは私達の体を見て興奮しただけだから。ね、良？」

「いや、恐らく暑さにやられたんじゃないかな。」

「そうなんだ。」

にやにやしながら加奈は私を見た。あいつの名譽に誓つて本当の事を言つ詫にはいかない。

今日は私と小倉にとつて忘れない日になつたのは言つまでも

無いだね。特に小倉にどつては。

「また皆で一緒に行こうね～ね、加奈ちゃん？」

「うん！今度、真美さんも増田さんも私達の家に来てよー。いっぱい遊ぼう！」

加奈が無邪気に笑いながら喋っているが、顔が悪い顔つきになつてゐる。何が起こるか考えただけでも胸があつく、寒気がしてくる。少しだして、中学生になつて初めての夏休みが終盤へ向けて始まつた。私はしばらく師匠の所にお世話をどうか本気で考え始めた。

## 中学生一年生？（後書き）

読んで頂きありがとうございました。今回は未熟ながら、精一杯頑張らせて頂きました。今後も、思う事を文章で伝えるように努力して行きます。それでは、今回も読んで頂きありがとうございました。

## 中学生一年生？（前書き）

怒濤の羊よりしへ、第六話です。書き始めたら止まつませんでした。本編は一応この回まで考えていましたので、これからどうするか考えます。それでは今回も最後まで読んで頂けるのならば幸いです。

## 中学一年生？

夏休みが開け、段々と気温が下がってきてもおかしく無い季節になろうとしているのに、相変わらずの暑さに登校するだけで汗をかく。私は、一週間後の文化祭のために、軽音楽部のバンド練習で多忙な日々を過ごしていた。

文化祭一日目の開催式において、軽音楽部は持ち時間一十分を生徒会側から頂いたので、一バンドだけ全校生徒の前で演奏する事が出来る。また、一日目は音楽室を丸一日使えるので、一バンド持ち時間50分とたっぷりと演奏する時間があるのはこちらとして嬉しい。これだけ好条件を与えてられている事から、学校側、生徒会側からの軽音楽部に対する期待は高いと思われる。

かく言う私は二つバンドを組む事になった。一つは私、真美、増田さんとのスリーピースバンドで、もう一つは先輩のバンドにドラムで誘われる事となつた。今更だが、生きてきた年数だけで上下関係を決めるならば私はここにいる一部の教師を含めて先輩となるのだが、どうなのだろう？それはそうと、増田さんも軽音楽部に籍を置く事に決めた。冬までコンクールも発表会も無いので暇だつたそうだ。夏のプール以来、真美と増田さんは親しくなり、真美が誘う形で増田さんを部に引き入れた。どのように説得したか解らないが、これらの事が重なり、最近の私は帰りの時間が遅くなつていて。放課後、バンド練習後にドラムのレッスンや師匠との個人レッスンを行う。逆のパターンの場合、帰宅する時間が夜九時近くになるから加奈は少し機嫌斜めだ。もう少ししたらクラスの出し物の方にも顔を出さなければならないのでこの時期は本当に忙しい。

「なんか、もつとこう面白い形のベースライン入れてくれない？歌メロを邪魔しないようにかつ、ベースラインが動くみたいな。」

「うーん、解った。それじゃあちょっと違った感じで弾いてみる。」

真美と増田さんとのバンドはオリジナルを作る事になつたので練習中はもつぱりアレンジ作業ばかりだ。真美と増田さんのツインボーカル、ギター無しのドラム、ベース、キーボードという編成でバンドを組んでいる。欲を言えばギターも一人欲しかつたのだが、私達の要求するレベルについて来れる人がいないのでこの形になつた。

「サビ前のオカズ、もっと勢いよくサビにいけるようなのに変えてくれない? ロールとかの連打系じゃない感じで。」

「了解。」

基本的に誰が曲や詞を作ると決まつていい訳ではない。それぞれが家や学校で思い付いたメロディーを皆に披露して皆が良いと思ったら曲を作る。そういう形で作曲は行われる。作詞はその曲でしたい人が行う、という事を取り入れた結果、増田さんがほぼ全ての作詞を担当する事になつた。増田さんの書く詞は恋愛ものが多く、時に女性ならではの纖細で優しい感じの詞を書く事もあれば、男性的な熱い詞を書く事もある。数曲はコピーを行うが、一度合わせた時にほぼ完璧だったので最近は常にオリジナル制作に意欲を傾けている。

「これで三曲出来たね。あと二曲くらい作つてみる?」

「じゃあインストでも作る? プログレ的な!」

練習後、それぞれが自分達の楽器を片づけている時に何気ない一言を真美が発した。

「いいね。客の反応は悪いだらうけど。」

「ま~プログレを好んで聞く中学生なんてあまりいないからね。増田さんは聞く?」

「私はあまり聞く?」

「ですよね」と私と真美は顔を合わせた。それぞれ、片づけが終わり準備室を出ようとした所、部長が準備室に入ってきた。

「お、危ない危ない。もう帰る所だったのかい?」

少し慌てた様子で部長は私達を見渡した。

「どうしたんですか？」

「いやね、君達に頼みがあるんだよ。」

部長は一呼吸おいかり、

「君達のバンドを開催式に出す事に決めたから。」  
と、私達を見て言葉を紡いだ。

「ここ一ヶ月凄く忙しそうだね。文化祭が近いから?」「

ドラムを叩き終えた後、師匠が私に向かって問い合わせた。

「忙しいですね。疲れてるよう見えます?」

うん、と師匠が頷いた所を見ると、私は見て解る位に疲労がたまつてているようだ。自分自身では忙しいなと感じるだけだが、体は外に向けて信号を出していたらしい。

「ま～体を壊さないように気を付けてね。ドラマーは体が大切だから。じゃあ今日は早い所切り上げて夕飯でも食べに行くか。親御さんにはちゃんと連絡しとくからゆづり片づけていいよ。」

師匠は立ちあがると、スタジオを出て行った。周りの人気が心配するくらいに私は無茶をしていたのだろうか。それとも要領よくこなせていなかつたのか。長く生きてきたつもりだったがまだまだ改善すべき点は色々あるな、と考えさせられた。

師匠と近くの定食屋に入ると店は会社帰りのサラリーマンで溢れていた。スーツを身に纏い、酒を口にしているのを見ると飲酒したい気持ちになるが、未成年なので後数年我慢しなければならない現実を思い出した。

「なんだ、良も酒を飲みたいのか?」

私が恨めしそうに隣のサラリーマンの飲む所を見ていたのが解つたのか師匠が私に問うてきた。

「いえ、別にそういう訳では・・・・・・

「はは、中学卒業したら飲ませてやるよ。」

笑いながら、師匠は店員に注文を行つた。私も一緒に軽い食事を注文した。疲れている時に重い食べ物は喉が通らないからだ。師匠は店員が運んできた水を口に少し運んだ後に、私を見て、

「それはそうと、バンドは楽しんでるか？」

と言つた。その意味する事は簡単な用で深いと私は思つた。長年、音楽業界にいる師匠ならば私が経験した以上の事を身に染みて経験したのだろう。

「ええ。楽しくやつてますよ。」

私が笑顔で答えたのを見て、師匠は軽く笑つた。だがその目はどこか遠くを見ているようだつた。純粋に楽しんで演奏していた時が懐かしい、そして今、その時期である私が少し羨ましそうな目だつた。そんな師匠を見て私は尋ねずにはいられなかつた。

「師匠は、まだバンドをやりたいと思いますか？」

私のその問いに師匠は面をくらつたような顔をしたが、直ぐに

「そうだな・・・・・やつてみなければ解らないけど、心から楽しつつて思える事は十年近く無かつたよ。」

と、答えた。それは趣味で行う事と、仕事で行う事の差。よく、好きな事は趣味に留めておいた方が良いと聞く。趣味で行うのならば自分だけが楽しければいい。そこに周りの重圧や大きな責任が伴う事は無い。だが、仕事となると別問題だ。仕事に結びつく事になると自分が目に見える以上に多くの人と繋がる事になる。自分一人のミスで最悪、誰かが首を切られるかもしれない。自分のせいで誰かが路頭に迷う結果につながる可能性があるのだ。お金を貰つて仕事をする以上、これははどうあがいても仕方の無い事だ。

「それでも俺は、この仕事に就けた事に誇りを持つてるよ。嫌な事もあつたし、認められるまで回り道もした。それでも後悔なんてしない。俺は胸を張つて、職業はプロのドラマーだと答えるよ。」

胸を張れると答えた師匠は輝いて見えた。業界の汚い所を見てきただろう、大きな挫折を味わつたのだろう、現実を見る事で理想が崩れた事もあつたのだろう。それでも後悔をしていないと言つた師匠に、

大人に私は成らなければならない。大人というものは皆そういう生き物なのだから。私はまだまだ社会の事は知らない。知つて行かなければならぬ。

「ま、こんな辛氣臭い話をするためにお前を飯に誘つた訳じゃないんだがな。」

苦笑いをしながら、師匠は頭を搔いた。

「とにかく、今を精一杯頑張れって事だ。勉強でも、ドラムでも、恋でもな。人生はゲームみたくセーブ、ロード機能なんて付いてないからな。どうあがいても後戻りが出来ない一方通行の道なんだ。」

「そうですね。俺も精一杯、今を生きます。」

師匠の言葉が胸を突く。どれだけあがいても後戻りが出来ないんだ、人生というのは。私があの時、周りをよく見ていたならば……。・と考へても今になつてどうする事も出来ない。過去の過ちを次に生かすしか道は無い

。

ようやく、私達のテーブルに料理が運ばれた。頂きますと言ひ、ご飯に箸を着けようとしたその時、

「そう言えば、真美ちゃんともつやつたのか？」

師匠の何気ない一言で私はご飯に箸をさしてしまつた。

「な、何言つてるんですか！ 真美とはそういう仲じやないつて何度も言えれば解るんですか！」

私がうろたえている事が珍しいのか、師匠は大笑いをしてゐる。

「何、隠さなくていいつて。あんだけイチャイチャしてるのを見せられるといつちもちよつとムカつくんだよ。あんな可愛い子と付き合つにやがつてよ。」

私と真美が一緒にスタジオにいる時や、増田さんと真美と三人で学校帰りに楽器屋や、ファーストフード店にいる時に、何故か師匠に会う事を思い出した。その度に茶化してくるのだ。

「だから付き合つてないですつてば！」

笑っていた師匠が急に真剣な顔になり、

「じゃあ、何か。テメーは真美ちゃんだけじゃ物足りなくあのお嬢様つぽい子とも遊んでるのか？おいおい、俺はお前に一股だけはするなと言つたはずだぜ？」

と、怖い顔で言つた。

「だから、一人ともそんな関係じゃないですってば！」

その後、師匠に一人とも何も関係が無い事を説明して納得させるまでに三十分かかった。

店を出ると一台のタクシーが止まっていた。

「もう遅いからな。今日は俺が付き合わせたんだ。お前はタクシーで家に帰れ。金は心配するなよ。」

と、言つと、師匠は私に五千円札を渡した。夕飯を御ちそうしてくださったのにここまでしてもらいうのは相手が社会人とは言えさすがに悪い。

「大丈夫ですって！僕電車で帰れますし！」

「いいから黙つて言つ事聞け。弟子は師匠の言つ事をちゃんと守るもんだぜ。それにほら、タクシーの運ちゃんもお前を連れていけないと商売あがつたりじゃねえか。」

「でも・・・・・・」

「いいから乗れ。お礼なんて考えるなよ。それでも何かを返したかつたら、文化祭でお前が出来る最高のプレイを最高に楽しんでいる姿を俺に見せる。それこそ、俺がもう一度バンドを組んで楽しみたいと思わせる位にな。」

そこまで言われて私は師匠の恩を受けない訳にはいかなかつた。

「師匠、ありがとうございました。」

私は師匠に頭を下げてタクシーに乗り込んだ。タクシーに乗り込んでから師匠の方を見ると、師匠は私の方をずっと見続け、一言、頑張れよと言つて踵を返した。

それから、家に着いた後に師匠から一通のメールが届いた。内容は文化祭が終わるまで個人レッスンは無し、文化祭終了後に真美と増田さんと私とでご飯を食べに行く事、そして最後に精一杯楽しめという事が書かれていた。

速い物で、あつという間に文化祭当日を迎えた。クラス展示の準備も無事に終了し、後は文化祭を楽しむだけだつた。私達は開催式を行うために近くのホールに向かつた。私はスネアとペダル、ステイックを持って、真美はベースとエフェクター・ケースを持ち、増田さんはキーボードを背負いホールの裏側へ向かつた。

「よし、私達の初ライブだ！ 気合入れて行こうぜ！」

「まだ時間じゃないよ。今は楽器を置きに来ただけ、そうでしょ？」うん、と元気よく真美は頷いた。ステージ裏に着くと、既にダンス部がステージでリハーサルを行つており、その後ろに部室にあつたアンプとドラムセットが準備されていた。

「いつの間に運んだんだろう？」

「ジョバンニが一晩でやつてくれました。」

増田さんの問いに真美がふざけて返す。その問い合わせが面白かったのか、増田さんは上品に手を口に押さえて笑つてゐる。本当にこの二人は最初の頃が嘘かのように仲良くなつた。

それから私達はリハーサルを軽く行い、ホールで昼食を取り、クラスの皆が来るのを待つた。皆が来ると私達は合流し、指定の座席に腰を掛け、開催式を迎えた。オープニングから始まり、数々の催し物が行われ、多いに盛り上がった。同じクラスの友人も、初めての文化祭に目を輝かせて楽しんでいた。私も何十年ぶりかの中学校の文化祭の開催式を楽しんだ。

私達の出番が次にさしあたつた所で私達は席を離れステージ裏へ向かった。ステージ裏に着いた時には私達の前のダンス部の演技が終わり、幕が下がっていた。業者の人達が楽器をセッティングしていたので、私達も急いで楽器を取り、それぞれの楽器をスタンバイした。軽く音出しをした所で一度ステージの真ん中に集まつた。

「私達の初ライブだね。」

「気合入れて行こう！」

「あんまり氣負いすぎるなよ？ 楽しく行こうよ。いつも通り、観客を楽しませるのも大事だけど、僕達が皆楽しまなきゃ意味がないよ。」

ステージの真ん中でそれぞれ思つた事を言い放つた。

それから私達は円陣を組み、

「良、何か言いたい事ある？」

真美が私に向かつて言つた。

「そう言えば、師匠が文化祭終わつたら皿でご飯食べに行こうだつてさ。」

「「それ今言う事？」」

真美と増田さんが笑いながら言つた。気を取り直して、

「それじゃあ思いつきり楽しみましょ。真美は？」

と言い、真美に繋げた。

「私からは、音楽を楽しみましょうー。これだけ！ はい次、まつちゃん！」

ちなみにまつちゃんとは増田さんの事だ。

「皆で楽しく音楽を演奏しよう！」

結局、皆音楽を楽しむためにここにいる。それでいいんだ。

「それじゃあ音楽を楽しもうぜー！」

「オーーー！」

一日に渡つて行われた文化祭もいよいよ終わりを迎えるとしている。今、私達はグラウンドで行われているキャンプフェイバーを準備室から見ている。

初日のライブは大盛況で終える事が出来た。私も真美も増田さんも、持てる力を精一杯出し切り、楽しく演奏をした。それが伝わったのか、一曲目、二曲目と次の曲に行く度に盛り上がっていった。最後は大きな拍手と声援を貰い、私達は感動を貰つた。

嬉しい事に、開催式が終わり学校へ戻る途中に、同じ学年の女子や先輩達から話しかけられたりしたのだが、真美と増田さんが良いタイミングで話しかけてきたり体を入れてきたので話すタイミングを逃してしまった。私が他の女子と仲良くなるのを好しと思えない理由もあるのだろうか？小倉からは死ねと散々言われた。

次の日、午前中はクラス展示の場所に私はいた。観に来る一般の

お客様の相手をしたりと中々忙しかった。

午後は音楽室に向かいライブを行つた。私と真美と増田さんのバンドは開催式効果もあり、音楽室の中が人で溢れていた。それこそ小さなライブハウスに有名バンドが来た時みたいな感じだ。ドラムの位置から見ていてライブやモッシュをしたら楽しいだらうなと思いつながら演奏をした。今回も最高に楽しく演奏する事が出来き、終わった後に師匠から俺にドラムをやらせろと言られた。可愛い女子中学生とバンドが組めるなんて事あり得ないんだぜ?と笑っていたが、私達の演奏を見て何か思つてくれたのだろう。素直に、師匠にそのように思わせる事が出来て嬉しかつた。

その後、先輩達とのバンドのライブも行い、無事に中学一年生の文化祭は終了した。

「なんか、あつという間だつたね。」

窓からグラウンドを見ながら増田さんが喋つた。あつといつ間に始まってあつといつ間に終わつた文化祭の余韻に浸つてゐるのだろう。「そうだね。」

私も窓からキャンプファイヤーを眺めてそう答えた。私としても、これまであつたどの文化祭よりも忙しく、楽しかつた。素晴らしい思い出が出来たと思つていてると後ろから頭を叩かれた。

「痛いな!」

「何余韻に浸つてるんだよ!俺は全然満足してないぞ!」

そう言えば小倉とはバンドも組んで無かつたので文化祭期間中はあまり会つていなかつた。

「知らないよ。」

僕がそう答えると、小倉は何でお前ばかり良い思いするんだよ!と叫び泣いてしまつた。確かに私は他の人より得をしているのかもしない。

「あ、キャンプファイヤー終わっちゃつよ!ね、最後は笛でグラウンドで見よつよ!」

真美の問いに、

「それもそうだね。小倉、外行くよー。」

私は小倉を引き連れて外へ向かつた。後ろに真美と増田さんが仲良く話しながら着いてくる。

グラウンドに着くと、調度キャンプファイヤーが燃え尽きる所だつた。それを四人で見て、私達の文化祭が終了した。最高の思い出と共に、一度と戻らないこの時を胸に仕舞い込み、私の一回目の、そして最高の中学生の文化祭が終わりを告げた。

## 中学一年生？（後書き）

読んで頂きありがとうございました。今年になつて歳が一回り以上の方と話す機会を多く頂きました。その人達が経験してきた事を聞く度に、重みが伝わってきて違うんじゃないかと感じても、違いますよね？と軽々しく話せない、という事を経験しました。彼らのそういう話を聞いて、ただ時間の無駄にするか、自分の人生に活かす事が出来るかは自分次第なんですね。過去から学び、それを次に活かす、これが大事なのではないかと私は思います。違うと思ったのならば、そのようにならないようにする。そうだな、と思つたのならばそれを活用する。何事も使いよつてどうともなるみたいですね。それでは今回も読んで頂き本当にありがとうございます！もっともつと読みやすくなるように頑張りたいと思います！

## 中学生一年生？（前書き）

本編第七話です。今回も読んで頂ければ幸いです。ここ最近とこうか数日の間にこんなに書けたことに自分でも驚きを隠せないです。完成度はともかく・・・・取り敢えず、書き続けて、勉強していけばより良い物が出来ると信じていますので頑張つて続けたいと思います。では宜しくお願いします。

## 中学一年生？

「もういいくつね〜ると〜 ク〜リ〜ス〜マ〜ス〜」  
準備室の窓際にクリスマスツリーを組みたてながら小倉は歌つていた。正月の歌をクリスマスに変えているのは突つ込み待ちなのだろうか？周りに真美も増田さんもいるのに一人とも小倉を無視し、読書にふけていた。誰か突つ込めばいいのに、誰も突つ込まない。外の寒さと二人の小倉への態度が比例しているかのように冷たい。小倉の替え歌もついに歌詞が思いつかないのか鼻歌になってきた。これはいよいよまずい。

「クリスマスには〜か〜のじょと〜ちぢくり 「おい！それ以上いけない。」・・・・・

下ネタに発展しそうになった所を、急いで止めた。だが、何を言いたかったのか察しが付いた二人は今までよりも冷たい視線で小倉を包み込んだ。さすがにそれに耐えきれなくなつた小倉が、

「な、何で二人は私をそのような目で睨みつけるのでしょうか？」  
と、怖々とクリスマスツリーを組み立てていた手を止め尋ねた。しかし、二人は何も答えようとしない。直ぐ様に視線を読んでいた本に戻した。一人とも小倉が来るまでこのような態度では無かつた。いつものようにオリジナル曲について話し合い、それから適当に会話をしていくはずだ。それが小倉が準備室に入つてくるなり急に会話を辞め本を読み始めた。

「なあ、なんかしたの？」

無言の状況に耐えられなくなり、私は小倉に二人に何かしたのか尋ねた。

「と、特に何もしていないとは思うんだけど・・・・・ひつ！」

何もしてないに反応して二人はまたしても小倉を睨みつけた。小倉は蛇に睨まれた蛙のように縮こまつた。

さすがの私もこの状況に耐えられなくなつてきた。

「じゃ、じゃあ俺先に帰るね。また明日ね。」

私が荷物を持ち、準備室を出ようとすると、

「私も帰る。」

「私も帰ります。」

真美と増田さんの二人も身支度を整え準備室を出ようとしたら。私が呆気に取られると、

「良、はやくして。」

と急かされたので、

「じゃあ、一人で頑張つて頂戴。なんだつたら明日の朝に来て俺やるから。」

私は小倉にそいつを言つと、準備室を後にした。

「あいつが、私にクリスマスは一人なんでしょうって聞いてきたんだよ！？どういう神経してんのよ！」

「私も言われました！まったく、デリカシーが無いですよね！」

二人は互いに小倉についての愚痴を言い合っている。察するに、個人個人にクリスマスの時に一人なのかと聞いていたらしい。おそらく、一人ならば一緒に過ごそうと誘う手はずだつたのだが、聞き方に問題があつたようで、クリスマスの時は一人なんだろ、とからかわれたと思ったのだろう。

「多分さ、小倉は一緒にクリスマスを過ごしたかつたんだよ。ちょっと言い方が悪かつただけで・・・・」

「そうだとしても！普通そういう話を笑いながら話す？だからあいつはモテないんだよ！」

少しだが小倉に同情したくなる。私もモテた記憶が無いので、小倉がクリスマスまでに彼女を作つて一緒に過ごしたいという願望は解らぬもない。

「そういえば良くんはクリスマスは予定あるの？」

増田さんが話を切り替えようと私に話を振った。

「いつも通りに家族で過ごそうって思つてるよ。学校もあるし、夜

遅くまで出歩くわけにはいかないからね。」

特定の誰かと一緒に過ごすにはまだ早い年齢だ。そういう事は高校を出てからでも遅くないだろ？。

「そうなんだ……」

顔を足元に向けて増田さんが答える。確かに小倉も含めて皆で盛大に楽しく行うのは面白そ�ではあるが、今はまだ家族で過ごしてもいいかも知れないと考えている。

「まあ、増田さんも僕のことは気にしないで楽しく過ごしなよ。」

「うん・・・・・・」

励ましたつもりがさらりと暗くなってしまった。既に断られたのだろうか？

「ほんと良って・・・・・・」

「うん、そうだね・・・・・・」

一人はそう言い残すとトボトボと歩いて行つた。一人の後を追つてはならないような気がしたので、私は挨拶をして一人、違う道を行くことにした。

「お前は本当に解つてないな。」

師匠との個人レッスンが終わり、今田の事を話すと呆れた顔をしそう言つた。

「普通や、女の方からクリスマスの予定聞かれる事つて無いぜ？あつたとしたら、それは気がある証拠だ。」

自動販売機の前のベンチに腰掛けている師匠が頭を搔きながら言った。

「ま～、普通はそう感じますよね。」

「そう思つなら氣の利かせた言葉位言つてやれよ。お前が最後に言った言葉は人によつちやフラれたと捉える奴もいるぜ。ま～、あつちはお前が鈍感つて事で終わらせてるけどよ。」

師匠の言つている事は解る。確かに最後の台詞はまづかつたのかも知れない。

「僕は一人の事は好きです。でも恋愛感情としての好きって気持ちをまだ感じた事がないんです。一人はもしかしたら僕の事をそういう気持ちで見ているのかもしれません。だからこそ僕は、恋愛感情を抱いて無い時にそれに答えるのは相手に失礼だし、何より僕自身が許せません。」

私だつてそこまで鈍感なわけじゃない。違う可能性もあるだろうけど。だが、違わなかつた場合、今の私の感情でそれに答えるのは私は出来ない。

「お前の言つ事はもつともだ。そんな気持ちで受け入れられても相手に失礼だよな。だが恋愛感情つてのは解らないもんでは、最初は何とも思わないで適当に付き合つたとしても、場合によつては付き合つてゐるうちに好きになつてくる、つて事もあるんだぜ。俺の今嫁さんがそうだった。」

いつの間にか師匠は私の方を指差して熱く語っていた。言い終えると師匠は立ち上がり、

「ま、お前は少し大人びてゐるからな。そんなお前だからこそ悩んでいるんだろうけど。多いに悩め、少年！悩む事は良い事だぜ。」それだけ言つと、師匠は私を置いてこの場を去つた。

「良は今年のクリスマスは真美ちゃんと二人つきりで過ぐすんだろ？あまり遅くなるなよ。」

珍しく早く帰つてきた父が夕飯の席で私に聞いてきた。  
「今年も家族で過ごそうと思つてるんだけど。」

私の言葉に父は心底驚いた表情をした。

「何で？クリスマスだぜ？彼女と一緒にいたいって思わないの？」

「お兄ちゃんは誰とも付き合つてないよ！」

父の言葉に私が反論しようとするよりも先に加奈が表情を顕にして言つた。

「お兄ちゃんは今年も来年も家族皆でクリスマスを祝いたいんだよね！？」

「そ、そうだね。」

妹の加奈の迫力が凄いためにそう言つしか無かつた。別に家族と過ごすのが嫌ということではないのだが、最近の加奈は私の手に負えない時がある。

「付き合つてないのか～。まだ良には恋愛は早いのかな・・・。」

疑問に思いながら、父は食事を口に運ぶ。

「ま～家族で過ごすのもいいけど、友達で集まるクリスマスもいいんだぜ？俺が高校の頃は男だけで集まってむさ苦しいクリスマスを過ごした事もあつたな。あの時は悲しかったな～。何が悲しくてカップルが幸せそうに過ごしている時に男で集まってるのかって思っちゃって。」

昔を思い出しながら喋る父を見て、私も同じ事をしたのを思い出した。大学二年生の時、彼女がいない友人を集めて、クリスマスイブの日に海で騒いだ。寂しい気持ちをまぎわらすために集まり、馬鹿騒ぎをしてクリスマスイブを過ごした。

「でも大学の時はずっと私と一緒にだつたじゃない？」

「ま～、付き合つちやつたもんな。まさか結婚までするとほその時絶対思わなかつただろうけど。」

父と母が仲良く笑いあう。学生時代から交際を始め、今に至つても仲の良い所を見ると、運命の人同士で結ばれたのだろうと思う。もしあの時、私が死んでいなかつたら父と母くらいの年代になつている。私は結婚をして、家庭をもつことが出来たのだろうか？子供を作り、幸せな家庭を築くことができたのだろうか？

「お兄ちゃん、どうしたの？」

加奈の言葉が耳に入った。加奈を見ると心配そうに私を見ている。

「何でもないよ。ちよつと考えただけ。」

「お父さんとお母さんを見て？お父さんも高校生の頃は寂しかったみたいだけど、今は凄く幸せそうだよね。」

父と母が楽しそうに会話しているのを見て、加奈が微笑みながら言う。加奈の“今は”という言葉に、私は昔の自分では無いことを思い出した。今の私は良だ、どうあがいても過去の私に戻る事は無い。良として人生を歩んでいくしかないのだ。その事を思い出すと自然と笑みがこぼれた。突然笑顔になつた私を見て、加奈は不思議そうな顔をしていた。私は加奈の頭を撫でて、

「ありがとう。」

と、言った。私の突然の行動と言葉に首を傾げていたが、私が元気になつたのだと感じたのか、

「どういたしまして！お兄ちゃんは私がいなくちゃ駄目だね！」

加奈は飛び切りの笑顔を私に向かって。

クリスマスイブまで一週間を切つた日の夜、父がクリスマスイブの日に仕事で出張に出かける事になつたので、今年は父のいないクリスマスイブになる事が決まった。その話をしている時の父の顔は物凄く残念そうであった。

「そういう事だから良も加奈も友達とクリスマスパーティーしてもいいんだぞ？別に家で行つてもいいし。な？」

「ええ。大勢で賑わうつてのも悪くないわね。」

父の言葉に母も頷いた。その言葉に、加奈は勢い良く、

「それなら真美ちゃんと増田さん呼ぼつよーね、お兄ちゃん！」

私に同意を求めた。私は少し考えてから、

「まー、一人がいって言うなら僕は構わないけど。」

「そうね、真美ちゃんも増田さんもきっと喜ぶわ。良、連絡してあげたら？」

真美と増田さんが来るかも知れない事に嬉しそうな表情をし、手を

叩きながら母が答えた。私は直ぐ様、真美と増田さんに連絡を取り、二人とも喜んで当日来てくれる事が決まった。ついでに小倉も誘つてみた所、電話の向こうで泣きながら感謝された。

「「「「「メリークリスマス…………」」」」

クラッカーを鳴らし、皆一斉にメリークリスマスと叫んだ。ダイニングで行うには少し狭いために、広いリビングで行われた。

「それについても豪華な料理ですね！皆手作りなんですか？」

リビングテーブルに所狭しと並べられた料理を見て、小倉がはしゃぎながら喋った。それを聞いて母は微笑みながら、

「そうよ。家では手作りなの。お口に合わなかつたらごめんなさいね。でも、多く作っちゃつたからもしかつたらいっぱい食べてね。

「めっちゃ美味いですよーこんなに美味しかつたら外で食べる必要ないです！」

いつの間にか小皿に料理を載せて食べていたのか、小倉は肉を頬張りながら答えた。あまりに美味しそうに食べている小倉を見て、母は満足そうであつた。

「本当に美味しいです。今度私に料理教えてくれませんか？」

「おばさん、私にも教えて！」

増田さんも真美も、母の料理の味に感動をしたのか母に料理を教授してくれないかと頼んでいた。

「お兄ちゃん、何か料理お皿に盛るつか？」

「うん、お願い。」

加奈に私の小皿を渡し、料理を盛つてもひつ。その間にゴシップについてあつたジユースを口に含んだ。

「お前、毎日こんな美味しい料理食べるのかよ？」

「毎日こんな豪華な料理が出る訳ないよ。でも、母さんの作る料理

は何でも美味しいよ。」

小倉が羨ましそうに聞いてきたので私は正直に答えた。確かに母の作る料理は美味しい。店で出される料理と比べても遜色無い。それこそ下手な店よりかは比べ物にならないくらい美味しい。友人が口々に母の料理を美味しいと言つてくれるのは息子の私にとっても嬉しい事だ。口に運んだ後の表情から決してお世辞で言つているのでは無いと解るのでなお嬉しい。

「いや、料理も上手でそんなに綺麗なら若い時はモテたんじゃないですか？もちろん今でもお美しいですけど。」

「お前、人の母さん口説いてるんじゃないよ。」

食事が進み、一段落してくると女子は女子同士で会話に夢中になる。

「でさ~どうしたらいいと思う？」

「私も知りたいですよ！ てか、真美さんには負けませんからね！」

「言つてくれるね~、私だってまっちゃんには負けないから~。」

「一人とも~私の存在を忘れないでください~私が一番ですから~。」  
女の子同士仲良く、とは見えないが話をしている。母は後付けを行つており、私と小倉はテーブルで将棋を指していた。

「な~、何でお前ん家つてゲームないの？」

「あるじゅん、今してるだろ。」

「いや、そうじゃなくてテレビゲームの事~。」

「必要ないもん。」

私の家にはテレビゲームが無い。なので大勢で遊べる物といつたらテーブルゲームしか無いのだ。その事に小倉は少しばかり不満を顕にする。

「お前普段何やってるの？」

「勉強か本を読むか、ギターを弾くか、ドラムパット叩いてるか、リズムトレーニングしてるよ。勉強はともかく、ゲームするより楽しいだろ?。」

私の言つている事にいまいちピンとこない表情を小倉はしている。

「小倉つてさ、ギター弾いて楽しいって思わないの？」

「いや、練習だもん。樂しいうて思わないよ。バンドでライブしてる時は楽しいけど。」

「そつか。僕はね、ギターを弾くだけで楽しいんだよ。ドラムもね。それに別に練習と思つて曲を弾いたり、リズムトレーニングしていないんだ。楽しいからしてるんだよ。出来ない曲を練習している時も僕は練習をしているつて思つた事は一度も無い。そうだね、例えるなら物語を読んでいる最中みたいな感覚なんだ。曲を完璧に弾けるようになつた時は物語を読み終えた時のようを感じてる。その積み重ねが今の僕の技術なんだと思う。好きこそ物の上手なれつて事だよ。」

啞然とした顔で小倉は私を見ている。別にこの感覚は今になつてからでは無い。前世の時もそうだったのだ。ただギターを弾くだけで楽しかつた。スポーツをするよりも、他のどんな遊びをするよりも楽しかつた。だから、苦に思う事なんて一度も無い。より上手くなりたいと思って様々な練習をしている時もそれは同じだった。

「なんか、お前が上手な理由が解つたよ。俺はお前程楽しめていいんだな。」

「ま、そのうち樂しいうて思えるよつになら。出来ない時は誰でも楽しくはないからね。」

落ち込み始めた小倉を軽くフォローしておく。こんな私の自論を聞いて腐るのは勿体無すぎる。

「そろそろ遅い時間になつてきたからお風呂入つて寝ましょ。」母がそう言つと、女子は皆で風呂に入り、私と小倉はそれぞれ別々に風呂に入つて寝る準備をした。

今日だけ、私は小倉と一緒に楽器が置かれている部屋で寝る事になつてゐる。私と加奈の部屋が一緒の部屋なので、それぞれの部屋に男女別れて寝るということが出来ないからだ。なので、私と加奈の部屋に、加奈と真美と増田さんが寝る事になつた。私の持ち物で

見られて恥ずかしい物は無いのでそこら辺は大丈夫である。

「うわ、すげー。このギターめっちゃいいやつじゃん！アンプもこんなに良い物を・・・・・」

部屋に置いてある楽器類を見て小倉は興奮していた。主に父と母の楽器が置いてあり、この部屋で私も加奈も音を出している。

「全部父さんと母さんの物だよ。僕のギターは部屋においてあるし、ドラムパットは・・・・・まあ、僕の物つてわけじゃないしね。

「え、お前の両親楽器弾けるの？」

「うん、父さんは昔からギターを弾いていて、母さんもベースをね。二人共、大学の軽音サークルで知り合ったみたいだよ。だから僕は小さい頃から楽器を演奏してるんだ。」

「環境つてやつか・・・・・」

小倉の言つ通り、環境つてのは思つ以上に人を左右する。別にそういう環境で無くとも才あるものは上に行くのだが、普通の人ほど環境次第でどうともなる。もつとも、環境だけでなく自分の心構えの方が大事なのは言つまでも無いが。

布団を敷き、電気を消して私達は床に着いた。いざ日を閉じようとした時、小倉が声をかけてきた。

「なあ良、お前真美さんと増田さんどっちが好きなんだ？」

私は小倉の問いに答えられないでいた。恋愛感情を無しで言えば両方好きだ。だが、不思議な事に一人には恋愛感情と言うものが芽生えない。それは他の女性に対してでもある。私が同性愛者だからといふ事ではなく、おそらく、精神面で思春期を迎えていないからであろう。身体面では一次成長期を迎えた。それと同様にして、普通は思春期に差し掛かるはずである。それなのに、今の私は異性として好意を抱くという感情が未だに芽生えない。

「一人とも好きだよ。」

「そういう事じゃなくて！女としてどっちが好きかつて事だよ。」

小倉の口調が激しくなっている。私はその問いに答えられなかつた。小倉は深く問いただす事もせず、私たちは眠りについた。

<Side Another>

今日は凄く楽しかった。この前良くんにクリスマスの事を聞いたときには考えられない状況。

私が良くんと深く関わるようになつたのは小学校6年生の頃からだけど、今みたいな気持ちになつたのは小学校最後の発表会のライブ後。以前から勉強も出来るし、顔も全然カッコいいほうだと思ってたけど、バンド練習してる時は全然違つた。学校で見せる表情よりも活き活きとして、凄くカッコよかつた。あんなに楽しそうな顔できるんだつて思つた。その時から何となく良いなつて感じだったのがライブを通して好きつて感情になつた。私はこの人以外を好きになるなんて有り得ない！そう思つた。

中学校に上がつて、同じクラスになれたらいなーなんて思つてたら、なんと、同じクラスになつた！これでまた良くんと一緒にいる時間が多くなる、そう思つたらとても嬉しかつた。でも、同じクラスにいたのは良くんの友達の真美さん。一度だけみたことがあつた。バンド練習中に勝手に入つてきた子。しかも良くんの手を引つ張つて！それから真美さんは良くんと一緒にセッションを始めたんだけど、その時の良くんの顔が私達とやつている時よりも楽しそ

うだつたのが悔しかつた。

始めの頃は真美さんは苦手だった。私とは違つて明るいし、活発的だし、美人だし。でも、プールの一件以来、私は真美さんと友達になつた。真美さんの良くんへの思いが私と同じだということが解ると、絶対に負けない！って気持ちになつた。でも同時に、私以外と結ばれるなら真美さんしか認めないと気持ちにもなつた。

良くんは文化祭以降、学校内でも有名人になつた。女の子からの人気も凄い。だけど絶対に負けない！真美さんにも負けない！

私は一人が寝静まつたのを見て部屋を飛び出した。ちょっと卑怯だけど、良くんの寝顔が見たかつた。ついでにキスもしちゃおうと思つてゐる。あと少しで良くんが寝てる部屋だ！勇気を振り絞つて、

「増田さん、そこはトイレじゃないですよ？」

声のした方へびっくりして振り向くとそこには加奈ちゃんがいた！

「さあ、トイレはほかちですよ。ほら、行きますよー。」

加奈ちゃんに無理やり連れられて私はトイレに向かわされた。加奈ちゃんもしかして、

「増田さん、私の目が黒いうちはお兄ちゃんは渡しませんから。」

・・・・・　真美さん、もしかしたら最大の敵は加奈ちゃんかもしれませんよ・・・・・

## 中学生一年生？（後書き）

読んでいただきありがとうございました。今回良とは別の視点を入れたかったので、最後は視点が変わったのを解りやすくするようにしました。そんなのいらねーよと感じる人もいるでしょうが、一応、ということで。では今回も読んでいただき誠にありがとうございました。次回も早ければ今日中に書き上げたいです。

## 外伝 別の転生者の場合?（前書き）

外伝一話目です。結構匠の性格、口調が変わつてますが中一病にさしかかるつとしている、と言ひ事で許してください。一応中学一年生ですからね。それでは今回も最後まで読んで頂ければ幸いです。おそれく今まで一番長いと思います。でも眠気を抑えて頑張つて書きました。ではよろしくお願いします。

## 外伝 別の転生者の場合？

相変わらず不思議な夢を見続ける日々が続いている。内容の速度が速く、一瞬のうちに全てを見る事が出来たのならそれは走馬灯なのではないだろうか。でも俺の生活している内容では無い。まるで夢の中で物語を見ているようだ。普遍的な、摩訶不思議の無いくだらない人生という物語を。

あの屋上で亜里抄と初めて出会った日から毎日、亜里抄は屋上に現れた。一人で勝手に喋るのを適当に頷き、適当に返している事が最初の頃は多かった。次第に、少しずつ会話をするようになつた。嫌なら行かなければいいだけのはず。だけど、毎日屋上に俺は行つた。何をする訳でも無く、ただ亜里抄の喋つてる事を聞いているだけなのに。

「お、今日もいるね。私というのが好きなの？」

下から顔を覗くように亜里抄が俺を見る。女性の上目遣いは何故か男心をくすぐる。

「別にそんなんじゃない。」

「またまた～照れちゃつて～可愛いな～。」

特に重要な会話をする訳でも無い、何かをする訳でも無い、それなのに俺と亜里抄は放課後に毎日屋上で会っていた。いつしかそれが俺と亜里抄にとっての日課になっていた。

どこもかしこも文化祭で盛り上がりがつてゐる。たつた一日しか行われない展示のためにクラスメイトは張り切り、楽しそうにしている。何をそんなに楽しいのか。どうせ最後に壊すんだから適当に作つて適当に行えばいいのに。俺が帰ろうとして鞄を持ち、椅子から立つと、

「ちょっと佐藤、あんた部活も入つて無いならちゃんと手伝つてよ。

「ある女が俺が帰るのを止めた。何で俺がこいつらの青春<sup>じゅんせい</sup>元気<sup>げき</sup>付き合わなければならないのか。

「聞いてるの？ 手伝<sup>てつ</sup>つて言つてるの！」

「うぜえよ。お前らに手伝<sup>てつ</sup>う義理<sup>ぎり</sup>なんて一つも無い。」

たつたそれだけの言葉で、俺に手伝<sup>てつ</sup>えと言つてきた女は怒り狂つた。別に俺一人いなくたつて出来るんだろう？ ただ作業の効率<sup>こうり</sup>が良くなるためだけに呼んでるんだろ？ そんなの断りだ。誰が好き好んで歯車になりたいものか。そんな奴の気が知れない。

「佐藤君だけ？ 君が手伝<sup>てつ</sup>わないで帰るのは、何か理由があるのかな？」

「うぜえつて。

「いつもこいつだ。女に良い所を見せようとして偽善者<sup>ぎぜんしゃ</sup>ぶつている。くだらない。ちょっとドラマが出来て、ちょっと顔がよくて、ちょっと頭良いだけで周りの女はキャーキャー騒ぎやがつて。

「何か理由があるなら仕方ないけど、何も無いなら手伝<sup>てつ</sup>ってくれないか？ 見ての通りまだ終わつて無いんだよ。」

「だからうぜえよ。」

「そういう態度<sup>たい도</sup>をとらぎにさ、手伝<sup>てつ</sup>つてよ。」

俺はこいつの言つてる事を聞いていて、段々頭に血が昇つていく

のが解つた。言葉よりも先に手が動く。気が付いたら胸倉をつかんで殴っていた。

「うぜえって言つてんだろ！」

そいつを殴り飛ばし、ドアを開けて教室を出ようととした時、「理由があつたのなら僕が詫びるけど、君の我が儘で帰るのなら僕は君を許さないよ。」

俺に殴られたのに脅えるどうか言い返しやがつた。そいつの言葉を無視して俺は教室を出て行つた。廊下に出るとそれまで静かだった教室内が騒がしくなつたのが解つた。どいつもこいつもくだらねえ。

教室を出て、そのまま帰るかと思つたのだが、殴つた時に鞄を教室に置いた事を思い出した。今更教室に戻つて忘れ物を取りに行く、なんてカッコ悪い事出来る訳がないので、玄関に向かわず、屋上で時間を潰す事に決めた。

屋上に出ると、どこかのクラスか部活が文化祭のための準備を行つていた。幸いにもうちのクラスの連中はいなかつたので、俺は屋上の端に行きアスファルトに腰を下ろした。

放課後に残つて文化祭のために準備をする。せっかくの時間をそんな事に割く事が俺には不思議でならなかつた。

「おいたく！お前大変な事になつたぞ！」

いつの間にか正也が目の前にいて、鞄を俺に投げ渡した。

「お前が殴つた相手あいつだぞ？良だぞ？これで女子全員を敵に回したぞ。しかも最初にお前が反抗した相手もまずい、真美さんにはんな態度取つたら男子全員からシカトされるぞ。」  
「別にいいんじゃね。」

俺の発言に正也は呆れた顔をして一言言ひ残し、屋上を出て行つた。何を言つたか聞こえなかつたが。

「それで匠は屋上にいるんだね。」

屋上のフェンスに背をもたれ、空を見ながら亜里抄が答えた。最初に来た時よりも人数が減り、日が傾け始めている事もあり屋上は寂しさを感じさせられる。

「亜里抄は手伝わなくていいのか？」

「私のクラスは今日はもう終わったから。それに、私不器用だからあんま手伝わせてくれないんだ。私が何かすると皆が慌てちゃうし。出来る事は特に無いんだ。」

空を見ながら悲しそうに亜里抄は答えた。

「手伝わなくていいならそれでいいだろ。俺なら喜ぶね。何をそんなに悲しそうにしてるんだよ。」

「だつて！」

亜里抄はそれまで見上げていた空から私の方を向いたと同時に声を張り上げて言った。

「だつて・・・・皆が必死に一つの目標のために頑張っている時に、私は何にも出来ないんだよ！？それほど悔しくて、悲しい事は無いよ！」

亜里抄が悲痛の声を上げて訴えるが、何故そこまで悲しいのか全く理解出来ない。そもそも、皆が必死に一つの目標に向かっている事に自分が一緒に取り組む必要は全く無い。そういうのはじたいやつだけでやればいい。

「やっぱ俺は悲しいとは思えない。自分の力が足りないって点は悔しくおもうだらうけど、そういう、皆で頑張ろうって気持ち俺はない。」

俺の言つた事に対しても亜里抄は驚きを隠せない顔をしている。

「アリ抄は、ただ皆で行う作業を手伝つて力になれたつていう結果が欲しかつたんぢやないのか？それを過程の段階で結果に結びつけなかつた、それが悔しくて悲しいんぢやないのか？そんな自己満足を得るために行つている事に同意を求められても俺は困る。」

· · · · · 私は體で喜ひたくて · · · · ·

亞里抄の口から出した言葉は今までにないくらい小さく、弱く、脆く感じた。嗚咽も聞こえる。今まで人のため、と行つてきた事が本当は自分のためと言う事に気が付かされてショックなのだろう。

「違つ・・・・・自己満足なんかじゃ・・・・・」

腰を抱え 蹤ぬるゝにして万里抄は言つた

鞄を持つてから立ちあがり、俺は亞里抄を残して屋上を後にした。俺の言つた事に間違ひは無い。それなのに、泣いている亞里抄を見てられなくて俺は屋上から逃げ出した。

「だりい」

文化祭が始まつたが、俺は一人屋上でふけていた。あれから亜里抄は屋上に来る事は無かつた。それでも今日まで毎日屋上に来てしまうのは日課となつた事を忘れられないからだろう。

あの後、正也の言う通り俺はクラスの連中からハブにあつた。皆が腫れ物を扱うように俺を見てきたのが解つた。ただ、俺と衝突したあいつだけは執拗に手伝えと言つてきた。正也もクラスでハブに遭いたくないのか学校で俺と会話する事は無くなつた。はれて、俺はクラス内ではぼっちという称号を得たのだった。取り敢えず、下校時間になるまでここで俺は寝て いる事にする。そう思い瞼を閉じた瞬間、

「佐藤、今の時間は君が当番だ。こんな所にいなで今すぐ行くぞ。」

「田を開けるとあいつがそこにいた。」

「つるせーな。別に俺がいかなくてもいいだろ。逆に俺が行つたらあいつらが困るだろ。」

「べー、君は他人の心配をきちんと出来るんじゃないか。」

その言葉に若干苛立ちを覚えてあいつを見ると一ヤ一ヤした顔で俺を見ていた。

「殺すぞ。」

「それは勘弁してほしいね。」

「じゃあ黙つてろ。」

「そうはいかない。君が当番になつてくれないと僕が困る。今からライブなんだよ。」

「知るか。」

お前のライブなんかどうでもいい。むしろお前が困るのなら喜んで邪魔をしよう。

「そつか、そんなに嫌か。残念だな、君が来てくれるんだつたら・

・・・・・

物で釣ろうとか考えているよつだけどそんな物では俺は釣られない。

「君が常に屋上にいる事を皆に伝えよう。」

勝ち誇った顔で言つているがそれが何になる？別に俺が屋上にいる事が知れたらくらいで俺に不利益は被らない。

「何にもおきないとか思つてるだろうけど、君が平日の放課後に屋上を頻繁に利用している事を真美が知つたら悪戯されるだろくな執拗に。それにある事無い事を喋つて君をクラスで一番のお笑いキャラにしてやるぞ。」

「おい、お前マジで殺すぞ。」

「今の君に暴力やハブかれる事は痛くない。それよりも周りの皆から自分が笑い物にされるほうが痛いはずだ。例えば、屋上で物思い

にふける事がカツコイイと思つてゐるハードボイルド野郎だと思わせたりね。」

「べ、別にカツコイイって思つてここにいるわけじゃ！」

慌てて反論しようつと想ひ拘みかからう、としたのだがやんわりとかわされた。そう言え巴こいつ運動面も良かつたんだつけ。

「それに、独りになりたがるのもそななんじやないのか？変に論理ぶつて相手を追い詰めるのも。」

こいつの前でそういう話をした事は無い。しかもあの時だけだ。

「・・・・・お前！」

「まゝ聞けよ。別にそれが悪いって言つてるんじゃない。今の君がそれが良いと思つてそういう風になつた事に僕が否定出来る訳が無い。でもな・・・・・一つだけ言わせてもらひ。お前の思う自論をベラベラと一方的に相手に喋つて、泣かせてじうするんだ！」

気が付けば胸倉を掴まれ、睨まれていた。その声は、低く静かな感じで、ドスが効いていた。反論しようにもこいつの出す迫力に俺は何も言えないでいた。

「お前はそれをして何がしたかったんだ？何故相手を思いやらない？何故相手の考えを理解しようとしてない？お前はあの時に彼女が悲しんでいた事に対して深く考へるべきだったんじゃないのか？違うか！」

俺の胸倉をつかんでいる手に力が入つてゐる。こいつが怒つた所なんて見た事が無かつた。だが、それ以上にこいつの言葉が突き刺さる。何故こんなにも痛いのだ、何故こんなにも心に深く突き刺さつてくるのか。

「慰めれば良かつたのかよ。傷の舐め合ひをすれば良かつたのかよ。

「

大きな声で言う事も出来ず、こいつの目を見て話す事も出来ない。明らかに氣後れしている。俺はこんなに弱い人間だったのか？

「そんな事を言つてるんじゃない。相手の考えが違うと思うなら相手の言い分をしつかり聞いて、しつかり考へろ。それから言葉を選

んで喋る。そうしたのなら、あんな事にはならなかつたはずだ。お前も相手の事を気に掛けてたからそう言つたんだろう？普段のお前なら聞き流してるだけのはずだ。」

「こいつの言う事に對して何も言えない。なぜか発する言葉一つに重みを感じるからだ。同じ歳のはずなのに、同じ年数しか生きていなければずなのに。そんなあいつの言葉が俺の心に深く突き刺さつて、胸に大きな痛みを感じた。

そんな痛みを感じていると、肩を叩かれた。

「ちょっと長く話しそぎたな。もうライブまで時間が無いからこのまま行くよ。皆には悪いけどね。もう一回、彼女の言つた事の意味を理解してみな。損得考えずに、心で考えるんだ。」

そう言つと、あいつは踵を返し屋上から去つて行つた。

「亜里抄が悲しんでいた理由・・・・・・」

亜里抄は文化祭の手伝いが出来なくて、それで悲しんでいた。あの時、亜里抄は皆で喜びたかったと言つていた。もしかして、出来あがつたという結果の喜びを得る事が目的じゃなく、皆で同じ物を作り上げるという過程を楽しみたかったのではないだろうか。その楽しみが亜里抄にとつての何よりの喜びだったのでは。

「喜びじゃなくて、楽しみたかったって言えよ。」

屋上の上で、大の字になつて寝ころび空を見る。ただ空は青く広がつていた。どこまでもどこまでも広がつていた。

俺は本当に馬鹿で頭でっかちだったのかもしない。あいつの言う通り聞きもせず、理解しようともせず、自分の中の答えだけを物差しとしていた。じつに、相手の立場になつて考えるだけで違つ考えが思いつくのに。

「本当に馬鹿だよな、俺。」

独りが良いと思ひながら、亜里抄との繋がりだけはどこか心の片隅で大切にしてた、失くしたくなかった。だから、あの時屋上から降りる時にあの感情が芽生えたのだろう。

今日、文化祭が終わるまで、終わつてからも亜里抄がここに来る

事を願つてここで待つていよう。あいつに伝えなければならぬことが出来た。

「もしもし、正也か。ちょっとクラス展示の当番やつてくれ。」  
正也に電話でそれだけを伝えると、俺は音楽室へ向かつた。あいつが夢中になつているというものがどんなものか興味が沸いたからだ。あんな事を言え、俺のためにあそこまで言つてくれたあいつが一番打ち込んでいるものを見てみたかった。

音楽室へ入ると大勢の人人がいた、それこそ身動きが出来ないくらいに。そういうえば開催式の時にも出てたんだっけか。その時寝てたから解らなかつたけど、あの一回で学内で人気が出たのだろうか。  
流れていた音楽が違う曲に代わり、ライトがステージを照らす。  
それと同時に、ステージ側のドアが開かれ三人が現れた。よくよく見るとあいつが同じクラスなのは解つているが、他の一人もクラス内で見た事がある。三人がそれぞれの場所に移動し、音を出したと思つたら流れていた音楽が止まつた。いよいよ始まるのだ。それまで音楽室内に飛び交つてた歓声も一段と大きくなつた。しばらくして、歓声が止むと、あいつが叩くドラムから曲が始まつた。始まるや否や歓声はそれまでとは比較にならないくらいに大きくなつた。  
だが、それ以上に、バンドの爆音が俺を包んだ。

体全身に響き渡るドラムとベースの音、纖細な音でその場全てに広がつて行くキー・ボードの音、それらが完璧に重なり、今までに味わつた事の無いような感覚が生まれる。楽器の演奏に乗せ、一人の歌声が広がる。片方は奇麗で優しい歌声、もう片方は力強い歌声。  
初めて聴いた曲のはずなのに、気が付いたら涙が流れていった。

「今日は楽しんでくれてありがとう！最後の曲なんだけど、本当はキーボードじゃなくてギターが必要な曲なんですね。でも私達、頑張つてアレンジしました。とてもいい歌なので最後まで聴いて下さい。ちなみに、歌詞は受付で貰ったパンフレットに書いています。よかつたら終わつた後にでも読んでください。では、聴いて下さい。MR・BIGで？To be with you」

「お前、何でここにいるんだよークラス展示の当番だつたはずだろー！」

トイレを出た所で、あいつらにばつたつと出くわした。ライブ後直ぐと言つ事もあり、肩で息をしていた。

「別に……」

恥ずかしくてこいつの前では絶対にライブを観てたなんて言えない。と思ってたら、ベースを弾いてた奴が俺を指さし、

「佐藤さ、私達のライブ観てたでしょ？ちょっと後ろの方で。しかも泣いてなかつた？」

と、ライブを観てた事と俺がライブ中に泣いていた事をこいつはばらしやがつた。

「観てなんかいないし、泣いてもいね～よー！」

「そういえば田元が少し腫れていますね、佐藤君、私達の曲聴いて泣いてくれたんだ！ありがとう！」

キーボードの奴が俺の手を両手で握り、上下に振りまわした。違うーと言おうとした時、あいつが俺の目の前に来た。キーボードの子も俺の手を離し、俺はポケットに手を突っ込んだ。

「それで、どうするんだ？」

そんな事言われるまでもない。

「やるべき事が解った。」

「それだけを言つと、俺は屋上へと向かうために歩き出した。あいつを通り過ぎようとした時、

「じゃ、頑張れよ。それと僕達の曲、最高だつたろ？」

自信満々に言つてきたのがむかついたので、

「悪くは無い。」

一言だけ返して、俺は屋上に向かった。

辺りも暗くなつて、グラウンドのキャンプファイヤーが綺麗に見える。真ん中で燃え盛る炎を囲んで、生徒達が文化祭の最後を楽しもうと騒いでいた。屋上から観るキャンプファイヤーは俺が思っていたよりもずっと綺麗だった。

あいつと別れてからずつと俺は待つてゐる。でも現れてくれない・・・・・せつぱり愛想を失かされたのだろうか・・・・・

「綺麗だね・・・・・・・・・

声がした方を向くと、そこには亜里抄がいた。

「私ね・・・・・・・自己満足でも良いつて思えるんだ。」

亜里抄は俺の目を見て、真剣な顔で言葉を紡いだ。

「私、あれから凄く考えたんだ。今まで楽しんで皆で取り組んだ事つて私自信が成功した事を喜ぶために、自己満足のためにやつてたのかなって。それはあるかも知れない。でも皆で一緒に喜びたいって気持ちも本当なんだよ？確かに自己満足なのかも知れない。でも、自己満足のためにやつてきた事で皆で一緒に喜ぶ事が出来るのなら、私はこれからも続けたいと思う。皆のために、皆が喜ぶためについていう他人のためじゃなく、皆で一緒に喜びたいっていう自己満足のために。」

亜里抄の話しさ聞いて、やはり皆で喜びたかったから手伝えなくて悲しかったのだと解つた。手伝えないからでは無く、手伝わなかつたという結果から亜里抄は自分は皆と喜ぶ資格が無いと感じていた。もし自分がしつかり手伝えたのなら、もし邪魔にならないくらいで良いから手伝えたのなら自分にも皆と喜ぶ資格があると、でも実際は出来ない、皆と喜ぶ資格なんて無い。だから悔しくて、悲しかったんだ。そして、俺が自己満足と言つた否定的な言葉で片づけたため、もっと傷つけてしまつた。

「ごめん。」

謝らなければ、そんな気持ちを知りうともしないで、一方的に傷つけさせたんだ。

「亜里抄の気持ちを考えずに、理解しようとせずに、俺の考えで追い込まれ、泣かしてしまつて本当にごめん。俺、今日あるやつに言わたんだ。俺は人の事を考えて無いんじゃないからって。確かにそうだった。あの時亜里抄が言つた言葉を何一つ理解しようとせず、自分が思う事を物差しにして喋つてた。でもそれじゃ傷つくだけだよな。誰だって自分の考えを理解されずにただ一方的に否定されるのは辛い。俺はそんな事をしたんだって教えら、やつと氣づいたんだ。」

パチパチとキャンプファイヤーの組み立てた木の燃える音も、生徒達の騒ぐ声も段々耳に入らなくなってきた。

「それで、亜里抄の事を考えたら、俺も亜里抄と同じような考えに行きついた。確かに自己満足と言えば自己満足だけど……そういう事を言いたいんじゃ無いで……でも、ここで

言いたい事は解つているはずなのに言葉に出来ない。簡単な言葉なのに、単純な言葉なのに口から出ない……でも、ここで言わなくちゃいけないんだ。

「それで……その、亜里抄とのまま会えなくなるのは俺嫌なんだ。これからも屋上で一人で会つて色々な話をしたいんだ。俺にとつて亜里抄と会つて話すのは何よりも大事なんだ。だから……これからも屋上に来てくれないか……」

喋りながら涙が出てた。普段の俺なら考えられない、泣きながら叫び、伝える事。普通に喋つてたはずなのにいつのまにか気持ちが抑えきれなくなつていた。

「馬鹿、それじゃあ告白じゃない……」

涙を流し続ける俺を亜里抄は抱きしめ、

「私だって、匠と一緒にいたいよ。屋上で初めて会つた時からなんかほつとけない感じがしてた。ぶつきらぼうで、歳下なのに生意氣で、敬語も使わない後輩君。そんな匠と話してるのが楽しかった。一日で一番大切な時間だった。だからあの日、私は匠に拒絶されたと思って凄く悲しかった。準備の事よりも悲しかった。ここに来るのも凄く勇気が必要だつたんだよ?でも、来なかつたら絶対後悔するつて思つて……だから……ここに来て良かつた。」

「俺を抱きしめる亜里抄の体は、思つてた以上に小さかつた。亜里抄の体を俺も抱きしめた。理屈じや無い、心で感じた事を言つだけでこんなに気持ちが近づくなんて。

「俺、こういう感情を初めて感じたから……人によつては違つと言つかもしけないけど、亜里抄の事、好きだと思つ。」「馬鹿、普通に好きつて言えないの?」

暗い屋上で、グラウンドではキャンプファイヤーが燃え続ける中、

生徒達が文化祭の余韻を感じて居る中、

た。

俺と黒里抄はお互いの素直な気持ちを確かめあつ

「佐藤、また行くのか？」

「うるさいな。」

放課後になつたので屋上に行こうとしたらあいつが喋ってきた。文化祭後、必要以上に俺に話しかけるあいつを見て、クラスの奴らは驚いていた。そしてさらに、ベースの女とキーボードの女も俺に話しかけるようになり、クラスの奴らは混乱していた。正也は学校で話さなくなつた事を詫びてきたが、学校以外では変わらなかつたので俺は気にしていなかつた。

「でも小説のような出会いだよな、お前とあ「それ以上言つな。」あいつが俺と亜里抄の関係を口走りそつになつたので、それ以上言わないように手で口を押された。基本的に、誰にもこの事は話していないはずなのに、何故かこいつらは俺と亜里抄の事を知つてゐるみたいで、たまに茶化してくる。どこで見られたのか・・・・。  
「ね、佐藤、今度さ、亜里抄さんに会わせてよ、いろいろ話したいんだけど。」

「私も亜里抄さんと話したいです！」

「お前ら声がデカイんだよ！」

と、あいつ以上に一人の女の方が執拗に喋つてくるので、おそらく、俺が誰かと付き合っている事は知られていると思われる。最初の頃のように、静かな学園生活とは少し離れたけど、これはこれで悪く無いのかもしねれない。

「お、やっと来たね。」

「悪い、あいつらがつまなくてな。」

俺と亜里抄の会う場所は屋上だが、放課後の早い時間なのにはいない。。。どこか、人が来なくて誰にもばれないような場所は無いかと探していたら、意外にあるものだ。そこで俺と亜里抄は会つようしている。

「でもあのバンドのメンバーと同じクラスだったなんてね~うひゅましこな。」

「普段はうつとおしいだけだ。」

「そなんだ。」

亜里抄が笑いながら答える。まあ、亜里抄さえよかつたら今度あいつらを紹介してもいいのかもしれない。

「ね、匠。」

「何だ?」

亜里抄の方を振り向いた時、唇にやわらかな感触が伝わった。

「え、ええ!?」

「相変わらず、突然の事に弱いよね。ファーストキスなんだから大事にしてよ?」

「俺も初めてだし・・・・」

亜里抄が恥ずかしそうに笑っている。よく顔を見ると少し赤くなっている。おそらく、俺の顔も赤くなってるんだろう。

「取り敢えず、これからもよろしくね!」

「う、うん。」

「佐藤が照れてる姿って面白いね。」

「佐藤君も亜里抄さんも幸せそうで羨ましいです！」

「一人とも覗き過ぎ。」

## 外伝 別の転生者の場合？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。今回で外伝その一は終わりです。書き終えた後、転生全く関係ね～と思いましたが、本編もぶっちゃけ転生関係無くなつてたんでしょうがないかなと。それもひとえに私の実力不足です。もつと考えている事をきちんと文章で著わせるようになければなりませんね。途中、自己満足は否定的な意味合いを含むと書きましたが、当たり前ですが私のこれも自己満足に入ります。そんな自己満足に付き合つてください本当にうれしく思います。またきつと匠と亜里抄の話しさ書きたいと思うのでその時は宜しくお願ひします。次の外伝からは結構重い話を書きたいと思います。それこそ、超ネガティブ人間の話を。まだまだ構想全然練つて無いのでこれからですけどね。では、今回も読んで頂き誠にありがとうございました！あ、あともしよろしかつたらMR・BIGのTO BE WITH YOUを最後らへんに聞いてみたらいいかも知れないです。書いてる時にずっと頭の中で流れてました。良い曲なので（メタルじゃないですよ普通のバラードです）もし聴いた事の無い人はこれを機会に聴いてみてください！実は、私が一番好きなバンドはメタルバンドじゃなくてMR・BIGです。

何と言つが、皆さんありがとうございます！お気に入り登録してくれた方々、読んで頂いた方々！感謝してもしきれません！正直な話、お気に入り登録して下さる方々なんていないだろうなって思いましたし、PVも100行つたら大成功だと思つていました。みんなのおかげで3000越えを果たしました！他の作家さんと比べたら全然少ないほうなんですねけれど、私にとっては滅茶苦茶多いです！本当にありがとうございました！

それで、今回なんですが……構想の3分の2くらいしか書いてないんですけど、今まで一番長くなつてしましました。まだまだ続きがあるので八話の？つて事にしました。長いんですけど、出来る事ならば最後まで読んで頂ければ嬉しいです。では、今回もよろしくお願いします。

「間もなく です、 観光電鉄を「」利用のお客様はお乗り換えください。忘れ物の無いよう、御仕度ください。この先、揺れる事がありますので、お気を付けください。お降りの際は足元にご注意下さい。」

科学の進歩は凄い物で、前世の実家まで新幹線、特急を乗り継いで三時間ちょっとで着いた。これくらいの時間ならば全然苦にならない。むしろ、新幹線、特急列車の、私の隣に誰も座らなかつたので氣を使わないでここまで来れた。

「暑いな・・・・・」

駅のホームに降りるとそれまで冷房の効いていた極楽な世界から、湿度が高く、気温も高いジメジメした地獄に戻された。15年間、ここよりも暑くジメジメした都会で過ごしていただから余裕だうと思つていたのだが、私が知つている時よりも何倍も暑く感じる。少しは涼しいだろと期待していただけに裏切られた想いだ。

駅の改札を出て、バス停まで行くと懐かしい風景が流れてた。昔と少しあは変わつてたが、大々的に変わつてる訳では無い。懐かしさから、辺りを歩き回つた。こんな場所だつたかな、とか、前世以来の、帰ってきた故郷に胸を熱くした。

私達の中学生生活は残り一年を切つた。一年生の時には学校内でのライブ以外にも、師匠のツテでライブハウスで演奏をしたりた。オ

ーディショնを受け、出演する事が決まった時の最初のライブはお客様さんは5人だけだった。お客様さんは皆、私達の対バン相手の方が本命らしく、無名な私達は観る価値が無い、と決めつけていたのである。一年生最後の卒業ライブの時の人数と比べると天と地ほどの差であった。私としては懐かしい光景だつたが、真美と増田さんは多少ショックを受けたらしい。それからライブ本数を重ねるうちに少しずつ観客数も増えていった。文化祭前には目標の100人を達成し、私達は素直に喜んだ。文化祭ライブ自体も二年連続で開催式で演奏する事が出来き、音楽室の中に入りきらないほどで、廊下でが増えた。嬉しい事に、音楽室の中に入りきらないほどで、廊下で聴いてた人が多かつたらしい。それから、増田さんはピアノのコンクールで中学生の部、全国三位という好成績を収めた。その時の演奏を生で見ていたのだが、鳥肌物だつた。演奏はもちろんの事、ドレス姿も最高だつた。そう言えば、加奈もコンクールで小学校全国一位というあり得ない成績を収めた。それも二年連続である。日本全国に天才美少女ピアニストとして紹介された。おかげ様で全国区の有名人になり、全国各地からファンレターが届く。それを一通一通しっかりとチェックをして安全な物を加奈に渡している。もしも危険な物が入つてたり、口リコンの行き過ぎた輩からの差し入れがあつたら迷う事なく捨てている。加奈の安全を守るのは私の役目なのだ。

そもそも、何故私が前世の時の故郷にいるのかと言うと、単純に両親に会うためである。そろそろ一人旅をしても大丈夫な年齢になつたので父と母に頼み、夏休みの一週間、一人旅をさせて欲しいと頼んだ。母は猛反対したが、父の、

「いいじゃないか、ほら可愛い子には旅をさせる、って言葉があるじゃん。それに良だぜ？ 加奈じゃないんだから～。」

という言葉に母は渋々納得した。加奈が付いて行くと駄々をこねたが、さすがに小学生はまずいと言う事になり却下された。その時に

加奈が私に向かつて、もう子供じやないよ・・・

・・・と色氣仕掛けをしかけてきた。妹のはずなのに加奈の色氣は凄まじく、本氣でまづかった。おそらく顔が真っ赤だつたのだろう。加奈が本当に色んな意味で怖くなつてきたのを感じた。

こうして、私は夏休みを利用して故郷に里帰りをしている。家の方のお盆は他の地域より早く行われるので、調度こちらのお盆時期に来る事が出来た。お盆の時期の帰省ラッショウも上手避けたので言つ事は無い。まさに、死んだ者が帰ってきた、というショーチュエーションだ。

バスに乗り、実家へ向かう。バスから見える街の様子はやはり所々変わっていた。大きな本屋が建つていたり、全国チェーンのフエミレス、ハンバーガーチェーン等の外食産業も進出しているようだ。もし、この地に両親が居なくとも、これを見ればだけで良かつたかもしぬれない。だが、会えなかつた時の事を考えてなかつたので不安でもある。

市街地から離れて行き、田んぼばかりの道を走る事30分、ようやく実家近くのバス停に着いた。集落も何も変わつていない。本当にもう一度ここに帰つてくる事ができたのだ。

「ただいま・・・・・・長く時間がかかるちやつたよ・・・・・・」  
誰に向けて喋つた訳でもなく、この土地に挨拶をした。

トランベルバックを引きずり、実家の方へ歩いて行く。近くの海から聞こえてくる波の音、所々に生えている松の木、実家に近付くにつれて、心臓の鼓動音が速くなつてくるのが解る。本当に行つていのつか?もし、信じてくれなかつたら、もし、まだ植物状のまま生き残つていたのなら・・・・・不安ばかりが募る。それでも、私が望んで来たのだ。しっかりケジメを付け、今を生きるために来た

のだ。今更迷つてもどうしようもない。

家の敷地に入り、正面玄関の前に立ち、一回深呼吸をしてからインターホンを押す。暫くしてドアが開かれた。

「はい、どちら様ですか？」

出てきたのは母だった。涙が溢れそうになる。母はもう60近くになつていて。最後に見た時よりも随分老けてしまつていた。

「すみません、こちら小比類巻博之さんの『じ寒家』でよろしごでしょうか？」

「はい、そうですが何か？」

ここからが怖い。もし植物状態で生きていたのならどうしよう。そんな時どう答えれば良いのだ？だが、ここですつと立ち往生している訳にはいかない。腹をくくれ、良！

「私、生前に博之さんにお世話をなつたものですが、お線香を上げに参りました。お上がりしてもよろしいでしょうか？」

さあ、賽は投げられた。ここからどうなるかは私も解らない。

「まあ」一寧にどうも、どうぞお入りください。後ろの方々もそつなのかしら？博之の知り合にしては若すぎるのだと想うけど。よし、私は既に死んでいる。良かつた～。って良くはないのだが。だがこれで博之の体には未練が無くなつた。これからは良として生きなけれ・・・母は最後の方何といったのだろうか。後ろの方も？今日は俺以外に線香を上げにくるもの好きなやつがいるのか、と変な思考をしながら後ろを振り返ると

「は、は～～あい・・・

「・・・・・

「・・・・・

「・・・・・

そこにいたのは加奈、真美、増田さんのこの地に居るはずの無い二人だつた。

一度、母の方を振り返り、

「すみません、急に来たので準備を行つていないのでしょうから、數十分後にまた伺つてもよろしいでしょうか？」

「あら、よく解りましたね。そうして下さると助かります。」

そつ言うと互いに礼をして私は扉を閉めた。そして、無言で三人に手で來い、と合図をし、近くの砂浜に向かった。

「それで、何でここにいるのかな？詳しく述べて。」

「いや、ね？ 加奈ちゃんが良が今日にどこか遠くに行くから追跡しようつて言いだしてさー」

「ま、真美さんが私がお兄ちゃんになくなるの寂しいって行つたら跡着けようつて言いだしたんぢやないですか！」

真美と加奈が一人で責任の押し付け合いをしている。増田さんはどうしようつとおろおろしているし、ここは優しく懐柔するしかない。

「怒つて無いから、ね、教えてよ？ 増田さん！」

「え、ええ～～～～～～～～～～～～！」

こうなつたら強硬手段しかない。私は増田さんの手を取り、目を真剣に見て、

「頼むから教えて欲しい。僕にとつて今日は凄く大事な日なんだ。」

と頼み込んだ。増田さんの顔が真つ赤になり、静かに頷いた。私も増田さんの手を取り顔を近づけるのは凄く恥ずかしかつたが、私に関わる重要な事なので我慢した。その後ろでは加奈と真美がまだ責任の擦り付け合いをしていた。

「それで、加奈が真美に僕が居なくなるのを教えて、一人で跡を付ける事に決めて、何も知らされてない増田さんを勝手に呼び出して、僕が家を出るのを確認して、コソコソ着けてきたと。」

真美と加奈を砂浜に正座させ、増田さんは私の持つてきたトラベルバックから服を取りだし、砂浜に広げて座らせた。

「はい、ごめんなさい」

自然と溜め息が出た。これからどうしたらいいのか。幸い、お金の

方はATMからおろせば四人分なら一週間くらいなら何とかなるが、

「真美と増田さんは親御さんに説明したの？」

「私はまっちゃんの家に泊まるって言つてきた。」

「私も真美さんの家に泊まるって・・・」

「二人とも申し訳なさそうにしているが、今回は軽く許すわけにはいかない。」

「加奈はどうするんだよ。父さんも母さんも許可していないだろ？」

少し考えるそぶりをして、閃いたという顔をして、

「お兄ちゃんと一緒に言つて良くなない？」

確かに、そうなりそうな予感がする。

「取り敢えず、帰りの電車代は僕が立て替えておくから、今日中に帰るんだよ？解つた？」

「え～～？」

「え～じやない！真美も増田さんも一日だけならその嘘も大丈夫だけどそれ以降は無理でしょ！常識的に考えて！」

「でも、良のおばさんに説明して頼んだら・・・」

「そんな事させません！！！」

あまりに吹っ飛んだ意見に、私は頭が痛くなつた。これからどうしようかというのだろう。

「取り敢えず、今からさつきの家に向かうから僕が言つ場所に、僕が出てくるまでそこにいろよ？解つた！？」  
は～いと三人は元気無く返事をした。

「お待たせいたしました、それでは仏壇に案内しますね。」

母の案内の元、私は仏壇に向かつた。家は昔と変わっておらず、所々、私が壊した場所が見受けられた。そして、仏壇に入ると、祖父の写真の他に、祖母と私の写真が新しく飾つてあつた。そうか、祖母は亡くなつたのか。

仏壇の前に座り、蠟燭の火から線香に火を付け、手で軽く振つて火をけして、線香を立てて合掌をした。心の中で、祖父と祖母に謝

り、無事に天国に行けたのかを聞いて。お供え物を置いて私は母の方を向いて深く一礼した。母も、

「本当にありがとうございます。息子も喜んでいます。」  
母は深く頭を下げ、私に向かつて言った。ここまではまだ、本番では無い。ここからが本番なのだ。

「すみません、少しお時間よろしいでしょうか？博之さんについてお話ししたい事があるのですが。」

「ええ、よろしいですよ。でも私にですか？」

線香を上げにきた目的の人物について話したい事があると言われ、母は不思議そうな顔をしていたが、快く承諾した。

「ここでは話しにくいと思いますので、別の場所にしましょうか？」  
「そうですね。お願いします。」

私は応接間に通され、椅子に座り、母を待つた。しばらくして、母がお茶とお茶受けを持って応接間に入ってきた。私の目の前にそれらを置き、母も椅子に座り、いよいよ話す時が来た。

「それでお話というのは・・・・・」

「転生、と言う言葉を御存じですか？」

いきなり転生の話を持ちだした私に、母は首をかしげるしか無かった。

「転生というのは死後に別の存在に生まれ変わる事です。輪廻転生の方が言葉としてなじみがあると思います。」

「そうですね・・・・・それで？」

私が仏教用語を出した事により、母は私が息子と関わりがあつた人物では無く、宗教関連の人物かも知れないと予防線を張った。見て解る、母の口調が変わったのだ。

「まず最初に、博之さんは　年に　市の　地域に午後　時に車に轢かれた、それが原因で死亡した、間違いないですか？」

「そうですが、あなたは博之の死んだ日にちをまさか知らないな

「なんて言わないでしようね？」

「残念ながら詳しく述べ知りません。ですが恐らく事故に遭った日から一年以内に死亡したのではないですか？私は博之さんが事故にあつてから一年後に生を受けました。ですので、今は中学生三年生です。」

「・・・・・」

母は無言になつた。ここからが大変だ。いよいよ私が転生した事を伝えなければならないのだから。私は一回軽く深呼吸をし、一息おいて説明を続けた。

「今から言う事は決してフィクションでも何でもありません。全て現実です。おそらく、信じられないでしょうが、私は博之として生を受けて、生活し、事故に遭つてから意識を回復した時、赤子として生を受けました。そして今に至ります。要するに私は、新堂良という体の中に、小比類巻博之の生きてきた記憶、性格を持つ人物と言つ事です。」

私が言い終えると母は肩を震わせながら下を向いていた。死んだ息子の魂が私のような若造の中に入つていると言わたのだ、今日初めて会つた人に。怒りを覚え無い方がおかしい。

「信じられないのも無理はありません。見ず知らずの若造に、体は違えど息子だと言われて怒らない親がどこにいるでしょうか。ですが、今回はそのようなドラマや小説のような話が、本当の事なのです。一応、証拠となりえるか解りませんが、家族以外、それこそあなたと博之さんしかわからないであろう事を幾つかお話ししましょう。」

私は母に、おそらく私と母しか知らないような事をいろいろ話した。浅い話では、父と姉に黙つて二人で外食をした事、その時はだいたい私の好きなお寿司を食べた事。高校の合格発表の時、私が合格したのにわざと、落ちて落ち込んでいるかのようにして母の元へ結果を報告しに行つた事、それを母は、私の口元が笑っているのを見て見破つた事、等様々話した。一つ一つ、詳細に話す私を見て、段々

と母の私の見る田が変わってきた。そしてついに、

「博之なの？」

と、田元に涙を溜めて私を見た。

「「めんね、お母さん。俺、親不孝者だよな。」いつぱい泣くしても  
らつたのに、何一つ返せなかつた。ごめんね、ごめんね・・・ごめ  
んね・・・」

そこから先、私は言葉が出なかつた。溢れる涙が止まらなく、喋つ  
ているうちについ言葉が出なくなつた。母を見ようにも涙で前が見えな  
い。本当に親不孝者でごめんなさい。

「それで今は都会に住んでるんだ。中学校も私立? ドラムも教室に  
通つてプロの人へ教えてもらつてる? お金持ちなんだね・・・」  
それから互いに今まであつた事を話した。主に謝つてばかりの私に、  
母は全然気にするなど言つた。姿形は違えどまた顔を見せてくれた  
事が嬉しかつらし。私がどれだけ感謝してもらしきれない事を話す  
と、互いに、また涙を流した。そして、今の生活を話し、今に至る。  
「今の父さんも良い人だし、会社も良い所に勤めてるからね。」  
「へへそななんだ。そういえば、博之が来た時に後ろにいた可愛い  
らしい子達は?」

「ん? ・・・ ・・・ あ ・・・ ・・・ ・・・

私は急いで外に飛び出し、トラクター小屋に向かつた。

「『ごめん！』遅くなつた！！」

ドアを開け、三人がいる所に向かつた。

「あ、良、やつと来たー、加奈ちゃん泣いて大変だつたんだよー！」

加奈を見ると膝を抱えて蹲つている。それを増田さんが心配そうに隣について見ていた。

「加奈！何があつたのか？」

私は急いで加奈の元に駆け寄つた。増田さんも心配そうな表情をずっと加奈に向けている。もしかして蛇とかに噛まれたのだろうか？

「おい加奈、何があつた？大丈夫なのか？加奈！」

加奈の肩を掴み、呼び続ける。そうすると、加奈は私の胸に飛びついで、

「お兄ちゃん、怖かつた・・・怖かつたよ・・・」

と震えながら鼻声で喋り始めた。だいぶ泣いていたのだろう。

「ごめん・・・僕がもつと安全な場所にいさせねばよかつた・・・」

「私・・・お兄ちゃんと一緒にいたい・・・」

「ああ、いいよ。だから落ち着いて。」

「真美さんと増田さんともいたい。」

「うん、みんなでいよくな。だから落ち着い・・・・・は？」

私は胸で泣いているであろう加奈を見た、そこには満面の笑顔の加奈がいた。

「え？・・・・・・え？・・・・・・」

真美と増田さんを見ると、真美の手には携帯が握られ、増田さんは胸の前に手を合わせてごめんなさいの格好をしていた。それの意味する事と言つと・・・・・・

「もしかして僕、はめられた？・・・・・・」

真美と増田さんが丶サインをして、私の胸の中にいる加奈は一人をみて、小さく、やつたねと呴きピースをしていた。

「 「 「お邪魔します」 」

「はい、どうぞ。」

取り敢えず私は、三人を家に上げる事にした。三人と私の関係、ここにいる事の経緯を説明した所、私が帰る日まで宿泊しても良いとの言葉を頂いた。いきなり四人も宿泊させる事となり、少し戸惑っていた様子だが、まだ中学生と小学生の女の子を同伴無しで宿に泊めたり、知らない土地で勝手に行動させる事になるくらいなら、と了承してくれた。その時、

「でも博之、あ、今は良くんか。あの子達に私とあなたの関係どう説明するの？あんたが死んだのってあんたが生まれる一年前よ？・・・喋つて何か違和感があるわね。」

「取り敢えず、全てを話そうと思う。加奈も真美も増田さんも信頼に値する人だと思うし、誰にも言わないと思うんだ。軽々しく喋つていい内容でも無いし、当事者以外が喋つたらキチガイ扱いされるからね。」

そう言つと、母はあんたがそう言つならしたいようにしなさいとだけ言つてくれた。

私と三人は、以前の私の部屋に案内されて、暫くここで寝泊まりをして下さいと言わされた。幸いにも、部屋の広さは畳十五畳と、広いワンルームサイズなので広さは困らないのだが、肉親以外の異性と一緒に寝泊まりをするのは若干心もとない。朝起きた時に、生理現象が起きてしまったら大変だ。加奈とでさえ、起きる前は数分心を落ち着かせてから起きるようにしているのに。

「広いね~。ここ全て博さんの個人部屋だったんですか？」  
自分の家の間取りと比べて、あまりにも広かつたために加奈が質問をした。

「博之と姉が使つてたのよ。博之が実家を離れてからは姉が嫁ぐまで一人で使つてたけどね。」

母が簡単に説明をする。そう言えば、私が実家に帰つてくると姉が一人で広々と使つていた。その姉も今は嫁いで二人の子供を儲けて主婦をしているらしい。自衛隊の航空パイロットの旦那さんだから、働かなくても生活に苦はしないらしい。

「それじゃあ、夕食の時にもう一度呼びますのでそれまでくつろいで下さい」

母は丁寧にお辞儀をすると、部屋から出るときに私にしか解らないよひこ、頑張れ、と小さく手で合図をした。私も母に解った、と手で合図をした。

あらかじめ母が、四人分の座布団を用意してくれていたので、私達はそれに座つた。一息ついてから私が喋ろうとした所、加奈が「お兄ちゃん、おかしいよね？」さつき私、小比類巻さんからお兄ちゃんとの関係を聞いたんだけど、矛盾している点がいっぱいあるんだ。お兄さんは何で小比類巻さんの家に来て、何で昔からの知人かのように二人とも接してるので？私達の知り合いに小比類巻つて氏の人は誰もいないんだよ？」

いつの間に母と会話をしていたのか、加奈が私とこの家の関わり合いを聞いてくる。どう三人に説明しようかと考えていただけに疑問を持つてくれた事は、説明するのには好都合だが・・・・・  
フィクションの世界のような話をして、三人が簡単に納得するのだろうか？もし仮に納得したとしても今後も同じように接してくれるのだろうか？今更になって不安が頭によぎる。母とは違い、今後も付き合いが長くなるかも知れない人達だ。それこそ加奈は死ぬまで関わるだろう。

「ねえ、聞いてるの？はぐらかそうと考えていても無駄だよ。だつて博之さんはお兄ちゃんが生まれる一年前に亡くなつてるんだから。どうやつても当人同士の関わりは不可能。百歩譲つて博之さんが芸能人でお兄ちゃんが尊敬しているんなら考えれなくも無い。お墓に

行かず、一般人の住んでいる博之さんの実家に線香を上げに行くのは非常識な行いだけど。でも博之さんは有名人じゃない、ただの一般人。おかしいよね？」

いつものふざけた加奈とは違う雰囲気に真美と増田さんは驚愕の表情で加奈を見ていた。二人は忘れていたかもしだれないが、加奈は全てにおいて非凡なのだ。これくらいやつてのけるかもしだれない。だが、私も、犯人を推理で追い詰める探偵のような加奈を初めて、しかも私に向けてされたので内心冷や汗なのだ。

「…………お兄ちゃん、もし、私に隠してある事があるのなら言つてくれない？私はいつだつてお兄ちゃんの味方なんだよ？」先ほどまでの問い合わせるような表情から一変して、加奈の表情は悲しそうになつた。加奈が名探偵のように推理を披露してくれたので私は中々、言いだすタイミングを探せないでいた。

「あ・・・兄妹間の話なら私席外そうか？ね、まっちゃん？」

「そ、そうだね、真美さん。」

慌てて真美と増田さんが立ち上がり、部屋から出ようとする。何故か、加奈がラートのように計画通り！って顔をしていたが、「待つて。一人ともここまで加奈が言つたら気になるでしょ？本当は加奈が疑問をもつ前に三人に説明しようとしたんだけど……。むしろ辻褄が合つし説明し易くなつたのかも知れない。だから僕は一人を、僕の友人の中で最高の友人、最も信頼のおける人だからこそ話そうと思う。だから座つて。」

真美と増田さんは最初、困った顔をしたが、話を聞いていくうちに表情が真剣なものになり、もう一度座布団に座つた。加奈が物凄く不服そうな顔をしていたが。

「これから話す事は絶対に他の人に言わないでほしい。多分信じないだろうけどね。加奈、お父さんにも、お母さんにも言わないでね。僕は墓までこの事を誰にも言わないでおこうと思ってたから。だから三人が僕の跡を着けてここに来たのは最大の誤算なんだ……。でもしちゃうがない。取り敢えず、三人に話しておきたい事は小比

類巻博之って人の事。この人は僕が生まれる二年前に死んだんだ。

バイクが終わり、住んでいるアパートへ向かう途中に後ろからきた車に撥ねられて。彼の人生はそこで終わった。彼が当時住んでいた所はH道 市、大学も同じ市にあり、彼はここと、市しか住んでいない。そんな人が、遠く離れた僕と接点を持とうにも持てないよね。では何故、僕は彼を知っていて、彼の母と親しく見えたのか・・・・・一年前に交通事故に遭つた彼が次に意識を回復した時は、目も開けれない、言葉も言えない、ただ泣き声を上げるしかできなかつた。それから目を開ける事が出来た時に確認出来たのは自分が小さくなつていた事。知らない女の人に抱き上げられ、知らない男の人が嬉しそうに私を見ていたんだ。」

私が話す言葉に一字一句逃さまいと、三人は真剣に聞いていた。途中、何かに気付いた加奈はもしかして、と言つ顔で私をみたが、手で静止した。

「加奈はうつすらと気付いたようだね・・・・・彼は目を開ける前から意識があつたために、彼自身にされる事、彼自身が身をもつて経験した事から赤子のようじゃないかつて思つてたんだ。彼は目を開けてその光景を見た時に確信した。自分が赤子になつてるつて。それから月日が流れ、彼が三歳になつた時、彼は向けられる情報から、彼が事故にあつてから四年が経つている事を知つた。一年間、彼が事故にあつてから空白の期間がある事を知つたんだ。そして數ヵ月後、彼に妹が出来た。ここまで言つたらもう解つたよね?・・・・

・・・小比類巻博之が事故に遭つてから次に目を覚ました時、彼は小比類巻博之じゃなかつた。彼は新堂良になつっていたんだ。」

三人は私の言葉を聞いて声を出せないでいる。当たり前だ。どこにこんな話を初見で聞いて納得する人がいる。内容も現実離れした、フィクションの世界の内容だ。

「僕が喋つている内容は嘘のように聞こえるかも知れない、物語を喋つているのかと思うかも知れない。でも・・・・・本当の事なんだ。言いかえれば、僕の体は新堂良で、中身は小比類巻博之な

んだ。」

私は下を向いていた。三人が私を頭のおかしい人を見る目、何か得体の知れない人を見る目で見ていくかも知れない、と思つたら怖くて見る事が出来なかつた。

「僕の言つている事は普通の事ぢやない。ただの頭がおかしくなつた人の話しか聞こえないとと思つ。僕だってこんな話をされたらそう思う。だけど・・・・・・」

言葉が出てこない。何を言つたらいいのか解らない。こんな時どうしたらいいのかなんて誰も解るはずが無い。誰も経験をしていないのだろうから。

「だけど・・・・・・これをきつかけに僕と距離を置く結果になつても僕は全然構わない。特に加奈は・・・・・・僕が、小比類巻博之が新堂良の中に入つたせいで本当の新堂良の自我は消滅したのかもし「馬鹿！――！」――！」

私が言つてい途中に加奈に馬鹿と言われ、反射的に顔を上げた所、私は加奈にほほをぶたれた。そして、加奈は私を強く抱きしめた。「心が小比類巻博之でも！体が新堂良でも！私の世界一大好きなお兄ちゃんはお兄ちゃんだけなの！名前なんて関係無い！もしどうだつたらとか関係無い！またそんな事いつたら今度は殴るからね！思いつきり殴るからね！私は今ここにいるお兄ちゃんが大好きなの！加奈の抱きしめる手が強くなつていて。喋つている声が大きくなるにつれて涙声になつていて。

抱きしめられている手が離れたと思ったら、私は胸元を掴まれ引きよせられると、誰かに殴られた。顔を上げると、そこにいたのは肩を上下させ、息を荒くしている真美がいた。

「良、今度また距離を置いてもらつても構わないつて言つたら・・・・・・私は良を一生許さない。何であんた一人の考え方で距離を置かなくちゃいけないの？私はあんたと距離を置こうなんて気はさらさらない！あんたが真剣に、苦しそうな顔で言つてている事が嘘だと思うほど、私とあなたの関係は浅く無いだろ！」

茫然と真美を見上げていると、真美の後ろから増田さんが近寄り、私は頬を叩かれた。

「良くんが不安になる気持ちも解ります。でも、私はあなたの真剣な話を信じられないほど馬鹿じゃない！私は……今のあなたが好きなんです！名前なんて関係無い！だから離れても良いなんて……」

「一度と言わないでください！」

増田さんが怒りながら、涙をながしながら言つた。そうか……。私が思う以上に、彼女達と私の間にあるものは深かつたんだな……

……

本当に三人とも……あれ？、先ほど私は増田さんに好きと言われなかつたか？

「あの、増田さん……さつき僕の事好きって言わなかつた？」

増田さんの顔が何を言つているのだろう、と言つ顔から段々狼狽していく、しまいには顔を真つ赤にして、「ですから……その……好きなんです！良くんの事が！他の誰よりも！」

増田さんは言い終えた後、真つ赤な顔で私を見た。私は告白されたのだ。この状況に置いて……

「ちょっとまっちゃん！」

「真美さんは黙つて下さい！」

「嫌、黙らないね！抜け駆けなんてするいよー」

「なら、告白してくださーい！」

二人が口喧嘩してゐるのを茫然と見ていると、真美が私の方を向き、近寄つてくると……

「…………」

「「真美さん…………」」

真美は私にキスをした。

「これで私の気持ちが解つたでしょ？解らないなら……」

と、言つた後に私の顔を掴みもう一度キスをした。口の中に舌を入れ

れて・・・・なすがままにしていたら、急に真美が引き離され、引き離された真美を見ると、増田さんにビンタされていた。

「ちょっと何を！」

「酷いです！私は告白して下さって言つたんです！」

「元はと言えばまつちゃんが先に私達の約束を破つたから！」

「それとこれは関係無いです！」

二人はまた口喧嘩を始めた。私は黙つて見ているしかなかつた。そこに、先ほどまで空氣だった加奈が私の前にゆっくりと近寄ると、「消毒しなくちゃね。」

加奈も私の顔を掴み、ディープキスを始めた。先ほどの真美よりも大胆に、ねちっこく。

一度行為を中断すると、ほんのりと火照つた顔で

「まだまだしなくちゃね・・・・・・」

もう一度顔を近づけようとしたその時、

「あほか～～～！！！！！」

真美と増田さんに頭を叩かれた。

「邪魔しないでください！」

「兄妹でそれは駄目だろ！常識的に考えて！」

「兄妹とか関係ありません！私は世界中で誰よりもお兄ちゃんの事が好きなんです！」

今度は真美と加奈が喧嘩を始めた。ちょっと待て、加奈は妹で肉親で・・・・と想えていた所に、

「私だけして無いのは仲間外れですかね？」

今度は増田さんがキスをしてきた。それも普段の増田さんからは考えられないディープキスを、

「「ちょっと！――！」

直ぐ様一人に引き離され、今度は三人で喧嘩をする。私の過去の話から一体どうなつてこのような状況になつたのだろう？

かくして、私はファーストキスを奪われ、合計三人の女性に数分のうちにディープキスをされるというおかしな事を経験した。

三人がまだ言い争つてゐるので、独り我に返つた私はこゝそり部屋を抜け出し、屋根の上に昇つた。物心付いた時から、何があると屋根の上で考える癖があつた。今はマンションのために無理なのがだ。

屋根の上は浜から来る浜風と、波の音が聴こえる。そして、海が近いため水平線を見渡せる。

「三人にキスされちゃつたな・・・・・・」

先ほどの事を思い出し、少し顔が赤くなつた。三人とも飛びぬけて美人だ。そんな相手に思いを寄せられ、キスまでされたら、答えを出すしか無い。

「加奈の事は好きだけど・・・・・・妹だしな・・・・・・」

加奈への愛情は妹としてしか見ていなかつた。だが、ここ最近の行動と、成長に危うい場面がいくつもあつた事は認める。もしも、同じ歳だつたら、それこそ非常に危無かつただろう。

「真美と増田さんか・・・・・・」

中学二年生頃から急に異性として意識し始めた一人。一人とも互いに持つていらない良さがある。だからこそ、迷う。ぶっちゃけた話、二人とも異性として好きなのだ。どちらかなんて選べない。それくらい一人とは深く、長く関わつてしまつた。二人とも好きなのだ。

「二兎を追う者は一兎を得ず、多分そんなんだろうけど・・・・・・僕は欲張りなんだろうな。どちらかをなんて選べない。どうしたらいいものか・・・・・・」

日本が一夫多妻制だつたなら良かつたのに・・・今の私は本気でそう思つてゐる。

「ほんと・・・三人とも僕には釣り合わない、素晴らしい女性だよ・・・・・・」

小さく呟いたと同時に、体を屋根に預け、私は空を見た。雲一つ無い晴天の空だつた。

「良。」

体を起こすと、三人が屋根の上にいた。

「何でここにいるつて解つたの?」

「お母様に聞いたんですよ。昔から何かあつたら屋根の上にいるつて。変わらないんですね。」

増田さんが笑いながら答えた。母は私の癖を今でも覚えていたらし  
い。

「良が言つてた事、聞いちやつた。」

真美が照れながら言つた。私も、さつきまでの独り言を全て聞かれたかと思うと顔から火が出そつた。そして、良が、私の事好きなんだつて事は言葉の意味から解つた。そして、まつちゃんの事も好きだつてことも。良なら多分そうなのかなつて納得しちやつた。だつて良つて案外欲張りだもんね。」

「うん・・・僕は真美の事が好きだ。女性として。でも同じくらい増田さんの事も好きだ。今の僕にどちらかを選べるなんて事出来ないんだ・・・ごめんね、凄く優柔不断で。」

普通の人ならこれで愛想が付くだろう。二兎を追うものは一兎を得ず、欲張りすぎる人は全てを無くす、世の中は本当にそののだ。「良、私凄く嬉しいよ。私の初恋つて良なんだよ?もしかしたら距離が近すぎて、友人としてしか見られていないつて思つてた。でも良は私の事を好きだつた。こんなに嬉しい事は無いよ。だから!」

真美は私の側に来ると、私を指さし、

「良が私以外の女なんてあり得ないつて思うくらいに、私頑張るから!だから、良が誰か一番好きな人が出来るまで私は良と今までの

関係でいる！駄目？」

「私もです！」

増田さんが真美の背から顔を出し、

「私も真美さんと一緒にいます！そして、それまで私は良くんと友達です！私は真美さんなら良いって最初から思つてましたので。私だったら嬉しいけど・・・・」

「私もまっちゃんならしようがないって思うよ！こんな良い娘他にいないもん！でもね、私達以外だつたら・・・」

解つてるよね？と言う由で一人は私を見た。笑顔なのにいつも以上に怖い。

「ま、二人は私の前に敗れ去るんで。」

加奈の声に、二人は後ろを向き、また三人で言い争いを始めた。本当に、仲が良いほどよく喧嘩をする。喧嘩の理由が私絡みで無ければ言う事ないのだけれど。

三人とも、こんな私を、優柔不断で踏ん切りのつかないへたれな私をここまで一途に思つてくれるなんて、

「ほんと・・・」

下を向き、軽く呟いた後、私は立ちあがり三人に向かつて大声で、「お前ら、最高の女だよ！！！」と叫んだ。その言葉に三人は言い争いを止め、私を最高の笑顔で見てくれた。

読んで頂きありがとうございました!

取り敢えず、今回の話はこの物語を作る上で最初から決めてました。

転生物を読んだり、考えてしまつとこれまでの両親の事を考えてしまつてどうにかして会って元気に過ごしていく姿を見せたいって思っちゃいます。形姿は違えど、会って話せば伝わる、解るはずだ！って勝手な思い込みが私の中にはあります。

それと、良の判断何ですが、今の所はこれでも大丈夫かなって。女性陣がたくましそぎるので・・・

それでは今回も読んで頂きありがとうございましたー出来るならば、今日中か、明日には次の内容を上げたいと思います！

## 中学生三年生？ - 2（前書き）

と言つ事でその2です。恐らく、前回の良の行動に疑問を感じた人つて結構いると思います。良死ねってなると思います。多数の人から好意を抱かれて、特定の人物を選び、その先をつてのを書くには私はまだまだ勉強不足なのでこうしてしまいました。すみません。それでも読んで頂ける方々には私自信もつと勉強して、納得のいく文章を書いて行きたいと心がけていますのでどうぞよろしくお願ひします。それでは今回もよろしくお願ひします。

「それにしてもどこかで見た事ある顔だと思つたらあの天才ピアースト少女だったのか～。お前も凄いのを妹に持つたな！」

夕食の席で父が加奈を見てどこかで見た事あるような顔だと言つたので、天才ピアニスト少女としてテレビで紹介された事があると説明した。そうしたら、父は非常に興奮し、握手を求め、サインまでねだつた。加奈の困惑した顔を久しぶりに見れたので私は面白かった。

「テレビで見るより何倍もめんこいな～。そんなにめんこいと学校の男どもが放つとかないだろ？」

「そ、そうですね～？」

父はただの酔っ払いになつっていた。それも達の悪い酔っ払いに。

父が仕事から帰つて来ると、母は私の事を全て話した。母の時と同様に、私と父しか知らない事を話すと（おもにへそくりの場所を話した。そして今も変わつて無かつた。）、父は私の名前を呼んで、殴つた。そして泣いた。

姉とも会いたかったのだが、明日来る事になつていたので今日は来れないみたいだ。甥っ子を見たかったのだが。

夕食の前に、小比類巻の母じやなく、新堂の方の母に、加奈が私を追つてきた事、ついでに真美と増田さんもついてきた事を電話で話した。私はすぐさま加奈と電話を変わつた。母からだいぶ絞り込まれた加奈はぐつたりしていた。切符の関係上、最低でも三泊しないと電車のチケットが取れない事を伝えると、母は真美と増田さんの親に家に三泊する事を連絡するからきちんと帰つて来なさいと言つた。あつちに帰つたらだいぶ怒られる事を予想したら、私は頭が

痛くなつた。

賑やかな夕食が終わり、三人一緒にお風呂に入っている間、私はまた屋根の上に昇つっていた。都會とは違い、真っ暗な夜の中、波の音だけが聴こえてくる。その音を聴くだけで心が洗われるようだつた。

「やつぱ、ここにいたか。」

父が酒を持って屋根の上に昇ってきた。

「まだ未成年なんだけど。」

「馬鹿野郎。お前が今の歳で梨木の家で酒を飲んでた事や煙草を吸つてた事もこちとら解つてるんだ。今更良い子ちゃんぶつてんじやねえ。」

「変わらないな。」

父は私に猪口を渡し、酒を注いだ。私も同じように父の猪口に酒を注いだ。

「取り敢えず、再び会えた事に乾杯だ。」

父と私は猪口を合わせ、ぐいっと一気に中の酒を飲みほした。この体になつて初めて飲む酒が日本酒と言つ事もあり、久しぶりの酒の味はただ辛くてきつかった。

「きつといな。」

「口がまたお子様に戻つたんじゃないか?」

父は笑いながら、また酒を注いだ。

「今夜は月が綺麗だな。」

「ああ、満月だ。」

私も酒を注ぎ、月を見上げながら酒を一口、口に含んだ。

「昔は月を見上げながら飲む酒は旨かつたけど・・・今はきついな。たぶんビールもだめだろつ。」

「もう顔真っ赤だもんな。相変わらず顔に出るんだな。」

「ほつとけ。」

父と私は笑い合つた。酔いが速く回つたのか、心臓の鼓動が速くな

つているのが解る。

「でもよ」

父は酒を口に含みながら、

「姿形は違えど、生きていて良かつたよ。お前が死んだ時、母さん少しおかしくなつたんだ。葬式中なんて見てられなかつた。あんなに泣き叫ぶ姿を見たのは結婚する前から一度も見た事が無かつた。」

酒を一気に飲み干すと、再び月を見上げ

「大勢の人がお前の葬式に来ててくれた。それを見て俺は、お前は他所でもちやんとしてたんだなつて思つたら涙が出ちまつたよ。母さんも五年もしたら元に戻つた。その間、香住が世話してくれてな。あいつも家庭があるのに、毎日来てくれた。あいつの旦那も。あいつは良い奴とくつ付いたよ。」

「父さん。」

私は猪口を下に置き、

「僕、感謝してる。今までの事全てに。高校だけじゃなく、大学まで行かせてくれてありがとう。いつもご飯を食べさせてくれるため働いてくれてありがとう。好きな物を買ってくれてありがとう。父さんと母さんには感謝してもしきれないほど沢山のモノを貰つた。僕が今、こうして新堂良として生きていられるのも、もしかしたら神様が僕に父さんたちにまだ何も返していないだろつて事で生かしてくれたのかも。」

父は腕を震えながら顔を下に向いていた。

「馬鹿野郎、お前は俺らにいろんなモノを返してくれたさ。金の話じゃねえ。いつも気持ちで返してくれてただろう。帰つてきいたら必ず元気な姿見せてくれたじやねえか。親はな、子供が元気な姿を見るだけでいいんだよ。」

「悪いな。先に死んじまつて。」

「生きてるじやねえか。今もこいつしてさ。」

「そうだな。」

私と父はそれから酒瓶が空になるまで飲み続けた。酔いで火照った

体に、夜風が涼しく感じた。

翌日、物凄い頭痛と吐き気で私は起きた。昨夜の酒が響いたみたいだ。

「そんなに飲んで無いのにな。」

台所へ向かい、コップに水を入れて一気に飲み干す。少しだけ気持  
ちが楽になった。

「日記」

- みたし

母が二日酔い止めの薬を持って来てくれたので、それを飲み、私はまた布団に入った。

あまりのうるささに目を開けると体の上に被さっていたはずの掛け布団が無かつた。横を向くと、掛け布団を持ったままの真美がいた。

「ちょっと頭痛いからあんまり大声出さないでよ・・・・・・」

「だつて・・・・・・」

先ほどの声と違い、小さな声で顔を真っ赤にしている真美を見て、何があったのか考えた後、私は今の恰好を思い出した。上半身裸で、パンツ一丁、そしておそらく寝起きなので……。

布団！布団！」

卷之三

慌てて真美に掛け布団を要求し、投げ渡された掛け布団で体を隠し

た

「アーネスト・モロード」

真美は顔を真っ赤にして部屋を出て行った。私は掛け布団で顔を隠し、恥ずかしさに悶えた。

「ごめん・・・・・・」

「こっちこそごめん！まさかあんな格好だと思わなくて！」

再び起きて、身支度をして居間に向かうと真美がいたので先ほどの事を謝った。真美も突然の事にびっくりしたのだろう、私に謝つてきた。

「でも何であんな格好で寝てたの？」

「多分、夜寝てる時、暑くなつて、皆がいる事忘れて脱いだんだと思う。僕の布団の周りに服があつたし・・・・・・」

無意識のうちに行つていたらしい。こんな事をしたのは良になつてからは初めてだった。

「でも・・・良のつて大きいんだね・・・・」

「褒め言葉として受け取つておくよ・・・・・・」

「わんこ！わんこ！」

外では加奈と増田さんが犬と戯れていた。この犬は何代目なんだろうか？でも犬は柴犬が一番可愛い。

「可愛いですね～」

犬の首元をさすつて増田さんが言つた。犬も気持ちよさそうに尻尾を振つている。それにしても犬と戯れる美少女一人。悪く無い絵だ。携帯を取り出し、カメラに設定をし、犬に戯れる一人を隠し撮りした。

「え？」

シャッター音で気付いたのか、一人は私の方を見た。

「おはよう。」

「もう昼だよ～」

「お兄ちゃん起きるの遅い！」

私は一人の元に近寄り、犬の頭を撫でた。

「ちょっと昨日寝たの遅かつたからね。」

「そりなんだ。」

犬を撫で続けていると、敷地内に車が入ってきた。家の前で止まる  
と、車の助手席から私と同じくらいの歳の男の子が、後部座席の方  
から一人の小学生くらいの歳の女の子が降ってきた。

「うわ、マジで新堂加奈だ！」

男の子が加奈を見て驚きの声を挙げた。初対面の人呼び捨てにさ  
れた事に不服な加奈は少し不機嫌な表情をしていたが、

「加奈ちゃんだ～～～～～～～～！」

二人の女の子が走りながら近寄つてきた事に驚き、私の方を見た。  
そして、二人の女の子に囲まれ、質問責めに合つた。

「こら！博美、幸恵！困つてるとじょ！落ち着きなさい！」

「だつて加奈ちゃんだよ？超可愛いもん！」

「落ち着け。」

「はい・・・」

運転席側から降りてきた女性の言葉に一人の女の子は加奈から離れ  
た。加奈は少し安堵の表情をして胸を撫で下ろした。

「君が良くん？」

「はい。」

「ちょっとあっちに行かない？」

「ええ、良いですよ？」

私はにやりと笑い、女性の指さす方へ向かった。その様子を不思議  
そうに一人の女の子と、男の子は見送った。加奈と増田さんが後ろ  
から浮氣者～！って叫んでたが。

「あんた本当に博之？」

「そうだよ、香住。」

ちなみにこの女性は私の姉だった小比類巻香住だ。そろそろ四十歳

だと思うのだが。

「へ～、本当に全然違うね。めっちゃイケメンじゃん。」

「何、そんなに昔の僕って不細工だった？」

「いや、普通？」

一人で笑い合つ。何年経つても、姉弟の関係は同じらしく、会話のテンポも昔とさほど変わらない。

「それで今のは那つて昔付き合つてたあの自衛隊の人？」

「そうだよ～。結婚しちゃつた！」

「おめでとう。」

「ご祝儀」

「お前中学生からせがむのか？」

出してきた手を叩き、私達は笑い合つた。

それから私達は、久々に前の家族全員揃つての食事をし、会話をして過ごした。他にも香住の子供、加奈、真美、増田さんと大勢いたが、大勢で囲んで食べる食事はどこでも美味しく、楽しかった。父が仕事の無い日に、私達は父にお願いして、車で近くのスタジオまで送つてもらい、父と母に今のバンドの曲を披露した。演奏終了後、父と母から大きな拍手を貰い、私達は一人に演奏を披露する事が出来て良かったと心から思った。

次の日の朝に帰る事が決まっていたために、私達は身の回りの整

理を行つた。それから、皆が就寝したのを見計らつて、私は砂浜に向かつた。

砂浜に向かう途中で枯れ木を何本か拾い、砂浜に着くと拾つてきた枯れ木で焚き火を作り、着火剤を置き、火を点けて燃やした。お盆の迎え焚き火と送り焚き火の、私の、小比類巻博との送り焚き火を自分自身でしたかつたのだ。焚き火の火の勢いが増すにつれ、木が燃える音がしていく。

「も～えろよもえろ～よ、ほのおよも～え～ろ～」

いつの間にか口ずさんでいた歌を歌い、私は焚き火を見ていた。小比類巻家にくるのはこれが最後だ。小比類巻博とはもう死んでいるのだから、むやみに私が来ていい場所では無い。これは私もそう思つていたし、父と母もそう感じていただろう。それでも、ここに来て良かつた。

「今日で小比類巻博とは完全に死んだよ。僕は身も心も新堂良になる。」

どこかで博之に戻る事に期待を感じていた自分、ずっと長い夢を見ついて、これは博之が夢見ている世界かも知れない、って。それらを全て捨てる。私は新堂良だ。

小比類巻博之がずっと吸つていた煙草を取り出し、ライターで火を点け一服をする。昔はあんなに美味しかつた煙草も、今となつてはただ煙を吸つて吐いているだけとしか思えない。

「こんな煙を美味しいなんて感じたなんて、煙草は麻薬より性質が悪いな。」

私はもう一本煙草に火を点けると、焚き火の前に刺した。そして、煙草を口にくわえ、合掌を行つた。私は神様に初めて感謝の言葉を奉げた。死んでもなお、私を両親に合わせてくれた事を、新しい命をくれた事により素晴らしい出会いと生活を送れた事を。そして、今後も送れる事を。

煙草を吸いきると、持つて来ていた携帯灰皿に入れて、砂浜に刺した煙草も燃え尽きたのを確認して灰皿の中に入れた。それから焚

き火が完全に燃え尽きるのを見届けた。焚き火が燃え尽き、再び着火しない事を確認すると、

「じゃあな小比類巻博之。安らかに眠れ。」

それだけを言うと、私は砂浜を後にした。

翌日、私達は父と母に駅まで送つてもらつた。

「もう来るんじゃねえぞ。お前は新堂良だ。俺達の息子の小比類巻博之ぢやねえ。」

「解つてるよ。今度会つ時はお空の上だな。」

「そうだな。」

父は笑いながら煙草をふかした。

「そうね。博之は死んだもんね。ここにいるのは良くんだもんね。母は少し悲しそうにしていた。」

「それじゃあ、行くよ。」

「おう、行つてこい。」

「元氣でね。」

見送る母と父を後にして、私達は駅の階段を昇つて行つた。

「今日で小比類巻博之は完全に死んだよ。僕は身も心も新堂良になる。」

お兄ちゃんが焚き火に向かって咳く。それまで持っていた小比類巻博への未練が無くなつたのだろう。そして、心の中のどこかにあつた新堂良を認めていなかつた気持ちが無くなり、身も心も新堂良になる事を決めたのだろう。その背中は堂々としていた。格好をつけて煙草なんか吸つてる。結構、キザなのかもしれない。でも未成年は煙草を吸つちゃいけないから今日以外で吸つてたら注意をしなくちゃ。

物心ついた時には、私は他の人とは違うと自覚していた。私が初めて、ギターを触つて弾いた時、お兄ちゃんもお母さんもお父さんも凄く驚いていたし、勉強も一度読んで考えたらほとんど解る。運動だってどう体を動かしたら良いか、普通に行つてているだけなのに他

の人よりいつも優れていた。他の人が出来ない事を見ていると何で出来ないか理解できなかったりした。それは主に勉強面なのだが、他の人が考えているのを見ると何でこんな出来ないのだろうとう気持ちになった。私はそれらを経て、少し傲慢になつていていたのか知らない。段々、女の子の友達は離れて行つた。それでも良かつた。家にいればお兄ちゃんがいて遊んでくれる。でも、離れて行つた友達の数が多くなるにつれ、私は寂しさを感じて行つた。ついに誰もいなくなつた時、私は孤独という感情を初めて知つた。男の子は寄つてくる。でもそれは対等な立場の友達では無い。それがまた女の子達は気に入らなかつたのだろう。無視だけしていたのが、次第にいじめへと発展して行つた。

いじめは決して気持ちの良いものでは無い。男の子も女の子もいじめを受けると心に大きな傷を受ける。暴力は物理的な物だけでは無い。殴られるよりも、蹴られるよりも何よりも、言葉の暴力は私にとって痛かつた。私に向かって喋るのならまだいい。反論をしたらしいだけだから。しかし、陰で言われたり、他の人との会話中には私に聞こえるように言うのは物凄くきつい。名前を言わないのだけれど、私の特徴を上げて悪口を言う。決して私個人の名前を挙げないのだからどうとでも言い逃れる事が出来る。悪口から、今度は私の持ち物を破り捨てる、机の中に死ねと書かれた紙を入れる、靴の中に画鋲をいれる、靴を隠される、トイレに入つたら水をかけられる、とエスカレートしていく度に、私は何で生まれてきたのだろうと感じた。誰も私が生きている事を望んでいない、そう思った時、私は死のうと考えた。

部屋の天井にロープを付けているちょうどその時、部屋にお兄ちゃんが入ってきた。お兄ちゃんは私がロープを付けている所を見るや否や、走つて私の元へ向かい、私に体当たりをしてロープからつき放した。そしてロープを掴み、部屋を出て行つた。私は茫然とし

てこると、お兄ちゃんはすぐに部屋へ戻ってきて、私を叩いた。

「おまえ、何をしようとした？」

いつもの優しいお兄ちゃんの声じゃなく、低く、小さいくど、はりはりとした口調で言った。私はそれに対して、私は誰からも望まれていらない、生きていても意味が無い、だから死ぬんだと言つたら思いつきり叩かれた。

「誰からも望まれていないって？生きている意味が無いって？ふざけるな！ここにいるだろ！お前が生きるのを望んでいるやつが、これから成長していく姿を望んでいるやつが！ふざけるなよ、世の中にはな生きたくても死んでしまうやつだっていっぱいいるんだ。それを自分から死ぬなんて事するなよ！」

その言葉を聞いた時、私は今まで溜めこんでた思いが全て溢れ出した。お兄ちゃんに何が解るの？私はいっぱい傷ついた。いっぱい酷い事もされたし酷い事を言われた。友達も皆いなくなつた。お兄ちゃんはそんな事ある？ある訳無いよ！お兄ちゃんにはいつも周りに大勢の友達がいて、いつも皆から慕われている人に私の気持ちなんか解るはずが無い！知った風な事言わないでよ！そう言葉にしていた。私は泣いていた。泣きながらお兄ちゃんに向かつて大声で叫んだ。そしたらお兄ちゃんは私を抱きしめた。

「痛かったよな、凄く痛かったよな。言葉の暴力って何であんなに痛いんだろうな。不思議だよな。体が傷つくよりも、心が傷つく事の方が百倍もいたいよな。体の傷は消えるけど、心の傷つて消えないもんな。」

そういうて抱きしめてくれたお兄ちゃんに、私はお兄ちゃんを強く抱きしめて泣いた。いっぱい泣いた。凄く泣いた。

お兄ちゃんは私がずっと側にいてくれて、一生懸命背中を撫でてくれた。それから私は全てを話した。いじめられた事を。そしたらお兄ちゃんは、

「僕もね、いじめられた事は無いけど、嫌われた事はいっぱいあるよ。僕はその時、相手の事を全然考えなかつたんだ。僕が相手の事

を考えないで言つたり、行動したらその子は僕の事を嫌い始めた。そして、僕の事を嫌いになる人が多くなった時考えたんだ。何で皆僕を嫌うんだろう？って。考えたら、僕の行動は僕の事しか考えていいなかつたんだ。そこで初めて気づいたんだ。僕は相手の事を考えていないつて、だから嫌われたのかな？って。加奈はどう思う？」私はお兄ちゃんの話している事を自分に当てはめていた。私は今まで人の事を考えた事があつただろうか？自分が出来る事が出来ないのを不思議に思つたり、自分が、自分が、自分が、全部自分の事しか考えていなかつた。

「お兄ちゃん、私も今まで自分の事しか考えて無かつた。なんで私は出来るのにあなたは出来ないの？とか、何で私は似合ひのにななたは似合わないの？とか。」

「そうか、じゃあもしかしたら加奈も僕と一緒に相手の事を考えてなかつたから嫌わちやつたのかな？」

お兄ちゃんが言つ言葉に、私は頷いた。それで嫌われて、憎まれて、いじめられたんだろ？」

「お兄ちゃん、私どうしたらいいのかな？」

「加奈にはもう答えが解つたんじゃない？だったらそれをしたらいいよ。それでもいじめてくるような奴とは加奈はその子と仲良くなれる必要なんてないよ・・・・・・加奈は凄いからね、皆加奈みたいじゃないよ。人は皆違うんだ。でも加奈には加奈のよさがあつて、その子にはその子の良さがある。それを探してみるんだ。そして相手の事を思えば加奈はまた友達が増えるよ。」

ね、と私に向かつて笑顔を向けるお兄ちゃんに、私は今までとは違う感情が芽生えた事が解つた。何だらう、凄くドキドキする。お兄ちゃんつてこんなに格好良かつたつけ？

その時私はお兄ちゃんを一人の男性として好きになつたのだろう。

私はそれから相手を思いやるという事をした、人の悪い所を探すよりも良い所を探す事をした。そしたら少しずつだが私を認めてく

れる人が現ってきた。数ヶ月も経つといじめは無くなつた。

「加奈ちゃん、それは恋をしたんだよ。その人の事を好きになつたんだよ。」

友達に、私の気持ちを伝えたらそう答えてくれた。恋なの?この気持ちは?そう思つた時、私は実の兄に恋をした、と友達には言えなかつた。

でも、気持ちが抑えきれなくなつた時、私はお兄ちゃんに振り向いてもらつたために色々な事をし始めた。時には体に接触して色気仕掛けを行つた時もあつた。お兄ちゃんは凄く恥ずかしそうにしてたけど、私も凄く恥ずかしかつた。寝ているお兄ちゃんにキスをした事もあつた。

私がお兄ちゃんに好意を抱くように、お兄ちゃんの周りもお兄ちゃんに好意を持ち始めた。真美さんや増田さんが良い例だ。真美さんも増田さんも凄く美人で良い人達だ。私と違つて結婚も出来る。二人が凄く羨ましかつた。何で私はお兄ちゃんの妹で生まれたのだろう?もし、お兄ちゃんと同級生だったら絶対にお兄ちゃんと結ばれる自信があるのに!でも、お兄ちゃんの妹で良かつた事は沢山ある。それに、私はまだまだ諦めない。結婚しなくとも二人でずっと一緒にいる事や子供を産む事も出来る。だから諦めない!最大のライバルは真美さんと増田さんの一人。でも二人は今お兄ちゃんがしている事を知らない。私は寝た振りをしてお兄ちゃんを襲うと思ってたからずつと起きてたんだもん。だから今夜は凄く運が良い。誰も見ていないはずだから・・・

お兄ちゃんが去つて行くのを見て、私はさつきまでお兄ちゃんがいた所へ向かつた。私もお兄ちゃん、博之さんのために合掌をしようと思ったからだ。

一步一歩、砂浜の上を歩いてるうちに私の視界の両端に人影が見えた。暗くてよく解らないけど、近くの住人がお兄ちゃんが焚き火しているのを見て、火がちゃんと消えたか確認しに来たのだろう。そう思つて近づいていく。

「え？」

「あれ？」

「ええっ！？」

一人の人影はここら辺の住人では無く、真美さんと増田さんだつた。

やっぱりこの一人が私の生涯のライバルだ。

読んで頂きありがとうございました

これで一応、良は過去との決別をした、と言つ事になります。書いてここまで長くなるなんて思つていませんでした。それはそうと、今児のカペタは物凄く熱いですね！ノノノノも面白かった！

「」最近は音楽と全く関係無くなってしまったのですが、転生、と言う所に重点を置きました。それとラブコメですかね？

次からはラブコメく音楽となると思います。話が結構重い話になつてたので、次からは明るい話を全面においていこうかな～つて思つてたりしています。それと、書いた後に誤字脱字をチェックするために読み直したら、結構良つてキザですね、つて事に気付きました！

それでは、今回も読んで頂き誠にありがとうございます。次も頑張つて書き上げますのでよろしかつたら、時間があつたら読んで頂ければ嬉しいです。

第九話の1です。書くのに夢中になっていたら「」飯を食べるのを忘れていた。一日一食！良いダイエットになりますね。めっちゃ眠い、でもゲゲゲの女房見なれば！ということで第九話の1です。今回も読んで頂けると幸いです。ではどうぞ宜しくお願ひします。

「次のライブは学校の文化祭になると思います。良かつたら来てくださいね！それじゃあ次の曲行きます。」

慣れと言うのは怖い物で、観客数が100人越えを達成すると、半分のお客さんの数でも少なく感じてしまう。それでも私達はお客様の多い少ない関係無く精一杯演奏しようと皆が心に誓っている。驕る事が一番だめなのだ。自惚れる事も駄目だ。

「ありがとうございました！」

最後の曲が終わり、私達はステージを後にした。ライブを一回やると私は汗だくになる。一曲一曲を常に持てる力を出し切るために精一杯行うからだ。物理的な力を入れてドラムを叩いてる訳ではない。

「お疲れ。」

水の入ったペットボトルを差し出し、真美が私の前に立つた。

「お疲れ。増田さんもお疲れ。」

「お疲れ～真美さんお疲れ～。」

増田さんに挨拶をして、私は水を飲んだ。ライブ後の水は凄く美味しい。楽屋の端に移動し、荷物を置いて一度外へ出る事にした。楽屋を出て、ホールを横切り、階段を昇り外へ出た。

時期的に、外も十分暑いのだが、中のこもった熱気に比べたらまだ涼しいので、夜風を浴びて涼しんだ。

「お疲れ様、中々良くなってきたんじゃないかな？」

「お疲れ様です。来てたんですか？」

師匠に良くなってきたと言われ、嬉しくなった。師匠が私を褒める事はあまり無い。褒めてくれる時は相当良い時だけだ。

「馬鹿、お前のドラムじゃねえよ。バンドだよ。お前はまだまだ。全然俺レベルには成っていないよ。たかが六曲くらいでへばつてるとよじじや話にならね。もっと力を抜けの所は抜けさせ。あと体力をつける。」

「ですよね。」

やはり、師匠は私個人を褒めてはくれなかつた。でも、バンド自体を褒めてくれたことは素直に嬉しかつた。そして、さり気無く私個人の問題点を話し、対処方法を教えてくれるので本当に尊敬出来る。「お前らがその気なら俺がレベルに声かけてやるけどどうする?ま~声かかってそุดだけどな。」

「直接は来てないんですけど、そんな話があるつてオーナーさんが。でも、正直まだまだレコードティングするレベルじゃないかと思つんですけどね。」

「う~ん。そりゃメジャーで長くやつてる奴らや上手い業界のやつらに比べたらまだまだだけよ。お前個人の実力つてお前が悲観するほど低いつてわけじゃないからな。お前個人に限つて言えば、若いやつらに比べたら技術はお前の方が全然上だ。真美ちゃんんだつて若いスタジオミュージシャンレベルはある。増田ちゃんなんて、あの子ピアノすげーだろ?普通ならクラシックでプロ目指してるんじやないか?」

確かに、私はそこまでのレベルじゃないと思つけれど真美と増田さんは凄い。師匠がここまで褒めるのも頷ける。

「そもそもだな、俺が三年も教えるんだ。それでアマチュアレベルしか成長出来ない奴を俺は教えねえ。見込みがあるやつだけにしか見てやらねえんだ。その点は誇つてもいいぞ。」

「ありがたいですね。」

「お前はもつと嬉しいそうにしろよ!」

頭を力任せに撫でられ、少し痛いが師匠の言葉は物凄く嬉しい。

「でだ。」

師匠は私の頭から手を離し、煙草に火を付けて話し始めた。

「お前らもそろそろどうするか考えろ。レコード会社と契約して商業的にするのか、それとも趣味の延長線上で行うのか。俺の見立てではお前のバンドは上に行く力を持つていて。集客性もある。売れるかどうかは運次第ではあるが、お前らがその気ならメジャー

でもインディーズでも話を持ちかけてやる。それでだ、取り敢えずデモ作つてみない? ドラム録りならいつもの所で出来るし、持つてなかつたらMTRも借してやる。

「何でそこまでしてくれるんですか? 師匠が口ネとかそういうの嫌いなの俺知りますよ?」

そう言うと師匠はニヤリと笑い、

「言つただろ? 俺にバンドをもう一度したいって思わせるバンドはここ数年いなかつたんだ。お前らは他のやつらとは違うんだよ。」

翌日、準備室に一人を呼んだ私は、

「つて事で、デモ作つてみる氣があるなら作れるけど・・・・・・  
どうする?」

真美と増田さんに、先程の師匠の事を伝えた。

「良いじゃん! 作ろうよ! 上手く行つたら私達デビュー出来るんで  
しょ? 作るしかないでしょ?」

「私も作つてもいいと思う。それに、本氣で皆がデビューしたいな  
らするべきだと思う。」

真美も増田さんも作る事に賛同した。

「それじゃあ取り敢えず、デモは作るつて事でいい? 数曲だけだから文化祭前にはつくり終えると想つ。文化祭の時にCDを配布してみよう。」

「やつたあ! ! ! 」

真美と増田さんはハイタッチをして喜びあつた。そして、私は先程の増田さんの言葉が引っかかり、真美を呼ぶと、準備室を出て階段の下に移動し、話を始めた。

「真美には悪いけど、増田さんがもしも僕たちのためヒートビューラーを  
たいてて貰つなら、僕は「モモを作るだけで留まらせるよ。」  
私の言葉に真美は困惑し、

「どういう意味？」

「増田さんが自らの気持ちでこのバンドで上に行きたいたって気持ち  
が無いんだつたら、僕はこのバンドでどこかと契約する事には同意  
しないつて事。」

「何で？ 真美だつて本気でバンドに打ち込んでるじゃん！ だつたら、  
」

真美が反論する気持ちも解らなくもない。

「バンドに打ち込むだけだつたら趣味で出来る。真美は元からプロ  
志向だつたし、僕もなれるならなりたい。でも増田さんは違うだろ  
？ 彼女は元々バンドをやるためにピアノをしている訳じやない。も  
しかしたらピアニストになりたいのかも知れない。そんな夢を、僕  
たちのために潰すことだけは絶対に出来ない。」

「やうだね。でも、まっちゃんが本心で上に行きたいつて言つたら  
？」

不安そうな顔で真美は私を見る。私は真美に笑顔を見せ、

「その時は皆で手招すだけだよ。」

そう言つた。

真美との話合ひを終え、準備室に向つたために、階段を昇ろうとした時、

「良くん、私がデビューしたく無いつて思つてるの？」

階段の真ん中に増田さんが立っていた。

「私がピアノのコンクールで三位に入ったから？だからプロのピア  
ニストを目指してゐつて思つた？」

増田さんは吐き捨てるよつに言った。

「ふざけないで！私のことは私が決める！そんな勝手な事しないで！」

えらい見幕で私の前までくると、右手で私のほほを叩き、階段を駆け昇つて行った。私はそれを見送る事しか出来なかつた。またやつてしまつた。自分の意見だけで、相手を理解したつもりになつて、「ちょっと良、追いかけなくていいの？」

「・・・・・」

言葉を返せないでいる私を見て、

「あ～～～もう、私行くからね。」

真美は駆け足で階段を登つていつた。

今の増田さんになんて声をかければいいのだろう？私が悪かつた、増田さんの気持ちを考えないで、でも、増田さんはピアノが大好きなはずだ。コンクールの時もあんなに楽しそうに弾いていた。その気持ちは嘘じやないはず。ならピアニストになりたいって考えがあつても・・・

「どうしたんだお前、こんな所で難しい顔して。」

顔を上げると佐藤が階段から降りてきた。

「いや、ちょっと・・・」

「どうした、ついにあの女どもにフラれたか？」

「そんな感じかな・・・・・」

声に霸気が無いのが私にも解つた。その様子を見て、佐藤は「話なら聞くぜ、屋上にでも行くか？」

と声をかけてくれ、私と佐藤は屋上に向かつた。

屋上に出ると風が強く吹いていた。午前中は晴れていたのに、曇り空な所を見ると、まるで今の私の心模様を現していくよつだつた。

「それで、どうしたよ？」

「うん、増田さんを傷つけたみたいだ・・・」

私は佐藤に先程起きたことを話した。そして、私が思つ、増田さん

の気持ちを。

「なるほどな。つまりお前はあの子がコンクールで楽しそうにピアノを弾いてる所を見てそう思つたのか？まあ小さい頃からピアノを弾いてそれならそう思わなくもないわな。」

屋上のベンチに座り、空を見上げながら佐藤が言った。

「まあ俺には才能ある奴の事なんて解らないけど、ピアノ楽しそうに弾いてる奴は全員ピアニストになりたがるかね～？」

「でも増田さんは非凡なんだ。普通の人とは違う。そういう夢を持つてゐる可能性があるなら「お前さ」「

話の途中に佐藤が入ってきた事に驚き、私は佐藤の方を向いた。佐藤は仏頂面のまま、

「才能あるやつは普通のやつの考え方を持つてないとでも思つてんのか？中にはただピアノ弾くだけで楽しいやつがいるかも知れないだろ？ピアニストにならなくともピアノは弾けるんだからよ。ピアノが弾けて、一緒にいるだけで楽しい連中と音楽が出来て、自分たちの曲を聞いて貰える。あいつにとつてピアニストになつて、独りでピアノ弾くよりもこっちの方がやりたいんじゃねえのか？」

そう言つた。確かにそうかも知れない。増田さんはただピアノが弾くだけで楽しいのかも知れない、そして真美、僕と一緒に演奏が出来る事、もしかしたら端からピアニストなんて眼中になかったとしても。その事に気づいたとき、私は居ても立つてもいられなくなつた。

「佐藤、ありがとな。あの時と逆になつたな。」

「これで借りは返したぜ。」

私は立ち上がり、

「亜里沙さんによろしくと伝えておいてくれ。」

「了解。」

佐藤に一声かけると屋上を出で、全速力で準備室に向かつた。まだ残つてくれ、頼む。

準備室のドアを勢い良く開けると、中には真美と増田さんがいた。私の方を向いた増田さんは涙が流れていった。私は肩で息をし、ドアを閉めると中に入った。

「良！」

「ごめん、ちょっと遅れた。」

私は真美の避難の声を制し、増田さんに向かって

「バンド、続けないか？これからも、この先もずっと。」

肩を上下に大きく揺らし、口で呼吸し、私は増田さんに言つた。増田さんは満面の笑みを私に向けて、

「当たり前です！」

と言い、私に抱きついた。

「良そんな事考えてたんだ？」

「真美には喋つたはずだけど？」

それから私たちは、師匠からMTRを借りるために師匠の家に向かつた。

「良くんは考えすぎなんです。私はピアニストになる考えなんて微塵も無かつたんですよ？大好きな音楽を大好きな人と一緒に出来るだけで幸せです。それでお金がもらえるなら、それだけをして行きたいですよ。」

「・・・なんか、そう直接言われると恥ずかしいよ・・・」

直接的な物言いに、少しだけ照れていると、私の顔を覗き込み、

「それくらいしないと良くんは気づきませんから。」

ほほ笑みながら増田さんは私に言つた。その仕草に思わず胸が高鳴る。

「も～まつちゃんはそういう事するからずるいんだよー良の顔、真っ赤だもん！」

真美に言われて顔が赤くなっているのが解つた。増田さんのいうこ

う仕草は正直に言つてしまつた。こ

「大成功です！一歩リードですね！」

増田さんは私の腕を掴み、身を寄せた。増田さんの大きな胸が私の腕を挟む状況になり、

「あ、増田さん……」脳か……」「…………」

卷之三

ほんのりと薄く桜色した頬を私の肩に寄せて、小さく呴いた。それを見た真美が急いで増田さんを私から引き離し、

坪田さんの腕を覺えたのが、遠

「お、きたな真美ちゃん、増田ひかる、その他一組。」「

お呼び無いとでも？

お前哲の知ってるな

師匠の家にお邪魔すると、最近は恒例のやり取りをして、私達は中に入つた。師匠の家はそれなりの広さを持つ一軒家で、地下に自宅スタジオがある。たまに、師匠が仕事帰りじゃなく、家にいる時はここで個人レッスンを受けている。

「あら良くん、いらっしゃい。他の子は初めてね。」  
「お邪魔します。」

い。  
師匠の奥さんが奥の方から出てきた。その歳の割には若く、美人な  
人だが、奥さんとしても優秀らしく、師匠は尻に敷かれているらし

「いいえ、ゆうぐりして行ってね。それにしても良くん、また一段

「お姉ちゃんって歳かよ。」

そう言って笑う師匠に、奥さんは近くまで寄ると

「ゲフツ！」

「何か言つたかしら？」

腰の入つた見事な突きを師匠のみぞおちに入れた。たまらず足がもつれ、床に膝がついた師匠は、

「何でも無いです・・・」

と言うのが精一杯だつた。奥さんは空手三段らしく、若い頃は隠していたとか、何とか。

地下のスタジオに行くと、既にMTRが箱に詰められている状態だつた。わざわざ私達のために準備していくてくれたようだ。師匠は何を思つたのか突然、

「良、ちょっと時間あるか？」一時間位。  
と私に聞いてきた。

「一時間ですか、僕は大丈夫ですが、真美と増田さんは？」

師匠の問い合わせ私は真美と増田さんにも聞いた。

「私は大丈夫です。」

「私も。」

二人共、時間に余裕があるみたいだ。

「じゃあ、一曲だけ一発録りしてみるか。デモだから良いだろ？」

「え、宜しいんですか？」

「調度、録つてたからな。それに嬢ちゃん達も楽器持つてるようだし。悪い真美ちゃん、ベーアン、アンペグしかないんだけどいいか？」

「全然オッケーです。むしろ良い位。」

「じゃあ録るか、特別にお前には俺のドラム叩かせてやる。」

師匠の持つドラムセットを叩かせて貰える事になり私は心が踊つた。

何回か聴かせてもらつた事があるが、音が全然違う。プロが選ぶ、最高のドラムと師匠の持つ腕で、私には到底出すことの出来ない嗜好の音を聴かせてくれた。

師匠は、箱に入つていらないMTRにシールドをつなぎ、外されたいたスタンドにマイクを付けて、シールドを接続し、ドラムの準備が出来た。

私は、ドラムセットの方に移動すると、入念にストレッチを行い、スローランに座り軽く音を確認して、準備が整つた。

「クリック音聴かなきや行けないからヘッドフォン付けておけ。」言われるままに、私は側に置いてあつたヘッドフォンを付け、メトロノームのBPMを設定した。

「いつでもオッケーです。」

「はいよ、んじや始めてくれ。」

メトロノームのテンポを聴きながら、私はドラムを叩き始めた。

一時間後、全てのパートを一発録りし、師匠がパソコンで編集したのをスピーカーから流した。私達の演奏は思う以上にまともに聴こえ、少しばかり自信が付いた。

「まゝ一発録りって事もあつたが、デモとしては上等だろ。しかしこれが中学生の演奏か？若い奴らがスタジオで録つたみたいじゃねえか。」

忘れていたが、中学生の演奏として聴いたならば全然問題ないだろう。

「案外上手く行つたね。」

「そうですね。」

真美と増田さんも、出来が良いと感じたのか、顔が綻んでいた。師匠は曲を聴き終えると、真面目な顔で指で額を押さえ、しばらくして、

「嬢ちゃん達は先に帰ってくれ。ドラム録り全てするから時間かか

る。上にいるカリさんには車で送らせるから気を付けて帰れ。

と二人に言った。

「は、はい・・・」

二人は、チャランポランな工口親父の印象しかない師匠の仕事モードを初めて見て、狐につままれたような顔をしていた。そして、私に軽く手をふった後、師匠に礼をして、この場を去った。

「良、ちょっと真面目に行くから覚悟しろよ。」

それから一時間、私は師匠に黙出しを食らうに続けながら一曲録音した。

「悪いな、遅くなつちまつて。心配しなくても良の両親にはかみさんに連絡入れるように言つといた。」

「ありがとうございます。」

師匠の車に乗せてもらい、私は家へ向かつた。ドラムの音源の入ったCDとMTR、58、コンデンサーマイク、ウォーカル録音用のポップガード、キャノンケーブル、とほぼ一式を借りてしまった。

「お前、決意したな？」

「はい。行ける所まで行く覚悟を決めました。」

「そうか、と言い、師匠はそのまま、車を運転し続けた。

「どうする？ 声かけとか？」

「いえ、焦らず、自分たちの力で声かけてもらえるように頑張りますよ。師匠のためにもね。」

「馬鹿が、ガキが生いいやがって……でも、悪くねえな。車は私達家族が住んでいるマンションの前に着いた。道具を持ち、降りる際に

「いつか、フェスでも何でもいいけどお前らと俺が受け持つバンド

が対バン出来たらいいな。」

師匠は笑いながら言つた。私は右手の指を全て広げ、師匠の前に出しつけた。

「五年以内、それまでに師匠と対バンしますよ。絶対に。」

「ハツ、そん時まで必死こいて練習しろ。情けね〜演奏見せたら承知しねえぞ?」

「師匠こそ、歳のせいにしないでくださいよ?」

私と師匠は互いに笑い、そしてその場を去つた。

翌日、部室を使い録音を行つた。昔のMTRと違い、今のMTRはHDDやらCDやらSDやらとカセットじゃない。しかも、MTRだけでCDが出来るのだから技術の進歩は凄いものだ。性能も素晴らしい、内蔵アンプシュミレーターもいい音を出してくれるので、アマチュアに重宝される理由が解る。しかし、準備室にある本物のアンペグのSVTを使つた方がさすがに良いため、ベースはDIを通して録音した。そしてキーボード、ヴォーカル、コーラスを録音して、出来上がつたマスターCDを皆で聴いてみた。

「なんか、感動モノだね。」

「本當です。これが私達の第一歩なんですね。」

「うん。これが僕たちの新しい第一歩だ。」

私たちは出来上がつたCDを聴いて、これを様々な人に聞いてもらふと思つと胸がはずんだ。それから皆で記念の写真を撮り、その日は解散した。

次の日、真美がジャケットのデザイン、歌詞カードをPCで創り

上げて、CDに印刷を施し、記念すべき一枚が完成した。そして、マスターCDからダビング、ジャケット入れ、を施し、108枚のデモCDが完成した。100枚はライブの度に無料で配り、残りの8枚のデモCDは、

「あ、小倉。デモCD出来たからあげるよ。」

「マジで？ やつた～～！」

一枚は小倉に、

「佐藤、デモCD出来たから里沙さんに渡しどう。」

「俺の分は？」

「しようがないな。一枚一万円だ。」

とのやり取りをして、佐藤と里沙さんに一枚ずつ、

「師匠、出来ました！」

「何でジャケットに真美ちゃんと増田ちゃんいないの？」

師匠に一枚、そして、私達の分の三枚、残り一枚は準備室に置いておく事にした。これで後は文化祭に向けるだけだった。

文化祭当日、今年の開催式のバンド出演は後輩のバンドを出す事に決まった。去年までは私達が先輩に依頼されて出ていたので、今回は私達の学年で出るバンドを決めた。出演するバンドは二年生のバンドで、一年生の頃から組んでいて、学内の全てのライブを見ていた。バンドとしての成長が著しかったので、今年は、このバンド

を出すことに決定した。

「良さん。こんな広いホールでやるの初めてなんでもつちや緊張してるんですけど・・・」

「大丈夫だよ。楽しんでー楽しめたらそれでいいんだから。ミスしたらどうしようとか思わないで思いつきり演奏を楽しんで!..」

後輩たちのバンドはとても楽しそうに行い、会場も多いに盛り上がった。こういう所が音楽の素晴らしい所だと私は思つ。

午後にライブがあるといふのに、私は午前中からずっと露店の手伝いをしていた。露店の近くを亜里沙さんと一緒に歩いている佐藤を見て、

「佐藤・・・亜里沙さんと一緒にいたいのは解るけど、店の方も手伝つてよ。」

と言つた。佐藤は嫌そうな顔をして、「別にいいだろ。」

と言い放ち、その場を去つていった。こんな暑い中に火を使う身にもなつて欲しいものだ。

その後も、私は露店を手伝い続けた。露店の売れ行きが好調のため、忙しく、一刻一刻と時間が過ぎていった。料理を作るのに夢中なあまり、私は時計を見るのをすっかり忘れてしまつていた。そのため、

「良ーあんた何やつてるの!十分後にライブだよ!」

「嘘！もうそんな時間？」

時計を見ると本当に出演時間まで後十分しか無かつた。私は急いで料理を作るのを別の人と代わり、エプロンと二角筋を脱いで音楽室へ向かつた。

「良くん、今から見に行くからね！」

「ありがとう！」

「今回もいいライブ見せてくれよー！」

「まかせとけ！」

音楽室へ向かう途中、すれ違う人達の声援を受けながら私は走つた。無我夢中で走つた。私にとつてこのバンドでライブをする事は何よりも大切で、何よりも楽しい。

準備室のドアを開け、私のスネアとペダル、スティックを二セット持ち、私は音楽室へ向かつた。

「良くん、もう準備始まっちゃうよ！」

「いい気になつて露店ばかり手伝うからそつなるんだよ。」

二人が私が走つてくるのを見ると、それぞれが口々に言った。私が音楽室の前に着いたとき、調度前のバンドが終わり、彼らが出てきた。

「温めておいたぜ！」

小倉が汗だくになりながら私達へ言つた。

「ありがとう。」

私は小倉に感謝の意を表すと、中に入つていった。音楽室の中は物凄い熱氣で、入つただけで汗が流れた。ドラムの方へ向かい、スネアとペダルをセットし、予備のステイックをバスドラの上に置いて、セットティングを開始した。タムをワンタムにして、フロアタム、ライド、ハイハット、クラッシュ、スプラッシュ、チャイナ、それぞれを自分の叩きやすい位置にセットし、全ての音を確認してから、私は準備室へ向かつた。

「良くんがいつもより気合が少なからず…もひとつ気合入れてくれ

「おいおい、何かハリがないな。」

「「ね～。」「

「中学生最後の文化祭ライブを楽しむつせー。」

「行きましゅう。」

「お、BGが変わったよ。もう少し行きます?」

「駄目です、許しませんー。覗として、後夜祭は私と一人つきで準備室に「まつちやんー」嘘ですー。嘘でですよねー。」

「ハハハ、そういう事にして、まつちやん。」

「ドリームだから仕方ないんだよ。」

「良くんはいつも最後ですねー。」

「ね、やつと来たー。」

ださい！」

「まつやさんが眞面目な」と喋つた。」

「いつも真面目です！」

「最近は発情期だつたからな～このHロ～！」

「ま、真美さんだつて！」

7

「『繪』」

7

私達は準備室のドアを開け、大歓声に包まれながらそれぞれの楽

器の元へ向かつた。真美がベースを背負いEの音を出し、増田さんがキーボードでEのコードを鳴らし、私がカウントを行い、曲がスタートした。

「え～次で最後の曲になります。でもその前に一つ告知を。私達、デモCDを作りました！わ～～～！ありがとうございます。それですね、三曲入っています！無料です！ライブ後に配布するんでもひとつ待つてね。真美も私も着替えたいから・・・・・凄い汗だくでちょっとね・・・・・と、言う事で取り敢えず余るの覚悟して100枚も刷っちゃいました！全部良の自腹です！だから良いんです（笑）良はそれくらいしないと駄目です！あ、話長くなっちゃいましたね。それじゃあ、最後の曲です。皆で楽しんでいきましょー！聴いて楽しんじゃえ！バディー！！！」



読んで頂きありがとうございました！

書いてて、めっちゃ最終回っぽくなりました。あ～終わっちゃうのかな～って。ところがどっこい！まだ続きます！まだ書いてない内容があります。そのためにもう少しだけお付き合いください。泣いて喜びます。

この、良達のバンドって実は名前考えていないんですよ。だから名前が出でこない訳で・・・良達の曲を考えようとしても・・・私キーボード弾けないので再現できません・・・普通の3ピースで考えればよかつたかな～

ということで、今回も読んでいただき誠にありがとうございます！次も頑張って書き上げたいです！

第九話の2です。本編の物語としてはもう九話目、投稿数で言えば合わせて十三話も投稿したんですね。我ながらよくここまで続けられたな、と。読んでくださっている人がいるつて思うとはりきっちゃいますね。特にここ最近は。

そんなこんなで中学三年生の生活も残り少なくなりました。（私じゃないですよ。）そんな彼らの物語を楽しく読んでいただけたらうらば嬉しい限りです。では、今回もよろしくお願ひします。

「時の流れは妙におかしなもので、血よりも濃いものを作ることがあるね。」

学校の屋上。空が夕暮れから段々と暗くなる中、グラウンドでは準備委員会の人達が急いでキャンプファイヤーの準備を行っていた。本来、今の時間はクラスの展示、露店、部の出し物の片付けを行なっている時間帯なのだが、

「たまにはさぼってもいいんじゃない?」

という真美の言葉を聞き、あらかた片付けの日処が着いた所で私は屋上に上がった。

「誰の歌だよ。」

隣に座っていた佐藤が訪ねてくる。

「B-Zの歌だよ。RUNって曲。僕のお気に入りの曲なんだ。」

「B-Zか、あんまり知らない。」

佐藤はあまり邦楽を聴かないのだろうか。それとも、結構古い曲なので私と同じ歳の子達は知らないのだろうか。シングル曲では無かつたし。

「でも、」

暗くなり始め、もう少しでキャンプファイヤーに火が付きそうな時に佐藤は言った。

「悪くねえ曲だな。まるでお前らの事じゃねえか。」

屋上の真ん中で亜里沙さんと話している一人を見て喋った。

「お前と亜里沙さんもな。」

「そうかもな。」

珍しく佐藤は同意した。

「Let's run, run for your life...  
・か。」

中学生最後の文化祭。それまでに様々な事があった。それこそ、血よりも濃いものを作るきっかけになったのかも知れない。同世代の人よりも長い年月を過ごし、経験していたからこそこのように出来たのかも知れない。特別なこの時期を一回味わう事が出来たからこのようになつたのかも知れない。一回目は今みたく上手く行かなかつた。大きな回り道をしながらもがき続けた。その経験が有つてもなお、私は回り道をしながら歩いてきた。

「面白いな、何事も解らない事ばかりだ。」

「解らないから、面倒くさい事ばかりだけどな。」

溜め息をつきながら、でもほほ笑みの顔で佐藤は答えた。佐藤が笑う顔を、私は亜里沙さんと一人つきりの時以外では初めて見たかもしぬれない。

そのように思つてると屋上の扉から小倉が現れた。それを見るや否や、佐藤はまたいつものように仮面に戻つた。素晴らしいまでのツンデレ具合である。

「良！つと、佐藤もいたか。ちょっと大変なんだよ！速く屋上か」扉の前で言い終える前に小倉の体は後ろからの衝撃で吹き飛ばされた。何事か、と皆が見守る中、小倉の体が地面に倒れると後ろから人影が見えた。

「お兄ちゃん！」

「加奈！？」

加奈が私のもとに駆け寄った。小倉を踏むのを厭わないまま、小倉が嬉しそうにしているのはおそらく私の見間違いなのだろう。

「ちょっと待って、今は在校生しかいないはずだけだ。」

「あの人だつて在校生じゃないでしょ！」

亞里沙さんを指指し、加奈が答える。よくよく考へると亞里沙さんは高校生だ。

「加奈ちゃん、良くん困つてるよ。」

亞里沙さんとの会話を一時中断し、増田さんが歩み寄る。増田さんが来た事に、顔を不機嫌にし、小さく、だが増田さんに聞こえるようになり、

「この泥棒猫が、」

と呟いた。

「え！えええ！？」

「解つてるんですからね！増田さんがお兄ちゃんにしている事を！」

その体で何をしているか！普段は大人しくしているくせに・・・・・・

・

あの台詞を現実で使う人がいるのを初めて見た。それも実の妹が。増田さんが狼狽し始め、その間も加奈が言及している。

「ま～ま～、加奈ちゃんもまっちゃんも落ち着いて、ね？」

「ま～真美さんは貪乳だからどうしようもないですもんね。」

「誰が貪乳だ！……私は普通だ！……！」

落ち着かせようと来たはずの真美が、加奈の言葉一つで逆の立場になつた。そしていつものように三人での言い争いが始まる。この光景を何度見た事か。思わず、額に手を当てて溜め息をついた。その様子を見た佐藤が、

「相変わらずだな。他のやつが見たら羨ましがる状況だ。」

呆れながら言つ。

「匠もそのほうがいいんだ？」

私が言うよりも速く、いつの間にか近くに来ていた亞里沙さんが答えた。

「い、いや……別に、俺は……」

「そうだよね。私は真美ちゃんや増田ちゃんやその子と違つて美人

じゃないもんね。私の他に美人な人が匠の声かけてたら匠はそっちに行っちゃうよね？・・・

笑顔で言つたが、その笑顔が怖い。女性の笑顔で問い合わせる様子はどうしてこんなにも怖いのだろうか？佐藤はあたふたし、必死に誤解を説いている。佐藤の説明を言葉では信じていよいよ反論するが、顔は嬉しそうにしている亜里沙さん。今の佐藤ならそれくらい読み取れるだろう。私は小倉の元に歩み寄り、「面倒くさい状況だから準備室に行こうよ。」

と言つた。

「全ての元凶はお前だけどな。」

溜め息をつきながら立ち上がり、小倉は言つた。間違いでは無い。「ホント、羨ましいぜ。一番佐藤が幸せそうだけどな。あんな中二病野郎が美人の先輩と付き合えるのに俺はよ～・・・・・・

肩を落としながら、小倉は歩いた。私も小倉について行き、階段を降りながら、

「いつか現れるさ・・・・・多分。」

私が言うと嫌味にしか聞こえないのだろうけど、私だって常にこのような立場では無かつた。それでもいつか、誰かと相思相愛になれる時が来る・・・・・多分。

「お前、来週の水曜日、午後から開いてるか？学校か？」

部屋で勉強をしていた所、携帯電話に師匠から電話が入った。

「普通に学校なんんですけど・・・・・何かあるんですか？」

当たり前だが、休日でも無い平日の午後は学校にいる時間帯である。

「いやな、前に一回俺の付き添いでレコードイング見学した事あつたろ？その時のプロデューサーが、お前に一曲叩いてもらいたいって言つてるんだけどどうする？」

師匠の話が本当なら私に仕事の依頼がある、と言う事だ。私の今仕事は学業だ。しかし、これはまたとないチャンスだ。これを機会に、私は今以上に学ぶ事が出来るのかも知れない。そう思つと私は、「やります。やらせていただきます。」

直ぐに返事をした。

「そうか、それじゃあ明日伝えておくから。んでその後曲の楽譜を渡すからな。ちょっと練習しておけ。大丈夫だ。そんな難しい事やらねえよ、多分。」

「そうですか。ありがとうございます。でも何で僕に依頼が入ったんですかね？ 師匠何か言いました？」

私はそう言つと、師匠は少しうへんと考えた後、

「ま～、誰か若いのでいいのいいのか、って言われた時にお前の名前を言つたくらいかな～。んで、実際のお前をあの時見て、まだ若い事に驚いたんだろう。んで試してみたくなつたと。そんな所じやね？」

それから、一言程話をし、私は電話を置いた。

そして、初めてのレコーディングの仕事の日になつた。

「あれ、良帰るの？」

午前中の授業が終わつた所で帰る支度をしていくと、真美が話しかけてきた。

「あれ？ 言わなかつたつけ？」

「真美さん、良くんは今日お仕事なんですよ。初めてレコードイングに関わるって言つてたじゃないですか。」

私が今日何があつたのか、と不思議そうな顔をしている真美に、呆れたように増田さんが言つ。

「…………あれ本当だつたんだ……良に先越された！  
…………」

私の言葉を冗談だと思つていたのだろう。真美が非常に悔しそうにしていた。元々真美はプロの演奏者を目指していたのだ。バンドで、という事と同時に元々の目標の方もしたかつたのだろう。

「全部師匠の力だよ。何の業界でも信頼が一番大事だからね。だから僕も重圧が大きいよ。」

私一人の力だと今の段階で仕事の話が来るはずもない。いかに師匠がこの業界で大きい人かと言う事が解る。

「あゝあの工口親父良がドラム録つてた時凄かつたもんね。普段と違つてオーラバリバリ出てたもん。」

「そういう事。じゃ、時間無いからこれで。」

私は真美と増田さんに挨拶をし、教室を後にした。

「おはようございます。」

約束の15分前にスタジオに入り、私はその場にいる全ての人に向け挨拶した。そして、中には入り、仕事の準備をした。仕事の手順は前に一度、師匠の仕事を見ていたために一通り頭に入っていた。約束の時間の15分前にスタジオ入りしたのは、私が新人なので、今日来る他のエンジニアを待たせる結果になってしまつてしまつた。今思い余裕を持つて来たのだが、予想以上に早く着いてしまつた。

「お、気合入つてるね～。ま、そりやそうか。」

スタッフの一人が私に話しかけた。

「はい。新人ですから。これくらい当たり前です！」

「元気がいいな！まだ中学生だつて？それで薰さんの信頼を受けるなんて相当だよね。皆尊してたんだよ？薰さんが初めて弟子をとつたつて！」

改めて、師匠の持つ力は凄いことを思い知らされる。そして、その信頼を地に落とす結果にならないようにしなければならない。

「それじゃあ、頑張ろうよ！力抜いてね！」

「今の所、もうちょい前ノリで頼む」

「解りました。」

やはり、プロの音響さんが求める事は細かく、そして予想以上に多くの事を求められる。

ただ、叩くなら楽譜を一回見るだけですぐ出来る。しかし、それだけではいけない。ただ叩くだけなら誰でも出来る。そして、たゞ上手く叩けるなら全てのスタジオミュージシャンは叩ける。そこから何が求められ、使いたいと思わせれる人物になるのか？それらを身に付けなければ仕事は来ないだろう。

「オッケーです。」

スタジオから出ると、ディレクターに呼ばれたので、ディレクターの元に向かう。

「おつかれ、いや、予想以上だつたよ。いくら薰くんの弟子とは言え私は君の演奏を聴いた事が無かつたからね。いや、その歳でこれだけのレベルを持つなんて素晴らしいな。」

「ありがとうございます。」

ディレクターの賛辞の言葉を素直に受け入れる。私は一応、求められた要求に答えられたのかも知れない。

「そこでだ。」

真剣な表情のまま、ディレクターは話を続けた。

「君が私の求めるレベルで終わらせたなら君はここで今日の仕事は終わりだ。だが、君は私の思う以上に答えてくれた。そこで、もう一曲あるのだが、叩いていいつてくれないか？」

そう言つと、ディレクターは私に右手を差し出した。  
「喜んでやらせて頂きます。」

私はその手を両手で取った。

「お前もこれではれてプロの//コージシャンだ。」

師匠は店員の出された料理に手を付けるのを一旦止め、私に言つた。私は師匠と師匠の奥さんの三人で料理屋に来ている。初めて給料を貰つた時、私は直ぐ様に師匠に何かしなければならないと思つた。それで私は、師匠と師匠の奥さんを家族で本当に特別な時にだけ使う料理屋に招いた。

「プロですか？」

「金を貰つたんだ。お前がドラムを叩き、商品が出来て流通ラインに乗る。そして誰かがそのCDを手にする。金が巡り回つてるんだ。お前がドラムを叩いた事で金が動く。立派な商売で、プロフェッショナルだよ。」

師匠の言つ事は仕事上の意味でプロと言つてゐる。自分の行う事でお金を貰える。それはもうプロだということだ、と。ここ日本においてプロとは技術が優れて、芸術面で成功している人、様々な仕事上での成功者、有名人を指している事が多い。

「お前の評価は凄く高かった。今回の曲は女子高生バンドのアニメの曲だそうだ。この曲が売れる事になるとお前は次からも呼ばれるだろう。新人だから単価も安いしな。んで、もしかしたら同じよう

なアニメやゲームの時に呼ばれるかも知れない。そうして仕事をこなしていく、信頼を勝ち得る事で次々と仕事が入るんだ。」

こういう事を一つずつ積み上げて師匠は今の立場になつたのだろう。

師匠は料理に手を付けるのを止めたまま、

「だが、お前の目指す世界はそこじゃないだろ？ 取り敢えず経験と知識を増やして、それを活かして行けばいい。」

私は話をし続けた。隣で奥さんが冷めると勿体無いから、と呟いているがそれを無視して喋っていた。私の事を思い、師匠の経験からアドバイスしてくれている。料理に手を付けないでだ。師匠の思いやりに、私は感謝しても仕切れなかつた。

「良くん、本当に今日はまじ馳走様。こんな美味しいお店、お高いんでしよう？」

「いえ、金額以上のモノを僕は師匠と奥さんに貰いましたから、せめてこれくらいさせて下さい。」

「嬉しいわ。若くてイケメンな子からお食事に連れていかれるのわ。」

「店を出ると直ぐに、奥さんから感謝の言葉を頂いた。

「ま～、ありがとうな。こういうのも悪くないな。」

「あなた、もしかして感激のあまり泣いてる？」

「うるせー。」

師匠が照れながら奥さんに言つた。師匠は物凄く情に熱い所もある。そんな師匠だからこそ、私は着いて来れたし、これからも着いて行きたい。単に、今の私がいるのは師匠のおかげだ。もちろん、他の人のおかげもある。

私は人との繋がりが自分を強く、たくましく成長させてくれる事を身に染みて実感した。

<Side Another>

「君はベースなんだね。重くないの？」

「だってカッコいいじゃん！四本しかないし！」

それが私と良の初めての会話だった。今からもう何年前になるんだ

る。十年以上前かな？私がベースを習いに行つてた音楽教室で会つた同じくらいの子。音楽教室で初めて出来た同じ年の子。

良がドラムを習つていると知ると、私は良と一緒に練習をする事が多くなつた。家で一人で弾いててもつまらなくは無いんだけど、人と一緒に演奏するのは一人よりも全然楽しい。

そのうち、課題の曲から私がしたい曲、良がやりたい曲、曲じやなくとも適当にセッション。凄く乐しかつた。私は良と一緒にベースを弾いている時が何より乐しくてしようがなかつた。学校の友達と話したり、買い物に出掛けるのももちろん樂しいけど比較にはならなかつた。

それから月日が流れるうちに、私は良を意識し始めた。良は学校で友達が格好良いって言つ男の子と比べても大差ないくらい格好良いし、周りの男の子達と違つて落ち着いていて、大人っぽかつた。そんな良に少しずつ、友達つて感覚から好きな人つて感覚になつていつた。でも言い出せない。言つたらこれまでの関係が崩れるつて思つちやうと動けなかつた。

良の通つている小学校は物凄く頭の良い小学校だ。そして中学もそのまま上に上がつちやう。今は良と一緒にいれるけど、もし、もしかしたら会えない時間が増えて、そのうち会えなくなつちやうつて思つたら凄く嫌だつた。

「同じ中学校に通えば良いんじやない？」

友達に相談した時にそう答えが返つてきた。そうだ、そんな簡単な事で一緒にいれるんだ。でも今から勉強して入るのは物凄く厳しい。多分音楽教室も、良と会う事も我慢しなきゃいけない。でもそれを乗り越えたら毎日良と会えるんだ、つて思つたら寂しかつたけど頑張れた。

試験が終わつて、合格発表があり、私が合格した時は泣いて喜んだ。お母さんもお父さんも喜んでくれた。

次の日、久しぶりにスタジオに行つた時、外に良がいた。私は嬉しくなつて近寄つて驚かしたりした。それで、何でここにいるの？

つて聞いたらバンド練習だつて良は答えた。同じ歳の子達同士らしい。多分、その子達は良の凄さを解つていない。そして、良の実力を發揮せることが出来ない、そう思つたらそいつらに良の凄さを見せてやるーつて気持ちになつた。良の手を取り、私はスタジオに向かつた。中に入つたら、私が良の手を取つている事に怒つてゐる子がいた。その子は凄く可愛いし、反応から良の事が好きなんだつて一発で解つた。でも良と一緒にいるのは私が一番長い、他の子に負けるはずが無いつて自分に言い聞かせた。

まさかその子と親友と言えるほど仲良くなるなんてその時は思わなかつた。

「真美さん、良くんつて他に好きな子がいるから私達に振り向いてくれないのかな？」

中学に入学して、最初は余所余所しかつたまつちゃんと私も、あまりに良が反応してくれないから一人で話をした所、意氣投合をして仲良くなつた。まつちゃんが不安になる気持ちは解るけど、他の子を好きになるなんて事有り得ない。だつて、まつちゃんは凄く可愛いし、それに・・・・・大きい。私と比べ物にならないくらいに。一度触らせてもらつた時にその感触に私は夢中になつてしまつた。もう少しで危ない線を互いに超えそうになつちゃいそつだつたけど、踏み止まつた。同姓の私でさえこいつはやつのだ。異性ならどうなるかなんて考えなくても解る。

「真美さんも増田さんも、私には結局負けちゃうんで違う男の人で

も見つけたほうがいいですよ?」

ある意味一番やつかいなのは妹の加奈ちゃんだ。この子は良より、全てにおいて完璧だ。私も小学生に胸の大きさを負けるとは思わなかつた。そして何より美人過ぎる。アイドル? 女優? そんなもの霞んじやう。私もまつちゃんも一番気をつけてるのは加奈ちゃんだ。だって、未だに部屋が一緒なのは加奈ちゃんが駄々をこねたせいだつて言つし、良への事となると凄く怖くなる。あの日、私とまつちゃんがキスをした時は恐ろしかつた。そして、加奈ちゃんのキスは私達の誰より激しかつた。そのうち、行為が始まつちゃうのかもつて思つくりいに。

良が私とまつちゃんの事を異性としてちゃんと捉えてくれて、そして好きなんだつて事を知つた時は嬉しい反面、一人の女性も選べないのかよ、つて思つた。でも、私は良以外考えられない。ならば一番になるしかない! それであんな事言つたけど、まつちゃんの方が行動に関して一枚も一枚も上手だつた。

「それくらいしないと真美さんに勝てないもん。私が勝つてる部分つて胸の大きさしかないし、」

その大きさがだいぶ強いと思つんだけど。

「スタイルも顔も性格も真美さんの勝ちだもん。何でこんなにスタイル良いの？」

そう言つてまつちゃんはよく私の体を触る。それもいやらしい手つきで。最近のまつちゃんはうつぽい。まつちゃんの行動力は加奈ちゃん最も危惧しているらしい。

でも、まつちゃんならって思つ。まつちゃん以外に考えられないから。

まつちゃんは中学生活も終わりに向かっている。バンドも田舎道を決めだし、恋も頑張らなければならない。これまで以上に険しくなるけど、頑張つて行こうと思つ。

「真美さん、帰りにドーナツ食べに行こう。私がお金払うから」とまつぱに食べてこつぱにおおきくなつてね！」

「太れつてこと?」

今回も読んでいただきありがとうございました。

一応前回からの続き、真美の話しつて形で書きました。百合好き  
な私の中では真美はネコ、増田さんはタチだと思っています。どう  
みてもキモイです、本当にありがとうございました。

まあ、そんな感じで書いていましたけど、どうしたらもうと面  
白く書けるかなって考えています。彼らはインディーズでやつてか  
らメジャーに行くのか?それとも、インディーズを経てそれなりの  
結果を得たら自分たちでレベルを立ち上げて活動していくのか?  
そんなこんなでそこら辺ももう一度勉強して考えていくたいと思いま  
す。でもそれは中学生の間じや書けないって言う・・・・ま  
だまだ続くかも知れません。

それでは、今回も読んでいただき誠にありがとうございました!

はい、第十話です！記念すべき十話の内容がこれでいいのか解りませんが、日常系です。あと、1・5禁の堺つてどういうへん何ですかね？よく解らないのですが、もし「このSNSが1・5禁に当たるだろ！」って思ったのならぜひ連絡ください。直ぐ様警告の所に1・5禁のタグ付けます。では、今回も楽しんで読んで頂けたならば幸いです。では、宜しくお願いします！

## 中学生三年生？

中学生生活も残り一ヶ月となり、高校受験をする人は今の時期は何と言つても大切な時期だろう。脇目も振らずに受験勉強をし、模試の結果に一喜一憂する。判定が思い通りに行く人はこの結果に満足せず、合格を確実にするために勉強をする。自分が思う結果にならなかつた人は寝る時間を惜しんで勉強をする。

と、真面目な話をしたが、うちのクラスで高校受験のために勉強をする人なんて一人もいない。もしかしたら他のクラスにはちらほらいるかもしれないが。うちの中学校は付属の高校に望めば全ての人が進学できる。有名私立大学の付属中学、高等学校なので、わざわざ他の公立、私立を受けるために勉強するメリットは無いのだ。エスカレーター式に高校まで上がり、校内推薦を得て大学まで上がる、これがほとんどの生徒とその親が描くシナリオだ。私立大学の中ではトップクラスの学力を誇るだけに、これを理由に小学校から受験を受け入る人もいるし、中学高の受験を受ける人もいる。高校の方も受験を行つているのだが、難易度は私立受験の中でも最難度を誇りちょっとやそっとでは受かる事は出来ない。

そんな訳で、私達は最後の中学生生活を満喫しようと日々勉強、趣味に時間を費やしている。そんな矢先、

「良、一生の頼みがあるんだが。」

小倉は、今回で何回目になるか解らない一生の頼みを私に話そつとしていた。

「実はよ、俺つて彼女がないじゃん？んで、お前も彼女がない訳じゃん？一応。」

実は、とまるで彼女がない事が不思議だと言つてもらいたいのか、そう小倉は言う。私も、彼女はないにはいないが、真美と増田さん以外に付き合おうと思う女性は一人もない。

「それでさ、今週の土曜日に俺のツテで合コンをやる事に決まった

んだけど・・・・・相手方の条件がお前が来る事なんだよ。もちろん来るよな?」

小倉が来ない訳ないよな、と言いたげな顔をしていた。私は小倉にほほ笑んだ。それを見た小倉は私が引きつけると思ったのだろう、満面の笑みをしたのを見て、

「うん、無理。」

私はほほ笑みなを続けたまま答えた。私が了承したと思つたのか、一瞬だけ大喜びした小倉も、私の返事が断りだと知るや否や、焦つた表情になり、

「何でだよ?他校の女子と知りあうチャンスだぞ?あわよくばその田のうちには、なんて事も出来るんだぞ?」

と、言うのだが、

「真美と増田さんにバレたらなんて言えばいいの?そんなの無理だよ。」

もし、私が真美や増田さんに行つた事がばれたのならば・・・・。  
考えるだけで恐ろしい。加奈なんて何をしてかすか解つたもんじゃ  
ない。それに中学生で合コンって何をするんだ?酒が入るなんて事  
あり得ないだろ?し、最初からカラオケボックス、いや、カラオケ  
ルームなんても考えられない。

「ほんと頼むよ!最後の中学生生活に思い出を作りたいんだ!ホント  
頼む!この通り!」

小倉は私に頼みこむと同時にその場に土下座をした。地に頭をつけながら。だが、私もここで折れてしまえば・・・・。

「本当に頼む!」

・・・・・

「つて事で、今日は来てくれてありがとう！あ、まず自己紹介しようか？俺小倉、小倉小倉智之って言うんだ！宜しく…ギターやってバンドもしてよ！」

小倉が張り切つて幹事を務めている。合コンが初めてなのが多少緊張しているが、頑張っている所から、やや好印象を与えただろう…・・・・多分。

心配していた場所は、私の心配ビッグツーファーストフード店だった。この次にカラオケを計画しているらしい。ファーストフード店で合コンつて、と思ったが中学生同士で居酒屋に行ける訳も無く、仕方が無いのかもしれない。

テーブルをくつ付けて、四対四で向かい合つ。男の方の面子は私と小倉の他に、小倉の友人が一人。女子の方は近くの公立中学校の子達で、小倉のいとこがいるらしい。公立の中学生は今が一番大事な時期だろう！と小倉に言つた所、彼女達は推薦でもう進学が決まつているらしい。

「次お前だぞ？」

「え？あ・・・・・新堂良です。よろしく。そうですね・・・・・

・趣味はギターかな？」

考え事をしている間に他の人達は自己紹介が終わっていたわしく、私が最後だった。自己紹介を終えた後、全員から拍手を貰つたのだが・・・・・自己紹介の時つて拍手は起るものだつただろうか。最後に合コンを行つてからだいぶ時間が経つてゐるため、内容をほとんど忘れてしまつていた。

「良くんつてドラムじゃないの？私ライブ観に行つてるから解るよ

！」

「あ、ライブ来てくれるんだ。ありがとう。ドラムは専門だから

ね。ギターの方がいいかな～って？」

「じゃあギターも出来るんだ！凄い！あ、良くん握手して！」

女の子がそう言つたので、一応握手をしておいた。私が握手をしたらその子は大変喜び、他の女の子達も私に握手を求めてきた。もしかしてこの子達は毎回ライブに来てくれる人達なのか？小倉のための合コンなのに、私ばかりに人が集まつていては本末転倒だ。これは非常にまずい。

「お、小倉もね、バンド組んでるんだ。凄く良いバンドだから今度学校であるライブに来たら聴いてみてよ。こいつ、今もカツコイイけどギター持つたらもっとカツコイんだよ。」

女の子達に小倉の事を話した。その後、小倉に田で頑張れと合図を送つたら、嬉しそうに頷いた。だが、目の前の女の子だけ、

「智之のバンド観たけどよく解んなかつた～ただ暴れてるだけって感じ～」

と、興味を惹かなかつた。この子はもしかして、小倉のいっこなのだろうか？

「それより良くんつて普段どんな音楽聴いてるの？私は西野力ナとか、青山テルマとか聴いてるよ～」

・・・・・この話題が一番困る。何故なら今の邦楽はあまり聴かないからだ。バンド物はたまに聴いたりするのだが、J - POPはあまり聴かない。普通の人と音楽の話をしようにも解らないし、この年代の自称音楽好きは邦楽なんて糞だと黙つて有名所の洋楽の話しかしない。今この場で中学生の女子でも解るような人達は・・・・

・・・

「B' - Zが好きだよ。」

「私もB' - Z大好き！イチブトゼンブとか、DIVIDEとかめっちゃ好き！」

どうやらこの子はB' - Z好きらしい。それなら多少話が出来る。

「良いよね。僕はRUNのアルバムが好きなんだ。out of controlとか、THE GAMBLER、月光、そして何よ

りさよならなんかは言わせない！アルバムの中の曲全部が好きだけ

ど今言つた曲はその中でも特に好きなんだ。君はどう？

「え？・・・・・うん・・・・・」「めん、そこまで知らないん

だ・・・・・・

「あ・・・・・・」「めん。」

結局いつものように私一人が盛り上がってしまった。

「――「濡れたまんまでいつちやつて――」」「――」

あれから適当に会話をし、それぞれが話せるようになつた所で、私達はカラオケに向かつた。同じ歳の子達と初めてカラオケに行つたが、皆が歌つている曲は知つていてる訳も無く、そんな私が歌つても場が白けるだけなので歌わないで合いの手を叩いていた。

そんな事ばかりしていると気疲れを起こすので、それが悟られないために私は一度部屋を出てトイレで気合を入れに行つた。

「全然解らない・・・・・・」

そもそも、酒も入らないであそこまで盛り上がる事が凄い。そう言えばこの時期に酒を飲んだ時はいつも以上にハイテンションになつたのだが、これくらいのテンションからさらにテンションが上がつた状態になるのだろうか。

手を洗つた後、トイレを出たと同時に

「ねえ、つまんないの？」

横から声を掛けられた。そこには、壁を背にして、顔だけ私の方に向けている小倉のいとこであるう子がいた。

「い、いや・・・・・別にそんな事は・・・・・・

「私はつまんないな。」

彼女はそう言つと、

「ね、一緒に抜け出しちゃおうか？」

と、言い私の腕を取つた。非常にまずい。この状況を誰かにでも見られたりなんかしたあかつぎには

「良くん、その子だれ？」

私の背後から声がした。振り向いた先に・・・・・増田さんがいた。最悪な形で、私は今、一番会つてはまずい人物の一人と会つた。

「ねえ、誰その子？私みた事ないし、何で良くんの腕に捉まつてるの？」

「いや、ここの子は・・・その・・・増田さんが思ひような人じゃないよー本当だよー」

増田さんが一つの表情も無く喋る。この顔は初めて見た。とても怖い。体中から脂汗が噴き出したのが解つた。

「キーボードヴォーカルの増田さんですね？初めてまして。私は上村綾香って言います。今から私と良くんは一人つきりで別の場所に行くのでどうぞごめんくくりとカラオケをお楽しみ下さい。」

「ちょっと、何言つてるの！？僕まだ行くなんて一言も「どういう事？」いや、だから違うつて増田さん！」

この子の勝手な言葉でややこしくなつていぐ。

「さつきも言いましたよね？今から私は良くんと遊びに出かけるんです。邪魔しないでください！」

「あなたは何を言つてているのか解つてるの？」  
二人は睨みあいながら火花を散らしている。私がこの場で出来る事と言えば・・・・・

「ちょっと良、どこ行くの？まだ話は終わっていいよ？」

その場を離れようと、後ずさりと一歩後ろに踏み出した時、誰かに肩を掴まれながら言われた。恐る恐る顔を振り返ると、

「ま、真美？」

「正解。」

恐ろしい表情をしている真美がいた。と、言ひ事はもしかして、

「お兄ちゃん・・・・・・」

「・・・・・・・・」

会つてはいけない人全員が揃つていた。

「これはこれは、メンバー全員勢ぞろいですか。一人知らないですけど。でもすみませんが、私達はもうここを出るので。」

「お兄ちゃん？」

「だから違うんだって、誤解だ！僕は別にこの子と一人つきりでどこかに行くなんて事しない！信じてくれ！君も勝手な事をしないでくれ！」

このままずるずると長引くくらいなら一言ビシッと言つた方が良い。そう思い、私は三人に私を信じるように、そしてこの子の勝手な行いに渴を入れた。それを聞いて皆、少し落ち着いた様子になつた。さて、ここからだ。どう説明しようか考えていると、

「・・・・・つまりお兄ちゃんは別にこの女とどこかに行く予定は無かつた、それをこの女が勝手に決まつているかのような話を増田さんに喋つた。」  
「こういう事？」

加奈が静かに喋る。完璧すぎるほどの正解だ。だが、加奈の様子がおかしい。驚くほど冷静で、静かなのが・・・・・静かすぎる。だが、加奈がこの子を見つめる視線がとげとげしい・・・・・そして、静か・・・・・まあいい！

そう思うと同時に加奈は動きだした。私は、加奈の前に立ち、加奈が彼女の元へ向かうのを妨げた。

「落ち着け！」

私の制止を振り切り、私を抜き去り向かおうとしていたので、私は加奈の手を取り、実力行使で止める事にした。

「だから落ち着けつて！」

「離してお兄ちゃん。この女、絶対許せない。」

まずい、完全に頭に来ている。こうなった加奈は梃子でも動かない。

非常にまずい。彼女の身が。

「君！部屋に戻つてくれ！」

「でもまだ、」

「いいから戻れって言つてんだろ！早くしろー。」

私の怒氣を含んだ声を聞き、彼女はびくついた後、私達が使つていた部屋の元へ向かつた。私は取り敢えず騒ぎの元凶がさつた事に胸を撫で下ろしたが、

「良、ちょっと表に出な。」

「そうだね。説明しなきや納得しないよね。」

真美の言葉に私は賛同し、三人を連れてカラオケの外に出た。

「そういう事なんだ・・・・・・小倉も必死だつたんだね・・・・・・

・

私がここに来るまでの経緯を全て伝えた所、真美が憐れみながらそう言つた。増田さんも納得はしてくれたがそれよりも先ほどの加奈の行いに驚いているようで何も喋らなかつた。加奈が少し落ち着いてきように見えたので、

「加奈、落ち着いた？怒る理由も解るけど加奈がキレる事は無かつたんじゃない？」

と言つた。そしたら、

「お兄ちゃんの話からするとあの女。絶対に増田さんの事を見ぐびつてたんだと思う。そう思つたら頭の中が真っ白になつて・・・・・・そうじゃなきゃあそこまでならないよ。」

加奈は増田さんが低く見られた事に腹を立てたのだろう。それこそ腹わたが煮えくり返る程に。たまに言い争つたりもするが、基本的に加奈は増田さんと真美の事は気に入つてゐる。増田さんの事はまるでお姉ちゃんが出来たみたい、と喜んでいたのだ。増田さんは加奈があそこまで怒つた理由を知ると加奈を抱きしめ、

「ありがとう加奈ちゃん。私も加奈ちゃんの事大好き……それにしても！」

「そして真美さんはお嫁さんだね。」

と加奈に言つた。

「ありがとう。私も真美さんは私のお嫁さん……それにしても！」

「そ、そうだね。」

「そうですね。」

加奈と増田さんの友情を美しく見ていたら、三人が一斉にこちらを向いてきたので、その迫力に私は後ずさつた。

「私達に黙つて合コンに行つたのは許せないよね？」

「そうだね。これは詫びが必要じやないのかな？」

「そうですね。そうしなければ腹の虫がおさまりません！」

三人は私に目を吊り上げながら言つた。

「で、でも、言つたら小倉が「あ～あ、小倉のせいにするんだ？ そ

うなんだ～。」・・・解つたよ。」

「「「やつたー！ー！」」「

私が渋々了承すると、三人はにんまりとした顔をし、ハイタッチをした。その後加奈が、

「この近くに美味しいケーキ屋さんがあるんですよ？ お値段は少ししますけど、お兄ちゃん、最近仕事があつてお金持つてるはずですからお土産も買ってくれますよー！」

「お、いいね～ありがとうね良ー！」

「御馳走になります！」

いつの時代も女性には敵わない。そしてこの三人は私が今まで会つた中で一番強い女性だ。この歳でこつなら成長して行つた事を考えると・・・・・

「どういたしまして・・・・・」

世の中考えない方が幸せな事もあるのかも知れない。特に女性関係は、私はそう思わざるを得なかつた。

「それにして何で真美がお嫁さんなの?」

「「可愛いから……」」

「「つまみつけられりが……」」

「今日は何の予定だつたんですかね？」

「さあ、仕事じゃないの？」

「それは無いですよ。私、お兄ちゃんの仕事の用事なら把握してますから！机の一段目の引き出しに手帳入れてあるんで毎日チェックするんですよ！」

一人の少女の言う事に二人の少女は苦笑いをする。休日の正午、三人の少女は人気のあるイタリアンレストランで昼食を取っていた。休日、昼間、人気店、三つの要素が重なり店の中は大勢の客で賑わっていた。

「でも本当に加奈ちゃんの紹介してくれるお店は美味しいですね。こんなに美味しいパスタ食べた事ありません。」

「増田さんはイタリアンより和食派ですもんね。着物でお茶を立てる姿は想像出来ますもん。真美さんは・・・・アメリカンって感じ・・・・」

「ガサツだつて言いたいのか！」

真美と呼ばれた少女が青筋を立てているのを二人の少女が口元を押さえ上品に笑う。たつたそれだけの行為で近くにいた客は三人の姿を凝視してしまう。それは無理の無い話である。三人の少女は一人一人がテレビに出てもおかしくない程の容貌を持っていた。それぞれ違うタイプの美少女に、客は料理に手を付ける事を忘れ、ただ彼女たちを見つめていた。

「でも、それなら本当にどこに行つたんだろ？今日はせっかく皆何もなかつたのにさ。」

飲んでいたコーヒーをテーブルに置き、真美は言った。真美の言葉に他の二人も手に持つていたカップを置いて、

「何があるんですよ。そんな毎日私達と一緒にいる、つて訳にも行かないじゃないですか。」

「でも私はお兄ちゃんといつでも一緒にいたい！…………そういえばですけど、この前お兄ちゃんがお風呂に入ってる時、間違つた振りして一緒に入っちゃった。」

加奈の言葉に、二人は言葉をなくした。加奈の表情はしたり顔で、勝ち誇つていいようだつた。

「ちょっと佳奈ちゃん！なんて羨ま……じゃなくて駄目ですよ！加奈ちゃんと良くんは兄妹なんですよ！」

「そうだよ！そんな・・・そんなの駄目だよ…」

慌てているように見える二人には明確な違いが見えた。増田はまだ余裕があるような感じだが、真美はどこか余裕が無い。それどころか、浴場という何も身につけない状況での事を考えてか、顔を真っ赤にしていた。その表情を加奈は逃さなかつた。

「真美さんもしかして、いやらしいこと想像してません？」  
「な・・・な、！」

加奈に詰め寄られた刹那、真美の顔は先程よりも赤くなつた。まるでゆでダコのようだ。

「加奈ちゃん、真美さんはいつも話弱いんですねからいじめちゃ駄目ですよ。」

「だつて、真美さんつてこいつ話になるとすぐに赤くなつて可愛いんですもん。私、食べちゃいたくなりますよ・・・・・・」

加奈は言い終える前に真美の顎を取り、顎したを撫でると、その手を段々と下に降ろしていった。その手つきはいやらしく、もう少しで襟の中に手が入りそうな所で手を離し、

「ほり、真美さんのこの表情。凄く刺激的じゃないですか？」  
真美の顔は真っ赤になり、目がトロンとしていた。

「ええ、とても。あまりの可愛さに嫉妬しますよ。」

顔を真っ赤にしたまま下を向き、

「一人とも意地悪だよ・・・・・・」

そう小さく呟いた。

「何か、真美さんって洋楽ばかりですね。」

「そういうのばかり聴いてきたからね。友達と話合わすために小学校の頃はいろいろ聞いたけど、最近は特にそういうのも無いしね。」

手にしたマイクをテーブルに置き、真美は次に歌う曲を探すため、リモコンで曲を探している時、

「真美さん、これ一緒に歌いましょう!」

「何?」

加奈が指さした曲はアイドルの可愛らしい曲だつた。

「ダメダメー私みたいながむつなやつより、真美みたいな方が似合つてるよ。」

「だ〜か〜ら〜、真美さんは今までも十分可愛いですって。そんな所をお兄ちゃんに見せないから私どろか、増田さんにも負けそつなんですよ?」

加奈は増田を指差しそう言つた。それを聞いた増田は

「加奈ちゃんの自信は凄いですね・・・・・・」

と微笑みながら呟いた。

「恥ずかしいよ〜それに、良だつていきなり私のそんな所見たら笑っちゃうよ。」

「ギャップですよギャップ。同姓の私でもきぢやいますもん。お兄ちゃんなら完璧に口口つと、そしてこんな風(に)、」

右手を真美の背中に回し、体を引き寄せ、もつ少しで唇が触れ合つくらいの距離に顔を近づけ、

「好きだよ、真美。つてなりますよ、ね、増田さん?」

顔を離し、増田の方を見ると、顔が少し不機嫌になつていた。

「加奈ちゃん。真美さんは加奈ちゃんのおもぢやじゃないんですよ

！」

少しやりすぎたかな、と加奈は思い真美に謝ろうと真美を見ると顔が今までとは比較にならないくらい耳まで真っ赤にしていた。そして、

「ちょっと・・・・・・ドキッとしたけど全然気にして無いよ！ね、  
加奈ちゃん！」

と真っ赤なまま手で大丈夫と合図した。それを見た加奈は真美に抱きつき、

「もう真美さん私のお嫁さんにする~~~~~！こんな可愛い人見た  
こと無いですよ～！」

体を触りながらやう言つた。

「ちよ、加奈ちゃん！私よりまつちゃんのほづが胸も大きいし抱き  
付き合いが、あつ！」

「大きさじやなくて感度ですか？大事なのは、」

耳元で声を出し、右手で真美の胸をまさぐつた。それにたえきれなくなりりそうな真美は、

「ちょ、た、たすけて！まつちゃん！！」

と、増田に助けを求めるのだが、

「加奈ちゃんダメ！真美さんは私のものなんだから～。」

と言つと、増田も加わり一人に骨抜きにされた。

「「めん！ちょっとお手洗い！」

真美は顔が真っ赤のまま、少し息を荒くして、脱兎の如く部屋を出て行つた。

「・・・・・・ちょっと悪ふざけが過ぎちゃったかな？」

「かもしれませんけど・・・・・・私は少し本気でした！」

加奈が舌を出し答える。その様子に真美は溜め息を吐き、

「加奈ちゃんって良くんが好きじゃないの？」

と、言つた。それに対して加奈は、

「大好きですよ！お兄ちゃんが旦那で、真美さんがお嫁さん、増田さんは私のお姉ちゃん！これが私の理想。」

そう答えた。それに対して軽くほほ笑み、

「私は加奈ちゃんが妹で、私が奥さんならいいな。真美さんは絶対にお嫁さん！これは決まりだね！」

二人は互いに笑いながら言い合つた。

「ずっと一緒にいれば良いね。」

「そうですね。皆で一緒にいたいです。」

ソファーに背をもたれ、少し上気味を見て二人は言った。

「あ、真美さんの様子見てきますね。待っててください！」

増田は部屋を駆け足で出て行つた。

## 中学生三年生？（後書き）

読んで頂きありがとうございます！

取り敢えず百合厨な私は今回のアナザーを書いている時が一番力を入れたりして・・・・。

んで、百合コンですが、慣れないと最初はお酒の力を使わなければ何も出来なかつた事を思い出します。最近は中学生でもやつてるとかなんちやらで百合コンの話を書いてみました。このリア充が！私が

中学生の時は皆で集まる～くらいしかやつた事が無いな・・・

それで、B・Zの下りは本当にあつた話です。女の子とチャットしててB・Zが好きって話になつて・・・まさにこの下りでした。

相手のごめん知らないが最も印象深かつたので入れてみました。

それでは、今回も読んでいただき誠にありがとうございました！

次は明日の朝までに書きたいです！

第十一話の？です。前回、朝までには・・・と思いましたが予想以上に書けなくて、この時間になりました。すみません・・・有限実行出来ないつてきついですね。

と、言つことで第十一話の？です！今回も皆さんに読んで頂けたならざま幸いです。それではよろしくお願ひします。

「お兄ちゃん、バレンタインチョコ貰つたらその場で叩き割るんだよ? 解つた?」

「心配しなくても貰えないよ。」

加奈は私が沢山バレンタインチョコを貰つてくると勘違いしているが、中学に入つてから真美と増田さん以外の女性から貰つた事など一度も無い。去年、一昨年と二人から貰つたチョコを嬉しそうに加奈に取られたので、今回は学校で食べようと思つ。

「良、俺今年はチョコ貰えると思うんだ。」

「どこにそんな根拠があるのか解らないが、小倉が胸を張りながら言った。

「そう言って毎年貰えてないけど・・・君の最大の問題点はその自信過剰な所だと思うよ。」

別に小倉はルックスが決して悪い訳じゃない。むしろカッコいい方だ。それこそ小学生の頃はそれなりに女性に人気があった。それならば何処で道が別れたか? 女心は解らないが、どこかで見切りをつけられたのだと思う。

バレンタイン。男として生まれたなら嫌でも意識をせざるを得ない日だ。沢山貰える人も、全く貰えない人も。私だって昔はバレンタインなんて都市伝説だと思っていた時期があつた。だが、友人が隠れてチョコを貰つているのを目撃した時、バレンタインという日は都市伝説では無い、という事を知つた。

「あ、良。チョコなんだけどさ。今年無しで良い?」

「え、何で?」

真美が私の傍らに来るや否やそう言つた。

「いや～ごめんね！楽しみにしてたでしょ？」

真美は、手で「ごめん」と形作りながら言つた。今年は食べれるのを楽しみにしていただけにすこく残念だ。だが、

「そりや残念だけど、増田さんがくれるかもしれないから何とか「良くん！」噂をしたら何とやらだね。」

柄にもなく、チョコが貰えると思うと胸が躍る気持ちになった。増田さんの手作りチョコを貰えて、食べる事が出来るのだ！さあ、私にチョコを

「「めんね、私も今年あげれないんだ。」

恵んではくれなかつた。悲しくなんか無いもん！だから小倉は私にお前の気持ちは解るよ、と言ひ田で見ないで欲しい。

「さて、今年はお前が俺ら側についた訳だが、手放しに喜べないね。可愛い妹から貰えるんだろ？」「

確かに加奈からは貰えると思う。ほぼ十割の確率で。

「この周りの人間を見てみる。お前が貰えなかつた事に最大限の喜びを感じている奴らだ。何故だか解るか？解るまい、学校の可愛い子ランギング一位、二位の女の子一人から常に好意の目を向けられ、毎年チョコを貰つていた良には、この俺らの体を通して出る喜びが

！」

お前はカミユカ、と突つ込みたくなる台詞だが、黙つて聞く事にしておいた。

「お前に解るか？俺たちはな・・・バレンタインなんて都市伝説だと思つてたんだよ・・・・・・」の時代に、憧れの先輩のために、・・・・・なんて三次元の世界で有り得る訳が無いと、そんなもの二次元しか有り得ないと・・・・・それをお前は・・・・・毎年毎年見せつけるかのように貰いやがつて・・・・・俺らにそんな厳しい現実を見せつけて樂しいか！？貴様は俺らが苦しむ姿を見

て悦に浸る肩やろつか？」

周りの人間が涙を浮かべながら拍手をしている所悪いが、

「お前だつてチヨコ貢つた事あるだろ。小学生の時。」

私の言葉をきっかけに、それまで小倉の言葉に賛同をし、多大なる拍手を涙を浮かべながらしていた全ての人が小倉を囲み、殴り始めた。

「ま、取り敢えずうちのクラスでチヨコ貢えそな人つてあんまりいないよな。女の子は女の子同士でチヨコ交換する日としか認識しないしな。」

大勢の人を裏切り殴られた後なのに、小倉は何事も無かつたかのように話し始めた。

「・・・・・彼女がいる奴は放課後とかに一人つきりで貢えると思つけど?」

「あーあー聞こえない聞こえない。あーあーあーあー。」

今日ほど小倉が面倒くさいと思った日は無いほど、面倒くさい。

「佐藤もあの先輩から貢つんだろうな・・・・・ほんとに、あの

中二病野郎が・・・・・」

何かと小倉は佐藤の事を中二病野郎と言つ。確かに一時期はなにかけていた時期があつたが、今は中二病と言う程中二病では無いと思うのだが。

「あいつどうせ屋上にいるんだろう? 独り寂しく黄昏てている所をからかおうぜ。」

「多分殴られるよ。」

「俺の方が強いし! 地元で負けなしだし!」

屋上に向かつて走りだした小倉を私は痛く感じた。むしろ、小倉のほうが危なくなきてているんじゃないだろうか。

小倉が佐藤の邪魔をするとなると、後々面倒くさい事が高確率で起きる。そう考えたら本当に煩わしいのだが、私も屋上に行き、小

倉を止めるしか選択肢は無かつた。急いで階段を駆け上がり、小倉の後を追つて屋上に入つたのだが、誰もいない。この寒い時期にわざわざ好き好んで外に出るような人はいるわけもないのだが。小倉も佐藤がいないと思ったのだろう。既に屋上を後にしたのかも知れない。しかし、佐藤は屋上の普通の人は知らない場所にいる。そこに行くと、佐藤は毛布をかけて寝ていた。

「風邪ひくよ。」

「ん？・・・・・あ～お前か。」

私が声をかけると直ぐに目を開け、佐藤が起き上がった。

「何しに来た？」

「さつき小倉来なかつた？」

佐藤は少し考えてから、何かを思い出すと、

「そもそも、お前に声をかけられて起きたから解るわけがねえ。」

そう答えて、また寝始めた。この寒い中毛布だけで寝れる神経が羨ましく感じる。仕方が無いので、屋上から出でていこうとした調度その時、屋上の扉が開き一人の女子が入ってきた。彼女は私と佐藤がいる場所に向かって一直線に歩いてきた。他には眼を向けること無く。佐藤に用事があるのだと思い、私は奥の方に隠れた。彼女は佐藤を見つけたが、寝ている事を知ると少し落胆した。だが、彼女の取つた行動は、

「！！！！！」

声をかけて起こす、もしくは諦めて帰る等ではなく、一緒に布団の中に入るという行動だった。大胆で私にとつては面白い行動に、佐藤のリアクションを見るまでは帰る訳にはいかない、そう思いこの状況を見届ける事にした。

暫くして、佐藤が亜里沙さんと勘違いしたのだろう、彼女を抱き寄せた。この場に亜里沙さんがいたのならば修羅場を見る事になるのだが、運が良い事にいない。やがて、亜里沙さんとは違う体付に違和感を感じたのか、佐藤は目を開けるのだが、

「・・・・・・」

自分が抱き締めた相手が亜里沙さんでは無い、と解るとそつと辺りを見回し、誰もいない事を確認し、その手を体から離した。そして、

「誰？」

と、最もな事を聞いた。佐藤の問いに答える前に彼女は顔を真っ赤にし、布団から急いで抜け出し、

「先輩！ チョコ受け取つてください！」

と言つと、佐藤にチョコを強引に手渡し走り去つた。嵐のように過ぎ去つて行つた出来事に、佐藤はただ呆然としているだけだった。

「見ちゃつた」。

そんな佐藤に静かに近寄り、私は一言声をかけた。

「まだいたのか？」

大きな溜め息を付き、佐藤は私を見て言つた。そして、

「解つてゐるとは思つが俺は、」

「うん、大丈夫だよ。亜里沙さんには佐藤がちゃんと説明したらいよ。でも羨ましいな。僕は今年は誰からも貰えないから。」と、佐藤の言葉に答えた。

「は？ あの一人から貰えるだろ？」

「今年はくれないんだつてさ。だから無いよ。」

私が貰えない事を知ると、

「バチが当たつたな。」

と佐藤は言つた。

「何、今年は一つも貰えなかつたのか？ ハハ、ざまーみろ。いつもいつも順調に行くとは限らないんだよ。」

師匠が今年は真美と増田さんからチョコを貰えなかつた事を知るや否や手を叩き、笑いながら言つた。確かにここ最近は今の環境に甘

えすぎていたのかも知れないが、

「師匠だつていつも愚痴るじゃないですか。色々な人から貰えるつて。」

「あれはなう仕事柄つてやつだ。俺に気に入られたいんだろ、若い奴らは。」

初めて、バレンタインの日に師匠と会つたが、去年も一昨年もチョコ食べ過ぎちゃつてよーと自慢してくるので普通に貰つていたのかと思つていた。

「んで、ライブやデモCDの効果はそれなりにあつたんだろう?..どうするの?」

私が一番考えている事を聞かれた。今一番現実的にCDを出せるのはインディーズだ。声もかかつてゐる。だが話を聞いたら、インディーズでやるとなるとお金がかかる事が解つた。その分、CDの売上次第ではこちらの手元に入つてくる金額はメジャーよりもいいのだが、それだけである。要はCDの売上のみが収入になる。レーベル側がプロモーションや広告をしてはくれるらしいが、レコードイングに関してはあまり融通を付けてくれないらしい。相手側も仕事だ。自分たち側に金が入るかどうか解らない新人に全額投資してくれるほど優しくは無い。メジャーの方がCDの売上げによるアーティストの取り分け少ない。しかし、メジャーは音楽事務所所属となり毎月固定給を貰える。メディアへの露出も多く、その分の金も貰える。こっちのほうが商品としての捉え方は大きいし、会社そのものの大きさから出来るのだろう。逆に言えば売れなかつたら契約更新はされないシビアな所だらうが。

「そうなんですね。今は考へ中です。」

「簡単に考へるよ。お前らの最大の武器つて何だと思つ?..」

師匠が私に問つ。

「・・・・・若さですか?」

私の問いにニヤリと笑い、

「解つてるじやないか。若くて将来性のある奴らには誰でも喰いつ

く。取り敢えずバンドコンテストにでも出てみるよ、10代限定の。ある「コンテストなんか優勝したらメジャーと契約させるつて書いてるんだしょ。こういうのを最大限に使うのが良いんじゃないか?使える物は使う、これくらいの気持ちじゃなかつたら生き残れねえよ。だから俺を使ってもいいんだが・・・・まあそれは置いとくか。

「 師匠の言葉で10代限定のバンドコンテストを知った。しかもメジヤー契約だつて?もつと調べておくべきだつたのかも知れない。「確しか地区予選が5月にあるが・・・・まあお前らが出ても大丈夫か。楽器隊はアマチュアレベルじゃねえもんな。そんな奴らが若い奴らだけの大会で予選落ちするならそんな大会は糞だ。本戦はもうそいつらの個性だろうな。結局、音楽は技術がモノを言う訳じやないからな。ま、取り敢えずこういう話があるって事だけは頭の中に入れておけ。それとだな。」

言い終えると師匠は私の方を指差し、「ぞまあ!!!!!!」

と言つた。

師匠の家を後にし、独り寂しく家へ向かつた。今日はいつもよりも寂しい。わずかばかり誰かから貰えるかと期待したし、今年こそは真美や増田さんからのチョコを食べると期待もしていたのだが、食べれる所か貰えさえしなかつた。期待が大きいほど、そうならなかつた時の損失は大きい。肩を落としながら私は家に入った。

「 ただいま・・・・・・」

靴を脱ぎ、部屋へ向かおうとした所で私は玄関に置いてある靴の多さに気がついた。女物のサイズの靴なので、母の友人か、加奈の友人でも来ているのだろう。取り敢えず部屋に行き着替えようと思いつつと大きめの箱が置いてあつた。

「加奈のチョコかな？」

荷物を置き、箱を持ち上げると可愛らしい便箋が一枚下に置いてあった。それを後で読むことにしといて、私は箱を開けた。中に入っていたのはチョコレートケーキだった。

「今年は凄く手の込んだ物を作ったんだな。」

まるでケーキ屋さんの売り物と見間違える程であつたが、加奈は毎年手作りをくれる。今年は例年以上に手の込んだ物を作ってくれたのだろう。早速味わうために部屋を出てキッチンへ向かつた。台所で一口サイズに切り小皿に載せ、テーブルに着いてチョコレートケーキを口に入れた。

「美味しい・・・」

予想以上の美味しさに、一人前ほど切り、もう一度食べようとテーブルに向かおうとした時、キッチンに加奈が入ってきた。

「加奈、ありがとう。これ本当に美味しいよ。」

と、味と作ってくれた事に感謝の言葉を送つたのだが、少し苦笑いをし、

「お兄ちゃん、ケーキ入つてた箱の下に便箋置いてあつたでしょ？ 読んだよね？」

箱の下においてあつた便箋の話をした。私はそれを食べ終わってから読もうとしていたので、

「まだ読んでないよ。」

と答えた。私がそう言つと、加奈は溜め息を吐き、キッチンとダイニングを区切つている扉の前までくると、

「だからお兄ちゃんはこういうの後に読むつて言いましたよね・・・

・・・まあ、サプライズって意味では間違つてないんでしょうけど・  
・・・・・

ダイニングにいる誰かに向かつて話をする、考えられるのは私と接点があり、加奈とも親しい人・・・・・そんな女性は二人くらいしか考えられなかつた。

「まあ、サプライズとしてはこっちの方がサプライズか。」

「そうですね。最初からこうしたほうが良かつたかも知れないです。

「ダイニングの方から真美と増田さんが喋りながら現れた。もしかして、

「もしかして、このケーキって三人で作ったの？・・・・・」

三人の様子から、もしかするとと思い、聞いたところ、

「そうだよ。昨日、良が居ない時間に作ったんだ。」

「上手い具合に昨日は平日でしたからね。」

真美と増田さんが私の問いに答えた。とすると、

「秘密にしたかったから学校でああ言ったんだ・・・」

「最初からあるつて思うより、何も無いつて思つてた時に貰つたほうが嬉しいでしょ？そういう事！」

真美がしたり顔で答えた。その顔を見て、私は一人の疑惑にまんまとまつた事を知った。

「でも本当に美味しそうに食べてたので嬉しかつたです！」

「作つたかいがあつたよね。」

「・・・・・主に私が作つてたじゃないですか・・・・・」

三人はそれぞれ言いあつているが、私にはそれがとても親しそうに見えた。ドロドロしていたと思っていたのだが、本当は最も仲が良いのだろう。

「三人共、ありがとう。」

感謝の言葉を三人に言うと、三人は本当に嬉しそうに微笑んだ。

あのバレンタインの日から一週間後、私達は準備室で卒業ライブのための練習を行っていた。中学生の軽音楽部最後のライブのため

に力を入れようと他の部員は力を入れ込むのだが、今日の練習は皆、緊張感の欠片もなかつた。その証拠に所々ミスが目立つ。昔の私も見落としていたのだろうけど、この頃レコーディング等、お金を貰いドラムを叩く立場になつてきたので、いついう所に敏感になつてきたのかもしない。毎月一回はライブを行つてゐるのだから、特にライブに向けて・・・といつ風に気持ちが緩んできているのかも知れない。もし、そのような考えに皆なつてゐるのだとしたら・・・非常にまずい状況である。

「もうそろそろ終わる？ 私お腹空いて来ちゃつた。」

曲が終わると直ぐに真美が言つた。練習時間が終わる時間までまだ20分もあるというのに終わらうと言い出したのだ。

「やうですね。何回もやつてますから大丈夫ですよね。」

増田さんも真美の言葉に賛同した。

「ね、まつちゃんもこいつ言つてるし、今日は終わらうよ？ ね？」

「やうだ、皆でお茶でもしましょー！ 真美さんも少しお腹が空いているみたいですし。」

二人は私に早く練習を終わらせようと提案してきた。だが、私は先程の事もあり、

「いや、もう一回やるわ。所々ミスがある。まだ時間はあるんだしこれは確認しながら出来る。だからもう一回さつきの曲をやるわ。」  
と、二人に言つたのだが、

「ま～ま～、良いじゃん。次のライブまでには何とかなるよ。それに、気楽に行こうよ。ね？」

と、真美はおちやらけて言つて、

「ちょっと疲れましたしね。学校のライブですからそこまで神経質になる事も無いですよ！」

増田さんまでも、そのように言つた。一人の言葉に私は溜め息を吐き、頭を押された。もしかしたら、と思つていた事が的中してしまつたのである。

「へ、どうしたの？」

私のその様子に真美が首をかしげながら言った。

「真美や増田さんは卒業ライブのためにバンドをしているの？それに学校のライブだから神経質になる必要は無いって？驕るのもいい加減にしてよ。君達はそんな気持ちでライブをするの？学校の皆さんから手を抜いていいって考えているの？人を選んで演奏するの？そんなバンドがプロで活躍出来る訳、ましてやお金を貰つて演奏する立場になろうとしているのならば関わる全ての人失礼だ。」

私の怒気を含んだ声に二人は驚いていた。

「そんな気持ちでやるんだつたら・・・・・そんな気持ちでプロを目指す氣でいるんだつたら、僕はこのバンドを・・・・・危うくもう少しで辞めると言う所だった。少し頭に血が上りすぎていたのかも知れない。私は深呼吸をして、

「もう一回考えてみて。僕の言っている意味が解るまで練習は無しだ。別に僕が来ないだけで君たち一人でやる事に僕は文句を言わない。」

私は立ち上がり、スネアとペダルを片付け金物類のネジを緩め終えると、準備室から出て行った。

「師匠、あの時の僕の言葉つて間違つてたんでしょう？」

師匠と会う日では無かつたのだが、私は師匠に電話をし、何とか会えないかと頼んだ。師匠は一つ返事で会ってくれると言い、いつも師匠と行つて定食屋で落ち合ひ、今日の事を相談した。

「プロとして、ならお前の考えが正しいだろ。そんな事は言つまでも無い。客に合わせて手を抜いたり、力を入れるなんて事をしている奴がいたら、俺も同じ事を言つと思つぜ

。

私の問いに師匠は真剣に答える。

「ま～でも、真美ちゃんや増田ちゃんはまだまだそこら辺は考えて

いなかつたんだろう。普通、そういう気持ちはいろいろ経験して知つていくもんだからな。」

確かにこの考えを言い聞かせるには少し早かったのかもしれない。まだまだ私達のバンドはアマチュアなのだから。ただ、「本気でプロになるつて決めたのでそれくらいの気持ちを持つてては欲しかったんですよ。」

私の言葉を師匠は黙つて聞き、刺身を一枚口に入れ、食べ終えた後、「確かにそうではあるが、もうちょっと優しく言つても良かつたんじゃないかな? 真美ちゃんも増田ちゃんもそうとつまつたはずだぜ?」

そう言い、再び刺身を口に入れた。

「バンドは何回も衝突して衝突して良くなる。悪くもなる。最悪解散もする。誰かが不満を持ち、それをぶちまけるなんて必ずある。その必ずある事がたまたまあ前だつたつてだけだ。取り敢えず一人とは仲良くしろよ。こんな事で解散なんてしたらこっちが困る。ただ、こんな事で解散するのもバンドだがな。」  
刺身を全て食べ終え、私たちは店を後にした。

翌日、一人は私に話しかける事も、近寄る事も無かつた。私が遠くで見た一人は、いつものような元気は皆無で、見ている者が暗くなってしまうほどに落ち込んでいるように見えた。

今回も読んでいただきありがとうございました！  
だいぶ、楽しい感じから一転して～と、いう話になってしましました。バンドをしていくところ、いろいろな事ってよくあります。誰か一人でも本気ならば必ず起きるんじゃないでしょうか？皆が本気ならば衝突つて免れないと思うんですけど・・・  
と言つことで今回も読んでいただき誠にありがとうございました！

第十一話の？です。最近以前ほどにスラスラ書けなくなりました。夏バテなんですかね？皆さんも気をつけて下さい。体力が無いってのは全てにおいて支障をきたします。と言っても場所によっては台風で大変ですからそちらに重点を置いてください。暑いからって素麺ばかり食べると私みたいに素麺アレルギー？になるのでご注意を。それでは今回も皆さんに読んで頂けたならば幸いです。では宜しくお願いします！

やってしまった。

全てでは私の我儘から始まつた。

私がもつと練習に身を入れていたらあんな結果にならなかつたはず。まつちゃんんだつて私がああ言つたから乗つただけだと思つ。全ては私が悪いんだ。

良の言つている事は解る。むしろ解つていなければならぬのはずだ。特に私達の場合は・・・・・

「真美さん、そんなに自分を責めなくとも・・・・・私も、むしろ私の方が悪いよ・・・・・だから」

「いや、まつちゃんのせいじゃないよ・・・・・私が・・・・・

」  
そこから先は言葉が出なかつた。何を言おうと、結局私が悪いとか言えない気がしたから。中学生最後のライブで、良い思い出で終

わるはずだったのに・・・・・

家に帰つても沈んだ気分のままだった。良が最後の言葉を言う前に言おうとした事がもしかしたら、口には出さなかつたけど、バンドを抜けるつて言おうとしたんだ。そんな事を考えると気分が晴れるなんて事出来なかつた。そんな事になつたら私達は、私はこれからどうしたら良いのか解らない・・・・・

「真美、ご飯だけど・・・・・」

「・・・・・今日はいいや・・・・・」

とても食事が喉を通る気分では無かつた。どうしたらいいのか、良に謝らなければいけないんだけど、明日会つて謝らなければいけないって解つてるはずなのに、怖い。怖くて仕方が無い。嫌われたと思うと、良の前に立つた時に今までのように笑つてくれなかつたら私は立ち直れない氣がする。そう思つと怖くて仕方がなかつた。

翌日、私は良と出来るだけ顔を合わせないようになつた。どういう顔をして良いのか解らなかつたから。もし、良の私への態度が冷たかつたら、言葉が厳しかつたら嫌だつたから。バンドを辞めるつて思つてたら・・・・・そんな考へが頭を余切り、私は自分の過ちを詫びなければならないのに良から逃げた。逃げちゃいけないつて解つているはずなのに、私は良から逃げた。

「真美さんも、私と同じ気持だつたんですね・・・・・」  
放課後、誰もいない教室で私とまつちゃんは話しあつた。まつちゃんは良の怒りが自分に向けられたことが無かつたらしい。元々私と違い、活発な子じゃない。昨日の事が怖かつたのだろう。まつちゃん

んも怒られた理由は自分にあるのだから謝らなければいけない、つて気持ちになつたのだけれど、私よりも感覚的に怖くて、良と田も合わせられなかつたそうだ。

「まだ・・・・・怒つてるのかな？怒つてるよね・・・・・良と長くいたつもりだけど、全然良の事知らないや。こんな時どうじたらしいのか解らないよ。」

十年以上一緒にいたはずなのに、全然解らない。怖い、人の気持ちが解らない事が凄く怖い。好きな人だから余計に怖い。

「・・・・・なんだ、あの野郎はいないのか。」

誰かが教室に入ってきた。振り返ると、佐藤がドアの前にいた。「珍しいな、放課後は三人でいるのがデフォなのによ。」教室へ入るなり、佐藤はそう言った。

「ちょっとね・・・・・色々あつて・・・・・

「そうか、そりや悪かつた。」

「ねえ、佐藤君。」

まつちゃんは佐藤の方を向き、

「佐藤君は良くんと仲いいよね？その、良くんと喧嘩したりもしたんだよね？・・・・・じゃあ、今の良くんの気持ち、解るよね？」

「あ？」

それから私達は昨日の事を伝えた。佐藤は黙つて聞き、私達の話を全て聴き終えると、

「あいつは本気でバンドを辞めたいから言つたんじゃねえよ。続けたいから言つたんだよ。」

と、言つた。そしてそのまま言葉を続けた。

「確かに怖えかも知れない。あいつがお前らの事を嫌いになつたかもつてお前らが思う気持ちも解らなくもない。でもその怖さを乗り

・・まあ、あいつはなんだかんだで優しいからお前らがずっとそうしてたら歩み寄るかも知れない。でもよ、それでお前ら良いのか？わざわざ自分らの駄目な所を教えてくれた奴に対して、何も言わないで受け身になつてて・・・・・お前らあいつに甘え過ぎなんだよ。女だから仕方ないとか思つてんなよ。お前らが、そんな都合の良い時ばかり女だ、男だ、って言う奴らだったら今すぐあいつと縁を切れ。そんな奴はあいつといふ資格なんて無い。」

私達は佐藤の言葉に黙つて耳を傾けていた。そして、何も言い返せなかつた。

「取り敢えず、明日にでもあいつに会ってちゃんと面と向かって話をしろ。まずはそれからだ。そしたら、少しほ互このことを今以上に理解できるかもな。」

に理解できるかもな

佐藤は言い終えると、黙つて教室を出ようとした。私は佐藤に、

あはれの

物語はいかにを題

むじにまじめ

といひ物語は出て行った。

翌日、私とまつちゃんはいつもより早く学校に来た。そして、良に準備室で待っているつてメールを送った。私達の気持ちを伝えるために。

「来てくれるよね？」

まっちゃんが不安になりながら私に聞いた。

一 絶対来るよ。

私はまっちゃんにそう言つたが、私も不安な気持ちでいっぱいだつた。もし、昨日の事で私達を見限つたならば、そうゆうつと怖くて仕方が無かつた。

五分後、準備室のドアが開き、良が入ってきた。顔に険しさは無い、いつもの良だ。

「どうしたの？こんな朝早くに一人とも。」

声色もいつもの良だ。なのに、何でこんなに緊張するんだろう。まつちゃんを見ると私と同じように顔が緊張している。良も、私達が何も言わない事に首を傾げている。まつちゃんと顔を見合させて、「「「めんなさい……」」

私達は一緒に息を合わせて謝り、頭を下げた。

「だから、バンド辞めないで……お願いだから！」

頭を下げながら私は言った。隣でまつちゃんも同じ事を言っている。

「顔を上げて。」

良の言葉に私は顔を上げた。良の顔を見ると、わざとよりも険しい顔になっていた。

「一人は僕の言つた言葉の意味が解つたの？」

その言葉はあの時の言葉をきちんと理解したのか？といつ事と同じだった。解る、きちんと解つている。言られてから解つても遅いのだけれど、

「きちんと解つてるよ。むしろ言われる前に解らなきゃいけなかつた。良の言つ通り、プロとして演奏するのを目標にするんだつたらそうしなきゃいけないんだよね。それに私達の目標は高い所にある。なら一生懸命、切磋琢磨しなきゃいけないよね。気を抜くんだったらライブ前じゃなくても、毎日練習している訳じゃないんだからいつでも出来るよね……。気を抜く時は抜いて、きちんとする時はきちんとしないと……。」

氣を抜くときは抜く、きちんとやる時はやる。こうじうのをしつかりしていかなければいけないんだ。常に氣を張つていられる訳じゃない、人間の集中する時間というのはどんなに頑張つても長く続かない。だから練習の時は必ず休憩時間があるんだ。私がそう答え、良の方を見ると……。少し驚いた顔をしていた。

「あ……うん、そうだね。氣を抜くときは……ぬ、

抜かないとね！そりだね！」

少し慌てて良は言った。こいつの時はだいたい、予想外の事が起きたときだ。私は良の言葉を思い出してみる。確か良はライブの事と、気の持ちようを喋つてた。私はさつきその事と、気の抜き所を答えた。それは私があの時、練習時間中気を抜いてしまったからそうだと思ったんだけれどもしかして、

「良、気を抜く事についてはむしろ何にも考えてなかつた？」

私の問いに良はビクつと肩を上げて、その後、

「…………うん。むしろ気付かされたと言つべきなのかな。最近氣を張り詰めていたくちやいけない場面が多かつたから……。だからあの時君ら一人にきつく言つちやつたのは僕が氣を張り詰めすぎていた、上手く切り替えが出来ていなかつたせいなのかなって……。」

良は頭を搔きながら言った。つまり私達はお互いにお互いの言葉で気づかぬきやいけない事に気づいたと言う事？

「だから真美、ありがとう。僕も気付かされたよ。そして一人ともごめん、あんなに怒つて君たちを追い詰めるような言い方して。安心して、僕はバンドを辞めようなんて考えてすらないよ。むしろ続けたいから言つたんだ。」

「…………なんだ、良はバンドを辞めようなんて考えてなくて、続けたいから言つたんだ。私達の目標が趣味で終わらせる事じゃないからああ言つたんだ。

「これでおあいこだね。僕も君たちに言われて気が付いた、君たちも僕に言われて気が付いた。だから、頑張つて行こう！」

「そうだね…………うん、そ…………」

まっちゃんが泣いていた。嬉しくて。これからもバンドが出来る事が、良に嫌われていなくて嬉しくて泣いていた。私も気がついたら涙が出ていた。嬉しくて、嬉しくて。私達が泣いているのを見て良が慌てている。大丈夫、私達は悲しくて泣いてるんじゃない。嬉しくて泣いてるんだから。嬉しくて嬉しくて、嬉しすぎて涙が止まら

ないんだから。

あれから私達は思う存分泣いた。泣きすぎて目が腫れたから午前中は授業に出ないで部室にいた。良も一緒にいてくれて、三人で色々な事を話した。良の考えはインディーズでCDを出すのも良いけどお金がかかる、だからメジャー・デビューを狙おうと。良の話では五月にバンドコンテストがあり、レベルの目に付いたならばメジャー・デビューをする事が出来るみたい。ただそのためには地区予選を勝ち抜いて全国大会に行く事が最低条件みたい。取り敢えずの目標は私それにして全国大会に行くこと、そして出来る事ならば優勝する事、そう決めた。

昼休みになり、私とまつちゃんは佐藤がいるであろう場所に行つた。屋上のあの場所に。

卷之四

やつぱりここにいた。亜里沙さんが卒業するまで佐藤はここに一人でいつもいた。卒業してからも、一人でここにいるのを良から聞いた。

「なんだ、お前らか。」

佐藤は私達を見るとそんな事を言つた。まるで私達がいるのが嫌かのように。でも佐藤はツンデレだから、亞里沙さんと一緒に一人つきりじゃないと仮頂面らしい。

「本当にありがとう！！」

「ありがとうございました！」

「あ～・・・・・ その様子じゃ上手くいったみたいだな。」

佐藤は相変わらず仏頂面のまま答えた。でも不機嫌じやないんだろう。良なら解るかもしれないけど、私にはそこまで解らない。

「うん。お礼が言いたかったから。」

今回、私達があんなに早く、上手く行つたのは佐藤のおかげだ。  
「いひつて、気にするな。お前らが落ち込んでるのは亜里沙も嫌だろうからよ。」

「へ～、本当にお熱い事で。」

佐藤が亜里沙さんのため、つて言つたから少し茶化したら、  
「ば、馬鹿。いいからお前らのどっちかも早くあいつとくっつけよ。」

佐藤が慌てながら答えた。本当にこいつは亜里沙さんの事となると面白い。でも、一生懸命、亜里沙さんの事を考えて、愛していく、亜里沙さんも佐藤と同じことを思つていて。そんな一人はどんな力ツブルよりも輝いて見えた。だからそんな佐藤に、

「うん、亜里沙さんと幸せにな!」

「佐藤君、亜里沙さんと頑張ってください!」

私達は心から今後もずっと一人の幸せな日々が続いていく事を願つた。

卒業式も無事に終わり、一週間後に卒業ライブを行えば中学校の行事は全て終わりだ。結局、私の友達は全て上の高校に上がるだけだから涙を流す事は無いだろう、と考えていたのだが中学生生活の事を思い出したら自然と涙が出た。小学校の頃より思い出深く色んな事があった。喜怒哀楽を共にした友人達がいたからこそ、私は成長する事が出来た。四月から高校の方の校舎で学ぶ事になるのだからこの校舎とはお別れだ。

「はい、と言つ事で皆卒業おめでと……………かんぱ  
い…………！」

「…………かんぱ…………い…………！」

卒業式の後、クラス毎に打ち上げが開かれる。私達のクラスは近くの焼肉屋で人数分入る部屋を貸切り打ち上げを行つた。グラスにはジューースか烏龍茶を入れ、私達は乾杯を行つた。

「佐藤もちゃんと来たんだね。」

「お前が無理やり連れてきたんだる。」

佐藤はこういうクラスの打ち上げに参加した事のないので、私が無

理やり連れてきた。

「また同じクラスになれたらしいね。」

「そりや遠慮したいね。」

佐藤はそう言うと持っていたグラスに口をつけて、中に入っていた飲み物を飲んだ。私も烏龍茶を口にした。

「それにしてもよ」

佐藤はグラスをテーブルに置き、

「いろいろあつたな。特にお前とは」と、言った。

「そうだね、いろいろあつたな・・・・・」

私は佐藤との事を思い出した。最初の印象は決して良いものじゃなかつた。でも、佐藤が決して悪い奴じやないって事は知っていた。よく屋上で亜里沙さんと一人でいたのを見ていたから。それから色々な事があつて、なかなか佐藤といるのは楽しかった。

「ま、高校の方でも何かあつたら頼むわ。」

「あ、デレた。」

「デレてねえよ。」

私が笑うと、佐藤は不機嫌そうにこちらを見た。

二次会はカラオケだったので、私は二次会に出席しないで帰った。

そして、卒業ライブ当口を迎えた。

私達のバンドの出番は最後だ。それまで私は他のバンドの演奏を楽しんだ。色々なジャンル、色々なバンドを楽しみすぎたために、少し疲れてしまった。ただ一つだけ残念だったのは、メタルバンドがいなかつた事だ・・・・・

少し外の風に当たるため、私は屋上へ向かつた。

「この眺めもこれで最後なのかな？」

屋上からの景色を見て、私はそう呟いた。屋上から見るグラウンド、空、全てがこの三年間で見てきた景色だった。ベンチに座り友人と喋った事も、一人で屋上で悩んだ事も全て現実だ。様々な思い出がこの屋上にあつた。

それから暫く眺めたあと、私は携帯電話で時間を確認し、少し早いが準備室へ向かった。

準備室に入ると、私達の前のバンドが準備していた。

「一応さん、お疲れです。」

祝張にてね

軽く会話をし、私は体のストレッチを開始した。いつもより少し時間を受け、入念に行つた。そして、床に座り軽く目をつむりライブを待つた。

卷之二

卷之三

耳から大きな声が聞こえたので私は目を急いで開けた。「ほら、準備しないと。この曲終わったら私達の番だよ。」真美が私に言つた。どうやら私は寝てしまつていたらしい。

せつかく温めた体もまた冷えてしまった。私は再びストレッチを行つた。

私が寝ていた」とに呆れながら真美は言った。すると増田さんが、「でも真美さん、良くんが寝ている姿をずっと見てたじやないですか。」口一コしながら。

「ちよ、ちよ」と、それ良に言わないと、言つたじやない!」

真美を笑しながら茶化し、真美が狼狽した。しかしも見慣れた光景だ。増田さんが真美で遊ぶ、もしくは増田さんと加奈で真美をイジる。そんな光景を眺めていたら、前のバンドの演奏が終わつた。

バンドがはけるのを確認すると、私達は準備のために音楽室のステージへ向かい、それぞれの楽器の準備をした。楽器のセッティングが終わり、音を確認するために皆が音を出す。音楽室の中にはまだ準備の段階なのに観客が大勢いた。皆、今か今かと待ち遠しくしているように見える。それを見た私は真美と増田さんに目で客を見ろ、と合図をした。一人は前を向き、私の意図している事に気づくと、私の方を向いて頷き、PAの方に手で合図をした。幸いにも全ての観客が私達の方を見ている訳じゃなかつたので、「それ」はしやすかつた。その間も、私はドラムをたたき続けていた。PA側も意図している事に気づいたのか、遠くから私達の方へ向けて大きくOKサインを出した。

これで準備が整つた。私は簡単なドラムソロを行つた。その音に気付いたのか、観客はこちらを向いた。まだ外にいた人も後ろのドアから入つてくるのが見えた。外の人があつたのを確認し、真美がドラムに合わせてベースを弾く。私は、真美を目立たせるために後ノリ気味のツービートに変更し、真美はそれに合わせスラップを開始する。暫くして、私達のグループにノせて増田さんがキーボードを弾く。

そう、私達はセッションからライブを行う事に決めたのだ。それぞのソロコーナーの度に観客は声援を贈る。真美と増田さんのソロが終わり、一旦タメを作つてからハイハットでカウントをし曲を始めた。

「それじゃあ～～～最後の曲です！聞いてください・・・・・・  
バディ！」

最後の曲を終え、私達は準備室へと向かった。予定調和ではあるが、トリはアンコールを認められている。一応そのために楽器類は置いてきたのだが、

「これでアンコールが無かつたら・・・・・・・つてすぐー。  
真美がもし無かつたらと言い終える前に、私達の所まで、アンコールを求める声が聞こえてきた。

「よし、予定調和ではあるが期待に答えますか！」

「そうだね、最後の曲行きますか？」

「ですね、頑張りましょー！」

「じゃ、行きますか。」

「あ、アンコールありがとうございます。最後にもう一回やれるなんて嬉しいです。私達は卒業しますけど、高校に行つてもこのバンドは続きますのでよろしくお願ひします！真美さんの女の子ファンの方々、だから大丈夫ですよ！高校になつたら過激な格好になりますから。常に水着です！（笑）アハハ、睨まないで真美さん。それで、中学生の最後の曲つて何やればいいのかな、って皆で考えたら一つ良いの見つかったんです。でもその曲ギター必要だつたんでアレンジしちゃいました！だから今回はキーボードが二つあるんですよ。それじゃあ、皆で聴いてください。知っている人は歌つてくださいね！B-2のグローリー・デイズ！！！！！」

今回も読んでいただきありがとうございました！

取り敢えずこれで中学校編は終了です！次からは高校編に行くか大学編に行くかどうしましよう？まー、どうしますかね・・・。卒業式って、本当にどう過ごしたかで変わりますよね。私は中学校の時が一番色々あったので泣いてしました。その反面、高校ではなんとも泣けない卒業式でした。高校も楽しいこととかいっぱいあつたんですけど中学の方が思い出深かったんですかね。それと、B・Zのグローリーデイズは卒業ソングとしてはもってこいだと思いますよ～是非共聴いてみてください。

では今回も読んでいただき誠にありがとうございました！

**短編 ある日の良達（前書き）**

今回は短編です。甲子園を見てて思いついたので書いてみました。  
ビールを片手に甲子園を観たいのですが、そういう訳にもいかない  
んですね。残念です。

では、今回も皆さんのが楽しく読んで頂けるのならば幸いです。ど  
うぞ宜しくお願いします！

## 短編 ある日の良達

### 1、甲子園

夏は何と行つても甲子園である。球児達の今までの努力を出すために、その地域の他の球児達の思いを胸に甲子園で戦う。その姿を私は涙無しでは見られないのだ。

「頑張った・・・・・よく頑張った！」

試合終了のサイレンが響き、敗れた者はその場に崩れる者、人目をはばかりずに号泣する者、全力を出し切ったと笑顔でいる者、様々な人達がいる。勝負には必ず勝者と敗者がいる。皆頑張りましたでは終わらないのだ。だからこそ観るものを感じさせ、心に響くのだろう。

「頑張った・・・・・」

テレビ中継を見ながら拍手を行つ。目には涙を浮かべ、私は両チークに惜しみのない拍手を続ける。君たちがこれまで頑張った事は決して無駄ではない、必ずその思い出が今後の人生に活けるのだ、だから負けた方も下ばかり向いてないで前を向いて胸を張つて欲しい。

「お兄ちゃん、毎年甲子園見ては泣いているよね。」

後ろから加奈の声が聞こえるが関係無い。私は闘い抜いた選手達にもつと拍手を送らなければならないのだから。

「良くんがここまで泣いてる姿初めて見ました。」

「あ、まっちゃんは甲子園シーズンの良見た事無いんだつけ？良はね、試合を観る度に泣くんだよ。そして試合が終るとこうなるんだよ。まゝ私にはよく解らないけどね。」

何故、家に真美と増田さんがいるのか解らないが関係無い。勝利高

の校歌を聴いて……君達は負けた人達の気持ちを受け継ぐんだ。次も頑張つてくれ！そう思わずにはいられなかつた。

「ねえ、気持ちは解るけどさ。なんであんなに号泣するの？…さすがに不思議に思うよ。」

「そ・・・そうですよ良くん。教えてください。」

次の試合が始まる前に真美と増田さんが私に聞つてきた。加奈には一度説明したのだが、二人には説明していなかつたか。

「一人とも長くなるから辞めといたら？」

加奈は洗濯物をたたみながらそう言った。

「加奈！お前は・・・・・彼らを見て何も思わないのか！？彼らのそれまでの頑張り、そして涙を見て何も思わないのか！？！」

「思うところはあるけどお兄ちゃんほど肩入れは出来ないよ。」

加奈は私の熱弁を洗濯物をたたみながら聞くという冷めた事をしている。お兄ちゃんは加奈をそんな子に育てた覚えは無い！私は一人を見て、拳を握り、

「いいかい二人とも。彼らはね、この日のために小さい頃から切磋琢磨してきたんだ。小さい頃から甲子園を夢見て、いつか甲子園の舞台で野球をして、優勝するために！そんな事を思いながら日々を練習につぎ込むんだ！朝早くから夜遅くまで白球を追い続け、砂にまみれ、暑い日も、雨の日も練習をするんだ！そんな人達でも一握りしか甲子園の舞台に立てない、選ばれた人達しか立てないんだ！そんな夢半ばで倒れた人達の思いを背負つて彼らは甲子園に立つんだ！解る？この場にいるつて事はそれだけの思いを持つて立つてるんだよ！？」

思わず手に力を入れ、声も熱を帯びていく。

「そんな代表校達がわずか一高しか持つことを許されない優勝旗を目指して頑張るんだ。そのために流した汗を、日々を思うだけで胸が熱くなるじゃないか！？そんな彼らが戦う。でも勝者がいるって

「そうだろう！？」  
「事は必ず敗者がいるんだ、そこに必ずドラマは生まれる。事実は小説より奇なりつて事を僕らは毎年テレビで観る事が出来るんだ。そんな彼らの悔し涙、嬉し涙を見ると、その日々の思いが伝わっていくじゃないか！これを涙無しでは観ることなんて僕には出来ない！」

そうだろ！？

この思いを誰に届けたい！そう思うと、熱弁せずにいられなかつた。この思いは一人にも届いているはずだ、そう思い一人を見るのだが、

「そ、そうですね。」あ、うん。」「そ、そうだね。」

一人は私に同意するのだが、笑顔が引き攣る

加奈がをつ弦く。  
一人こま私の思一が云ひて

加奈がそう呟く「一人はは私のが思いたいながてのが、こんな素敵で純粹な気持ちをまだ感じ取れないのは何故だらうか・・・

和が済く核算した後にかのうに着いた答文には

なら解らないよね。じゃあ今から第三試合が始まるから随で観よう

「…………あ、ちょっと用事を聞いて出したがや。ね、井つ

ちやん?

「そ、そうですね！真美さん！」

二人はその場限りの嘘で何とか逃げようとしているが、そんな事はさせない。今はそんな気持ちでも試合後には泣き崩れて僕に試合を観る機会を与えてもらつた事を感謝するのだから。

「うちに来て！」

私は一人を強引にテレビの前に座らせた。まあ、もはやすぐ試合が始まる！

「加奈が洗濯物をたたみ終え、この場を去ろうとしていたので、「加奈、どこに行くんだい？ もう試合が始まるよ？」

「え？ 私は関係ないんじゃ……」

と、試合を観ない氣でいたので、

「僕は三人つて言つたよね？ 加奈も一緒に観るんだよ。」

と私は加奈に手招きをした。

「私は関係無いじやん！」

加奈がそう言つた時に、真美と増田さんは立ち上がり加奈の両腕にそれぞれつかまり、

「加奈ちゃん。一緒に観ようよ。」

「そうですよ。せつかく良くんが積極的に私達に言つてくれたんですよ？」

と言い、一人は加奈をテレビの前まで連れてきて、強引に座らせた。二人にも私の気持ちが伝わったのかも知れない。

その後、私は涙無しでは一試合を観ることが出来なかつた。やはり、夏は甲子園を観るのが一番である。

「一人だけ逃げようとした罰だからね。」

「・・・・・」

「加奈ちゃんだけ逃げようといつ事はさせません！」

## 2、メタル

「な、良、メタルって難しいのか？」

昼休み、準備室でお弁当を食べていると小倉が聞いてきた。小倉はパンク好きだったはずなのだが、

「難しいって、ギターの事？」

「そりゃそうだろ。俺はギターしか弾けないんだし。」

私は食べようと持ち上げていたからあげを弁当箱に戻し、少し考えてから、

「曲によるけど……難しいのは多いよね。」

と、答えた。一般的にメタルは凄く難しいというイメージがある。否定はしないが、メタルの曲ばかり練習するのはあまり上達しない気がする。恐らく、メタルの曲、と言つて練習を開始すると速弾

きばかり練習する人が現れるだろう。だが、曲の中で速弾き等は数秒しか披露する機会が無い。むしろその他のリズムバッキングの占める割合が多い。だからこそ、リズム面を強化するためのバッキング練習は欠かせない。

「そうか……何か初心者にお勧めのバンドあるか?」「ページする上で。」

これまた難しい質問だ。基本的に自分が好きなバンドの曲をページするのが一番良いのだが、私がお勧めするのは……

「メタルじゃないけど、ディープ・パープルとかいいよ。」

「ディープ・パープルね……どんな曲があるん?」

「有名所だと、ブラックナイトとか、バーンとか、ハイウェイスターとかかな。僕はチャイルドインタイムが好きだけだ。」

私も初めてギターを触ったときに練習したのはディープ・パープルだつた。有名なスモークオンザウォーターを弾いたものだつた。ソロは決して初心者用では無いのだが、リフを弾くだけで満足した。

「へへ、どんな曲?」

私が口で説明しても伝わる訳が無く、弁当を食べ終えた後、準備室に置いてあるギターで、私は小倉にバーンを聴かせた。

「案外簡単そうだな。」

「きちんとリズムを取つてやんなきゃ駄目だよ。でもだいたいリズチーの曲はソロが、」

ソロに入るとそれまで余裕そうに見ていた小倉の顔が真剣になつた。私の弾くパッセージを見て、先程までの簡単だ、という考えが消え去つたのだろう。ソロを弾き終えると、

「これって難しいほうか?」

と小倉が聞いてきた。

「ディープ・パープルの中では難しい方だろうね。でも、速弾きつて観点から言えばもっと速くて複雑なのはいっぱいあるよ。例えばこれとかね。」

私はイングヴォイのライジングフォースのソロを弾いた。その速さ

にただ小倉は驚いていたようだった。

「ま、これは難しい方だと思うよ。でも練習をしていたら弾けるようになるよ。必ずね。」

私の言葉に小倉が頷いた。昨今では速弾きは弾いても目立たず、ただ速く弾いてるだけと言われるが、私の中で未だに速弾き、ギタリストは好きな部類である。メタルを弾く上での楽しさはリフもあるのだが、速弾きも無くてはならないと私は思う。私はギターを置き、「まあ、リフを弾くのも凄く楽しいよ。それでも練習をしなければいけないのは言うまでもない事だけね。」

「そうだな。取り敢えず、これらを完璧に弾きこなすわ。」

小倉はそう意気込んだ。こうしてメタルを弾く楽しさを感じてくれたならば嬉しいのだが。

「取り敢えず、好きな曲を見つけてそれを練習するのが一番だと思うよ。準備室に何枚かCD置いてあるから聞いてみるのもいいよ。」

「解った。聞いてみる。」

小倉が準備室のCDをあさりだしたが、もうそろそろ午後の授業が始まるので私は小倉に一聲かけてから準備室を後にして、教室へ向かつた。

それから一週間が立つたある日、

「なあ良！お前のおかげで俺気づいたよ！」「

と、小倉が朝から元気よく私の所へ来た。

「やっぱあれだな。邦楽なんて糞だな。俺聴いてて解ったよ！洋楽のほうがめっちゃくちゃ上手いし、良い曲ばかりだもんな。いままで邦楽を聴いていたなんて俺、恥ずかしいよ。」

活き活きと邦楽を貶し、洋楽を絶賛する小倉を見て、私はやつてしまつた感が大きかった。

「日本のギタリストなんて糞だ糞。皆下手くそだ！俺取り敢えずヤングギター読んでもっと海外の事勉強するわー！それじゃあな！」

走り去る小倉を見てどうしようと私は思った。

「あちやー、典型的なパターンに小倉なっちゃつたんだー。」

小倉が言っていたのを聞いたのか真美が私に言った。

「ま、面白そうだからこのまま見届けようよ。」

真美は笑いながらそう言つと、自分の席へと向かつた。私は小倉が

こうなつた原因の元があると思うと頭が痛くなつた。

短編 ある日の良達（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございました！

ま～、中学生の時つてこういう考え方になっちゃう人つて大勢いますよね。私の時は私も含め、周りが皆そうなりました。私はバンド系だったのですが、R & amp; B や H I P H O P が流行っていたので皆ソックチ系に。B系が多かったな～。今でもたまに会うとそういう格好の人とかいます。私がライブハウスに行くように、彼らはクラブに行くみたいです。クラブとか怖くて行けないです！

それでは、今回も読んで頂き誠にありがとうございました！

## 高校一年生？（前書き）

ついに高校生にまでなつてしましました。速いですね～。それは  
そうと、今風凄かったです。あ、感想頂きました。ありがとうございます！  
ざいます！丁寧に隅から隅まで見て頂き、それに基づいて評価をして  
頂きとても嬉しかったです。今後も、お目にかかるようなものを  
書いていくように心がけます！

それでは、今回も皆さんに楽しんで読んで頂けたのならば幸いで  
す。では宜しくお願ひします。

高校生になつて変わつた事、と挙げていつたらキリがないだろう。例えば、服装が厳しく無くなつた、授業に出なくてもそこまで怒られない、アルバイトが出来るようになつた、とか。私も、以前は朝の新聞配達までしか出来なかつたがガソリンスタンドでバイトをするようになつた。これも懐かしい思い出である。校則が厳しかつた田舎の中学校ではカラオケ入店禁止、等も緩和されてある程度の自由が許されるようになる。だがそれは義務教育という立場が無くなつたからというのが大きい。法律上の関係も言うまでもないのだが、それをきちんと把握している人なんてあまりいないだろう。どちらかと言うと高校になつたことで羽目は外す人が増える。いわゆる高校デビューだ。男子は髪型を気にしだしたり・・・・と、今は小学、中学からでも珍しくは無いのだが、心機一転、新しい生活のために！と意気込む人は今なお少なく無い。女子なんかはそれが多くに見受けられ、パツとしなかつた子が別人のようになつている、なんて話はザラだ。化粧というのは本当に素晴らしい力である。

そんな高校生活を始めるに当たつて、私達は中学の頃と同じように軽音楽部に入部した。主にスタジオ代の節約のためというのが多くいのだが、卒業した先輩達から誘われたのも大きな理由かも知れない。もうそろそろ始まるバンドコンテストのために練習もしておきたかったので、入学当初から部室を使えるのは凄く美味しい話だ。

中学とは違い、高校の軽音楽部は部室棟に部室を一つ構えているので前ほど苦情が来る事も無い・・・・・・と思っていたのだが、他の部から「うるさい」という苦情は中学以上に多いらしい。

それでも、部の設備は充実しているし、大きさもそれなりにあるため、私達は重宝している。個人の所有物があちらこちらに見受けられ、ギターアンプは部のマーシャル、ジャズコの他に個人のアンプ数台、それもメサブギーやレイニー、ケトナー等、とても高校生では買えない代物が目白押しだ。さすが親がお金持ちなだけある。ベースアンプは相変わらずアンペグのSVTなのだが、ごく稀にラックを持つてくる人がいるらしい。皆、機材にお金をかけすぎなのでは無いだろうかと心配してしまう。初心者のうちに良い機材を使いすぎると音作りをきちんと出来なくなってしまう可能性があるからだ。

「じゃあ、事故紹介と担当楽器、もしくはやりたい楽器、それと好きなバンドをそれぞれ言って頂戴。」

毎年行われる新入生歓迎ライブの中の入部予定の新入生の事故紹介が始まった。一年生全員がステージに上がり、マイクを通して挨拶を行う。ステージの上にいる人達を見ると、中学の頃からの顔も見受けられるが、半数は見たことのない人達だ。上級生を見ても同じであり、部としての規模、人数は高校の方が比べ物にならないくらい大きい。私としては、中学校の時くらいの規模が好きだったのだったのだが、仕方が無い。

「良、良の番だよ。」

マイクを私に渡し、真美が喋る。どうやらもう私の出番らしい。

「新堂良です。パートはドラムをやつてますが、今組んでるバンド以外では叩くつもりはありません。ギターもやつているのでそちらの方でお願いします。好きなバンドは・・・・色々あります。では宜しくお願ひします。」

私は言い終えた後に一礼をした。少々生意気だつたが、これが私の本心なので変えるつもりは微塵もない。先輩達も中学での私の事を知っているのだろう、納得している顔をしているが、一部、険しい顔をしている人がいる。おそらく外部がら入ってきた人達なのだろう。

新入生全ての挨拶が終わり、私達がステージから降りた時に、

「おいお前、何生意気ぶつてるんだよ？」

と、先程の挨拶を気に食わなかつた人が絡んできた。

「おい、良いんだって。良のドラムは俺らじや釣り合わないし良も良で忙しいんだよ。お前は高校からだから解らないかも知れないけどさ。」

私の事を知つてゐる先輩が言つたのだが、

「そんなの関係無いだろ。俺はこいつより上級生だ。調子こいてる下級生は上級生がきちんとしてあげないとな！」

そう言つうと、私は腹を殴られた。急に殴られたので、腹に力を入れる事が出来なく私はその痛みにその場にしゃがみ込んだ。その様子を観ていた周りが騒然となる。そして、

「おいヤメろ！俺らの部はそんな上下関係を厳しくしていないだろ！」

「だからと言つて後輩が先輩を舐めていいなんて事決まつてないだろ！」

それを区切りに、先輩が言い争いを始めた。真美と増田さんが心配そうに私の元に駆け寄るが、私は大丈夫と一声かけ立ち上がつた。

「ようやく立つたか。これに懲りたらてめーは偉そうな事を抜かすんじゃねえよ。」

私が立つたのが見えたのか、完全に舐め切つた口調で私に言い放つ

た。その口調に真美や増田さんだけでなく、小倉さえも顔が険しくなった。その言葉と舐め切つた口調、表情に私は、「・・・・全く、いつの時代も口だけは威勢のいいやつがいて困る。」

「あ？」

私の言い言葉に頭に血が昇つたのだろう、私は胸ぐらを掴まれた。だが、私は言葉を止めなかつた。

「だいたい下のやつに威張る奴はな、実力的には下つ端なんだよ。まあ軽音楽部だから技術なんて関係無いけどよ。少しはそのちっぽけな自尊心捨てたらどうだ？たかが数年早く生まれたからって意氣がる事じゃねえだろ！自分の実力で示せよ！」

「てめ！」

その瞬間、掴んでる手とは別の手で私を殴りつけようと拳を後ろに大きく振りかざした。だが、その手は後ろからの誰かの手に掴まれていた。

「おい、やめておけ。これ以上騒ぎを起こすならじつちも考えなくちゃならない。」

その一言で、先輩は私の掴んでいた胸ぐらから手を離しどこかへ行つた。

「大丈夫？あの人達あまりこないくせに威張るのだけは得意なんだよね。」

「助かりましたよ前田さん。」

私を助けてくれたのは前田さんだつた。おそらく学年的にはあの先輩の方が上なのだろうが、何かあり前田さんの言葉を逆らえないらしい。元々私が売り言葉を買つてしまつたのだから悪いのだが・・・。私達の印象が決して良いとは言えない新入生歓迎ライブは波乱を巻き込む結果となってしまった。

「にしてもよ、あの先輩マジでうざがつたな。」

「まあ、僕が悪いんだけどね。」

の一件があり、私達の学年の入部者はあの先輩の事を気に入らなくなってしまった。特に小倉は目の敵にしている。あの時が初対面であつたにも関わらずだ。私の言葉で他の人にまで影響が出てしまった事に、少なからず反省はしていた。

「良も大丈夫？お腹殴られたでしょ？」

「平氣だよ。伊達に鍛えてないよ。体力がモノを言うからね。」

真美が私のことを気にかけてくれたが、不意打ちで無かつたのなら何とも無かつた。プロとして関わる以前からきちんと体は鍛えているから、今も変わらない。格闘技経験者や常に体を鍛えている人に殴られない限りそこまで体に痛みは残らない。

「でも良くん・・・・印象悪くなつたんじや・・・・そこ  
が心配です・・・・」

皆日々に心配をしてくれる事に私は素直に嬉しかつた。

あの最悪な形での事故紹介もあり、先輩から何故私がドラムを叩くのは今のバンドだけなのかと聞かれる事が多々あつたが、私がドラムを叩いてお金を貰つてている事、それに伴いあまり他の曲のための練習時間をさきたくない事、真美と増田さんとのバンドに集中したいからと答えた。ギターはやつている人、今から行なう人が多いためにわざわざ私を誘つてまでバンドを組もうと思う人はいないだろうと思い言つたまでだつた。まあ、一つくらいならギターでバンドをやってみたいという気持ちも頭の片隅にあつたのだから口に出たのだろうけど。

再来週にはバンドコンテスト、その翌週には顔見せライブ、と中々忙しい時期だつた。私個人としても、音響監督に呼ばれる機会が

増えたため、学生とプロとの一足の草鞋を履いている状況が多くなった。その度に、自身の力が付いた実感が湧いてくるのでとても充実している。学力の方も心配は無い。長年の蓄積と、これまでの日々の積み重ねからセンターレベルなら間違いが起きなければ確実に九割は取れる。このまま行けば校内推薦を取らなくても、一般入試で入ることが出来るだろう。今からでも必死に勉強をしたのならば国内最難関を誇る一大大学にも現役で合格出来るかもしれない。だが、私にそのような考えは今のところ無い。今無いのだから今後生まれた所でどうする事も出来ないのだろうが。

「さて、いよいよ本番だね。楽しみだね～！どんな感じなのかな？」「至つて普通のライブみたいだよ。ただ会場が今までよりも大きいくらいかな・・・・・中学の文化祭の開催式程ではないみたいだけどね。」

バンドコンテストの会場を見渡して、私は言った。これほどの広さでライブをするのが慣れている。増田さんは、個人でもっと広くて緊張する舞台での経験が多いし、真美もホールクラスを初めて行なった時は緊張する所が今まで以上の力を出した。私も場慣れをしてきたので問題無いだろう。むしろ、初めて会う音響監督に叩いている所をジーッと見られる方が胃に悪い。

「楽しみですね！ここにいるの皆二十歳以下の人達なんですよね！どんな曲を聴かせてくれるんでしょうか？」

増田さんも大勢の人を見てはしゃいでいた。ほとんどの人が同世代だろうが、中には、見て解るくらいに私達より若い子もいる。私達があれくらいの時は・・・・・それなりに出来たかも知れない。非凡な一人はさすがとしか言えないが、私の場合は特別才能があつた訳では無い。全てずると言つても過言ではない。その事に他の人

に申し訳なく思つ。

一つのバンドの持ち時間は、十五分与えられておりその時間内に準備と曲を演奏しなければならない。私達の出番は中盤の最後と、何とも言えない所だが、何とかなるだろ。早速、一番最初のバンドの演奏が開始された。ガチガチにメンバー全員が緊張して演奏している所を見ると、学校でバンドを組み、文化祭等しか出した事が無いのだろう。私も最初の頃はこんな感じで緊張ばかりしていた事を思い出した。曲もいささか伸びした感があり、難易度の高い曲を演奏していた。

「もつと、自分達に合つたレベルの曲を演奏したらいこのにて。あれじゃあ曲を演奏するのに必死で全然楽しんできないよ。」

真美が的確な評価を下していた。必死にミスしないように、と下を向いてばかり演奏している。観ていて大変なんだろうな、としか伝わってこない。これではせっかくの自分達の持ち味を出しきれていな。

次のバンドも、その次のバンドも似たような感じであつた。順番が最初とこう事もあるのだろう、いささか可哀想だった。そういう点で言えば、私達の順番は良い位置なのかもしれない。

「お、ちびっ子がいる。可愛いな~。」

「ですね！私も小学校の頃を思い出します！頑張れ～！」

上手のギタリストが他のバンドとは違つた。それは、そのギタリストが小学生であろう事だ。真美と増田さんはその子に声援を送つていた。こんなに若い子がどんな曲を弾くのだろう、と私も興味を抱いた。そして、そのバンドの演奏が始まった。演奏しだした曲の、イントロを聴いた瞬間私は、

「嘘・・・・エクストリーム？・・・・」

と、思わず呟いてしまつた。この曲を知っている者たちがざわめいたのを私は感じた。そのバンドが演奏したのはエクストリーム

のWarheadsだったからだ。生半可なレベルじゃエクストリームの曲はバンドでは出来ない。ましてやギターは、求められるモノが多い。だが、このバンドはアマチュアレベルとは言えそれなりに演奏している。私も、好きな曲であつたから頭を振り曲にノッていた。そして、ギターソロが始まつた時、

「――「お――――――――――――――――――」

会場にいるほとんどの人が小学生ギタリストのテクニックに酔つた。私も両手をロックサインにして、頭上に挙げてギタリストを讃えた。彼のソロは完璧だった。

次の曲もGet The Funk Outと大いに盛り上がった。私も真美も学校の文化祭以上に盛り上がって曲を楽しんだ。増田さんも曲を知らないなりに楽しんでいたようだ。やつぱり、エクストリームのファンクメタルなるノリは聴いていて楽しい。

「あのちびっ子凄かつたね。昔の良思い出したよ。」

「私も思いました！」

「あの子の方が凄いし、才能もあるよ。」

曲が終わり、バンドに皆が惜しみない拍手をしている時に真美と増田さんが私に言った。確かに、私の方が経験の差で技術はあるだろうが、あと数年もしたら追い抜かれる。あの年代での技術を持っているだけで凄いのだ。今後もその非凡さに驕る事無く切磋琢磨していくけば将来間違いなく、素晴らしいレベルのギタリストになつていいだろう。ただ、スタジオ、セッションミュージシャンを目指すのか、バンド、ソロでレビューするかで大部変わつてくるのだが。

他のバンドも良いのは多かつたが、インパクトを全てあの子に持つて行かれた気がしてならなかつた。技術的には小学生に負けない

！と意気込むギタリストが多かったのだが、音の粒、正確性からあの子ほど上手なギタリストはいなかつた。個性的で面白いギタリストは何人かいて面白かつたのだが。

バンドとしてまとまっているのもあまり無かつた。皆、どれかが抜きん出ていると言う事が多く、それを補う、バンド全体としてでは無く個ばかりに重点を置いていたためであろう。ただ、何組かのオリジナルバンドのうち一つは未熟ながらも素晴らしいセンスを魅せつけてくれた。こういうのがあるから面白い。

そろそろ私達の出番になるので、楽屋の方へ向かうために一度外出したのだが、

「…………ここにいるの未成年だよね？まっちゃん。」

「煙草を吸うなんて不良です！」

若い子達に多い、煙草の喫煙。それを見た一人が露骨に嫌そうな顔をした。ライブハウスに出る事は多数あつたが、対バン相手はどれも成人や、師匠の知り合いのプロのミュージシャンの遊びバンドとかだったために、未成年とのバンドの対バンは無かつた。未成年なのに、男女構わず大勢の人が煙草を吸つている光景が嫌なのだろう。それを露骨に嫌そうに見ていたために、

「お嬢様方はこんな場所で煙草を吸つているのが珍しいのかい？さすがはお嬢様だね。どうせ下手なんだから恥じかく前に帰りなよ！」

と、ヤジを飛ばされた。言い返そうとした真美を制し、

「言わせたい奴には言わせておけばいいよ。」

と言つた。真美はくやしそうに頷き、私達は楽屋へ向かつた。楽屋へ入ると、私達の前のバンドが準備をしていた所だった。

「お疲れ様です。」

私達はそのバンドに挨拶をした。あちら側も私達に挨拶をし、

「僕らの次のバンドですね。噂は耳にしていますよ。ドラムの子がプロだと。」

「あ、そんな事まで広まつてるんですか？」

私の事が広まつていいらしい。

「そうですよ」それにベースもキーボードも滅茶苦茶美人だつて。初めてお会いしましたけど、めっちゃ美人ですね！羨ましいな。」と、互いに会話をし、健闘を祈つた。

「それじゃあ、楽しもうよ！」

「そうだね！」

「ファイト、オーです！」

私達の番が来て、無事終わった。会場に何人かいつもライブに足を運んできてくれた人達もいたおかげか、盛り上がり、私達も楽しく終える事が出来た。

その後、外の自動販売機で水を買つた時、

「良くん。」

と、声をかけられたので、振り向いたところ、

「あ、お疲れ様です！どうしてここに？」

そこにはつい最近のレコードティングのディレクターを務めていた人がいた。

「いやね、このコンテスト、実は僕らのレーベルの主催なんだよ。

私こそ君がバンドで出場している事に驚いたよ。」

どうやらこのコンテストのメジャー契約のレーベルは私が仕事で知り合つたディレクターのレーベルらしい。世の中広いようで狭いとはこの事だ。

「君だけがズバ抜けているようだつたら考え方のだつたけど、他のメンバーも素晴らしいじゃないか。ベースの子もプロレベルだし、キーボードの子なんか言うまでもない。恐らく君達がこの大会の通

過者の一組なのは間違いないが、私が一声上の奴に取り次いであげようか？ルックスも才能も技術もそろつた子達なんて滅多にいないからね。」

「ありがとうござります！でも、取り敢えずその話は今は置いときませんか？全国大会でも変わらないお気持ちであれば喜んでお願ひします。でも、今の段階でその話を受けるのは他の人達に失礼な気がするので・・・・取り敢えず、他の子達のバンドを観ましょう。」

「ははは、そうだな。そう言えば、来週の話なんだけど・・・・。

「その後、私は仕事の話を『ディレクター』と話し合った。そして、自分の力で段々と繋がりを広げている事にも気がつかれた。

「と、言つ話があつたんだけど・・・・勝手に僕の判断で決めちゃつてごめんね。」

私は先程の『ディレクター』の話を一人にした。

「ううん、良の気持ちは私も同じだから。」

「私もです！」

二人も私と同じ気持ちのようだった。自分達の実力だけで上に行きたい、という気持ちがあるようだ。若い時だけの特権なのだろう。私もそういう気持ちがあるって事は心に余裕があるのかもしれない。昔の職を探していた時ならば是が非でも飛びついただろう。

「取り敢えず、僕達が全国に行ける事を願いながら、今日のコンテストを楽しもう。」

「おー！！」

私達は残りのバンドのライブを観るために中に入つていった。

全てのバンドのライブが終わり、数十分待つた後、結果発表と表

彰式が行われた。私達のバンドは見事に優秀賞を取る事が出来き、夏の全国大会に行ける事になった。全国大会と行つても、場所がここから数駅離れたホールで行われるので甲子園に行くぞ！という気持ちにはならないが、私達の目標に一歩近づく事となつた。そして、特別審査員賞として小学生のギタリストのいるバンドも全国大会に出場出来る事となつた。その他に個人賞として、真美がベーシスト賞、増田さんがキー・ボーディスク賞を頂いた。私はプロという立場になるのだから申し訳ないが受賞出来ない、という旨をディレクターから聞いた。私としても個人賞に未練は無いので他の子に渡り、今後の糧としてほしいと言う事を伝えた。そして、ギタリスト賞はもちろん、あの小学生の子だつた。

「見て見て～、個人賞貰つたらエフェクター貰つちゃつた～！オーケーションにだそつかな？」

「真美さん駄目ですよ！せつかく頂いたんですから！」

真美と増田さんも個人賞を貰つた事が嬉しいのかはしゃいでいた。この一人が今回の個人賞を貰えないとするならば、それは出来レースしか有り得ないだろう。それくらいに一人の技術は他の人達より頭一つ以上抜けていた。だが、嫉妬心は冷静な判断を出来ない場面もある。現に、他の出場者の女性達は真美と増田さんを目の敵にしていた。

「あの子達つてさ、絶対上の人達と寝たよね。対して上手くもないくせにさ。」

「枕つてやつ？うわ～最悪～、あのドラムの子も可哀想に！あんな女なんかにひっかけられちゃつてさ・・・・・・」

「だよね～。私が今から説得して私達のモノにしちゃおうよ！」こんな心無い言葉も囁かれているのを聞いた。とても心外である。わざわざコンテストのために寝るなんて一人に限つて有り得ない。二人は見た目以上に心も立派な人達なんだ。そう思い、憤慨していると、

「良、何で怒つてるの？」

「ちょっと顔が怖いですよ・・・」

二人が私の顔を見て心配そうに言った。

「あ、ごめんごめん。ちょっとムカツク話を聞いてね。」

「それって私達の話でしょ？」

真美は囁かれていた事に気がついていたらしい。それでも、心を乱すことなくいつものように振舞っている。それでも、心につけた傷は深いはずだ。だから、

「真美、増田さん、この後時間ある？今日のお祝いをしよう！僕が全額持つよ！」

一人には悲しまないで欲しかった。だから、今日はこの良い結果を祝つて楽しい思い出にして欲しいと思った。この一人が悲しんで傷つく事だけはあつてはならないんだ。

「え、ほんと！やつたーー！まっちゃん、今日はご馳走だよー！」

「はい！加奈ちゃんも呼びましょう！」

二人は悲しむ顔よりも笑顔が似合う。だから、私は出来るだけ笑顔にさせなければならない。一人の事が好きだから。それにしても二人は忘れているのだろうか？

「加奈は今ベルリンだよ。忘れてた？だから三人だけだよ。」

私達は全国大会に出場出来る事を盛大に祝った。お金は三人で諭吉さんが一人いなくなるという高校生としては多少高い金額だったが目を瞑った。

「てか、そんなコンテストがあるなんて聞いてなかつたし！俺が出たら確實にギタリスト賞取つてただろ！」

先日あつたコンテストの事を小倉に言つた所、小倉は悔しそうにそう言つた。それを冷めた様子で聞いていた真美が、

「無理無理！あんたじやあの小学生にかないつこないよ。もつと練習しなさい。」

「何だと！俺だつてほら、こんなに弾けるようになつたんだぜ！」

そう言うと小倉は、手にしていたギターでハイウェイスターのソロを弾いた。だが、

「良、あの小学生が弾いた曲弾いてみて。弾けるでしょ？」

小倉のギターを取り上げ、真美が私に渡してきた。強引な行いに苦笑いを浮かべたが、私は仕方がかなくWarheadsのソロを弾いた。そして、

「これを小学生の子が弾いてたの。ライブで完璧に。あんたじやまだ無理でしょ。」

あまりに的確な言葉に小倉はただうな垂れるしか無かつた。

「糞～～～～！絶対そいつを越してやる！」

と、意気込み、小倉はギターをケースに入れ教室を出て行った。

高校一年のクラスで特に親しい人は真美しかいない。増田さんも小倉も、佐藤も皆違うクラスになつた。悲しいがこればかりは仕方が無い事である。ただ、一年の時の文理、授業選択でほぼ同じクラスになれるかも知れない選択をする事が出来る。ただそれは、進路に関わる事なので出来れば自分が必要だと思った事を自分で決めて欲しい。

「それにしても・・・・あの小学生は上手だつたね。」

「そうだね。楽器は違うけど、小学生の真美レベルじゃないかな？それくらい上手かつたよ。ま～加奈みたいな化物が世の中にはいるから、上には上がいるって思い知らされるけどね。」

あの技術を小学生で持つのだから素晴らしい才能だ。恐らく地区や

周りではあそこまで上手い子はあの子の周りにいないだろ？ ただ、加奈みたいにとんでもない化物が世の中にはいるのだから、本当に世の中上には上去るという言葉を思い知らされる。

「それにしても加奈ちゃんは本当に凄いね……あの子将来何するとか決めてるの？」

「うーん…………何も言つてないからな～。」

加奈は去年のコンクール優勝により、国際コンクール出場の権利を手に入れ、それに出場するためにベルリンにいる。母も一緒に着いて行つたので、家には帰つても一人だ。父も寂しそうにしている。

「加奈ちゃんほどのチートは見た事が無いよ…………」

真美が言つ言葉を私は小さい頃から田の当たりにしていたので最近は特に思つことは少なくなつてきた。

「あ～あ、それにしても……今週末は顔見せだけ？ バンド数多くて疲れそう～。」

「真美は受付だからいいよ。出来る事なら僕も受付にいたいよ…………」

・・・

高校の軽音部になつてから、ライブの設営等は全て自分達でやる事となつていて。会場作りから、PA、そして、ライブ中の転換も自分で行つ。一年生は担当楽器毎に仕事を割り当てられていて、私の場合、ドラムの転換、準備を行わなければならない。一年生のドラム人数が少ないために、ほぼフルでやらなければならぬのが面倒くさい。

「私も、良と一緒にずっと受付出来たら嬉しいけどさ…………」「真美さん一同じクラスだからって！」  
真美が恥ずかしそうに答えた。私もめんと向かつて言わると恥ずかしい。そこに、

「真美さん一同じクラスだからって！」

どこからともなく増田さんが現れた。増田さんは隣のクラスなのだが、感が良いのかこういう時には必ず現れる。

「ちょっと、まっちゃん！ またこんな時に！」

「ええ、感じましたもん！ 真美さんのラブ臭を感じましたもん！」

結局、クラスは違えど二人の共にいる時間は以前と何ら変わらないのだった。

そして、顔見せライブ当日。私は過大な労働を強いられていた。事前のミーティングで説明があつたものの、ほとんどの新入生は設営はした事がない。先輩に教わりながら四苦八苦して進めていくものだから時間は押しに押した。ドラム周囲も、先輩も含めマイキング、設置位置などずさんな物だったので、私が一から説明をしてそれなりの物にした。ただ、最初の時同様、気に食わない人が現れるもので、結構すんなりは行かなかつた。それが適切な指摘ならば私も頷くのだが、その人の主觀で違う、昔はこうだつたと言われても困る。そちらの昔はよく知らないが、現場や師匠、その他エンジニアから見て教わった事を否定するのは恐ろしいにも程がある。反抗しても埒があかないでの、その人達の時はそのままにしたが、今後もこういう衝突があるのかと思うと頭が痛くなつた。全ての準備とリハが終わり、本番開始を待つだけになつた時、小倉が私の元に来た。

「お疲れさん。お前休みなしだな。」

「だつてただでさえ少ないドラム人口は少ないので上にはあの人かいりんなんだよ？」

「あ～・・・・・災難だな。」

そう、ドラムの最上級生の一人に一番最初に私に絡んできた人がいるのだ。前田さんはサッカーの試合があるらしく、今日はここにいない。最上級生のドラムの人達は皆、仕事をする事もないので話していたり、遊んだりしてまつているのだが、この人だけは違う。まるで姑のようにネチネチと文句を付けてきたりするのだ。

「ま、頑張れよ・・・・・お前らの出番は五番目か。ここにいる客、序盤で帰っちゃうかもな。」

「そつならぬよう盛り上げないとね。」

私はそれだけを言い、開始時刻を待つた。

高校の軽音楽部、という事もありレベルは中学のより少しあがつていると思える。先輩たちも皆上達しており、努力の成果が見受けられる。楽しそうに演奏している所を見る限り、本質は変わらないのだろう。と、準備をしつつ観ていたら、もう私達の出番が来た。出演バンド数が多いために時間が少ないので、次々と回転が速いのだろう。私は直ぐ様に、置いてあつたスネアをセットし、そのまま自分でセッティングをした。

「良、疲れているみたいだけど・・・・大丈夫?」

「これくらい何とも無いよ。それよりちやつちやつと準備を終わらせて。今回は前のよつてセッションから始めよつ。」

「うん、解つた。」

真美と増田さん、この前のよつてセッションから始める事を伝えて、皆が準備を終えた所で私達は演奏を開始した。

それからは本当にきつかった。これが労働だったのならばそれに賃金を貰えてもおかしくない。まさか裏方の方をやる羽目になるとは誰が予想しただろうか。それも憎まれ口を叩かれながらだ。全てが終わった時、私はライブを終えたと言う達成感より、ようつて仕事が終わったという開放感のほうが強かつた。

「あ～終わった。帰つて寝よつ。」

伸びをし、そう呟いた所、

「あれ? 今から打ち上げじゃないの? 出ないの?」

真美が私にそう言った。そうだった。これから皆で打ち上げがあるのであった。

「・・・・面倒臭いな。」

「良くんがいかななら、私は行きません。」

増田さんがそういうが、事前の確認の時に行くと言った手前、行かなければ店側にも部にも迷惑がかかる。

「いや、行くよ。ただ、それまでは少し教室かどこかで休むよ。」  
打ち上げまであと一時間しか時間は無いが、少しでも体を休めてからじやないと動きそうに無かつた。

部室に行き、私は少しの間仮眠を取ることにした。

「あ、良。そろそろ行かないと………つてまっちゃん!」

真美の言葉で私は目を覚ました。だが、目の視点が少々高かつた。それに頭の下の感触も床の硬さじやなく、柔らかかつた。何事かと思ひ、起き上がり、床を見ると、誰かの太ももがあつた。その太ももの人物を見ると、

「もう、真美さんのせいできちやつたじやないですか！」

増田さんが不満そうな顔をして座つていた。つまり、私は今まで増田さんの膝枕で寝ていた事になる。私は意識が無かつた事を非常にうらやんだ。

「そりやつてまっちゃんはいつもいつも！」

「何ですか！真美さんは同じクラスになれただけでは満足してないんですか！」

そして、二人はいつものように言い争いを始める。

「良、そろそろ行くぞ………つてまたかよ………」

部室に入ってきた小倉が溜め息をつきながら言つ。小倉もこの一人が言い争つているのを見慣れている。取り敢えず、私は立ち上がり荷物を持ち小倉の元へ向かつた。

「どこにいるかと思いきや……」

「ハハ、ごめんごめん。一人とも、もつ行くよ？」

私は言い争いを続けている一人にうながした。二人は言い争いを続けたまま私達について来た。部室の鍵を閉め、夕暮れ時のオレンジ

色の空の中を、私達は打ち上げ会場へ向かって歩いて行つた。

## 高校一年生？（後書き）

読んで頂きありがとうございました！

え～っと、案外好きなバンドで年代がバレてしまう！って事もありますが、私と同年代でエクストリームが好きな人はあまりいませんでした。むしろ知られていないです。昔ですが、小学生がエクストリームの曲を完璧に弾きこなしているを見てびっくりした思い出があります。普通に考えて、エクストリームは難しいです。バンドでやりようものなら、本当にしんどいです。

本当はもつと早い段階で書くべきだったのですが、ご感想お待ちしております。ビビリな私なので今まで書くに書けませんでしたが、自分の実力を上げるには客観的意見が大事なので・・・・・では、今回も読んで頂き誠にありがとうございました！

## 高校一年生？（前書き）

今回はちょっと遅れたかも知れないです。楽しみにして頂いて  
いる方、すみません。  
では、今回も皆さんが楽しんで読んで頂ければ幸いです。それで  
は宜しくお願ひします！

「はいはい、この機械にこの紙を入れて、ボタンを押すと……・何とおれになっちゃうんですね～。あ、これ決して偽札じゃないよ？マジックだからね？」

教壇の上で割かし危ない事が繰り広げられていた。一円程度の大きさの真っ白の紙をプレス機に入れてボタンを押してプレスした所、その紙の模様が一万円札の模様になつたのだ。遠くから見たら本物と遜色が無い。近くで見たらどうなのだろう。と、言つたり何故生物教師がこのような機械を持ち出してきたのだろう？

高校の教師は少し変わっている人がいる。これはどこの地域でも同じなのだろうか？現代語の教師なのに白衣を着て授業を行う先生。普段はぱっとしないのに、愛車がインプレッサWRX STiに乗つているもう少しで定年を迎える家庭科のおばあちゃん先生。毎日、良いマフラー音を響かせながら登校しているので、あだ名が走り屋おばあちゃんとなつた。そして、担任なのが、

「え～っと・・・・・・はい。今日は特に何も無いんだけど・・・・・・・球技大会前にクラスの団結を一致するために今から体育館に集合！大丈夫、今の英語の時間と、次のLHRの一時間もあるから！それじゃあ十分以内に着替えて集合！」

初めてのクラス担任に意気込む若い先生だった。

「何でだでさえ暑い夏の時期に体育館で運動をしなければならないのか。朝一で体育があつたのだから今日だけで三時間分体育を行こうな暑い時期に一回も体育館で体動かさなきやいけないのよ！」

真美が不満を言っているが、その気持ちは私も解る。たう事になる。体育会系や、体を動かすのが好きな人は良いのだろうけど……。

・例えば、

「よつしゃー！英語が体育になつた！」

小倉は張り切り過ぎている。それぞれ思う事があるのだろうが、私達は体育館に向かい、更衣室で制服から学校指定のジャージに着替えた。着替えが終わり、体育館で氣だるそうにしていると、

「良、なんかお前嬉しそうじゃないな。」

「そりやね・・・・・暑いし。」

私の言葉に大げさな手ぶりをつけて小倉が、

「おいおい、ライブの時の方が暑いじゃねえか！それによ・・・・・

・見てみろよ。」

私は小倉が指刺す方を見た。そこにはクラスの女子がいるだけであるのだが、小倉は目を輝かせて、

「女子のジャージ姿だぜ？暑いから上はもちろんシャツ。下はパン、何人かズボンもいるけどよ。見てみろよ、あの膨らんだ胸を。シャツの上から大きく主張している一つのおっぱいを。眺めるだけで興奮しないか？あれが動くと上下左右に揺れるんだぜ？しかも、ズボンもヒップラインがしっかりと現れている！これを見るだけで俺は・・・・・俺はもう！」

いつかの時のように力説した。気が付いたらクラスの男子連中も頷いている。それほどまでに魅力的なのだろうか？私も凝視してみると、

が、「いや、僕は小倉ほど・・・」

「はい出ました～！やつぱりいつも増田のよつな大きな胸を目の前で見てるやつは言つ事が違うよな～。増田みたいに大きい胸でスタイルも良い、顔も良いなんて滅多にいないもんな～。それに、真美

さんみたいな貧乳属性も一緒に死んで死ね！」

またしても、いつかのよつに小倉の言葉に頷きながら男子達は私を睨みつけた。だが、それ以上に小倉の言葉がまざい。真美の事をそう言つと、

「死ね！」

案の定、小倉は真美に殴られた。真美の胸の事にたいする悪口は禁句である。真美が小倉を殴り、去つて行つた後、

「もう学習したら？」

「馬鹿野郎！…………」

私の言葉に小倉は血相を変えて、

「俺だつて学習していない訳じゃねえ！真美さんに胸の事を言つと殴られる事くらい知つていい！でもな、貧乳と言われて頭にくる真美さんをみたいからやつてるんだよ！裏返せば、貧乳という事にコンプレックスを持つていると言つ事だ！そんな女性を見ない事ができようか？いや、出来ない！…………俺は巨乳の方が好きだ。でもな、貧乳の事に悩んでいる、その事に恥ずかしがつている女性はもつと好きなんだ！！」

またしても小倉に拍手が送られる。女子は冷めた目で見ている。それと同時に真美を励ましている。真美も、「いつか殺す。」と呟いている。何とも言えない状況だった。また一つ、小倉が遠くへ行つたような気がしてならない。

「おかえり~~~~~！」

家に帰宅すると加奈が私を出迎えてくれた。実に一月半ぶりにその姿を見ることとなる。メールや電話で近況は教えてくれたのだが。

「今日帰ってきたの？」

「うん。お昼には帰つてきたよ～。んで、はいお土産。」

と、加奈が私に手渡したのは・・・・・・

「いや、ビールが名産なのは解るけど、僕、未成年だよ？」

「大丈夫！ノンアルコールだから！それとソーセージ！」

ベルリンに行つていたのだからこのようなお土産になるのは予測していたのだが、本当に予想通りだとは思わなかつた。まあ、ドイツのソーセージは絶品らしいし、これでフランクフルトを作り食べる事を考えたら口の中に涎がたまつた。

久々の家族四人での夕食を終え、私と加奈は部屋でお土産のビールを飲むことにした。

「本当にノンアルコールだよね？」

「本当だつてば～。それじゃあ乾杯しよう？」

加奈はビール瓶を開け、私と加奈のグラスにビールを注ぎ込んだ。冷蔵庫に冷やしておいたので、今日のような暑い夜には最高なシチュエーションである。アルコール入りならば・・・・・

「それじゃ～乾杯！」

「乾杯！」

グラスの合わさる音が響き、私はビールを一気飲みした。この喉越し、苦さ、疲れた体に心地良い程染みていく感じがたまらない。

「つ～～～！やっぱ美味しいな～。ドイツのなんてビールだろう？それにしてもアルコール入りと変わらない美味しさだね。これってす・・・・・・

何のビールか確認しようと瓶のラベルを見た所、私は言葉を無くした。明らかにアルコール分5%と書いているからだ。

「ちょっと、加奈！これノンアルコールじゃないよ～。」

私はそう言つた後、加奈の方を見た。だが、加奈の様子がいつもと違つ。手に持つグラスは既に空になつており、顔が見る見る前に真っ赤になつていつた。明らかにアルコールにやられた顔だ。私は加奈の酔いを冷ますために水を持つてこよつと立ち上がらうとしたその時、

「どこに行くの？」

私の腕を掴み、加奈が言った。

「加奈、酔つてるでしょ？ もうこの際アルコールが入つていたとかどうでもいいから水を持って」

「そんな事どうでもいいでしょ？ お兄ちゃんは私といつしょにいるのいや？」

そう言つと、加奈は私の腕を胸の辺りに持つてきた。いつのまにこんなに成長したのだろうか？ とても今年中学一年生になつたばかりの女性の感触と大きさでは無い。これではまるで増田さんのようである。非常にまずい。アルコールを摂取したせいもあるのだろうが心臓の鼓動が速い。まるで、実の妹に欲情しているかのようである。そして、加奈の鼓動も腕を伝つて感じる。加奈も同じように鼓動が速い。何をしているのだ、私は。そう思つていると、

「聞こえる？ 私、こんなにお兄ちゃんの事を考えると胸がどうにかしそうなんだよ？」

真つ赤な顔だが、上目遣いで言い寄る加奈に確かに女性を感じてしまった。

「あの時、お兄ちゃんの事好きって言つたの嘘だと思った？ でも本当の事……だって、こんなにもお兄ちゃんを欲しがつているんだもん。」

加奈は私の掴んでいた腕を自分の服の中に入れた。段々と私の手を上に上げていき、胸の辺りに持つてくるとブラジャーの中に入れた。加奈の体温が私の手のひらを伝わり感じる。とても熱く、そして体温ばかりではなく柔らかさまでも感じてしまった。素直に言えば、私は加奈に女としての魅力をこれ見よがしに感じさせられたのだ。

「ね・・・・・ 解るでしょ？ 本気なんだよ・・・・・だからお兄ちゃん、私を一人の女として・・・・・」

「つ！」

私が、気合を入れて冷静さを保とうとする同時に、加奈の体から力が抜けていき、私の元に倒れた。何か悪い事でも起きたのか？と思つて加奈を見ると、加奈は寝息を立てて寝ていた。どうやら初めてのアルコールにやられて、潰れてしまつたらしい。

私はほつと胸を撫で下ろすと、加奈をベットまで運んで寝かせた。運んでいる時に、もう加奈は少女ではなく、大人の女性に近づいている事を解つてしまつた。そして、恐らく最後の言葉も酔いで自制心が効かなく発したのだろうが、本心なのだろう。

加奈が私のことを兄として見ているのでは無く一人の男性として見ている。嬉しい気持ちとは裏腹に侵してはいけないタブーだという気持ちが生まれる。正直な話、私はあの時加奈に欲情してしまつた。兄なのに、妹にだ。あれほどまでに寄られて大胆な行動をされた事が無い、という事があつたとしても、あつてはならない事なのだ。

「まいつたな・・・・・・・・

私は残つてゐるビールを開け、一人で飲み始めた。未だに鼓動の速さは続いている。真美、増田さん、加奈。もうそろそろ答えを出さなければならぬのかも知れない。今までのようになあなあで済ます訳には行かない時期かも知れない。次に加奈が免疫を付けて私に言い寄つてきたら、私は断れる自信が無い。加奈だけ無く、真美や増田さんでもそうだろう。そうなつてしまつた場合、答えを出していよいよ手を出すことになる。不可抗力と言つて免れる事など出来ようも無い。

「高校までだな。それまで愛想つかされるかも知れないけど。」

いつの間にか空になつたビール瓶を見た後、時計を見てもう夜も更けてきた事に気づいた。私はビール瓶とグラスを片付け、布団に潜り込んだ。

翌日、加奈が物凄く体調を悪そうにしていた。

「「じめんお兄ちゃん・・・・・・昨日ビール飲んでから記憶無いん  
だけど、ノンアルコールでも酔つたりするものなの？」

「あれね、アルコール入つてたよ。多分一日酔いだから今日はゆつ  
くりしたら？」

私の言葉に黙つてうなずき、加奈は再び眠りについた。初めてのアルコールに記憶をなくしていただらしい。昨夜の事を覚えていないのは、私にとって好都合だった。

それから、母にビールの事を話し加奈を休めさせる事にした。母がきちんと確認をしていればよかつたのだが、

「まゝお酒位この歳になつたら飲むでしょ。」

の一言で終わつた。確かにそうだが、親公認でそれはいささかまずいのではないかと感じてしまつた。

終業式が終わり夏休みに入ると、私達はよりいつそうバンド練習に力を入れた。時には一日中部室で曲作り、練習を行つた。あまりの暑さと真剣さに脱水症状になるのではないか、と思つたくらいだつた。個人個人が自らの実力のレベルアップを図り、私達のバンドはより一層の実力を付けたと自負している。

「今日はここまでだね。珍しく次が入つてるみたいだし。」

額の汗を拭き、私はそう言い練習を終えた。一人ともここ連日の猛練習にさすがに疲れた表情を隠せないでいる。

「一応、新曲が出来た、と言う事でいいのかな？」

「そうですね。そういう事で良いんじゃないですか?」

部室の中の熱気を少しでも和らげるために、クーラーの温度下げて、一人はマイクを片付け始めた。私も自分の楽器を片付け、それらを持ちこち早く外に出た。

外に出ると、次のバンドの人達が既に待っていた。

「お疲れ〜。」

「お疲れ様です。」

「気合入ってるね〜。何があるの?」

私はそう問われ、

「今月にコンテストがあるんですよ。優勝するとレーベルから声がかかるとか、もしくはお田にかかれれば同じような結果になるとか。」

そのように答えた。

「そんなのがあるんだな。俺らも来年出ようかな。お前らは出るなよ、俺らが上に行けないからな。」

「僕達がお田にかかれればいいんだけどね。」

真美と増田さんが部室から出てくると、その人達は部室に入つた。

「何話してたの?」

真美が私にそう言つたので、

「いや、何でも無いよ。」

とだけ、答えた。

「前より広い場所だとは聞いてたけど、そこまで変わらないものなのね。」

会場を目にし、真美が呟いた。大会本番、私達は会場に来ていた。出演者達が集まる時間より少し早めに来ていた。中に入り、楽屋に行くと、既に何組か来ているようだった。

「お疲れ様です。」

「お疲れ様です。」

私達の挨拶に、皆こちらを向き挨拶を返してくれた。ぱっと見だが、緊張を隠しきれ無い人が多く見える。それだけで、この大会に意気込んできている事が解る。だが、私達も皆と同じ、それ以上に努力してきたと自負している。

「あ、この前はどうも。あなた達の演奏を聴いてちょっと自信無くしましたよ。」

一人の青年が私達に話しかけてきた。その青年は、以前見たことがあった。それもそのはずであり、私達と同じ地域のもう一つの出場バンドである。小学生の天才ギタリストを筆頭に全てのパートが高いレベルを持つていた。

「いえ、私達もあなた方の演奏には感激しました。何より、あのギターの子には私も驚かされました。」

「あいつは俺の弟なんですよ。俺らの仲間でバンドを組むときになつ以外に良いギター弾けるやついないんで。でも、貴方も私と同じ位の年代のはずなのに凄いですね。プロの演奏かと思いましたよ。」

謙虚で低い物腰のまま言い続ける彼に、私はより一層的好印象を抱いた。私達の事を教えると、彼は納得したかのように、

「それならばその実力も頷けますね。しかし、本当にプロでしたか。今度一緒に対バンしませんか？俺らも貴方達から学びたい事はいっぱいあるし、何より面白そうです。」

「ええもちろん。一緒にやりましょう。その時は是非オリジナルが聴きたいですね。それではお互い頑張りましょう。」

「ええ、今回は負けません。」

互いに握手をして、私達は健闘を祈った。

会場に移動し、主催者から挨拶を聞き、私達は出番を待つた。

今回も中番だったので、出番が近づくまで他のバンドの演奏を聴い

ていた。さすが全国各地から予選を勝ち抜いてきたバンドや、人達だったので、その演奏力、オリジナル性はどれも引けを取らなかつた。様々なジャンルがあるのかと思っていたのだが、やはり中高生に人気のジャンルがオリジナルにも現れている。だが、それぞれの良さをきちんと出し、観客達を盛り上げさせていった。審査員席の人達も固唾を飲んで聴き入れ、それぞれのバンドの評価をしていた。その中に、お世話になつて『ディレクター』、そして何故か師匠もいた。

「ねえ、良の先生いるよ。」

「うん、僕もびっくりしてる。」

「私達が考えているよりももっと凄い人だったんですね・・・・。」

増田さんの言葉に私は黙つて頷くしかなかつた。影響力のある人だと思つていたが、ここまで多方面に関わつてゐるとは思わなかつた。考へてもみれば、いくら長年、トップクラスのプロのミュージシャンだつたとしても、ドラム奏者だけであんなに豪華な家を持つ事は厳しい。そして、顔の広さ、慕われよう、もしかしたら私が知らない以外にもまだまだ師匠の秘密は多いのかも知れない。

先程の青年のバンド、小学生ギタリストのいるバンドの演奏が始まつた。今回も同じくエクストリームのようだつた。出演しているギタリストは彼のプレイを食い入るように觀いていた。私も、気になつていたので始まる前に色々聞こうとしたのだが、

「あんたギタリストじゃないだろ。そんなやつに教える事なんて無い。」

と、一蹴されてしまつた。なんて可愛げの無い子だろ、と思つた。だが、彼のプレイは凄まじい。以前の棒立ちのプレイから、所狭しと動きまわる姿はさながらヌーノのようである。

「彼も何か一皮剥けたかな。」

音の変化以前に、ライブでの立ち振る舞いからそう思つた。

「そろそろ私達の出番ですよ！」

増田さんが私と真美にそう告げたので、私達は楽屋の方へ向かつた。樂屋に入り、今朝したスネアのチューニングを再確認し、ペダルとスティックを取り出した。軽い準備運動を行い、私達の出番を待つた。

次に出るバンドが樂屋に入り、準備を終えた所で、

「君達さ、何処の代表？私達北海道なんだよね。」

と、話しかけてきた。

「僕たちは関東です。家がこっちにあるので地元ですかね。」

「なんだ。じゃあ、交通費とか出ないのかな？私達は北海道からこっちまでの交通費出でせ。飛行機代だつたからフェリーで来て差額分儲けちゃつた！」

こういう事が出来るのが地方の強みだろう。私も、同じことをしたと思つ。北海道から来たと言うこの人達は、どうやらガールズバンドのようであり、地元の学校の制服を着ていた。私服や、そのバンドの個性に合わせた衣装も良いのだが、制服と言つのも女子ならば良い。見ていて清々しい気持ちになる。もつとも、文化祭で真美と増田さんの制服姿でのライブをメンバーとしては観ていたが、観客として観るのはまた一つ違う意味合いを持つている。

「でも君はまさに両手に華だね。こんな可愛い子達とバンド組んでるなんて周りからうらやましがられない？」

「そうですね。僕もそう思いますよ。」

僕が素直にそう言つと、茶化すはずだったのだろう、反応が薄い事に少し顔色を変えた。遠くで真美や増田さんが、それ見た事か、といいたげそうな顔をして私達を観ていた。すると、彼女は他のメンバー全員を呼び、私を囲むと、

「あの子達も可愛いけど、私達も悪くないでしょ？」

「そうそう、私達来年上京するからその時はね？」

「私達と遊ばない？」

「手とり足取り色々教えるよ～。」

と口々に言つてきた。言つだけで無く、制服のスカートを捲し上げる等もしてきたのだが、私には彼女達の色氣等ビリとも思わない。真美や増田さん、加奈といった三人に比べたら天と地ほどの差があるのだ。だが、真美と増田さんは彼女たちの行為に腹を立てたのか、こちらに寄つてこようとしていた。始まる前につまらない事で騒ぎを起こしたくなかったので、

「遊ぶのは良いですけど、そんな事までしていくからなくて良いですよ。間に合つてますんで。」

と笑顔で拒絶の言葉を差し向けた。その言葉が面白く無かつたのか、「そ、そ、う、あ～・・・・・・イケると思つたんだけな～。ま、いいや。お互い頑張りましょ～う。」

と、最初に話しかけてきた彼女が言つた。そして、手を差し出してくれたので、私はその手を取り、

「ええ、頑張りましょ～。」

と、言いながら握手をした。その後、彼女らはステージの方へ向かつた。

「良つて誰にでも付いていく奴じゃないんだね。私達が迫つたときにすぐ狼狽えたから弱いと思つてたよ。」

「私もそう思つてました。でも違うんですね！」

彼女たちがいなくなると同時に、真美と増田さんが私にそりひき言つてきたので、

「そりや、真美や増田さんほど色氣があつて魅力のある女性なんていないからね。それに比べたら他の女性が迫つてもどうとも思わないよ。」

と答えた。一人は私が褒めた事に嬉しそうに笑い、

「そうですね！ありがとうございます！」

「ま～、加奈ちゃんつて言つ例外がいるけどね。」

と答えた。確かに、加奈と言う例外がいる事に同意をせざるを得な

い。

前のガールズバンドが終わり、私達はステージへ向かった。表に立つと、多くの観客と終えたバンド、これから出るバンドの人達が私達を観ていた。そして、中央に審査員達。これほどの目に見られたのならば、よほど場慣れをしている人以外ならば足が竦むだろう。近くを見ないで、遠くを観る、足元をみているだろう。人それぞれであるが、緊張をほぐすのは重要だ。私とて、決して緊張しない訳ではない。程良い緊張感があるだけだ。緊張しすぎていると体に力が入りすぎていけない、逆に全く緊張しないのはそれはそれでいい。私としては緊張感がなさすぎると、全くやる気が出ず何をしてもつまらなく感じてしまうからだ。そんな中では決して良い演奏、音楽が生まれる訳がない。これが私の自論だからだ。

長く照明が当たっていた事もあり、ステージ上は程良いくらいの熱気だった。もっともっと熱ければ良いが、それは私達が演奏している間に暖めれば良い。会場全てを熱気につぎ込むくらいに。音を出し、P Aと確認を終えた所で準備が終わった。二人は私よりも早く終えていたようで、黙つてこちらを見ていた。

「終わった？ それじゃあやろうー」  
「オーケー！ 真美も増田さんも、今日も楽しもう。」「はい。またいつものようにですね！」  
「うん、それじゃあ精一杯楽しもうー。」「おー——————！」

軽いタム回しの後、タメを作り、皆で同時に音を出した。ベースから放たれるA音、増田さんの弾くスケールにのせ、私は金物類を叩き続けた。その後、ハイハットで勢い良くカウントを刻み曲の開始を告げた。熱い熱気に包まれながら、私達は大勢の客、バンド、審査員の前で自分達だけの演奏を開始した。

「皆さん盛り上がりますか！！！？私達は見て解る通り盛り上がっています！今日は・・・・・コンテストの全国大会って事でもう次が最後の曲なんですけど・・・・・あ、ありがとうございます！頑張りますよ～！もう演奏が終わつたバンドの方はお疲れ様でした！これから演奏する方は頑張つてください！審査員の方々もお疲れ様です！そして、見に来てくれている人達ありがとうございます！私達の事を初めて知つた方々は、良かつたら応援してください。もし、知つていて来て下さつている方がいらっしゃつたらありがとうございます！もつともつと頑張ります！それじゃあ、最後の曲です。盛り上がりましょう～多いに弾けましょ～！

jump to one-s feetです！行くよ~~~~~

一曲目だが、最後の曲を私達は始めた。観客が盛り上がっているのが見えた。真美が楽しそうにベースを弾き、マイクに声を通す。

増田さんも流れる汗を拭く」とも無く歌い、弾き続ける。嬉しい事に皆が熱狂してくれていた。コンテストなのに、ライブとは言えないのに。皆が熱くなっていた。ドラムを叩く手に力が入る。前ノリになるから、皆をもっと盛り上げさせるために。そして、私は気が付いた。この中の誰よりも、私が熱狂して、楽しんでいるんだと。

## 高校一年生？（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございました！

え～、今回結構時間がかかつてしまつた理由としましては、外伝を考えていたからです。結構書き進んだ、と思つたらデータが消えたり、等とハプニングもありました。そして、いまだに外伝進んでません！どうしよう・・・・・テーマが難しそぎて進まない・・・

と、愚痴を書きましたが、今回も読んで頂き誠にありがとうございました！

前回で「一」と「二」表記をするのを忘れていました。ですので今回は  
続きです！

それはそうと、気がついたらポイント数が三桁突入！PV数も一  
万達成しておきました！ありがとうございます！本当にありがとうございます！  
これからも頑張っていきたいので宜しくお願いします  
！それでは今回も皆さんが楽しんで読んで頂ける事を願って、そ  
なつて下されば幸いです。では宜しくお願ひします！

「ベストパフォーマンス賞は・・・・・ 東北代表！・・・・・ 私達は精一杯の力を出したが、最優秀賞、このコンテストのベストパフォーマンス賞を取る事は出来なかつた。

自分達の力を出し切り、僅かな時間のみだつたが楽しめたので私は悔いが無かつた。メジャー契約が遠のいた事は残念だが、まだまだチャンスはある。真美も増田さんも清々しい顔をしていた。二人とも、悔しさはあるだろうが、それ以上に観客のレスポンスの良さ、そして自分達の実力を出し切つた事に満足したのだろう。私はそう感じた。

最優秀賞を取つたバンドがステージに上がり表彰されると、会場中から拍手が起こつた。私達も惜しみない拍手を送つた。

それからその他の表彰が行われ、私達のバンドはどの賞も、貰える事は無かつた。さすがにどの賞も貰えないほどに酷いとは思えなかつたので、この結果に少々疑問を抱いたその時、

「おい良、ちょっといいか？」

私は後ろから肩を叩かれ声をかけられた。この声は恐らく師匠だ、そう確信を抱いて振り返つたら、私の予測通り師匠がいた。私が挨拶をしようとした口を開けようとしたと同時に、師匠は私に付いて来てジェスチャーをした。私はそれに従い、師匠の後を付いて行つた。私と師匠は裏の機材の搬入口に出た。ここならば、レベルの上の人、そして出演者等に話しを知られないですむからだろう。ズボンのポケットから煙草を取り出し、口に咥え火を付けて一吸いした後、横に煙を吐き出した。

「良、悪かつたな。本来ならお前らが最優秀賞なんだが・・・・・・

」  
そこから先は言われなくても解つた。十中八九私絡みだろう。私がプロである事。バンドとしてプロでは無く、十代だったのならば出

演は可である。それは十代といつ若い歳でプロとして活動している人が極端に少ない事に関係する。そして、そのような人達ならばツテやコネを使いレベルの人に見せる機会を設ける。そういう事もあり、今までいなかつたのだろう。だが、今回は私が出てしまった。まだまだヒヨックと言えど、プロである事には代わりはない。

「解っていますよ。」

「ああ、それもあるんだが、今回は出来レースだつたんだよ。」  
渋い顔をして、師匠はそう言つた。煙草をおもいつきり吸い込み、嫌な思いを吐き出すかのように煙を吐き出した。

「最優秀バンドな。あれは審査員長の甥っ子がいるそうだ。高校生活の最後にいい思い出を作りたかつたらしいんだと。だから他の奴らには申し訳ねえよ。あんな糞バンドが最優秀だとよ。ただ、あいつらは契約はさせねえんだと。そこら辺はさすがに解つてあるんだろ。」

出来レースは他のバンドには可哀想だけど、何処にでも有り得る話だ。世の中にはこういう事もある。これでコネにより賞を取得、デビューとしていたのならばこちから願い下げだった。そんなレベルに契約してデビューする気など毛頭も無い。追い込まれている時期なら話は違うが、今の時点ではまだまだ若く、チャンスもあると考えられる。でも、公私混合をコンテストのみで終わらせる所を見ると、まだまだこのレベルは良いのだろう。

「それでだな。まだ確定している訳じゃないが、審査員の思考、スカウトの奴らの様子からお前らに声をかけるかも知れない。確實とは言えないが、ほぼそなうなるだろう。」

「本当ですか？」

「まだ解らないがな。あくまで希望的観測だ。お前もこの業界に入つたんだから解るだろ？話が無くなるなんて事はあり得るんだ。そちら辺をきちんとわきまえていると思ってお前にだけは言つんだよ、俺は。」

吸い終えた煙草の火を靴で消し、携帯灰皿に入れると、

「ま、そういう事だ。どっちにしろレベルがお前らに田を付けている事だけは確実だ。どっちに転ぶにしろ悪い事じゃねえよ。」

師匠はそう言うと、辺りを見回した。私も顔を上げて見回すが誰もいない。まだ表彰式の最中なのだろう。師匠は誰か来るのを待っているのだろうか？ そう思っていたら、私の頭に何かが置かれた感触がした。師匠の方を見ると、師匠は私の頭に手を置き、

「よく頑張った。お前のプレイは何処に出しても恥ずかしくねえ。立派なプロの演奏だつた。それも人を惹きつける演奏だ。胸を張れ。

」  
そう言いながら、私の頭を思いっきり撫でた。師匠が褒めてくださったのだ。滅多に、本当に良くなければ褒めない師匠が・・・・・。それもプロと認めてくれた・・・・・上手く前が見えない・・・・・。師匠の顔がぼやけていく・・・・・ああそうか、私は涙を流しているんだ。師匠に褒められ、胸を張れと言われ、感極まって涙が溢れたのだ。

「馬鹿野郎・・・・・泣くな。俺がお前の師匠だからじやねえ、お前が俺の弟子だから褒めたんじやねえ。一ドラマーとして最高の演奏をしたから褒めたんだ。」

「はい・・・・・ありがとうございます！」

師匠として、一人の人間として最高に尊敬している師匠の言葉が嬉しかった。私は頭を下げて師匠にお礼を言った。師匠の顔は見えなかつたが、鼻をする音が聞こえた気がした。それが私の音なのか、師匠の音だったのかは解らない。

それから私は会場に戻り、出演者皆で集合写真を撮つた。手に賞状を持つもの、トロフィーを持つ者、それらを持たない者、皆が笑顔だった。成績という結果よりもライブをして楽しかつた、という過程のほうが重要だつた、結果が伴つた者達も結果だけに満足する

のではなく過程にも満足した、だから皆笑顔になれたのだろう。

全体写真の後、ティーンズ向けの音楽雑誌からの個別の「写真撮影、軽いインタビューを受け、私達は一時的とは言え、アーティストとして扱われた。各バンドのギタリストはさらに機材の説明、ギターを持ち写真撮影を行つていたのだが、私達はギタリストがないのであまり関係無かった。

その後、師匠に私達三人の写真を撮つてもらい、私達はその場を後にした。こうして、様々な人達、私達にとって、私にとって大会に出場する事よりも多くのものを得られたコンテストが終了した。

後日、私の元にレベルの方から連絡が入った。レベルで話し合った結果、私達のバンドと契約を結び、専属のアーティストとして世に出したいとの事だった。

私達三人はレベル本社に行き、担当の人から一通り話を聞いた。その上で、私達三人の意思はレベルと契約する事にした。日本の

メジャーレベルの中では決して大きい会社ではない。その点で言えば最大手のレベルと比べれば宣伝、CM等のタイアップと、セルス力は少ない。だが、大手のプロデュース等、私達の意見を通さない事も少ないので、そう思つて私は承諾した。もしかしたら甘いのかも知れない。レーベルも慈善行為で私達と契約を結ぶ訳ではない、商品として売り出すからには売れてもらわなければ困るのだ。会社の従業員を路頭に迷わせないためにも。

契約を結ぶに当たり、私達三人は親の同意が必要になつた。私は未成年で学生である。私達の意思だけではどうする事も出来ない。私達がどう思おうが、責任等は親に行く。

本社を後にし、私達はそれぞれの帰路に付いた。家に着いてから、私はこの事を母に伝えた。母は大いに喜び、私を祝ってくれた。加奈もその事を知ると、私に祝辞の言葉を言うと直ぐに、真美と増田さんにも電話で祝辞を伝えた。父にもその事を伝え、一人の同意を得なければならなかつたので、私は黙つて父の帰宅を待つた。

父が帰宅し、私と両親の三人で話し合つた結果、直ぐ様同意を頂いた。ただ、学業との両立をきちんと行う事が条件だつた。私自身も、大学に行くつもりだったのでその条件に喜んで同意した。その後、家族四人で近くの料理屋へ向い、私のお祝いをしてくれた。

「それで・・・・増田さんの方は父親が理解を示してくれなかつたと・・・・」

「うん・・・・でも、私頑張るから大丈夫だよ！心配しないで・・・・」

翌日、私達は三人で学校の部室に集まつた。真美の家は何も問題は無かつた。むしろ、私と同じように盛大に祝つてくれたみたいだ。ただ、増田さんの家の方は父親の方が頑として首を縊に振らなかつた。親として娘がこのような道へ進むのを善しとしていないので

う。増田さんはどちらかというと箱入り娘だ。小さい頃からピアノ、私立の幼稚園、と通わせている所から一般家庭では無い。所得上の問題で普通の家では無理である。だから、わざわざこの道に進む必要は無い、進めさせたくないのだろう。

「まっちゃん、大丈夫だよ。きっとお父さんも解ってくれるって。」

「うん、ありがとう真美さん・・・・・・」

増田さんの言葉には霸気が無かった。恐らく、昨日の段階で頼み通したのだろう。しかし、結果は見ての通りだ。私と真美が思う以上に見込みは無いのだろう。それならば、

「増田さん、今日君の家行つていいかな？君のお父さんと話がしたいんだ。」

私の言葉に増田さんは非常に驚き、

「え・・・・・良いと思つけど・・・・・・」

「じゃあ、お父さんが返つきそうな期間帯を教えて。真美も大丈夫？僕らで思いを伝ええた方がいいと思つんだ。」

「うん！任せて！」

一人で言つて伝わらないのなら、皆で伝えれば良い。必ず人の思いは伝わる、そう思ったから私は増田さんのお父さんと話をする事に乗り込んだ。増田さん一人に厳しい思いをさせない。レベル側の条件は三人全員の親の同意だ。それがなければ私達は契約を結べない。もし、増田さんの親が同意をしてくれなかつたからこの話が無かつた事になつた場合、増田さんは自分を責めるだろう。そして、親との距離があいてしまつ。そうなつて欲しくないから、もし同意を得られなくても、増田さんには親の気持を知つて納得をして欲しい。

「良くん、真美さん・・・・・・ありがとう・・・・・・」

増田さんの声に少しだけ霸気が戻つた。上手くいくかどうかは解らないが、やれるだけの事をしよう、私は一人にそう言つた。

「それでお父さん、一人はバンドメンバーの」

「初めてまして。新堂良です。」

「稻葉真美です。」

テーブルを挟み私達三人の向こう側に増田さんのお父さんが座る。私達はあれから部室で時間を潰し、良い時間になるのを見計らつて増田さんの家へ向かつた。

そして今、私達は増田さんのお父さんと話し合つため対面している。

「仕事帰りでお疲れでしょうが、本日は私達のバンドの事でお話をしたくて上がらせてもらいました。それで、増田さんがバンドでデビューする事を善しとしないのは何か理由があるのでしょうか？ありましたらお教えてください。」

増田さんのお父さんの表情を伺いながら、私は言葉を口にした。何か粗相が無いように、慎重に言葉を選びながら。すると、

「君が良くんかね？ そうか、江利子からよく話は聞いている。うちの江利子が大変お世話になつていて。もちろん真美ちゃんも。君達が江利子と仲が良く、そして江利子も君達と仲が良いのは親として非常に嬉しく思う。だが、」

始めのうちは静かに話し始めたのだが、

「レコード会社と契約を結びレコードを出す、これは非常にやくざな仕事だと私は思うのだ。私は音楽業界の事を知らない立場では無い。私の会社の取引先としても何社か名前が挙がる。もちろん、君達が契約を結ぼうとしている所もだ。そして、売れないとミユージシャン達がどうなつていくかも解る。売れる卖れないは実力だけではどうしようも無い部分がある。ましてや昨今ではレコードが売れないのだ。一昔前みたいには行かない。そんな場所に、江利子を出したいがないのだ。解らないかもしねりだらうが、親が子に求めるの

は幸せなのだ。今は良いかも知れないが、いずれ後悔する。」

途中途中で熱く語る増田さんのお父さんの話は十二分に解る話だ。誰も好んで子供を苦労させる道に進めさせたくない。それが増田さんの家みたいな環境なら尚更だ。話を聞くだけで相当上の立場、もしかしたら社長、会長、取締役のどれかかも知れない。

「確かに江利子は普通の子達とは違う。親の目から見なくともどれだけ才能豊かな人間か承知している。だが、江利子には幸せになつてもらいたい。人並みの幸せで良い、私と家内みたく険しい道を進まなくとも良いのだ。今まで何不自由する事無く進んで行ける。・・・・・」

増田さんの事を思つからこそ、自分が険しい道を歩んできたからこそその言葉なのだろう。それが親の勤め、親の思い、そう思つのだろう。そこに増田さんの主張は無くとも、なら私が言える事は、

「お父さんの仰る事は僕も解ります、と言つたら嘘になります。僕は子供を設けた経験も、結婚もした事もありません。そして、社会人としての経験も皆無です。ですから、どれほど僕達が良かれと思いつこの道に進もうとしている事を甘い、馬鹿な選択であると言われても仕方がありません。そして増田さん、いえ江利子さんの幸せを願つからこそ反対している事も解りました。ですが、江利子さんの幸せを願うのであれば、もう少し江利子さんの言葉に耳を傾けて下さいませんか？」

私の言葉に増田さんのお父さんは眉間にシワを寄せた。当たり前だが、自分の人生の半分も生きていかない若造に娘の事を言われたのだ。だが、私は口を開ざさないで言葉を紡いだ。

「江利子さんの幸せを願うのは親として当たり前だと思います。でも、江利子さんの意思を尊重しないのは少し違うと僕は思います。確かに長いスパンで考えるのならばこれほど安定とはかけ離れた事は無いと思います。大きな失敗や挫折を味わうかも知れません。でも、江利子さんは決して後悔なんかしないはずです。江利子さんは過ぎた事を悔やむような人ではありません！そして何より、江利子

さんのような人が失敗をすることは僕は思えないのです。何をしても成功する人、そう思つてならないのです。だからこそ僕達はレーベルと契約をするまでに至つた、まだ16か15の僕達がです。技術面だけではバンドとしては上手いだけのバンドで終わります、でも、江利子さんの歌う歌、作る曲には人を惹きつける何かがあるんです。江利子さんだけではありません、ここにいる真美もそうです。」私が伝える事は増田さんのしたい事、そして、真美と増田さんの二人が他の人と違う事。

「僕は未熟ながらプロのドラマとして少ないながらも数々の現場でお仕事をさせて頂きました。その経験上から、私の感が必ず成功する確信しているのです。江利子さんの事は僕が責任を持ちます。だから、江利子さんの事を思つのなら、どうか江利子さんの話を聞いてあげてください。」

私はテーブルに額を付けるくらいに頭を下げ、懇願した。どうか、増田さんの願いを聞いて欲しい。そう思うからだ。

「お父さん、私ね、最初は皆でバンドをするだけで良かつた。その時はピアノを弾く意外でこんなにも楽しい事があるんだ、そう思つたの。それが真美さんと良くんと三人で始めて、私と真美さんで歌つて、凄く楽しくて。でもそれだけでなく、お姫さんが喜ぶ姿を見た時、何よりの喜びとなつたんだ。私達の曲で、歌詞で大勢の人が楽しんでくれる、元気を貰つたつて言ってくれる。こんな事つてあるんだなつて思つた。そしたらこのバンドが私の中で何よりも掛け替えの無い物になつたの。私達の曲をもっと大勢の人へ聴いてもらいたい、真美さんや良くんの素晴らしい事を皆に伝えたい。だから私は皆でデビューしたい！このバンドは私の、私の夢なの！」

増田さんが涙ながらに訴えた。力強く、ハツキリとした声で真つ直ぐに目を見ながら。その様子に一番驚いていたのは増田さんのお父さんだった。増田さんの思いがハツキリと伝わったのだろう。そして、私も増田さんの迫力に圧倒されそうになつた。普段はのほほんとしているが、自分の意思を曲げない、強い気持ちを持っている。

彼女はそんな女性だ。

「いつのまにか大人になつたんだな……それも強い女性に……」

そう呟くと、増田さんの方を見て、「

「江利子、良い人を見つけたな。決して離すなよ、お前の生涯の宝物になるだろう。真美ちゃん、江利子とずっと友人でいてくれ。そして良くん、もしも江利子に何かあつたら」

強い眼差しで私を見た。私はその眼差しに答えるべく強く頷き、「はい。必ず江利子さんを守りぬきます。そして絶対に幸せにします。」

と言つた。そして、言つた後に気が付いた……まるで結婚前に彼女のお父さんに挨拶をしに行つた男の台詞のようである、と。ハツとして増田さんを見ると、顔を真つ赤にしていた。そして、「良くん、娘を頼む。」

増田さんのお父さんはそう言つと頭を下げた。おかしい、これではまるでではなく本当に、やつと思つと同時に増田さんのお父さんは顔をあげ、

「おい母さん、今日はお祝いだ。急いで食事の準備をしてくれ。」

「はい！江利子の旦那さんが決まりましたね！」

「ちょっと、お父さんお母さん！まだ私と良くんはそんな関係じゃ！」

「まつちゃん、もしかしてこれを狙つて……」

気分を良くした増田さんのお父さんが食事の準備を促し、お母さんは娘に旦那が出来たと喜び、真美が嫉妬心を増田さんに向け、増田さんは増田さんで突然の事に狼狽している。まるで誘導されたかのように言わされた。何故こうなつたのか……私は頭を抱えるしか無かつた。

「あ～あ、まつちやんこはしてやられたよ。まさか両親を使つちやうとはね～」

「だから違つんです！あれは勝手にお父さんが！」

増田さん家で食事をし馳走になつた後、私達は増田さんの部屋で談話をしていた。もちろん話題は先程の事なのだが・・・・。  
「これなら私も反対されるんだつた～。」

「もう！」

真美が不貞腐れて、増田さんが必死に誤解を説く、とこう構図になつていて。私が何も言えないので黙つてみていると、

「てか良も良だよ！何であんな事言つたの！両親の前で娘の事を幸せにするつて言つたらああ思われても仕方ないじゃん！」

「いや・・・・なんか、増田さんのお父さんに上手く誘導されて言わされた気が・・・・」

真美の言葉に曖昧な答えを言つしか無かつた。私も何故あの時ああ言つたのか全く解らないのだ。

「良くん！お父さんの前では私の事名前で言つてましたよね？何で今は名前じやないんですか？」

「え、いや・・・・だつて増田さんのお父さんも増田さんな訳だし」

「江利子つて呼んでください！」

増田さんが私に顔を近づけながら言つ。相変わらず増田さんはこういつ所で行動力がある、なんてのんきに觀察している場合じやない。「ま、「江利子！」え、江利子さ「さんもいらないです！」え、江利子・・・・」

顔を段々と近づけながら、目を見て言つので従わずにほいられなかつた。そしてとてもなく顔が近い。この距離はますい。まさに目と鼻の先である。心臓の鼓動が速くなつてするのが解る。江利子の顔がさらに近づき、もうこれ以上はと言つといつて  
「はいはー離れようねー！」

真美が江利子を私から引き離した。

「…………あと少しだったのに!」

「せんとまひねやんは・・・・・」

江利子が悔しそうに、真美が少々呆ね

江利子が悔しそうに、真美が少々呆れた素振りをしている。私はほつと胸を撫で下ろし、そつと部屋を出た。そして人知れずに荷物を持ち、玄関に向かつた。

「お、お邪魔しました。」

「『モード』で行くつもりなのかな?」

前二動二〇ニ志功廿

両肩を掴まれた。前に動こうとも動けない。左後には・・・・・真美が、右後には・・・・・江利子が笑つて立つていた。どこに行こうというのか？そう言いたげな目をして笑つていた。まだまだ帰れない、そう思うと私は大きく肩を落とした。

「三人とも同意書も揃つた事だし、君達はうちの専属となる。契約期間は四年間で、まあ延長するかどうかはその時に話しあおう。」  
レベル本社で、私達三人は再び話し合いをした。主に今後の方向性である。親の同意を得た条件として極力、学業に支障を来さない事があげられている。レベル側も、この事に理解を示し、学校の長期休暇の時にライブ活動を行い、放課後にレコードティング、メティア出演をするようにしてくれた方向になつた。

年内はレコードデイニングを中心に、一枚のシングルをリリースする事、来年の春までにアルバムをリリース、そしてそれに伴なう関東圏のツアーワーを行う事が決まった。

「これで取り敢えず終わりかな。君達も急な話を良くなじまで円滑に進めてくれた、感謝するよ。さすが薫さんが田を受けたバンドだ。今後、正式に専属となるとこれまでのようになりきにライブ等は出来ない

い。だから今日から一週間後に正式に会社から連絡が来ると思うから、それまでにしたい事をしといてくれ。それじゃあまたその時に。

「

私達はサインをした後、互いに握手を交わし、その場を終えた。

それから一週間、私達はアマチュアとして最後のライブを行った  
ために急遽、顔見知りのライブハウスに頼み込んでイベントを行う事  
にした。参加するバンドは私達と関わり合いの多かつたバンド、人  
達を選んだ。師匠にお願いした所、師匠も仲間を呼んで参加してく  
ださる事になつた。そして、コンテストで出会つたあのバンド、小  
学生ギタリストのいるあのバンドも出演してくれる事になつた。  
そして、ライブ当日・・・・・

「良ー真美さん、増田ーおめでとう、と言いつつ悔しそう。お前ら  
が遠い所に行く気がしてならないぜ。」

「そんな事無いよ。取り敢えず今日は楽しもつよ、小倉もライブハ  
ウスデビューなんだしね。」

お祝いの言葉を言いながら悔しがる小倉に私はそう言葉をかけた。  
小倉も今回のライブに出演する。これを機に外の事を知つてもらい  
たいという思いがあつたからだ。

「ああ、頑張るぜ！ それじゃあちょっと行くわ。」

小倉は私の元を離れ、外に出て行つた。内心、緊張感でいっぱいな  
のだろう。私が声をかける事は容易い、だが小倉が自分で乗り越え  
る事こそが大事だと思い私は何も言わなかつた。

ライブは無事に成功した。私達三人の最後のアマチュアのライブが終わった。

打ち上げも終わり、私は師匠と一緒に近くの居酒屋に入った。

「良、二人だけだからちょっと真面目な話をしようじゃないか。」

カウンター席に付き、日本酒を呑みながら師匠は言った。

「良は解っているだろうが、これはゴールじゃない。スタートだからな。そこを履き違えないようにしておけ。」

私は頼んだソフトドリンクを一口も飲むこと無く、師匠の話に耳を傾けていた。

「今はCDが売れない時代だ。お前らは苦労を強いられるだろう。だがそんなの会社には関係ない。お前らに価値がないと判断したら契約延長しない、最悪打ち切りだ。お前らは解散をするか、会社の言う通りに誰かがソロとしてデビューするか……間違い無くお前が切られるだろう。嬢ちゃん一人はアイドル顔負けのルックスを持つている。そんな奴らを逃す手はない……まあ、解るとおり結果が求められるんだ。」

「そうですね。確かに結果が全てだと。でも、僕はこのバンドが売れるって思うんですよ。理由なんかありません。僕の感がそう伝えてるんです。だからと言って努力を怠る気にはなりません。師匠、

僕はいざれレベルを創りたいんですよ。理想は自分達だけの、どこかのメジャーの傘下でも構いません。そのためにも、こんな所で燻っている訳にはいかない。だから絶対に結果を出しますよ。」

私の感が必ず成功する、そう言つてゐるのだ。真美と江利子、この二人が売れないわけがない、と。根拠なんてどこにも無い、ただそう思つだけ。説得力は全く無い。だけど、私は信じてみたいと思う。そして、いづれは自分達のレベルを立ち上げ自由に創る。そのためにも私は大学で経営学を学びたいと思う。レベルで実務等を経験する、学ぶ事をしつつ、知識を増やしていきたい。それが自分達で会社を経営するに当たつて必要になるだろうから。それを師匠に伝えた。

師匠は、私の決意と言葉に対し、

「最高だ。最後は自分の心で決めるんだ。おまえのここがそう言つなら間違いないだろう。頑張れ、絶対にお前らなら成功する。その時は約束忘れるなよ?」

笑いながら答えた。胸に手を当て、叩きながら。私も笑みを返し、

「来年の夏、ジャパンロックフェスで会いましょう。」

そう言い返した。私と師匠は互いに乾杯をし直した。グラスと猪口、大きさの違う二つの杯が重なる音が響いた。

今回も読んで頂きありがとうございました！

え～っと、ようやく二人のフルネームが出ましたね。稻葉真美と  
増田江利子。こんな可愛らしい名前です。そして、バンド名決まつ  
てません！！！アハハ、どうしよう。何かいい名前ないかな？

それにしても暑いですね。皆さんも熱中症には十分気を付けてく  
ださい。あれはきついです。私も昔部活動で味わったことがあるの  
ですが、死にそうになりました。適度に水分と塩分を摂取してこの  
夏を乗り切ってください。

では、今回も読んで頂き誠にありがとうございました。

## 外伝？ やうやくの転生者の場合？（前書き）

だいぶ時間が置いてしまいました。今回の外伝はだいぶ話が違います。良が出る事もありませんし、匠が出る事もありません。日本が舞台でも無くなります。まだまだ全然話が出来上がっていないのでこれからどうするかは決めてませんが、漠然と最後の方は元から決めています。ただ、学園モノではないのでどうなるか……。

まだまだ良達の方は終わりまで書いていないので続きますので、そちらを楽しみにして下さっている方はこの話が合わなくてどうか見切らないでください。では、宜しくお願ひします！

## 外伝？ わらじで別の転生者の場合？

何故、僕は生れて来たのだろう。家族からは出来そこないと言わ  
れ、学校ではクラスメイトとはなじめずに、仲の良い友達どころか、  
皆は僕の事を嫌っている。嫌っているという表現が正しいのかどう  
か解らないけど、色んな人に虐げられている事だけは事実だ。何が  
そんなに僕をこんな苦しい状況に陥らせているのか、見た目が悪い  
から？ 勉強も運動も出来ないから？

そんなに・・・・・持つて生まれた物だけで人の人生って決ま  
るものなの？ そういう風に人生って出来ているの？ だったら、持つ  
て生まれてこなかつた人は他の人に虐げられるために生まれてきた  
の？

「アハハ。でさー、昨日のあれだけど。本当に面白かつたんだよ。  
「マジで？ 見逃しちやつた～・・・・・あいつまだ学校に来て  
るんだ。よく平氣でいれるよね？」  
「ほんとほんと！ 私だつたら自殺するし！」  
「だよね～。」

僕がクラスに入るやいなや、それまで世間話をしていた女子が僕の  
話をしてきた。わざわざ僕に聞こえるか聞こえないかくらいの声で  
話している声を聞いていると、僕だつて嫌になる。人は慣れる生き  
物だ、とは言うけど僕には全然慣れる事なんか無い。

自分の席に着き、座ろうとした時、

「つ！」

机の上に落書きが書かれていた。消えない問題になるから鉛筆で、  
机一面に僕の悪口を。それを消しゴムで必死に消している間も、周  
りの人からの声が聞こえる。

何で学校に来てるの？マジきもいんだが。  
死ねばいいのに。あいつって生きてる価値あるの？

何でここまで言われなきゃいけないんだろう。僕が君達に何をしたというのだろうか。僕は君達に関わらないようにしてきたじゃないか。なのに何でここまで言われなきゃいけないの？

「おい。」

誰かに呼ばれた気がして、僕は消しゴムで消すのを止めた瞬間、  
「てめえ、何キレてんだよ！」

机事、僕は蹴られた。

「お前何キレてんだよー！ザーンだよ。学校に来るなよー。」

「アハハ。そうだそうだーー！」

「死ねよ。」

周りが僕を死ねとはやし立てる。なんでこんなに・・・・・・・・こん  
なに僕は酷い目に遭わなければならぬのだろう・・・・・・・・

その日の夜、僕は自らの命を絶つた。

「ハル様、夕食の時間でござります。」

「解つた。」

召使いの言葉に僕は読んでいた書物を閉じ立ち上がり、その足で食卓へと向かった。

長いテーブルに所狭しと置かれた料理を目前に、僕達は食前のお祈りをする。それを済ませると、召使い達がそれぞれの料理を皿に盛り、飲み物を僕達に注いでくれる。僕はそれを静かに、食器の音を立てる事無く口に運ぶ。美味である。専属の料理人達が腕を奮うのだ、万が一、僕達の誰かが口に合わない等と言えばそれだけで首になる。神経の一つ一つを張り巡らせ、慎重に作らなければならぬ。一流シェフのそのような料理が不味い訳が無い。

だが、

「ハルお兄様、今日のスープは少し微温くありません?」

妹のセリアの言葉に辺り一面の空気が凍る。これを良しとしない考え方を父様と母様が思えば最後、スープを作った料理人、もしくは運んだ召使いの気遣いが無いと判断され処刑される。

「セリア、このスープはね、これくらいの温度が一番味が良くなる

んだよ。それに僕も母様も父様も熱いスープは苦手だからね。」

「そうなのですか。お兄様は物知りですね。」

僕の言葉にセリアはほほ笑みながら口元をナップキンで吹いた。召使い達は表に出さずとも、安堵したのだろう。母様と父様も何事も無かつたかのように食事を続いている。

僕のいるこの家は侯爵家、要は貴族の中でも比較的高い地位にある家だと思ってくれてもいい。何故僕がここにいるのか?という事は解らない。僕はある日確かに死んだのだから。だから僕の今の名前はハル、ハル・クラリス=コンチエス、クラリス家の次男であり。・・・・・要するに良い所の坊ちゃんって事だ。僕が生きているこの時代は封建制度であり、前に暮らしていた時みたいに民主主義、平等なんて言葉は無い。生まれながらに全てが決まっている人が大勢いるのだ。僕みたいに良い所で生まれたのならば色々出来るかも知れない。それでも自由に、なんて出来ないだろうけど。

僕より歳上の人達が頭を下げて様付けして呼ぶ、最初は違和感しか感じなかつたのだけれど段々と慣れていく、今では当たり前となつてしまつた。こうして、自殺をしたのに何事も無く、むしろ前よりも良い身分で生まれ変わる事が出来るなんて夢にも思つていなかつた。今、身分が下の者達が僕を見て侮辱的な言葉を並べただけでそいつは首が飛ぶだろう。前に生きていたあいつらが侯爵よりも上の地位にいるわけが無い。せいぜいいたとしても農民だろう。まあ、一生会うことも無いだろうから復讐する事は出来ないのだけれど。

「お兄様、いらっしゃいますか?」

セリアの声が廊下の方からしたのと同時に扉が叩かれた。僕は扉の前まで行き、扉を開け

「どうしたのセリア？」

と、声をかけた。セリアは私の顔を見るなり、「お兄様、明日は何をするのか覚えていてます？」

と、聞いた。その様子はさながら遠足前の子供みたくそわそわしていた。僕は一寸考えたのだが、何があつたのか思い出せぬ、腕を組み熟考していたら、

「憶えてないのですね……」

と、溜め息をつき呆れながらセリアは言った。その様子から何か大事な用事があつたのだろうか？と頭をひねっていると、

「明日はお兄様と一緒に海へと行く予定です！お忘れになるなんて酷いです！」

そこでようやく僕は思い出した。確かに一月前程にそのような約束をしたはずだった。僕が勉強やら何やらで忙しかったためにすっかり忘れてしまっていた。

「ごめん！ほら、僕も忙しかったから…………でも楽しみにしてたのは本当だよ！」

「本当なのですか？またいつものように学問の事ばかり考えていましたのではありませんか？」

「ち、違うよ！さっきはたまたま忘れていただけだから！」

疑る目で僕を見るセリアに、物怖じしながら僕は答えた。中々苦しい言い逃れだったのだが、

「解りました。明日は楽しみにしています。」

と言つと、セリアは踵を返し、僕の部屋の前から去つていった。

翌朝、馬車に僕とセリア、召使いが一人程乗り込み、僕達は海へ

と向かっていた。約30分程走ると海が見える。僕はこの場所が好きだった。崖を登り、水平線を眺めているだけ、これだけなのに何故か心が洗われるような気がしてならなかつた。ボーッと崖に腰掛けながら眺める、たまに海鳥の鳴く声が聴こえ、崖下を覗き、それだけをするだけだった。いつからかセリアも来るようになり、一緒に会話をしながら眺める事が多くなつた。

「もう少しでお着きになります。」

馬車の中から外を見ると、既に海が見えていた。もう少しで着く、そう思つていた時、馬車の中が大きく上下に揺れだした。

「――！」

体が大きく揺さぶられる、中に置いてある物が大きな音を立て崩れ落ち、割る音がする。召使いの人達は必死にセリアと僕を覆いかぶさるようにして抱きしめる。何か大事が起きても僕達に問題が無いように。上下していた動きが左右にも動き出し、その度に僕達は中で大きく揺さぶられた。僕を必死に抱きしめている体が中の側面に勢い良くぶつかり、僕は体を投げ出された。その衝撃のせいなのか、何かで反対側のドアが開かれてしまった。そして、その方向に僕の体が勢い良く放り出され、ドアの隙間から僕は外に飛び出た。

「ハル様！――！」

地面に着いても大怪我をするのだろう、そう考えていた。

だが、僕の体は地面に着く事が無かつた。

僕の体は地面に着く事無く、崖下へ向かつて落ちていった。

外伝？ わらじ屋の転生者の場合？（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございました！

え～、だいぶ違う設定、内容、話なのでお見苦しいかもされません・・・・元々の方も酷いんですけどね。

前書きでも書いたように、これはある意味博打です。超博打です。1000円札を持って慶次の等価を打つような感じで書きました。ですので、宜しければ感想等私に書いてくださいましたのならば嬉しいです。学園物、って登録において学園物じゃないのを書いてしまったので問題もあるんでしょうかなど・・・・あ、近日中には良の方は確實に書き上げたいと思います。もしかしたら匠の方になるかもりませんけど（笑）

それでは、今回も読んで頂き誠にありがとうございました！どうか、この話も書き続けていけるようになつたのならば嬉しいです！

## 外伝？ わら元の転生者の場合？（前書き）

と言つ事で外伝？の？です。結構間際らしいですね。そういうえば、夏祭りに行つた時にカップルが物凄く目につきました。同年代の友達もほとんど異性と付き合い、皆カップルで夏祭りに向かいいます。ああ、良いな。私もいつかはカップルで夏祭りを、防波堤で一緒に花火を・・・・・と思う気持ちよりもカップル爆死しろつて気持ちの方が大きかったです。人として最低だと感じて泣きながらたこ焼きを食べていました。

まあ、それだけなんですが・・・・・と、言つ訳で今回も宜しくお願いします！皆さんのが楽しく読んで頂けたのならば幸いです。

## 外伝？ わらじ別の転生者の場合？

ああ、また僕は死ぬのか。

前世で自ら死んだんだ、その罰当たりなかも知れない。あの悪い環境を抜け出すために死んだ事、環境を変えようとしなかつた事、逃げ出した僕への報いなのか？ならば何故この家に生まれたのだろうか？記憶を残し、時代は違うと言えど望んでも手に入らない境遇に生まれて。

水面に背を向け少しづつ落ちていく、自分の体がスローモーションのように落ちているかのように感じる。この高さから落ちたら死ぬだろうな、運良く生きていたとしても五体満足では生きれないんだろうな、そのように頭の中で考えられる程、ゆっくりと、少しずつ落ちているように体感していた。下を見るともう少しで水面に着く。セリアや召使いたちは大丈夫だつたのだろうか？今更彼女たちの心配をする僕は人思いじゃないのかも知れない。

ゆっくりと、ゆっくりと体は落ていき、ついに水面に僕の体は接触した。その瞬間、今までの遅い体感速度からいつも通りの速度に戻った気がした。背中から伝わる物凄い衝撃に、痛みを感じる前に、僕の意識は手放す事を選択した。

音が聴こえる、纖細な音色で澄み切るような音が。こっちに来てから聴いた事のある楽器の音色だ。なんだつたつけ？その音が徐々に鮮明に聴こえるように感じた時、僕は目を開けた。体を起こそうとした時、

「・・・・・・・・・」

体中に痛みが走り、僕は起きあがるのを止めた。そうだった、僕は崖から落ちたのだった。でも、痛みがあると言う事はここは天国では無い。どうやら僕は生きのびる事が出来たみたいだ。何故生きれたのかは解らないが。目線を足元に向けてみようと頭を起こす。多少痛みを感じるが、先程のように激痛を伴なう事は無かつたので無理やり頭を起こした。体の上にシーツが被せられ、その膨れ上がりを見るはどうやら五体満足のようだ。手足が動くかどうかは現状では試しようが無いが。そう思っている間にも何かの音色は聴こえてくる。室内に響き渡るその音は空氣感を持ち、エコーがかかっているかのように聴こえる。

「ああ、この音はオルガンか。」

教会に行けば修道士が礼拝のために演奏しているのを、稀にただ弾いているだけを目撃していた。そのオルガンに似た音色。音量、体に響く音色は違うのだが、これは間違いなくオルガンの音である。だが僕の家にオルガンは無い。昔に比べて小型化され、貴族の、僕の家のような身分なら持つ事は可能なのだが、楽器を演奏する事は父の考えにそぐわないらしく、置かれていないはずだ。首だけを回

し、辺りを見渡すと、この部屋は自分の知らない部屋である事が見受けられた。僕の家にこんな質素で狭い部屋は召使いたち用である。間違つても僕がそのような場所で寝かされる事は無い。ならば、あから僕は誰かに拾われたのだろうか？

「あら、ようやく目を覚ましたのですね。」

声が聴こえた方を向いた先にいたのは、修道服を身に纏とい、手に布巾とボウルを持っていた若い女性だった。

「僕はハルと言います。失礼ながら貴方のお名前を。それにここはどこですか？」

「私はマリーと言います。ここはですね、小さな教会なんですが、身寄りの無い子供達を預かつて育てるもいるんですよ。だからハル君を海辺から運んでくれたのもこここの子供達なんです。」

マリーさんは僕の問いに笑みを浮かべながら丁寧に答えてくれた。身寄りの無い子供、それは恐らく捨て子や戦争孤児なのだろう。貧しい家庭だと子供を育てるはおろか、自分達の食い扶持だけで精一杯という所も少なく無い。そんな家庭では子供を捨てるという事は在り来りである。それ以外にもつい最近までこの国は隣国と戦争をしていた。近代のように大多数の質量兵器、多数の戦死者を出す事はなくとも、いつだって戦争の被害を被るのは民である。なるべく戦地は市街ではなく、平原等広い場所を使われるのだが、運悪く農民等が巻き込まれる場合がある。逃走兵等により村を焼かれる、壊滅させられるという事も珍しく無い。幸いにもこの国は負けていないのだから敗戦国ではないので国民は酷い扱いにはならなかったが、相手国側はどのような事をされているのか考えたくもない。

「そうなのですか。その子達に僕はお礼をしなければなりませんね。・・・・・っ！」

寝たままで受け答えするのは失礼に値すると思い体を起こそうとするのだが、体中の痛みに顔が歪む。それを案じてか、マリーさんは優しく、

「体を動かさない方が宜しいですよ。貴方の体は重症なのですから。

お医者様にお見せした時に一月は安静にしていなさいと言われました。貴方が運ばれてからまだ半月程しか経っていません。決して無理をしてはなりませんよ。」

僕に言い、ベットに歩み寄ると手にしていた物を机の上に置いた。マリーさんの言葉通りだと、僕はあれから半月ほど眠つていた事になる。その間看病や身の回りの世話をして下さった事を考えると感謝してもしきれない。

「半月もお世話になつてましたのですか？それは誠に申し訳ございません。このご恩は必ず返させてください。」

「いいのですよ。何があったのか存じ上げませんが、神様が貴方を救つてくださつたのです。ならば私が貴方を看病する事は決まっている事なのです。感謝をするのなら神様に感謝しなくてはなりませんね。」

胸の前で十字を切り、マリーさんは両手を合わせて祈つた。その姿は修道女に相応しく、堂々としていた。その様子を見ていたら廊下から足音が近づいてくるのが聽こえた。足音がすぐそこまで聞こえると、勢い良くドアが開かれ、

「シスター！…あと少しでお祈りの時間ですよ！…急いで下さい！…！」

黒髪を肩くらいまで伸ばし、マリーさんと同じような修道服を見に纏つた活潑そうな少女が入ってきた。走つてきたのか肩を上下に揺らし、息を乱しながら。

「シャロン・…………何回言えぱいいのですか？少しは淑女としての嗜みを…………それにこの部屋には患者がいるのですよ？」「でもシスター！」

「でもじゃありません。ハルさんのお身体に差し支えたらどうするのですか？元気があるのは良い事ですけど時と場所を考えなさい。」「優しく諭すように言つていいつもりなのだろうが、それが余計に怖く感じる。人によつては起こつた時は怒鳴るよりも静かに喋る方が怖い人がいる。マリーさんはまさにそちらのほうだらう。シャロン

と呼ばれた少女も段々と顔の色が青くなつていいくのが田に見えて解る。

「シ、シスター・・・・・・」

「シャロン、私はもう少ししたら行きます。必ず時間には間に合いますから安心してください。さあお行きなさい。皆をしつかりとまとめるのですよ?」

マリーさんは彼女に歩み寄ると田線を同じにして言つた。先程までの優しさの中に怖さがある物言いでは無く、全面的に優しさのみが伝わる。彼女もそれが伝わったのか、表情が明るくなつた。

「はい!」

「それじゃあ部屋を出る前にハルさんに一言謝りますよ?」

「はいシスター。騒いでしまってごめんなさい。」

優雅さが少し欠けるものの、誠意のこもつている事は伝わる。僕は気を悪くする所か、全然きにしていいのだからそこままでしてもらう事は無い。

「全然大丈夫ですから。早く礼拝所に行つて子供達の所に行つてあげてください。」

「ありがとうございます!」

彼女は元気よく頷くと駆け足で部屋を去つて行つた。

「ああーもうあの子は・・・・・お見苦しい所をお見せしましたね。」

「いいえ。元気があるのは良い事ですよ。なんだか年寄りくさい物言いになっちゃいましたね。」

「私もハルさんもまだまだこれからの人ですよ。ハルさんはシャロンと同じ位の歳に見えますよ?」

ほほ笑みを浮かべながらマリーさんは答えた。マリーさんの歳が非常に気になるところだが、女性に歳を聞くのは失礼な行為だ。それに、何気なく聞いて怖い事にでもなつたら、

「ハルさん? もしかして私は若く無いなんて思つていませんか?」

「い、いいえ! そんな事は

当たらずも遠からずな事を急に聞かれて僕の声はうわずってしまった。マリーさんを見るとさげすむような視線を僕に向けていた。その視線に狼狽えていると、

「もう、私はこう見えてまだ23ですよ？でも主に身も心も捧げているので駄目ですよ？」

そう言うマリーさんは修道女と言つよりは歳相応の女性が垣間見え、僕は少しだけ心がときめいてしまった。

部屋に微かに聴こえる賛美歌の音色に耳を傾けながら窓の外を眺めていた。陽射しが部屋に入り、風が室内に流れてくる。その風の心地良さと綺麗な歌声を聴いていると心が洗われるようだった。

「セリアや皆は大丈夫なのかな・・・」

僕だけが運悪く、ならばそれにこした事はない。不慮の事故で命を落とす事は無念過ぎる。それにいくら人はいつか死ぬと言つても出来る事ならば幸せに見守られながら死んで行ってほしい。

「早く動けるようになるまで回復しないとね。」

父様や母様の事も気がかりだ。半月も経っているのだからもう僕は亡くなっている人かも知れないと、どうにかして二人に元気な姿を見せてあげたい。

僕はクラリス家の事を話し、父様に僕の安否を伝えて欲しい旨を喋つた。マリーさんは快く承諾して下さり、一番近くの修道院から伝書鳩を飛ばしてくれる事になった。

「本当に迷惑をおかけしてすみません。」「主に使える身としては当たり前ですよ。」

僕が田を覚ましてからさらに半月が経過した。身体の方もだいぶ良くなり、日常生活に支障がきたくないくらいに送れるようになるまで回復した。子供達の世話をしたり、文字や勉強を教え、マリーさんの手伝いをして日々を過ごしていた。

「ハル～！今日は何のお話してくれるの～！？」

「お話よりも僕達と一緒に遊ぼうよ～」

「遊ぼう～。」

「先にシャルとアンとセシリーにお話をしなきゃいけないんだ。それから遊ぼうね。」

子供達も僕に懐いてくれたので、暇の無い日々だった。女の子達はお話や勉強事に興味を示してくれて、僕の話す内容は小さい子以外にも、シャロンやマリーさんまでも興味を抱いて聞いてくれる。男の子は体を動かす遊びが大好きなので、あまり一緒に遊んであげれないが、徐々に体が動いてくれるようになるにつれて様々な遊びを教えたり、一緒に行うようになった。

椅子に腰掛け、前世で読んだり、聞いたりした事のある物語を僕は女の子達に聞かせた。僕の話を聴いている時の女の子達の顔はとても楽しそうで、喋っている僕の方が嬉しくなる。

「はい、と言う事でここまでだよ。続きは明日かな?ちゃんと皆がマリーさんのお手伝いを頑張つたら話すよ。」

「解つた!私、シスターのお手伝いいっぱい頑張るよ!」

「私も!」

「私も頑張る!」

僕の言葉に元気よく返事をして、彼女達はマリーさんの元へ走つていった。こうして皆が手伝えばマリーさんも仕事の量が減り助かるだろう。それに、マリーさんは子供達と一緒にいるのが大好きな人だ。手伝ってくれるとなると喜ぶだろう。

「ハル、ちょっと洗濯物干すの手伝つて!」

遠くからシャロンが声をかける。

「解つた~。すぐ行くよ。」

椅子から立ち上がり、僕はシャロンの元へと向かった。今日も天気が良い。選択を干すには最適な日和だらう。

洗濯物を干していると、

「ありがとねハル。ハルが来てから皆楽しそうだもん。」

シーツを木に干しながらシャロンが言った。

「ううん。僕も楽しいから。」

「私もハルのお話楽しみにしてるんだからね。」

「ありがとう、シャロン。」

「シャロンお姉ちゃんでしょ!?私の方が歳上なんだから!~」

他愛も無い話をしながら僕とシャロンは洗濯物を干していく。実はシャロンは僕よりも一個上なのだ。それが解るやいなやシャロンは僕にお姉ちゃんと呼べと言つようになつた。僕はこれまで姉を持つ事が無かつたのと、照れからお姉ちゃんとは言い辛くてあまり言わないようにしている。シャロンは呼んで欲しいのか呼び捨ての時は口ずっぱく僕に指摘してくる。でも、口では言えなくても僕の

中でシャーロンは姉的存在になつていつたのが解つた。

「シャ、」

「お姉ちゃん！」

「お、お姉ちゃん。」

「うん！な？」「？」

「ひひ生活つて楽しいね。」

翌日、クラリス家からの伝書が届いた。



“ クラリス家のハル・クラリス ” コンチエスは既に亡くなつており  
この世に存在しない。よつて、そちらにいるハルと名乗る人物はク  
ラリス家とは一切関係無い人物であり、当家には関わりは無い。 ”

## 外伝？ わざわざの転生者の場合？（後書き）

読んで頂きありがとうございました！

ええ、結構急展開という形で作ってみました。どうなるかは・・・。  
・・・どうなるんでしょう？ そう言えば、三万PV達成しました  
！ 本当に皆さんありがとうございます！ 一日だけ物凄くアクセス数  
が多かったので何でだろう？ って思つたらこじりやない投稿サイト  
の検索の方で名前が挙がつてたみたいですね。正直、めっちゃ嬉し  
かったです！ あのサイトを常日頃利用している自分にしたらめちゃ  
くちゃ嬉しかったです！ 本当に皆さんありがとうございました。  
と書つことで今回も読んで頂き誠にありがとうございました！

外伝？ やりて型の転生者の場合？（前書き）

はい、？です！何とか書けました！

そう言えばフルメタの最終巻、ようやく読み終えました！素晴らしいですね、そして賀東さんはやっぱり凄い！あと緋弾のアリアの最新刊も、来月は境界線上のホライゾンとE.Sの新刊が出るとか……めっちゃ趣味の事ばかり書いてしまいましたけど、頑張って書きました。今回の話も皆さんが楽しく読んで頂けるように頑張りました。それではどうぞ宜しくお願いします！

外伝？ やうて別の転生者の場合？

「クラリス家のハル・クラリス＝コンチエスは既に亡くなつており  
この世に存在しない。よつて、そちらにいるハルと名乗る人物はク  
ラリス家とは一切関係無い人物であり、当家には関わりは無い。」

クラリス家の正式な返答内容。要するに、僕はもうハル・クラリ  
ス＝コンチエスでは無い。ならば僕は誰なのか？僕はハルでは無い  
のか？この世に存在しない人物、存在してはいけない人物。

「ハル君……」

ハルとは一体誰なんだ？ハルは僕ではないのか？今ここにいる僕は  
一体何者なんだ？

「ハル？」

「……はは、僕はハルじゃ無いんだ……ハルじゃ……無いんだ……」

僕は誰なの？ねえマリーさん、シャロン、ハル・クラリス＝コンチ  
エスはもう死んでいなくなつてゐるんだってよ。おかしいよね。僕は  
生きてるのに……でもクラリス家には僕の居場所は無いんだって。  
僕の中にあつた何かが失われて行く。クラリス家の屋敷で過ごした  
日々が、生活が、全て頭の中に流れては消えて行く。母様から生ま  
れた日の記憶も、兄様達と遊んだ記憶も、父様から学んだ記憶も、  
召使い達にお世話をもらつた記憶も、セリアと一緒に観た海の景  
色の記憶も。

「ハハハ、僕つて……僕は……ぼ……」

足が、体中に力が入らない。立つていられない、それに体の内面か  
ら何がが沸き上がつてくる。抑えきられない、胃から食堂を通り、  
喉を伝つて何かが逆流する。駄目だ、吐き出しちゃ駄目だ、全てが、  
僕の生きてきた全てが吐き出される気がする。絶対に吐き出しちゃ  
駄目だ。吐き出したら……

「……う……ー……ー……ー……」

「ハル！しつかりして！」

……駄目だ、今吐き出してしまつたら何もかもが失くなる。そんな  
事になつたら僕は、僕は僕でいられなくなる！でも口からは何かが  
吐き出される。吐いちゃ駄目なのに、駄目だつて思うのに体が言つ  
事をきかない。辛い、胃から云つて来る物が出るのが辛い。辛い、  
吐く度に息が出来ずに咳き込むのが辛い、辛い……

ハルの家から伝書が届いた。丁度、お昼寝の時間で私とシスターとハルしか起きていなかつたので、シスターが伝書を受け取り、それを読んだ。

ハルの家は大貴族らしく、家の方が心配しているかも、と言う事でハルがシスターにお願いして伝書を出した。私達は帰る場所はここだけ、ハルにはハルの帰る場所がある。それはとても良い事であると同時に、いつかは別れなければいけない事に子供達やシスターも寂しさがあつたと思う。もちろん私も皆と同じように寂しく思つた。

「でも、ハル君には家族がいますからね。シャロンにとつての私みたいな人がいるのですよ。寂しいですけど我慢しなければなりませんよ。」

シスターはそう言つけど、本当は一緒にいたいんだと思う。私よりも下とは言つても体は大きいし、男の子が手伝ってくれるのは大きい、何よりも一緒にいて楽しいはずなのだから。

シスターが伝書を読み終え、ハルが自分にそれを読ませて欲しいと言つた時、シスターは難しい顔をした。まるで見せたく無いような、ハルに伝書を渡したくなさそうな複雑な顔をしていた。私はそれがここに来てハルがいなくなるのが嫌なのかなって思った。ハルがこれから的事もあるから、と言つて無理やりシスターの手から無理やり取つて読もうとした時、いつも凜々しく、優しい表情のシスターが悲しそうな、泣きそうな顔を表に出した。私はその顔を見て、それまでのハルがいなくなる事が嫌なのではなく、伝書の内容をハルに見せたくないのだと確信した。

ハルが伝書を読んでいる間、シスターは酷く狼狽しているように見えた。そろそろ読み終えてもいい頃なのに、ハルは一向に伝書から目を離さない、何回も、何回も読み直しているように見えた。目の動きが止まつても、暫く伝書から目を離さなかつた。その時間がとても長く感じた。いつまでたつてもハルは顔を下にしたまま、伝書を持ったままだつた。私は堪らず、ハルの名前を呼んだ。ハルの様子を探るように、か細い声で。続いてシスターも名前を呼んだが、その声は私以上に細く、小さい声で、私よりもハルの様子を伺うような、心配しているように聞こえた。するとハルは肩を小さく揺らしながら、

「……はは、僕はハルじゃ無いんだ……ハルじゃ……無いんだ……」

僕は誰なの？ねえマリーさん、シャロン、ハル・クラリス＝コンチエスはもう死んでいなくなつてるんだつてよ。おかしいよね。僕は生きてるのに……でもクラリス家には僕の居場所は無いんだつて。最初は咳きながら、そして、私達の方を見ると自分はハルじゃ無いと言つた。嘲るよつに笑い、目が血走り、狂氣じみた表情を浮かべ

ながら静かに喋つた。私はそんなハルに、何も言えずに、ただただ  
啞然とするしか出来なかつた。

でもこのままじゃハルが壊れしていく、大事な弟があの時みたいに  
また失われる！そんな事は絶対に嫌だ！そう思いハルに何か言おう  
とした時、

「……う…………！」

ハルは苦しみだし、その場に膝を着くと同時に口を手で押さえ下を  
向いた。

「ハル君！」

シスターが慌ててハルの元に駆け寄る。その間にハルは手で抑えき  
れないほど口から物を吐いた。シスターがハルの背中をさすり、必  
死に呼び掛けながら介抱する。また、また私は弟を失つてしまふの  
？苦しんでいる弟を見殺しにしちやうの？

「いや……」

嫌だ、そんなの嫌だ、弟が、ハルが死んじゃうなんて嫌だ、そんな  
の絶対に嫌だ。嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ！何で？どうしてハルが苦しま  
なくちゃいけないの？どうして私達ばかりこんな思いをしなくちゃ  
いけないの？どうして？ねえ、神様どうして？私、ちゃんと毎日お  
祈りしてるよ？なのに何でハルはこんなに苦しんでいるの？ねえ、  
どうして？どうしてなの神様？どうして私の弟はいつもこんな目に  
遭わなくちゃいけないの？ねえどうして？……どうして！…………

「シャロン！――！」

シスターの怒声で私はハツと我に返った。シスターの方を向くと、ハルの背中をさすりながら私の目を見て  
「急いで水を汲んで来て！それとベットの準備を！ハル君は必ず助かります、だからしつかりして――！」

「は、はい！」

私は急いで水を汲みに井戸へ向かつた。ハルが死ぬ訳では無い、今は精神に負荷が荷重に掛かっている状態だ。部屋を出る時にチラツと見た時ハルは気を失っているようだった。ならばハルが次に目覚めるまできちんと整えてあげてそれからハルの心を直していけば良い。ハルはまだ死んでいないんだ、私に出来る事はこれからまだまだある。今ここで愚図愚図している場合じやないんだ。

ハルの身体を綺麗にし、着替を行つた後私とシスターでハルをベットに寝かせた。段々呼吸も安定していき、どうにか一段落着いたみたい。ただ、ハルが目覚めた時にどんな行動をするか解らない。その時に側にいて、落ち着かせる事が最も重要で、私が最も頑張らなければならない事。

「シャロン、ありがとうございます。」

「いえ、私も気が動転してしまいシスターに迷惑を掛けましたから。」

室内の空氣は異様なまでに暗い。幸いにもちつちゅい子達はお昼寝

の時間だったからこの事を知っているのは私とシスターだけだ。あの子達には何とか有耶無耶にしておける。ハルのさつきみたいな様子を見せたく無い。

「シャロン……貴方も辛かつたのですよね？それなのに怒鳴つてしまつてごめんなさい。」

シスターは私に申し訳なさそうに謝った。私の事は小さい頃から知つてゐる、ここで生活した事も、ここに来る事になった経緯も。だから謝つているのだろうけど、

「いえ、シスターが謝る事じゃないですよ。ちょっとシェーンと重なっちゃいまして……もう何年も前なんですけどね。ハルつて、シェーンと同じ年だったから余計に……だから本当は誰より早くハルの元に駆けつけなくちゃならなかつたんです。」

私はシスターに精一杯の笑顔を向けて言つた。そう、本当ならば動転している場合じやなかつた、シスターよりも早くにハルの元に駆けつけて介抱しなければならなかつた。私がお姉ちゃんなんだから。「シャロン……」

シスターは私に近寄ると、私を抱き寄せた。シスターの胸の間に私の顔がうずくまるように、優しく、優しく頭を撫でられながら。最初は驚いた。だつて私はここにいる子達よりもお姉さんで、一番しつかりしなければならないんだ。それが、小さい頃のようにこうされるなんて。でも段々と心が落ち着いてくる、シスターの温もりが伝わる、慈悲深く、全ての者を包むこむような。マリア様がもし今この世界にいらっしゃつたのならばそれは、それはシスターなのでは無いだろうか？

「シスター……シスター…………」

シスターに抱きしめられ続け、何かが肩から降りたように感じた時、私は叫ばずにはいられなかつた。胸の中で叫びながら、シスターと叫んでいると、私の中から悲しみが外に溢れでた。いっぱいいっぱい涙が溢れた、いっぱい悲しさが込み上げては外に出て行くように感じた。

「主よ、どうかこの子達に仁慈加護を……」

私はシスターにじがみつきながら、気が済むまで泣いた。

「シスター…………！」

シャロンが私の胸で悲しみを吐き出している。シャロンの辛さ、悲しさは私以上でしょ。小さい頃に戦争で家族と弟を無くして、行く宛の無かつたこの子を拾つた経緯を考えれば、シャロンにとって家族を失うのはどれほど辛い事か、家族が傷つく事がどれほど辛い事か。シャロンにとってハル君は本当の弟、シェーン君と重なったのも無理の無い事です。歳が同じだけでは無かつたのでしょうか、どこかハル君はシェーン君と似ていたに違いありません。シャロンがハル君に顔を真っ赤にしながらお姉ちゃんと言われた時、シャロンの顔はいつもより輝き、笑つているように見えました。

ここ暫く、シャロンがこんなに泣いている姿を見たことがあります。誰よりも私の手助けをしてくれて、子供達の面倒を見て、しっかりと皆のお姉ちゃんの役割をするシャロンの泣き顔を。しかしよつと、誰よりも強くあらうとするシャロンは、今日の様な事がまた起きたらきっと今のように誰よりも悩みを、悲しみを胸に抱え込もうとするでしょう。それではいつかシャロン自信が壊れてしまします。そうならなによつに、私が修道院にいた時、悩みを、悲しい事をシスターに伝え心が軽くなつたように、シャロンにとつて私が本当のシスターと思えるようにならなければなりません。

「主よ、どうかこの子達にご加護を……」

この子達はいっぱい辛い思いをしています。主よ、私達を見てくださいといふのならばどうか、どうかこの子達に祝福を、ご加護をお与え下さい。この子達に幸せが訪れるよつに、この先笑つて暮らせるよつに。主よ、どうかこの子達にご加護を……



外伝？ やりがいの転生者の場合？（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございます！

前書きとあとがきに結構好き勝手書いてますけど皆さん読んでいらっしゃるのですかね？結構気になります。

さて、この外伝、どーんよりと暗い感じで始まり、明るくなつた  
と思いきやまたまた暗くなる、なんて事でしょう！間違いない精神  
的ダメージは大きいはずです！まあ、こんな感じで書き続けてたら  
良の方をどう書けばいいんだ！と感じてしまつたり。

それではいつもの「とく感想をお待ちしております！  
では、今回も読んで頂き誠にありがとうございます！

遅くなりました……そして、良編再開です。まー、いろいろありましたが、今回も皆様が楽しんで読んでくださいね。では、どうぞ宜しくお願いします！

「良、ピッチがずれてる。ちゃんとオクターブ合わせたのか？」  
「すみません。」

私は急いでチューナーのスイッチを踏み、オクターブの確認をする。ほんの僅かだがGとBのオクターブが高い。僅かな音の違いでも、レコードティングにおいては多大に影響をもたらす。世に出す以上、バンド側、レベル側、共に妥協を許さない。それが商業ラインに乗せて音楽を出す者の義務である。

「確認しました。今度はバツチリです。」「本当か？弾いてみる？」

「はい。」

再度チューナーのスイッチを押し、ギターの音が出るようにする。そして全開放弦を鳴らした後、それぞれの弦の単音を弾いた。ガラス窓の向こうからエンジニアがOKサインを出す。

「じゃあもう一回。今度こそしつかり決める。駄目だつたらお前はギタリストとしては首だ。」

「はい。行きます。」

ヘッドフォンからクリック音が聽こえ始め、私はギターをかき鳴らした。

「良、ピースなんだけど……あんたのピース入れる？ぶっちゃけ無くても良いような気がするんだけど。」「ああ……じゃあ無しで行こつか。今後は全部歌系は真美と江利子に任せるとよ。」

水を一口飲んだ後に私は答えた。今まで何曲か私もコーラスをする場面があつたのだが、レコードティングしている内に女性陣だけのコーラスでも十分だと感じた。むしろ所々音を外してしまった私を外す方が良いのではと考えていた所だった。

「じゃあ私達だけね。良は後何も無いでしょ? どうする、帰る?」

「どうしようかな……」

「迷うくらいなら残りましょうよ! 皆で一緒に帰りましょう!」

「そうしようかな。じゃあ見ているよ。頑張つて。」

残りは歌物だけなのだが、一応残る事に決めた。

夏休みが終わり、私達はレコードティング作業に勤しんでいた。シングルに出す用にと一曲レコードティングする事になり、一曲は歌を入れるだけで完成という所まで来た。わざわざ曲を作つてからレコードティングと言う訳では無く、既存の曲をシングルで出す事に決まつたのでそこまで時間は掛からない、と思っていたのだが、私以外の一人は始めてのレコードティングにだいぶ手こずつてしまつたようだ。プロデューサーの要求する事に即座に理解、対応する事が難しかつたらしく、二人共最初は戸惑いを隠せなかつた。だが、彼女達の適応力は凄まじく、翌日にはもう要求していた事に直ぐさに答え事が出来ていた。そして、この中で一番時間を使つてしまつたのが私のリズムギターである。スタジオ音源だから音を厚くしてはどうか、と言う事でリズムギターを入れる事にしたのだ。そこまで難しい事をしないのだから私でも大丈夫だろうと思い、プロデューサーに伝えギター録りをしたのだが、私が思う以上に音、ピッチについて厳しく駄目出しされた。そのせいで歌入りするまでにだいぶ時間が掛かつてしまつた。もしかしたら、今後はギタリストを呼ばれるかも知れない。ギターの方も結構自信があつたのだがだいぶへこんだ。

ドラムの方は良くも悪くもいつも通りだつたのだが、そろそろ新

しい金物系に変えなければならない。ただ、レコードティングやこのバンドに使っている物は安い物ではない、そこそこ値段がはるのが悩みの一つだ。経費として落ちれば良いのだが、世の中そんなに甘くは無い。もつとも、有名になるなりしたらメーカーと契約、タダで試供品を貰えたりするのだが……今の私には関係無い話だ。

「良、あのギターだけどよ。次使う時までにメンテ出しておけ。そうじゃ無かつたら今後は二度とお前にギター弾かせないからな。」ギター録りが終わると同時に、プロデューサーは私のそう言つた。ギタリストの方も何とか首にならずに済んだようだ……何とかではあるが。

「明日学校か……てか、そろそろ文化祭だね。もう出れないのかな？」

「ま～、言えば何とかなるかもしれないけれど……今回は駄目だろうね。まだレコードティング終わってないし。それに直ぐにアルバムの方もあるからね。」

休憩室で椅子に座りながら私は答えた。数週間後に文化祭が行われる。だが、今回は私達の出番は無い。個人個人ならまだしもバンドとしてならばいささかややこしくなるからである。まだ契約したばかりでかつ、レコードティングも終えていない今の時期に色々な人にこれ以上忙しくさせたくない、との皆の意見で今回は自粛する形となつた。

「そうだ、真美さんも良くんもこれからお時間ありますか？良かつたら家でご飯食べていきませんか？」

「え、いいの？もちろん行くよ！良も行くでしょ？」

江利子の誘いに真美は乗り気で答え、私に問うてきた。だが私は、「ごめん、一時間後に学校でバンド練習なんだ。」

そう答えた瞬間、一人は驚くよつこちらを向き、

「いつのまにバンド組んでたの？」

「何で私を誘つてくれなかつたんですか！？酷いです！」

真美は少し呆気に取られた顔をしながら、江利子はむつとした顔を  
して尋ねて見二。

「いや、その時一人とも大変そうだつたしさ。それに小倉とだよ?」

「でも、メンバーに女人とかいるんじゃないんですか？」

ジト目でそう言つ江利子は本当に怖く感じる。まるで浮氣は絶対に許さないと妻が夫に念を押しているかのようである。最近ますます強気な態度の江利子に少したじろぎながらふとメンバーの事を考えた。私は小倉にバンドでギターを弾かないか?と誘われただけで他のメンバーもやる曲も知らない。

「そういういえは誰とやるとか聞いてないな……」

「ほら！ ゼ~~~~~つたい女の子いますよ！ 先輩にも同学年にも女の子いっぱいいるんですからね！ 小倉くんの事だから絶対入れてますよ！」

湯和子は和の書きに引く手が無い

「..なう」

言いはしないが、解つて いるだろ? と念を押すかの真美の言い様である。顔は笑つて はいるのに目が笑つていなければそのためだろ。二人ともう一人と長年過ごす事によつて目は口程にものを言つ事を身を持つて 知る事が出来る。

「ま、まあ……何も無こと思つよ……うん。」

一人の物を言わない迫力にたじろぎながらも、何も無いであろう事を伝えた。誰でも良いからこの空気をどうにかして欲しい、そう思つてみると部屋の中にマネージャーが入ってきた。

「お、皆揃つてゐるね。今日はお疲れ様へ、次なんだけど来週の金曜日の17時からだね。忘れてないよね?土日はいつも通りの時間ね。

「解つてますよ。」

「はいは～い、覚えてますよ～。」

「大丈夫です！」

「なら良かった。取り敢えず今日はお疲れ様。次からはもう一つの方だけ……それにしてもレコードティングってこんなに早く進むものじゃ無かつたんだけどな～。」

マネージャーの咳きも最もである。新人バンドのレコードティングは一曲だけとしてもこんな短時間で終わるハズは無い。長年活動を続けセミプロ、プロレベルのバンドならいざ知れず、高校生バンドではまず無いだろう。あまりにもレベルが低すぎてプロがレコードイングする場合もある。

「良くんは元々プロでしたしね。」

「良は元より君達一人も十分プロレベルだよ……技術もあって曲作りの才能もあるのか……ほんと、君等みたいなのが上に行くんだろうね……」

マネージャーが若干羨ましそうにこちらを見て言った。元々ミニユーニシャン志望だったそうなのだが、大学時代に自分の限界を感じて諦め、マネージャーになつたそうだ。まだ入社して三年目と年齢が若い分そう思う気持ちは大きいのだろう。

「ま、取り敢えず今日はこれでおしまい！機材は……僕が全部積み込むのか……そしてそれぞの家まで持つて行くと。そうだ、ついでだから家まで送るかい？これから何処か行くんだつたらそこまで乗せていつてあげるよ？俺も会社に戻るし。」

「じゃあ私をまっちゃんの家まで送つてよ！良は学校だつて～。」

「了解。それじゃあ準備が出来たら駐車場まで来てね。」

マネージャーはそう言うと部屋を出て行つた。一度ギター・アンプを車まで持ち運んだ後、私達は帰り仕度を行い、部屋を出て再度駐車場へ向かつた。その後、一足遅れて来たマネージャーに載せられ、それぞれの場所へと向かつた。

「ありがとうございました。それではお疲れ様です。」

「お疲れ様。」

「また明日ね。」

「お疲れ様です！」

一度私の家にアンプを置いた後、私は学校で降ろしてもらい、部室棟へと向かった。部室に入ると私以外のメンバーと思われる人が三人いた。小倉はまだいないが。

「お疲れ様です。」

「お疲れ様。」

「お疲れ。」

「お疲れ様。」

「お疲れ様。」

私の挨拶に三人とも私の方を向き挨拶を返した。三人の内、ベースを持つているのは早瀬と言い、中学の頃に軽音楽で小倉とバンドを組んでいた。なので、早瀬とは接点はあるが、他の二人と私は接点が無い。ドラムスローンに座り腕を組んでいる人は先輩だったと思うが、腕前は良く解らない。最後の一人は……女性だった。マイクスタンド前に椅子を置き、足を組んで座っていた。真美、江利子とはタイプの違う美人だった。確かヴォーカルをしていたのを何回か観たことがある。観客に熱狂的なファンが男女問わずにいたのを見た気がする。この人も先輩のはずである。

室内に入り、ギターアンプの方へ向かおうとした所、

「新堂、小倉は一緒じゃないのか？」

早瀬がベースアンプのセッティングをしながら私に尋ねる。

「いや、僕は一人でここに来たから……」

「そつか。」

背負っていたギター・ケースからギターを取り出し、スタンドに立て掛ける。エフェクター・ケースからシールドを出した所で、そもそも何の曲をやるのか知らされていない事を思い出した。

「早瀬、何の曲やるのか決まってるの？」

私の問いに早瀬はベースの音量を絞つた後、

「聞いてないのか？Coccoの星に願いをとParamoreのMiserly Business、Decodeの三曲だ。あいつ、お前に知りせていないのか……」

呆ながら早瀬は頭を抱えた。Paramoreの一曲は聴いた事があるが、Coccoの方は知らない。それに、聴いた事があるだけで、コピー等していないのだ。つまり、今回の練習においては私は何もする事が無くなってしまう。せめて音源を何回か聴けばそれなりにコピーは出来るのだが、三曲は難しい。

「取り敢えず、早瀬は全部コピーしてきたの？」

「何とか。」

他の先輩達はどうなのだろうか？

「すみません、先輩たちは全部コピーしてきましたか？」

「俺はしたぜ。お前してこなかつたの？」

私は事情を説明すると、ドラムの先輩は腕を組み始め、

「それは小倉が悪いな。でもどうする？」

と言つたので、

「ま～、最悪曲の展開さえ解ればバッキングは出来ると思いますよ。楽譜見ながらでも何とかなる気がしますしね……」

「じゃあ、俺のプレイヤーと楽譜渡すわ。」

先輩から楽譜と、曲の入ったプレイヤーを借り、私は曲を聞き始めた。丁度一曲終わった所で、

「遅くなつてすみません！でも完璧にしてきたんで大丈夫ですよー。」

小倉が汗をかきながら部室内に入ってきた。

「小倉、先輩が十分前に来てるのに遅刻か？」

「す、スミマセン！」

ヴォーカルの先輩に嫌味を言われながらも、小倉は急いでギターの準備に取り掛かった。そして、終えた所で、

「それじゃあやりましょうか！！！」

と、張り切るのだが、私はつい先程曲を知らされたばかりだ。

「小倉、張り切るのは良いが、新堂は何も知らされていないようだぞ？」

「え？」

不思議そうな顔をしてこちらを見るが、本当の事である。イヤホンを耳から外し、

「小倉……僕は聞かされてないよ…………」

私がそう言つと、小倉は「冗談だろ、とでも言いたげな顔をした。が、私や皆の顔を見渡した後、携帯電話を取り出し確認をすると、顔が段々と青くなり、

「「めん……メールが送信わざつてなかつた…………」

と私を見て言つた。その言葉に皆呆れはてた。

「いや……まあ、元から良のレベルなら大丈夫だとは思つたんだよ！な？な？……というか俺が足引つ張つてたしな…………」

練習が終わり、それぞれ片付けをしている時に小倉が私に言つた。最初は私抜きで一度全ての曲を合わせていたのだが、如何せん個々のレベルが高い訳では無いし、初練習と言うこともありバラバラであつた。私も何とか Paramore の Misery Businessだけは覚えて皆で合わせたのだが、私も含め皆の完成度が低かつたために今日はこの曲だけを重点的に練習した。一時間前と比べると少しはましになつたとは思う。他にも小倉のギターの音、リズム帯の合わせ方、ヴォーカルにバンドの音を聴く事を伝える、等指摘をしていたらあつという間に時間が過ぎていつた。

「新堂、時間がある時俺にドラム教えてくれないか？」

「良いですよ。ただ、週に一日か三日位しか無いと思いますけど？」

「それで良い。今日一日でだいぶためになつたと思うし。」

なんだかんだで私も忙しい身である。もうドラム教室に通つてはないが、師匠とのレッスンはあるし、今月はバンド以外にも仕事の依頼が三つ程きている。業界内で私は、私達のバンドのドラマーとしてよりも、高校生ドラマーとしての方が知名度がある。以前と変わつたのは事務所に所属しているか否かである。

「新堂、俺ももうちよいリズムと言うか、グルーブ?の取り方とか教えて欲しいんだ。」

「あ、私もヴォーカルの事を……」

「良!俺もギターの事を今以上に……」

一人良いと言つたがために皆が私に頼り出してきた。非常に嬉しい事なのだが、

「と、取り敢えずその話は部室出てからね。次のバンドの人達待つてると思うし。」

ここで長く居座り続ける訳にもいかないので私は皆にそう促し、片付けを終わらせ部室から出て行つた。

その後、外で私は皆の質問に答え続けた。全てが終わった時にはもう辺りは真っ暗になつており、私は急いで帰路に着いた。

それから小倉達とのバンド練習、師匠とのレッスン、他の仕事、バンドのレコーディングと日々に忙しいスケジュールをこなしていく。忙しい時は何も考えずにただ目先の事を黙々とこなしていくために解りづらいが、充実している証拠もある。時間が経つのが早く、アツという間に過ぎ去つていく。この出来事が私に今以上に良い事をもたらしてくれるはずであるから。

文化祭まで残り一週間を切り、レコーディングの方も無事に一曲

録り終わり、後は編集作業を残すだけとなつた。編集の方は私達は誰もやつた事も無いので、違う人に任せた事になつたのだが、ゆくゆくは自分達でしたいので、様々な人にレコーディングの時から色々と教わつたりした。自宅で、自分のPC、ソフトを使い編集する事は出来るのだが、プロ用のツールにはあらゆる面で叶わない。それらを揃える程の費用も無いので、私の当分の目的はこれらを揃える事である。そのためにも様々な仕事をこなしてお金を貯めるしか無い。既に月の収入が新卒のサラリーマン並になり始めたので、この調子で行けば数年で揃える事が出来ると思つ。

「こんなに早く終るんだつたら私も何かバンド組めばよかつたかな？久しぶりにメタルやりたい気分だつたし。」

「僕もギターならやりたいな。」

「ツイン踏める人良以外いないから無理だと思うけどね～」

「昼休み。教室で私は真美と他愛も無い話をしていた。するとそこに、

「お～い。新堂いるかい？」

ドアの方から私を呼ぶ声が聞こえた。ドアの方を見ると千佳先輩が私を手招きしていた。千佳先輩は小倉とのバンドでヴォーカルをしている人である。

「良、千佳先輩と何か接点あつたつけ？」

「あ……」

こここの所忙しくて真美に千佳先輩の事を話すのを忘れていた。もちろん江利子にもだが……

「あ、つて何よ？」

「と、取り敢えず行くね！ちゃんと話すから！」

今ここで全てを話すと時間がかかるてしまうのかもしけなかつたので、私は千佳先輩の方へと急いだ。後ろで真美が軽く怒っているのが解るが今は気にしてはいけない！多分……

「どうしたんですか？」

千佳先輩の前に立ち、私は何か用事があるのか尋ねた。

「新堂、今日の放課後バンド練習終わった後時間あるか？」

「まあ……今日は何も無いんですけど……」

「ならば少し相談したい事がある。付き合つてもられないだろうか？」

相談と言つとヴォーカルの事なのだろうか？それならば特に私が言える事は無いのだが、

「……まあ、僕なんかでよければ良いですよ。」

私なんかで力になれるのならば断る理由は無い。千佳先輩は私が承諾したのを聞くと嬉しそうに笑い、

「それではバンド練習後に。」

そう言い残すとその場を後にした。そんな事ならばバンド練習後でも良いじゃないか。焦つてしまつたでは無いか、千佳先輩は小倉曰く非常に人気のある人なのだそうだ。見た目は良い、歌は上手い、性格も良い、なので学年関係無く人気があるらしい。高校の四天王のうち一人なのだそうだ。残りの三人は知らないが。

「良？」

安心しきつている所に後ろから声を掛けられる。ああ、この威圧感は事あるごとに感じてきたものだ。振り返るのが恐ろしい。

「良くん？」

なぜここにいるのだろうか？彼女は同じクラスでは無いはずだ。振り返つては駄目だ。何か嫌な予感がする。でも真美に千佳先輩の事を伝えなければならないのだが、果たして彼女は聞く耳を持つてくれるのだろうか？否、持ちはしないだろう。ならば、私の取る行動は一つしか無い。一刻も早くこの場を離脱するだけだ。目指すは屋上、最短距離で駆け抜けなければならない。捕まつたら負けだ、命は無いと思え。両足に力を入れ、駆け出そうとした瞬間……

私の両肩が掴まれた。前に進もうとするも、一向に動かない。

「良? 何処に行くのかな?」

「良くん、ちょっとお話ししましょうね?」

身体が教室内に引っ張られていく、一人の身体の何処にそんな力があるのか? 窓際のいちばんうしろの席まで連れて行かされ強引に座された時、私の目の前に一人の女性が立ちはだかった。

「小便是済ませたか? 神様にお祈りは? 部屋の隅でガタガタ震えて命乞いをする心の準備はOK?」「悪魔なりのやり方で話を聞いてもらひつから……」

一人に誤解だと言う事を納得してもらうまで昼休み中所か、次の授業時間全てを使った。そして、一人が今日のバンド練習、その後の千佳先輩との相談まで同伴する事になつた。

「なあ、良……何で真美さんと増田がいる訳？」

「まあ……いろいろありますて……つてお前昼休みいなかつたつけ？」

バンド練習中常に部室内で静かに黙つてみている一人について小倉が尋ねてきた。やはり気が散るのかも知れない。たまに見に来る人もいるのだが、一人の放つ異質なオーラに居た堪れないのだらう。それを感じ取つた千佳先輩が、

「済まない、真美、江利子。ちょっと外に出てくれないか?・皆やりづらいみたいだ。」

と、一人に言つた。

「す、すみません!・じゃあ私達でようか?」

「そうだね……そうしようか、まつちゃん。」

一人は室内を出ては行つたが、恐らく外にはまだいるだろ?・  
「ま、まゝ気にせず続けましょうか?」

「そうだな。」

「それじゃあ、もう一回頭からでお願いします。」

練習後、千佳先輩は用事が出来たらしくその日は何も無く家に向かつた。一緒に帰る時に、真美と江利子が何處かほつとした表情をしていた。

文化祭は無事終わつた。軽音楽部の方の手伝いも難なく進み、クラスの方にもちゃんと顔を出せた。変わつた事と言えば、漫画研究部のコスプレショーとライブイベントだらう。軽音楽部の部長と漫画研究部の部長が仲が良いらしく、文化祭ライブに一バンドだけ漫画研究部が出演した。流行りであろうアニメの劇中歌をコスプレして演奏するなど（男性が女性のコスプレをしたり……）半ば異様な盛り上がりを魅せていた。楽しそうに演奏していたので彼らにとつては良い思い出となつただろう。部員の一部は邪険そうに扱つていたが、そう偏見の目で見なければいいのに。

小倉とのバンドも無事終える事が出来た。部員、観客共に曲を知らなかつたのかあまり盛り上がりはしなかつたが、良い演奏が出来たので善しとしよう。

「小倉上手くなつたね～。」

「ま、俺だし？」

真美のお世辞に気を良くした小倉は上機嫌であった。私達はいつものように、文化祭終了後に四人で部室の外にいた。先輩たちが中に入るために、今回は部室の外にあるベンチに集まつた。佐藤も呼ぼうとしたのだが、邪魔をしてはいけない、と真美と江利子に言われたので呼ばなかつた。

「じゃあさ真美さん、俺と付き合おうぜ？」

「あゝそれは無理。」

真美に即答された小倉はがっくりと肩を落とし頃垂れているが、このやり取りはいささか見飽きているので何も言わないでおいといった。「良くん、次は私達も出たいですね。」

「そうだね……レコードイングも良いけどライブしたいね。シングルが年内に出たら来年は関東内でツアーが出来るかもね。」それまでにアルバムも制作出来たら夏のロックフェスに出れるかもしれない。運が良ければ師匠と一緒にステージに立てるかも……

日が傾き始めた時、私の携帯に着信が入つた。私は皆と離れてから電話を取つた。着信は千佳先輩からだつた。

「もしもし？」

「もしもし、新堂？ 今大丈夫？」

「大丈夫ですよ。どうしました？」

「ちょっと私のクラスまで来てくれない？ ジャあ来てね。」

私の言葉を待たずに千佳先輩は電話を切つた。何が何だか解らなかつたが、私は千佳先輩のクラスに向かつた。

千佳先輩は私達の二個上、教室は四階にある。校内に入ると、もう後片付けをしている生徒はおらず、昼間の騒がしさが無く、僅かな話声が聴こえる程度だつた。

階段を登り、四階に着くと人は誰一人としていなかつた。三学年は最後の文化祭、と言う事もあり打ち上げや、校庭で皆と楽しく過

ごしているのだろう。千佳先輩のクラスのドアを開けた時、教室内は綺麗に片付けさされており、夕日が差し込み、室内はオレンジ色に輝いていた。その中で一人、黒板に背をむけて千佳先輩は立っていた。

「新堂、待っていたよ。」

私が室内に入るのを確認すると、千佳先輩は笑みを浮かべながらそう言つた。

「どうしたんですか？」

「いやね、私は今年で卒業する訳じゃん？ 大学も校内推薦を取つてから受験勉強をしなくていい。後は最後の高校生活を満喫するだけなんだよね。」

言いながら、千佳先輩は私に一步ずつ近づいてくる。

「勉強をして、友達と遊んで、話して、バンドをして……それだけでも十分面白かった。周りの友達は誰かに恋して、誰かと結ばれて、それらの話が主だった。あの人がかっこいい、とか彼氏がどうのこうのとかね。でも、私にはその気持が解らなかつた。何でそんなに盛り上がるのか、何が楽しいのか解らなかつた。」

ゆつくりと、ゆつくりと歩み寄り、

「誰かに言い寄られる事は多々あつた。好きだ、付き合つてくれ、と。何の感情も持たなかつたが、好きでも無い男と付き合つた事もあつた。最初は好きで無くとも、段々と好きになる事もある。そうしたら恋愛つてどういうものか解るよつて言われたから。でも、一向にそんな気持ちは湧いてこなかつた。だから付き合つてもふる事ばかりだつた。でも新堂、君はどこか違うみたいだ。バンドを組むまでは君も周りの男と変わらない、一人の男性だつた。でも、バンドを組んで、練習をしていくうちに君の放つ何かに惹かれて行つた。君の音に私の身体が反応したんだ。」

ついに、私の目の前まで来た。目と鼻の先、そんな距離まで。

「そして、気がついた。私は君に恋していると。」



今回も読んで頂きありがとうございました！

えへ、だいぶ外伝？が何とも言えない結果のようですね……何件かお気に入り登録を外してしまわれた方々もいらっしゃるよう…全て、私の実力不足で…ございます。またお気に入り登録してくださいるよう、認められるように頑張ります！皆さんがもっと面白いく感じるように頑張ります！

それはそうと、感想を書いてくださった方々ありがとうございます！ポイント付けてくださった方々ありがとうございます！読んでくださった方々ありがとうございます！…どんな事でも良いので感想などなど待ってます！

では、今回も読んで頂きありがとうございました！

高校一年生?—2(前書き)

祝、十万PV!!!!!!

本当に沢山の方々に読んで頂き誠にありがとうございます!多くの方々からお気に入り登録や、評価、ご感想を頂きまして、本当にありがとうございます!初めてのSSでこんなに多くの方に読んで頂ける事になりました事を非常に嬉しく思います。

では、今回も皆さんが楽しんで読んで頂けたのならば至極光栄です。では宜しくお願ひします!

「そして、気がついた。私は君に恋していると。」

歩みを止め、手を伸ばさずとも触れる事の出来る距離で千佳先輩は私に言う。聞き間違いであれば良いものの、この近さで聞き間違えるほど私の耳は遠く無い。私は精神異常者であり、ただの妄想か？とネガティブに考えてみても間違ひ無く妄想では無い。

要するまでも無く、千佳先輩は私の事を好きだと言つているのだ。

「先輩、僕は」

私が言い終える前に、千佳先輩は人差し指を私の口の前に置き

「ああ、言わなくとも良い。新堂の言わんとする事は解つていて。あの二人のことだろう？あの二人は心底君に惚れ込んでいる、普段の言動からも皆が解る事だろう。そして、君もあの二人に好意をい抱いている。そうだろう？」

私が言おうと思っていた事を述べた。私の口元から人差し指を離し、苦笑いを浮かべながら

「解つていて、解つているさ。彼女たちが君に好意を抱いている事も、君が彼女たちに好意を抱いている事も。全くもって君たちの間に誰かが割つて入る事なんて無理だと思わせてくれるよ。だがね。」  
そう言つた。私は千佳先輩の逆説の言葉を聞き、常々思つてている事

を言われるのではないかと思つた矢先に

「最終的に選ばなければならないのは一人だ。日本は一夫多妻制では無いからね。一人が君の事を好きでも、君が一人の事を同じくらい好きでも選ばれるのは一人だ。その時残つた一人はどうなるのだろうね？」

言われてしまつた。決して間違いは言つていない、むしろ正論だ。私がずるずると一人を決めずにここまで来てしまつたのがいけないのだ。一人の女性から私に好意を持つてゐる事を告白されながら。全くもつて返す言葉が見つからない。

「それにもしもだ、もしも一人を決めた所で君達のバンドも今まで通りにはならないのではないか？少しの蟠りから始まり、それは徐々に大きくなりバンドは方向性を見失つ。そうなつてしまつのではないか？」

……バンド内恋愛でそれまで良い方向へ向かつていたバンドがいとも簡単に崩れしていく事はよくある。私もそうなつてしまつたバンドを沢山見てきた。歯車が悪い方へと進めば進むほど多方面にも広がつて行く。三人の関係、それは直接バンドの方へと繋がる可能性はないと言い切れない。

「聰明な君なら解るはずだ。バンドの事を思つならば君は他の女の子と恋をしていくべきだと思う。恋愛絡みの解散なんて数多くあるんだ。君はあのバンドにどれくらい力を注いでいるかなんて見れば解る。それをこんな事で台無しにたくないだろ？」

と、言いながら千佳先輩の顔が近づいてくる。彼女の放つ有無を言わせない迫力にのみ込まれ、正常な判断ができなくなる。実年齢では私より一回りも少ない彼女に圧倒されているのが解る。少しづつ、少しづつ、まるで悪魔の囁きを聞き入れ魅了されたかのようになつて考へる事を放棄してしまいそうになる。

千佳先輩が顔を近づけてくる、数ミリ前へ顔を傾けるだけで唇が重なり合つ。私は彼女に魅了されているのか？

「崩れ去る前に、私と一緒にいたほうがよくなつか？君達のバンド

はもう趣味では無い。ビジネスなんだ。君と一人はビジネス上の関係にしておいて……私が君の愛人になれば何も問題無い。そう、何も問題なんて無いんだよ。」

頭の中に彼女の囁きが響き渡る。私が一人と恋愛関係を結ぶことを破棄する事でバンドはビジネスとして成り立つ。互いに成果を求めるだけに動き、そこに余分な感情等一切要らない。ビジネスと実生活を切り離せば全て上手く行くのだと。

……本当にそうなのか？本当にそれでバンドは成り立つのか？バンドを優先するがために一人への気持ちを押し隠して千佳先輩を選ぶ事が成功へと繋がる？それで良いのか？一人は納得してくれるのか？ここ数日仲良くなつただけの先輩と私が結ばれる事を一人は心から祝福してくれるのか？バンドはより良い方向へと導かれるのか？もし私がどちらかを選択する事で一人の関係はいともたやすく崩れ去ってしまうのだろうか？……否、彼女たちの友情を甘く見てはいけない。そんじょそこらの友達を謳つている奴らとは違うはずだ。それに、事の中心、癌は私にある。私自信が上手く行えば良いのだ。

そう……だから……私は……甘い考え方かも知れないけど……

私は顔を背け、千佳先輩から離れた。先程までのまるで濃い霧の中をさ迷っていた感覚は失くなり、クリアな感覚に頭の中がなる。「すみません先輩、それでも僕は先輩の気持ちに答えられません。」私の問いに千佳先輩は驚きを隠せないようだった。まるで初めてフラれたかのような、今までにこのたぐいで落ちなかつた男はないと言わんばかりに。

「先輩、貴方の言つ事は決して間違つてはいないと思います。バンドの事を考えるのならばバンド内恋愛は避けるべきなのかもしません。ええ、そちらの方が良い方向へ向かう可能性の方が大きいかもしれません。ですが、僕は彼女たち以外を選ぶという選択肢は無いんです。先輩は凄く魅力的だと思います。でも、僕にとつて先輩は彼女たちに遠く及ばない。外見とかじゃないですよ。そして、彼女たちはどちらかが僕と結ばれる事で関係が崩れる程、彼女たちの絆は僕らが思うほどに深い。だから例え何があつたとしても、僕は二人は最後には笑つていると思うんです。まあ、僕が愛想つかされるという事ももちろんあるでしょうけどね。」

窓の隙間から教室内に風が吹き入れ、秋の夜風が私の身体に吹き付ける。何を揺れる事があろうか、恐れる事があろうか。彼女たちの事を不安がるよりも、私自信の事の方が今も、これからも不安な事が多いうだろうに。

私の言葉を信じられないとでも言いたげに千佳先輩は私を見ている。恐らく千佳先輩は、彼女は軽い気持ちだったのかもしれない。今回たまたまバンドと一緒に組んで何か私に惹かれる所があつたのかもしれない。それを見て、私と付き合いたいと思ったのだろう。それが自然だ。否定等一切しない。彼女たちだってそうだったのかもしれない。ただ違う所は彼女たちと千佳先輩との思いの強さだけなのだから。

「どうか。いやはや君達の思いの深さを見誤つていたよ。そこまでだつたとはね。そして君自信にも誤算だつたよ。君みたいな人はさつきみたいに言えば確実に落とせると思つていたのだけどね。」

「正直、先輩の揺さぶりは理にかなつていた分タチが悪かつたですよ。頭の回転も速いですし、今までに落としてきた男の数は多いんじゃないですか？」

「そうだね。そして断られたのは君が初めてだ。」

自嘲気味に笑いながら千佳先輩は答えた。ただでさえルックスが良いのだ。そして他人に自分のペースに引きこませない手腕とかもし

出す雰囲気は同年代の子達と比べるのがおこがましい位に抜群に出ている。

「ハハハ、ますます君に惹かれてしまったよ。遊び半分な所があつたのだけれど、本気になろううじやないか。」

「え？」

「だから」

千佳先輩は私のネクタイを引き、強引に自分の顔に寄せた。

「本氣で君に恋したという事だよ。こうなつたらバンドがどうのだとかそういう事で君を物にしようとは思わない。そうだな、私が君を求めるように、君が私を求めるようにしてみせよう。廊下で盗み聞きしている一人よりも君が私を求めるようになるくらいにね。」

そう言う千佳先輩の顔はもはやただの高校生が出せるようなオーラでは無かつた。何なんだこの少女は？本当に油断していると主導権を持つて行かれる！

「と、言つ事でだ」

握っているネクタイを徐に引き取り、千佳先輩は私の元から離れていった。

「ちょ、先輩！それ」

「今日の記念に貰つていいくよ。それじゃあまた今度。」

私のネクタイをブレザーのポケットに入れると、千佳先輩は教室を出て行つた。残されたのは呆然としているのみだった。千佳先輩が教室から離れていく足音が廊下中に響き渡る。何とも波乱に満ちた文化祭だった……床に座るとどつと疲れが込み上げてきた。

「……あ」

そう言えば私は皆で話していた所を呼び出されたのだった。携帯を開き時間を見ると呼び出されてから40分も経っていた。体感時間は凄く早く感じたのだが、実際はそれほどの時間が過ぎていたのだ。もう皆帰つてしまつたのかもしれないが、取り敢えず元の場所に戻らなければならない。荷物もそこにおいているのだから帰るにしても一度そこに行かなければならない。

「……よいつしょつと！」

若者らしくない言葉を使いながら私は立ち上がり、教室の窓を閉めてドアを開けた。月の明かりが照らされているように時間ももう遅い。これ以上遅くなると家に帰った後が面倒くさい。（主に加奈だが）急いで帰らなければ。

階段の方へ向かおうと方向転換した時

「……」

目に入ったのは見知った二人組だった。

「……」

一人は満面の笑みで私を見ている。私も笑顔を返し、反対方向を向き走り去ろうと一步踏み出すのだが、

「待ちな！」

「待つてください。」

それぞれ別々の肩を一人同時に掴まれ、私はその場を立ち去る事が物理的に無理になってしまった。

「ちょっと話聞かせてくれるよね？」

「良くん、私も聞きたいな。」

決して振り返ってはいけない。振り返ると今以上の地獄が待つているのだろうから……掴まれている肩口に指が徐々に食い込んでいく。いくら一人いようと女子と男子では体格に差がでてしまう。本来ならば振りほどけるのだが……

今は振りほどこうと腕を上げる事すらままならない。というか物凄く痛い。一人とも何処にそんな力があるのだ？

「い、いやね？ 最近帰りが遅くなってるから両親も加奈も凄く心配しているみたいだから今日はこれで……」

「じゃあ良の家に行けばいいんだね？ そうだね、加奈ちゃんも立ちあつて話しなきゃいけないもんね。」

「そうですね。幸いにも今日は真美さん私の家に泊まる事になつてましたから。私も両親に良くんの家に泊まると喜んで承諾すると思いますし。」

「そうだね。何で千佳先輩が誰かのネクタイをポケットからはみ出させていたのかとか、何で良のネクタイが無いのとか、何で上着がそんなに気崩れていいるのかとかね。」

真美の言葉に違和感を感じ、胸元を見てみるとシャツのボタンが上から三つも取れていた。そして、不自然にはだけていた……いつの間に千佳先輩はこのような事を……

「いや、待って！これは！」

「『言い訳は家に帰つてから！』」「

……本当に今年の文化祭は波乱に満ちている。今の私の状況は幸なのか？不幸なのか？ああ、家に帰つてからもこの空気が続くのかと思うと頭が痛くなる……

「バンドをやつてこるとモテる」

こんな言葉が世に出回っているが、俺自身は決してそんな事は無かったぜー！畜生ー！何で俺はモテないのか？顔だつて悪くない（と思いたい）だらうじ、身長だつて低くは無い。頭だつて良いはずだ！そりゃ学内じゃあまり良い成績では無いけど、この学校は元々超進学校なんだしー！ギターだつて、小学校や中学校の時と比べたら格段に上手くなつたと思うのに何で俺はモテないんだ？

……だが、バンドをやつてモテる奴がいるのも事実だ。いい例が新堂良だろう。事実、小学校最後の出し物のバンドをやつてから周りの見る目が変わった。そりや、あいつは見た目もそこそこ良いだろつし、学業も運動面も悪くは無い。だが、そんなやつうちの学校では珍しくない。上には上がいる。良より成績が良い奴は……そんな多く無いけど運動なんてあいつより凄いやつなんて沢山いる。小学生なんて皆運動が出来る奴に惚れてしまうのさ。だからあまり良は目立たなかつたのかもしれない。元々元気で活発な奴じゃないしどちらかといふと大人びている奴だ。中学生になると周りの女子もそれまでの価値観から違う物へと移行し、大人びている奴が人気が出るようになつた。それでいてバンドやつてめちゃくちゃドラム上手いんだからモテないはずが無い。ドラムだけじゃなくギターまで上手いときたもんだ！それに性格も悪くない。糞！あいつは完璧超人かよ！でも良が言うには妹の加奈ちゃんこそが本当の天才であつて、自分は努力の人間だ、と言つている。……まあ、言いたい事は解るけどな。

要するに！決してバンドをやつているからモテる訳では無いのだ！モテる奴は何やつてもモテる、それがたまたまバンドだつただけなのだ！

俺だつて最初はモテたいが為にバンドを始めたさ。それでギターなんだからモテない訳が無いだろ？だつてギターはウォーカルと同じくらい目立つんだから。技術だつてそんなに悪くないはずなのに何で俺はモテないのかね……滅茶苦茶練習して上手くなつてきたから憧れの千佳先輩を誘つてバンドを組める事になつたのに、千佳先輩は俺よりも良の方を見てしまつ。今回の選曲の美味しい所は全部俺が弾いているのに良を見る……アハハ、何か目から塩水が流れてきてるぞ？おかしいな……外で真美さんと増田、良と話していたはずなのに良がどこかへ行くと二人ともその後を追つかけるし……

俺一人で寂しい思いするのも何だから今日は友達に撮つてもうった  
ライブのビデオを見て一人で悲しく過ごそうかな。あ～あ、世の中  
のカップル皆滅んだらしいのに。

「匠、最近寒くなつてきたね……」  
「……ちやんと暖かくしろよ。」

……本当に……カップルなんて滅んだらしいよ……

と、その前に部室に行つて機材取りに行かないと。先輩たちまだ

いるのかな?ま、関係無いけど。

今回も読んで頂き誠にありがとうございました!

えへと、いきなり言い訳から入ります。感想の方では書いたのですが、最近実生活のほうが何かと忙しく全然書く暇がありませんでした。楽しみにしてくださっている方々には申し訳無いです……それで、今回約一ヶ月ぶりの更新も非常に少ない文章量で本当に申し訳ないです。出来る事ならば年内に後最低でも四つは投稿したいと思っています。

前書きの方にも書かせていただいたのですが、本当に多くの方々にこの作品を読んで頂きとても嬉しく思っています。私自身ももっと頑張つてより良い作品にして行きたい!と思つていますのでぜひ暖かいまなざしで見守つてください。

では最後に、今回も読んで頂き誠にありがとうございました!感想等ありましたら気軽にどうぞ!泣いて喜びます!

## 高校一年生？・1（前書き）

ああ、この調子で本当に年内あと二つも投稿出来るのかな……でも書いちやつたんだから実行しなければ……

どうも、またまた遅れながらも書き上げました。忙しい事は良い事なのだろうけど考えものです。やらなければならぬ事を全然終わらせれないで何をしているのだか……

と、愚痴っぽくなりましたが、26話目です。今回も皆さんのが楽しく読んで頂ければ幸いでござります。では、どうぞよろしくお願ひいたします。

「Power! power! Happens every day!」

部室に入るや否や、部屋中に響き渡る大音量のBGMが私の耳に入ってきた。部屋に置いてあるCDコンポをミキサー、パワー・アンプを通して一本のスピーカーから流れる音は、家のミニコンポのスピーカー やヘッドフォン出力では決して体感する事の出来ない音質を与えてくれる。まあ、ただひるせいだけ、と言わればそれまでなのだが。

と、そのような事を考えていると、

「お、やつときたな！ そんなにあいつの話って長かったのか？」

私が部室の扉を開けた事に気が付いたのか、CDコンポのヴォリュームを絞り、私に問いかけた。

「うん。色々とね。」

小倉の問いに答えながら、私は部室内に入り、カバンをドラムセッタの近くに置いた。

小倉の言葉から察すると、私が来るよりだいぶ前に来ていたにも関わらず、部室内は全くと言つていいくほど暖まっていない。むしろ、外よりも寒いのでは無いだろうか？

「……寒くないの？」

「だからこんなに厚着してくるんだるー。」

「……暖房つけたら良かつたじやん。」

「あ……」

まるで忘れて……いや、この場合本当に忘れていたのだろう。小倉は直ぐ様に、ヒアロンの位置まで向かうと、ヒアロンのスイッチを入れた。

「いや……ね？俺の前に誰かいたような気がしたから……ね？」  
だから暖房が入っていたと思っていたと……なるほど。小倉らしい

と言えばそれまでなのだが、

「普通はそういうの全て切つてから退室するでしょ……」

溜め息まじりに小倉にそう言うのだが、小倉も小倉で言い訳の一つでも、と思いとつたに口に出したのだろう。アハハ、と苦笑いを続けていた。

「それで……今日は何でまた突然部室なの？今日は何も無いからよかつたけど。」

「あ、ちょっとギターでも教えてもらいたいな」と思いまして……」「絶対それだけじゃないでしょ？」

「あ、やっぱ解る？」

確かに小倉は向上心が有り、様々な人に教えを請う事は多いのだが、私に限つて言えばおまけ要素が強い。何か聞きたい事、相談したい事がある、それらを聞き終えるついでにギターも教えて!と、言うのだ。ギターの事はだいたい一の次。今みたいに、ギターを教えて欲しい、と先に言う事はほぼ無いに等しい。

だから今回も他の事がメインだろう、と思いながらドラムスローンに腰を降ろし、小倉が言葉を発するのを待つた。しかし、なかなか言いだそとしない。むしろ、私が何か聞くのを待つている節がある。

……仕方が無い。

「それで……どうしたの？」

「いや……ね？俺つてぶっちゃけた話、俺つて周りの人達と比べたら下手なのかな~って思つてさ。」

「何か言われたの？」

「少しだな。良はどう思う？」

笑いながら私に尋ねるのでは無く、神妙な面立ちである。誰かしらに気に病む事でも言われたのだろうか？それで私に尋ねようと思つた。私が思うに、小倉は決して周りと比べて見劣りするようなギタリストでは無い。

「技術？全然あるじやん。むしろ部内だつたら上手いギタリストだ

と思つよ。」

「でも先輩達の中には滅茶苦茶凄いソロ弾く人もいるじゃん？それでも俺は上手い方なのかな？」

余程、今までに積み重ねてきた自信を打ち碎くほどに強く言われたのだろうか？

「難しい速弾きとか出来る事は確かに凄いと思う。先輩達の中にはそういうのが出来る人もいるからね。でも、リズム面で小倉程きちんと出来る人って部内じゃないよ。」

「いや、でもさ。やっぱソロが目立つ訳じゃん？ギターって。」

……なるほど。小倉の言いたい事は良く解る。

「一番大事なのはソロだけを華麗に弾く事じゃないよ。ギターはリズム、バッキングこそが重要なんだ。それをきちんと出来ていなければ例えソロだけ技術があつてもやつてる人達は上手い、と決して思わないよ。だから僕は小倉が部で他の人より劣っているギタリストだとは全然思わない。」

私もかつて同じ事を考え速弾きばかりを延々と練習していた。たどり着いたのは今の小倉と違い、リズム面がまったくもって未熟な時に行ってしまった。部屋で一人でレコードに合わせて弾く場合はそれで良かったのかも知れない。繰り返し同じ曲を聴きコピーするのだから、自分の頭の中にレコードで演奏されているリズム、構成を完璧に把握している。そしてレコードと同時進行で曲を弾く。だが、バンドで行う時にはそう上手くいく訳が無い。その時々により、合わせつつ、自分のリズムでグループを作つて行かなければならない。それらはしきりとリズム面を鍛え、周りの音を聴かなければ到底不可能である。それらが出来ない場合どうなるか、と言つと自分一人が勝手に演奏を行いバンドがバラバラになつてしまつ。周りの音を聴き、それに合わせる。最低限この事が出来なければお話にならない。リズム隊、となれば話は別になつてくるのだが。

そして、ソロが上手い＝楽器が上手いと言つ事も必ずしも当てはまる訳では無い。かつての私のようにソロ、リードばかりを鍛錬し

てその他が疎かになつている者はしかりと觀てゐる人には下手である、としか言われない。よくて指が速く動くんだね、くらいだ。曲の全てがソロでは無い、リズム面、ギターはバッキングの方が曲の占める割合は大きいのだ。プログレ等は全てがソロ、リードに思うかもしれないが、リズム面ありきで成り立つてゐる。それを疎かにしてきた者が出来る代物では無い。

私の言つた事に小倉は理解を示してくれたのか、先ほどより表情が一段と明るくなつた。

「そ、そ、う、か……？お前からそこまで言わると俺もちょっと自信が出てきたな」。

少し照れ笑いをしながら小倉は私に言つた。

「だからと言つて奢らないでね。僕が見てきた人達の中で……と比べちゃうと酷だけどね。」

「お前の基準はプロじゃねえか！！！」

「そうだったね……それじゃあ、脱アマチュアレベルを目指して頑張ろう！」

私の問いに大声で返す小倉を見て、私は自然と笑みを浮かべ、そう答えた。そんな私を見て、小倉は絶対見返してやると返し、私に笑みを向ける。

「そうなつたら特訓だ！よし、今日はとことん弾くから覚悟しろよ！！！」

「なんだよ、それ？意味が解らないよ。」

「俺の特訓にお前が付き合つて事だよ！！！」

ギターを取り出し、アンプに繋いで、小倉は開放弦を鳴らす。私が来る前に電源を入れて真空管を温めておいたのか、準備は整えておいたみたいだ。

「取り敢えず、僕が言つておいた事はやつてるのかな？」

「当たり前だぜ！」

それから一時間程、私は小倉に様々な事を教えた。その間、何人か部員が来ては私達の様子を眺めていたのだが、それらに一切気づく

様子も無しに、小倉は集中して取り組んでいた。彼の呑み込みの速さ、上達の速度が速いのはセンスや才能の他に、この集中力にあるのだと私は感じた。

私が部室を後にする時も、まだ残り、独りで練習をしたいと言つたので、私は独りで帰る事にした。

駅に向い歩いている途中、ポケットの中の携帯電話にマナモードにしておいたバイブレーションが鳴った。取り出し、画面をみると、着信相手は江利子からだった。

「もしもし？」

「もしもし、良くん？今電話大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。」

どこかで歩みを止め、電話をしようと思ったのだが、場所が無かつたので、いやさか不謹慎ではあるが私は歩きながら電話を続ける事にした。

「あのね、私達のシングル、マスターアップしたって！だから年内にお店に並ぶ事になるんだって！」

江利子は電話口から興奮気味に言う。そうか、ついにマスターが終わつたのか。

「本当に！？やつたね。これで後はアルバムの方もマスターが終われば……」

「年明けの最初のライブで私達のシングルを観に来てくれた人達に直接手渡せるね！何とか間に合つて良かつたよ。」

面と向かって話している訳では無いのに江利子が心から喜んでいるのが伝わる。私だけじゃ無い。皆、思いを込めて作ったのだ。これが喜ばずにいられる訳がない。

「それでね、良くん……つて真美さん…ちよつと……まだ私が……ああ！……もしもし？良？」

何やら電話口が騒がしいと思っていた所、先ほどまで話していた江利子では無く、真美が話しかけてきた事を考えると、無理やり奪つたようだ。

「……真美？」

「正解。それでね、明日なんだけど。本当は何も無いはずなんだけど、音源貰えるみたいだから、皆で事務所に行こう？」

「良いよ。じゃあ、学校終わってから行こうか。」

「うん、つてしまっちゃん…ちよ、じら、ひゃん！……い、一回切るね！」

有無を言わさず、真美は電話を切つた。取り敢えず、携帯電話を閉まりポケットの中に入れる。向こうで江利子が何か真美の体にちょつかいをかけたのだろう。最近はちょっとかいと言えるレベルじゃ無くなつてはきているが……その度に前かがみになる男子が多くなるのだから少しは控えてもらいたいものだ。一度、廊下でとある男子何人かが、

「えりまみは俺のジャスティス。」

「ああ、胸が熱くなるな……」

「三次元にこんなパラダイスがあるなんてな。」

と前かがみになりながら話しているのを見てしまつた。解らなくもないのだが……

そこまで話し込んでいた訳でもないのに、気が付いたらもうすぐで駅に着く所まで来ていた。駅に向かい歩く人達にまぎれ、私も歩

いて行つた。

「今日は何にも無かつたんだから、早く帰つてくるって言つてたよね？」

玄関の扉を開け、部屋に向かう途中に後ろから立腹そうな声の加奈が話しかけてきた。最近の加奈は怒るにしても凄みが出てきているので困る。加奈の上に立つような人は現れるのだろうか？

「い、いや……ちょっとね？」

「こつちを見て喋りなさい。」

「はい！？」

慌てて振り返ると、壁に寄りかかりながら腕を組んでいる加奈がこちらをじ～っと見ていた。

怖い、今の加奈はとてもなく怖い。

「今日の朝、私、お兄ちゃんとどんな会話をしたつけ？」

「今日の朝は……」

加奈に言われて、何を話したか思いだそうとしていると、一つの事が頭の中に過る。今日の朝、私が学校に行こうと、玄関に向かつた時、加奈は「今日つて学校終わつてから何かあるの～？」と聞かれたものだから、何も無いと答えたはずだ。それから……「じゃあ、買い物行きたいから付き合つてよ！」……ああ。思いだしてきた。今日の朝、私は加奈と一緒に買い物に行く約束をしたのだ。それに今日の放課後のこと思い出してみよう。うむ、小倉と一緒にいたではないか。言い訳を考えた所で聰明な我が妹の事だ、バレルに違ひない。ならば行う事は一つ。

「加奈。」

「なに？」

こついう時は私が出来る最大限の笑みを持つてして、イメージするは某エーアのOP最後らへんのシジ君のように無邪氣で、無垢の無い笑み。その顔で、

「忘れてた。」「めん！」

言つや否や、私は思いつきり加奈に右頬を引っ叩かれた。斜め横から的確に顎を含む右頬全体を、体重を乗せ、手のひらで押し出すようだ。

「馬鹿！！！」

叩き終えると、私にそう言い放ち、部屋へ向い走り去つて行った。走り去る加奈を見ながら呆気に取られていると、

「あら～、加奈が不機嫌だった理由はこれだつたのね～。」

母が仁王立ちをしながら私を見降ろしている事に気が付いた。「良、あなたにとつては忘れてしまつた、ですむ話だけれど。加奈にとつてはそうでもないのよ？」

「それって……？」

「さてさて、先週まで加奈はどうに行つてたのかな～？」

「…」

そうか、加奈は先週までウイーンに行つていたのだ。そして、私は一昨日までレコードイングなり、何なりで家に帰るのは遅くなつていた。加奈とはここ暫くゆつくりと話す時間も無かつた。

「気が付いたかな～？あの子は良と一緒に ireなくとても寂しそうにしてたんだからね。だから朝は凄く喜んでいたのにね……あんなに喜んでいた加奈は本当に久しぶりなんだから。」

「そつだつたのか……」

「そつだつたのか……じゃないでしょー今すぐ部屋に行つて加奈と話してきなさい！ついでに散歩でもしてらっしゃい。ここら辺だったら危なくないでしょ。それに、何かあつたら良が命がけで守つて

くれるだろうしね~。」

「ありがとう、母さん。ついでにどこかで一緒にご飯でも食べてくれるよ。」

「やうしなさい。というか、夕飯の準備してなかつたのよね~。」  
と、笑いながら母はリビングへと向かつて行った。まあ、一人で外食すると思っていたのだから夕飯を作つていなかつたのだろう。  
部屋に向かいドアを開けようとするのだが、中から鍵がかけられていた。

「加奈、僕が悪かつたから。開けてくれない？」

中に向けてそう言うのだが、加奈は返事をしてくれない。

「本当に悪かつた……それでさ。今からだと店とかで買い物とかは出来ないけど……ちょっと一緒に歩きまわらないかい？久しぶりに加奈とも話したいし。」

そう言い、暫くすると鍵が開く音がした。ドアを開くと、加奈がふてくされた顔をしながら下を向いていた。

「……ごめん、加奈。じゃあ、ちょっと散歩でもしようか。」

部屋に鞄を置き、私は加奈を促しながら外へ向かつた。玄関で靴を履き、ドアを開けようとする前にリビングの方をちらりと覗くと、母が目で頑張れ、と合図をしていた。

「それじゃあ、母さん。ちょっと出かけてくるね。」

「あんまり遅くならないようにね~。」

「解つてるよ。」

住宅街の路地を照らす街灯と、月の光を明りにしながら私と加奈は歩く。繁華街では仕事帰りのサラリーマンが騒ぐのに良い時間なのだが、元々閑静な住宅街だけあって辺りは静かだった。駅に向かつて歩けば、帰路についている人々とすれ違う事もあるのだが、反対側を歩いているので人と出会う事も少ない。

「ううして、一人で歩くのも久しぶりだね。」

声を出す度に、息が白く吹き出る。こんな寒い日は星が綺麗なはずなのだが、夜空に輝く星は一つも無かった。

「お互いに、昔と違つて忙しいからね。だからうそ……今日は楽しみにしていたのに……」

「本当にごめん。」

私が顔を向けても、加奈は反対側に顔を向けながら歩いている。

「もしかして、最近告られた先輩と一緒にいたんじゃないでしょうね？」

「違うよ、小倉と二人で部室にいたんだよ。」

「本当に？」

疑いの目を持つて、私の方に顔を向けて加奈はこちらを見た。

「本当だつて。あ、やつと僕の方見てくれたね。」

「……まあ、ちょっと一人でカーッとなりすぎたかな～って……でもお兄ちゃんが悪いんだからね！」

よく加奈を見ると、余所行き用に洋服もお洒落をしている事に今気が付いた。そして、うつすらとだが化粧もしているようだった。最近の女の子は小学生の時から化粧を嗜むのだから、やついていても何ら不思議では無い。

「加奈も、化粧とかする年頃になつたんだね。」

そう言つうと、加奈はひどく驚いている表情をした。その様子が何だかおかしく感じ、思わず笑ってしまった。

「おかしい？ つていうか、よく気が付いたね。」

「いや、全然おかしくないよ。加奈が驚いてるからね、笑っちゃつたんだ。だつて、僕は加奈が生まれた時から一緒にいるんだよ？ 気付かない訳無いよ。」

「そ、そうだよね！ お兄ちゃんとはずっと一緒にいるんだね！」

大分機嫌が良くなつたのか、加奈の表情が和らいできた。そういう表情の方が加奈には似合つている。そう思つていると、

「お兄ちゃん、ちょっと寒いから……腕組んで歩いていい？」

「ん？ 寒いんだつたらマフラー借すよ？」

と、言いマフラーを首から取ろうとした所、

「マフラーじゃ無く！私はお兄ちゃんと腕組みしたいの！」

私は強引に加奈と腕を組ませた。少々歩きづらいのだが、加奈の機嫌が悪くなるよりかは、と思いそのままにしておく事にした。

「もつと、こり……シャキッと背筋を伸ばして！これじゃあカップルに見えないよ…」

「カップルって……ここにら辺で誰かに見られたとしても相変わらず仲の良い兄妹としか思われないでしょ……」

「それはそうだけど……」

しかし、こうして腕を組まれる事なんて昔はあり得なかつたな、とふと思い出した。女っ気の無い人生を過ごしてきたのだから仕方の無い事だが。

暫く他愛の無い話をしながら歩いていると、懐かしい場所が私の目に着いた。

「懐かしいな～。ここに来るなんて何年ぶりだろ？」「

「あ、確かに。というか、こっちの方向に来る事自体があまり無いからね。」

そこは小学校に上がる前、それも数回しか来た事の無い公園だった。母と加奈と一緒に手をつなぎ来た場所。ブランコに乗つて遊んだりした場所。この公園も、遊具の安全性を見直す、と言われほとんどが撤去されてしまった。残っているのはベンチとそこそこの敷地のみである。

「でも……私が覚えている物がこのベンチしかないのは悲しいな……」

…

ベンチの前まで来て、名残惜しそうに辺りを見回しながら加奈は言う。母がこのベンチに座り、私と加奈が遊ぶ姿を見ている姿が思い出される。そのベンチに、私と加奈は座つた。

「あそここの木つてあんまり大きくなかったんだね。」

「そうだね、僕も加奈も大きくなつたからそう思うんだろうね。」

人は毎日を重ねる事に変化していく。そして、自身が変わることには滅多に気が付かない。それに気が付かてくれる数少ない要因の一つとして、昔訪れた場所へ行く事である。この敷地はこんなに狭かつたっけ？この遊具はこんなに小さかったっけ？等、懐かしさがこみ上げてくると同時に、同じ物を見ているのにあの時の自分とは違う捉え方をしている事に気が付く。その時、自分は変わったのだなと思ってしまうのだろう。嫌でも人は変わっていく生き物である。それが良いのか、悪いのかは人それぞれだとは思うだけれど。

加奈も昔はもっと小さく、無邪気に走り回り、お兄ちゃんお兄ちゃんと言しながら私の後をついてきたものだな、と思ってしまう。まあ、今でも兄離れのしていない妹だとは思うが。

「私もそうだけど、お兄ちゃんもあの頃とは違つて色々な事を経験してきたよね。まあ、お兄ちゃんはあの頃に行きつしまでにも凄い経験をしているけど。」

私の肩に頭を寄せながら加奈は言つ。

「まあ、僕はね。バイト先から帰るうと歩いていて、気が付いたら赤ちゃんなんだもん。ほんと、事実は小説より奇なりつて話だよね。」

「でも、そのおかげで私はお兄ちゃんと出合えたんだから感謝しないと。あっちの家族には申し訳無い話だけどね。」

「まあ、そうだけど……僕も兄思いの良い妹が出来て良かつたと思っているよ。加奈だけじゃない、父さんや母さん。真美や江利子、師匠や小倉とか色んな人達と出会う事が出来た。こんなに素晴らしい事つて無いよ。」

本当に私は恵まれている。昔も今も、こうして誰かの愛情を感じて日々を過ごす事が出来るのだから。

「……まあ、沢山の人にお会い事は良いと思うけど……そろそろ女絡みの問題も片付けなくちゃいけないんじゃないの？」

「そ、それは……」

「こつそのこと、他の女人全員に愛想でもつかされちゃえれば？…

……

加奈の言葉は、最後の方は声があまりにも小さくて聞こえなかつたが、確かにこのままではへとは思つただが……。欲張りは身を滅ぼすのだからな……。

ふと、顔を上げると夜空に一点の光が流れでは落ちた。とつさの出来事のために何も考へる事など出来なかつたが、あれは間違いなく流れ星だつたのだろ？。生まれてから初めて見た。もちろん、前世でも見た事は無い。

「お兄ちゃん、見た？」

「え？」

とつさに加奈の方を見ると、加奈は人差し指を上に向けて指した。なるほど、加奈も流れ星を見たのか。

「うん、でもとつさの出来事だつたから願い事なんて出来なかつたよ……」

「そつか！私はちゃんとしたもんね！願い事が叶うかも！」

「かなえれば良いね。つと、ちょっと話しそぎたね。おなか空かない？どこかで食べようか。……駅前じゃないと無いよね……」

「ふふふ、もちろんお兄ちゃんの奢りでしょ？」

「当たり前。これでも給料貰つてるんだから。」

私と加奈は立ちあがり、公園を後にした。その際、加奈は何か呟いていたみたいだけど、私には聞こえなかつた。何と言つたのか気になるが、聞かない事にした。それが流れ星に願つた願いだつたのならば加奈の願いは叶わなくなつてしまつから。

「さて、どうだい？中々の出来だとは思うのだけれど。」

マスターが終わった一曲を聴き終えた所で、マネージャーの声が聞こえた。録音した時よりも何倍も良くなつていて、私は感じた。音のバランス、欲しい所で欲しい音が聞こえる辺りがまた良い。そこまでいじつていよいよここまで変わるのだからやはりプロの仕事は素晴らしい。

「凄いですね……私達の作品じゃないみたいですね。」

「ハハハ、だつて編集してくれたのはあの薫さんだからね。だから尚更良くなつたんだよ。」

「へへつてもしかして、ドラマの薫ですか！……？」

「え、薫さん知ってるの？」

「僕のドラマの師匠です。13歳の時からお世話になつてます。」

「そうなんだ～、だからOK出してくれたんだね。あの人、業界じや知る人ぞしる大物だからね～。中々仕事受け入れてくれないんだけど、君達のような新人バンドを受け持つてくれた理由が解つたよ。」

「そうか、師匠が編集作業をしてくれたのか……やはり師匠は私が考える以上に凄い人物だつたのだ……まあ、もしかしたらとは思つたのだが。」

「何か改めてあのおっさんの凄さといつか……ここ最近凄さしか伝わつてこないよね……」

「ですね……初めてあつた時の印象とは違います……」

「普段というより、二人の前だとただの年齢相応の人になるからな、師匠は。」

「ま、シングルも無事出来た事だし。後は年内にアルバム用のレコードティングを終わらせちゃおう。と言つても、後二曲だけだつける？」

「そうですね。正確には一曲のうち一曲は歌だけですが。」

「じゃあ、話は早い。年明けからリハーサルを開始しちゃおう！そして、レコ発ツアーダ！」

マネージャーが意氣込むのも解る。このまま予定通り進めば来年の

三月にはライブが出来るのだ。既にホームページにはシングルの発売日と試聴用音源がアップしてある。年内にアルバムのレコが終われば年明けにも今企画しているツアーニの詳細もアップされるだろう。「よし頑張ろう! 僕も君達のスケジュールがスムーズに行くよう全力を持ってマネージメントするから!」

「はい! ! ! !」

マネージャーの言葉に、私達三人は声を合わせて勢いよく返事をした。このまま順調にいけば良い。

そして、早くライブをしたい。レコーディングして一つの作品として仕上げるのも良いが、やはりライブをしたい。私達が一番輝く時はライブなのだから。

今回も読んで頂き誠にありがとうございました！

最近、アニソンバンドの方の活動を再開しました。私はベースを行っているのですが、アニソンって中々ややこしく動くのでコピーするのが非常にめんどくさい時があります。そんな時はアドリブを行ってしまう悪い癖が発動してしまいます。どうしようも無いですね……下手糞なのに……

それと、私はいまいちなゆうのシステムを使いこなしていない気がします。これらも有効に活用していきたいなーと考えています。それよりももつと作品が良くなるように勉強をしなければならないですね……頑張ります！！

そして、ここまで沢山の方々にこの作品を読んで頂き誠にありがとうございました。もつともつと頑張って皆さん満足のいくような作品に仕上げたいです。

では最後に、今回も読んで頂き誠にありがとうございました！感想等ありましたら気軽にどうぞー泣いて喜びます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5221m/>

---

転生は良い結果をもたらすのか？

2010年11月27日13時59分発行